

序にかえて

教育長 別 府 基 保

今回、発掘調査のおこなわれた「城の前」遺跡は、信越線田中駅の東方数百メートル、烏帽子山麓の扇状地の末端、千曲川の高い侵蝕崖の上に位置した、南面緩傾斜の肥沃な台地である。近くを佐久川西地方に通ずる2本の幹線道路が走っており、往古に於ても、この地方との関係の深かったことが想像される。なお隣接して「善福寺」「門前」「寺裏」等の小字があり、すでに廃寺となっている善福寺の跡地であり、この附近一帯の広い台地は、埋蔵文化財包蔵地調査に於ても、注目されている地籍である。

このたび、県企業局が、ここに住宅団地造成の計画をたて、これに先立って発掘調査がおこなわれることになり、東部町教育委員会は、これを、上小考古学会に依頼した。

調査の進むにつれて、この遺跡は①奈良平安時代の製鉄の遺構であり、しかも遺構が7か所も発掘されたことから、工人部落が形成されていた。②弥生時代の環溝(村をとりまく溝)が発見された。これは上小地方で始めてである。という特色のある遺跡であることがはっきりした。このような遺跡の調査記録、数多い貴重な発掘物は、町の歴史の上ばかりでなく、考古学上も、重要な資料である。

調査を終るにあたり、並々ならぬ努力をいただいた団長小林幹男氏ならびに団員諸氏、染谷丘高校をはじめ多くの学生諸君、地元の方々に、心から感謝を申し上げます。

例 言

○ 本書は、昭和50年2月25日から3月18日まで、長野県小県郡東部町大字田中宇城の前681～844番地一3所在の城の前遺跡で行なった発掘調査、ならびに出土遺物に関する報告書である。

○ この調査は、長野県企業局が、当該地籍に住宅団地を造成するに伴い実施した緊急発掘調査であり、長野県教育委員会文化課の指導の下に、東部町教育委員会が主体となって行なったものである。調査は、さらに東部町教育委員会が、上小考古学研究会に委託して実施された。

○ 出土遺物の整理は、京都女子大学・信州大学・新潟大学・共立女子大学・共立女子短期大学の学生諸君・および高校生諸君の協力により、児玉卓文氏（長野県飯山照丘高校教諭）と小林が分担して行ない、小林が全般の調整を担当した。

○ 本書の執筆は、各調査員が分担して行ない、東部町教育委員会と協議しながら、小林が編集を担当した。

○ 本書の遺構、および出土遺物の整理には、記述を簡略にするため、下記の記号と番号を用い、遺構実測図は60分の1、部分図は30分の1、遺物実測図は3分の1の縮尺とした。

遺跡略号—J O 縄文期—J 弥生期—Y 古墳および歴史時代（土師期）—H

土坑—D その他特殊遺構—S

遺構の整理番号は、発見順に付した。

○ 今回の調査は、工期の関係で、2月下旬から厳しい寒気の中で行なわれた。この調査が多大の成果を収めて、無事完了できたのは、東部町教育委員会事務局の努力と、地元の多くの皆さんの協力、新潟大・信州大・大東文化大・日本工業大・立正女子大・立正大・明治学院大・共立女子大・明治大・東京写真大・中京大・東京女子短大・大妻女子短大・東洋短大・女子美術大・共立女子短大・武蔵野女子大などの大学生諸君や、上田染谷丘高校歴史史班・上田高校郷土研究班・上田千曲高校考古学同好会・小県東部高校・小諸高校などの多くの高校生諸君の献身的努力の賜物である。ここに併せて心から敬意を表し、感謝申し上げる所である。

昭和50年9月13日

小林 幹 男

本文目次

序にかえて	1
例 言	2
第Ⅰ章 発掘調査の経緯と概要	15
1 発掘調査の経過	16
2 調査団の構成	18
3 調査日誌	19
第Ⅱ章 遺跡の立地と環境	25
1 地理的環境	26
2 歴史的環境	27
第Ⅲ章 発見された遺構と遺物	30
1 I地区の遺構と遺物	31
A 弥生時代の遺構	32
(1) Y-1号住居跡	33
(2) Y-2号住居跡	34
(3) Y-3号住居跡	36
(4) Y-4号住居跡	37
(5) Y-5号住居跡	38
(6) Y-6号住居跡	39
(7) Y-7号住居跡	39
(8) Y-8号住居跡	39
(9) Y-9号住居跡	39
(10) Y-10号住居跡	40
(11) Y-11号住居跡	40
(12) Y-12号住居跡	42
(13) Y-13号住居跡	43
(14) Y-14号住居跡	44
(15) Y-15号住居跡	45
(16) Y-16号住居跡	46
(17) Y-17号住居跡	46
(18) Y-18号住居跡	48

19	Y-19号住居跡	48
20	Y-20号住居跡	49
21	Y-環溝遺構	50
B 弥生時代の出土遺物		51
(1)	壺形土器	51
(2)	鉢形土器	54
(3)	高坏形土器	54
(4)	台付甕形土器	56
(5)	甕用鉢形土器	56
(6)	甕形土器	56
(7)	鉄器	59
C 古墳時代と歴史時代の遺構		59
(1)	H-1号住居跡	60
(2)	H-2号住居跡	61
(3)	H-3号遺構	61
(4)	H-4号住居跡	61
(5)	H-5号住居跡	62
(6)	H-6号住居跡	64
(7)	H-7号住居跡	64
(8)	H-8号住居跡	66
(9)	H-9号住居跡	66
10	H-10号住居跡	66
11	H-11号遺構	69
12	H-12号住居跡	69
13	H-13号住居跡	70
14	H-14号住居跡	71
15	H-15号住居跡	72
16	H-16号遺構	74
17	H-17号住居跡	74
18	H-18号遺構	74
19	H-19号住居跡	75
20	H-20号住居跡	75
21	H-21号遺構	75

22	H-22号住居跡	76
23	H-23号住居跡	77
24	H-24号遺構	78
25	H-25号住居跡	78
26	H-26号住居跡	79
27	H-27号住居跡	80
28	H-28号住居跡	80
29	H-29号住居跡	81
30	H-30号遺構	81
31	H-31号住居跡	81
32	H-32号住居跡	83
33	H-33号住居跡	85
34	H-34号住居跡	86
35	H-35号住居跡	88
36	H-36号住居跡	89
37	H-37号住居跡	89
38	H-38号住居跡	89
39	H-39号住居跡	89
40	H-40号住居跡	89
41	H-41号住居跡	90
42	H-42号遺構	91
43	H-43号住居跡	92
44	H-44号住居跡	93
45	H-45号住居跡	93
46	H-46号住居跡	93
47	H-47号住居跡	93
48	H-48号住居跡	95
49	H-49号住居跡	95
50	H-50号住居跡	96
51	H-51号住居跡	97
52	H-52号住居跡	97
53	H-53号遺構	98
54	H-54号住居跡	98

55	H-55号住居跡	98
56	H-56号住居跡	98
57	H-57号住居跡	99
58	H-58号住居跡	100
59	H-59号遺構	100
60	H-60号遺構	101
61	H-61号住居跡	101
62	H-62号住居跡	101
63	H-63号住居跡	101
64	H-64号住居跡	102
65	H-65号住居跡	105
66	H-66号住居跡	106
67	H-67号住居跡	107
68	H-68号住居跡	108
69	H-69号住居跡	108
70	H-70号住居跡	108
71	H-71号住居跡	109
72	H-72号住居跡	110
73	H-73号住居跡	110
74	D-1号址跡	110
D	古墳時代と歴史時代の出土遺物	110
a	土師器	110
(1)	坏形土器	110
(2)	台付皿形土器	119
(3)	台付碗形土器	121
(4)	鉢形土器	121
(5)	高坏形土器	124
(6)	甕形土器	125
(7)	壺形土器	125
(8)	甌形土器	129
b	須恵器	129
(1)	坏形土器	129
(2)	台付皿形土器と台付碗形土器	130

(3) 有蓋坏形土器	130
(4) 壺形土器	133
(5) 甕形土器	133
(6) 甗形土器	133
(7) 細頸瓶	133
c 施釉陶器	133
d たたら跡の遺物	133
(1) 吹子羽口	134
(2) 坏形土器	134
e 鉄器	134
2 II地区の遺構と遺物	136
A 弥生時代の遺構	137
(1) Y-1号住居跡	137
(2) Y-2号竪穴遺構	138
(3) Y-3号竪穴遺構	138
(4) Y-4号住居跡	139
(5) Y-5号住居跡	139
(6) Y-6号住居跡	140
(7) Y-7号住居跡	140
B 弥生時代の出土遺物	140
(1) 壺形土器	140
(2) 高坏形土器	141
(3) 甕形土器	142
(4) 鉢形土器	142
C 古墳時代と歴史時代の遺構	142
(1) H-1号遺構	143
(2) H-2号住居跡	143
(3) H-3号住居跡	144
(4) H-4号住居跡	145
(5) H-5号住居跡	145
(6) H-6号住居跡	145
(7) H-7号住居跡	145
(8) H-D-1号遺構	146

(9) H-D-2号遺構	146
(10) H-D-3号遺構	147
(11) H-D-4号遺構	147
D 古墳時代と歴史時代の出土遺物	147
a 土師器	147
(1) 坏形土器	147
(2) 鉢形土器	149
(3) 甕形土器	149
(4) 埴形土器	149
(5) 高坏形土器	149
(6) 台付埴形土器	149
b 須恵器	151
(1) 坏形土器	151
(2) 台付坏形土器	151
(3) 甕形土器	151
c 鉄器	152
Ⅲ地区の遺構と遺物	152
A 弥生時代の遺構	152
(1) S-2製鉄跡遺構	152
(2) Y-環溝遺構	154
(3) Y-1号遺構	155
(4) Y-2号住居跡	155
(5) Y-3号住居跡	156
(6) Y-4号住居跡	156
(7) Y-5号住居跡	157
B 弥生時代の出土遺構	157
(1) 高坏形土器	175
(2) 鉢形土器	159
(3) 壺形土器	159
(4) 甕形土器	160
(5) 鈎付円筒形土器	160
(6) 鉄器	160
C 古墳時代と歴史時代の遺構	161

(1) H-1号住居跡	161
(2) H-2号住居跡	162
(3) H-3号住居跡	162
(4) H-4号住居跡	163
(5) H-5号住居跡	163
(6) H-6号住居跡	164
(7) H-7号住居跡	164
(8) H-8号住居跡	166
(9) S-1溝状遺構	166
D 古墳時代と歴史時代の出土遺物	166
a 土 師 器	166
(1) 坏形土器	167
(2) 鉢形土器	167
(3) 台付皿形土器	167
(4) 台付碗形土器	167
(5) 高坏形土器	167
(6) 甕形土器	170
(7) 埴形土器	170
(8) 皿形土器	171
b 須 恵 器	171
(1) 甕形土器	171
(2) 器台形土器	171
(3) 坏形土器	171
(4) 壺形土器	171
c 古 銭	172
第四章 考 察	173
1 弥生時代の遺構と遺物	174
2 弥生時代の製鉄跡遺構	179
3 古墳時代と歴史時代の遺構と遺物	180
4 古墳時代と歴史時代の製鉄跡遺構	187
あとがき	189

図 版 目 次

図版 1	城の前遺跡全景	191
図版 2	城の前遺跡Ⅰ地区全景	192
図版 3	H-10号住居跡と石組かまど	193
図版 4	I地区北西隅の遺構	194
図版 5	H-5号住居跡と周辺の遺構	195
図版 6	H-11号住居跡とたたら跡	196
図版 7	H-19号住居跡(上)H-11号住居跡周辺の遺構(下)	197
図版 8	H-16号遺構と周辺の遺構	198
図版 9	H-16号遺構のたたら跡と周辺の遺構	199
図版 10	H-16号遺構のたたら跡	200
図版 11	H-18号遺構と周辺の遺構	201
図版 12	Y-10・18号住居跡と周辺の礫層	202
図版 13	Y-12号住居跡とH-21号遺構	203
図版 14	H-24号遺構とたたら跡	204
図版 15	H-64号住居跡と石組かまど址	205
図版 16	H-65号住居跡と石組かまど址	206
図版 17	I地区の遺構(H-31・2・35・36・Y-1号住居跡)	207
図版 18	I地区の石組かまど址	208
図版 19	Y一環溝遺構と周辺の遺構	209
図版 20	鉄器の出土状態	210
図版 21	土器の出土状態1)	211
図版 22	土器の出土状態2)	212
図版 23	土器の出土状態3)	213
図版 24	Ⅱ・Ⅲ地区の全景と発掘風景	214
図版 25	Ⅱ-H-2号住居跡と土器の出土状態	215
図版 26	Ⅱ地区の遺構と土器の出土状態	216
図版 27	Ⅲ地区の全景と発掘調査風景	217
図版 28	Ⅲ-H-8号住居跡と土器の出土状態	218
図版 29	Ⅲ地区の遺構(H-7号住居跡と溝状遺構)	219
図版 30	Ⅲ-Y-製鉄跡遺構1)	220

図版31	Ⅲ-Y-製鉄跡遺構2)	2 2 1
図版32	Ⅲ地区の遺構	2 2 2
図版33	Ⅲ地区の土器出土状態	2 2 3
図版34	城の前遺跡の出土遺物(鉄器・吹口羽口・古銭)	2 2 4
図版35	城の前遺跡の弥生式土器(1)	2 2 5
図版36	城の前遺跡の弥生式土器(2)	2 2 6
図版37	城の前遺跡の土師器と須恵器(1)	2 2 7
図版38	城の前遺跡の土師器(2)	2 2 8
図版39	城の前遺跡の土師器と須恵器(3)	2 2 9
図版40	城の前遺跡の土師器(4)	2 3 0

挿 図 目 次

第1図	城の前遺跡発掘調査風景	1 5
第2図	城の前遺跡全図(折り込み)	1 8
第3図	城の前遺跡発掘調査団	2 4
第4図	城の前遺跡と周辺の遺跡	2 5
第5図	城の前遺跡Ⅰ地区全景	3 0
第6図	城の前遺跡Ⅰ-H-25号住居跡北側断面図	3 1
第7図	城の前遺跡Ⅰ-T-3・Ⅰ-U-1東側断面図	3 2
第8図	城の前遺跡Ⅰ地区の住居跡分布図	3 3
第9図	Ⅰ-Y-1・8号住居跡実測図1)	3 4
第10図	Ⅰ-Y-2、H-1号住居跡実測図2)	3 5
第11図	Ⅰ-Y-3・7・20号住居跡実測図3)	3 6
第12図	Ⅰ-Y-4・6・17、H-6号住居跡実測図4)	3 7
第13図	Ⅰ-Y-5号住居跡、H-3号遺構実測図5)	3 8
第14図	Ⅰ-Y-9、H-15号住居跡、H-53号遺構実測図6)	4 0
第15図	Ⅰ-Y-10・14、H-12号住居跡実測図7)	4 1
第16図	Ⅰ-Y-11号住居跡実測図8)	4 2
第17図	Ⅰ-Y-12、H-61号住居跡実測図9)	4 3
第18図	Ⅰ-Y-13、H-23号住居跡実測図10)	4 4
第19図	Ⅰ-Y-3・14号住居跡実測図11)	4 5
第20図	Ⅰ-Y-15号住居跡実測図12)	4 6

第21图	I—Y—18、H—40号住居跡、H—30号遺構実測図13	47
第22图	I—Y—19、H—43号住居跡実測図14	48
第23图	I—Y—環溝全測図15	49
第24图	I—Y—環溝・16・17・19・20、H—43・46・48号住居跡実測図16	50
第25图	I—Y—1出土遺物(壺形土器)実測図1)	52
第26图	I地区出土遺物(弥生式土器)実測図2)	53
第27图	I地区出土遺物(弥生式土器)実測図3)	55
第28图	I地区出土遺物(弥生式土器)実測図4)	57
第29图	I地区出土遺物(弥生式土器)実測図5)	58
第30图	I—H—2号住居跡実測図1)	60
第31图	I—H—3号遺構、H—4号住居跡実測図2)	62
第32图	I—H—1・5・9・17号住居跡実測図3)	63
第33图	I—H—7・19・20・22・62号住居跡、H—18号遺構実測図4)	65
第34图	I—H—8・44号住居跡、H—16号遺構実測図5)	67
第35图	I—H—10号住居跡実測図6)	68
第36图	I—H—11号遺構実測図7)	70
第37图	I—H—11号遺構たたら跡実測図8)	71
第38图	I—H—12・13号住居跡実測図9)	72
第39图	I—H—8・15・32号住居跡実測図10)	73
第40图	I—H—20・22号住居跡実測図11)	76
第41图	I—Y—9号住居跡、H—21号遺構実測図12)	77
第42图	I—H—25・26号住居跡、H—24号遺構実測図13)	79
第43图	I—H—24号たたら跡実測図14)	80
第44图	I—H—27・28・29号住居跡実測図15)	82
第45图	I—Y—18、H—45・57号住居跡、H—30号遺構実測図16)	83
第46图	I—Y—16、H—31・39・45号住居跡実測図17)	84
第47图	I—H—31号住居跡部分図18)	85
第48图	I—H—31・32・37・45号住居跡実測図19)	86
第49图	I—H—33号住居跡実測図20)	87
第50图	I—H—34・35・36号住居跡実測図21)	88
第51图	I—H—38・51・59・60号住居跡実測図22)	90
第52图	I—H—41・58号住居跡実測図23)	91
第53图	I—H—46号住居跡、H—42号遺構実測図24)	92

第54图	I—H—46·48号住居跡実測図25	94
第55图	I—H—47号住居跡実測図26	95
第56图	I—H—49·50·51·52号住居跡実測図27	96
第57图	I—H—51·52号住居跡実測図28	97
第58图	I—H—54·73号住居跡、H—59·60号遺構実測図29	99
第59图	I—H—58号遺構実測図30	100
第60图	I—H—63·66号住居跡実測図31	102
第61图	I—H—64·72号住居跡実測図32	103
第62图	I—H—64号住居跡部分図33	104
第63图	I—H—34·65号住居跡実測図34	105
第64图	I—H—65号住居跡部分図35	106
第65图	I—H—67·68·70·58号住居跡実測図36	107
第66图	I—H—68·69号住居跡実測図37	109
第67图	I地区出土遺物(土師器)実測図1	111
第68图	I地区出土遺物(土師器)実測図2	112
第69图	I地区出土遺物(土師器)実測図3	113
第70图	I地区出土遺物(土師器)実測図4	114
第71图	I地区出土遺物(土師器)実測図5	120
第72图	I地区出土遺物(土師器)実測図6	122
第73图	I地区出土遺物(土師器)実測図7	123
第74图	I地区出土遺物(土師器)実測図8	126
第75图	I地区出土遺物(土師器)実測図9	127
第76图	I地区出土遺物(土師器·縄文式土器)実測図10	128
第77图	I地区出土遺物(須惠器·灰輪陶器)実測図11	131
第78图	I地区出土遺物(須惠器)実測図12	132
第79图	I地区出土遺物実測図13	134
第80图	I~III地区出土遺物(鉄器)実測図14	135
第81图	I—H—25号住居跡遺物出土状態	136
第82图	城の前遺跡II地区の住居跡分布図	136
第83图	II—Y—1·4·6、H—4·5·6号住居跡、Y—3号竪穴遺構実測図11	137
第84图	II—Y—2号竪穴遺構、Y—7号住居跡、D—1号土坑実測図2	138
第85图	II—Y—5号住居跡実測図3	139
第86图	II地区出土遺物(弥生式土器)実測図	141

第87図	Ⅱ-H-1号遺構実測図1)	142
第88図	Ⅱ-H-2号住居跡実測図2)	143
第89図	Ⅱ-H-3号住居跡、D-2・3・4号土坑実測図3)	144
第90図	Ⅱ-H-7号住居跡実測図4)	146
第91図	Ⅱ地区出土遺物実測図1)	148
第92図	Ⅱ～Ⅲ地区出土遺物実測図2)	150
第93図	Ⅱ地区出土遺物(須恵器実測図3)	151
第94図	城の前遺跡Ⅲ地区の住居分布図	152
第95図	Ⅲ地区製鉄跡遺構実測図1)	153
第96図	Ⅲ-Y-2・3・5号住居跡実測図2)	155
第97図	Ⅲ-Y-2・3号住居跡実測図3)	156
第98図	Ⅲ-Y-4、H-1号住居跡実測図4)	157
第99図	Ⅲ地区出土遺物(弥生式土器実測図)(1)	158
第100図	Ⅲ地区出土遺物(弥生式土器)実測図2)	159
第101図	Ⅲ-H-1号住居跡実測図1)	161
第102図	Ⅲ-H-2号住居跡実測図2)	162
第103図	Ⅲ-H-3・4・5号住居跡、S-1号実測図3)	163
第104図	Ⅲ-H-6号住居跡実測図4)	164
第105図	Ⅲ-H-4・7号住居跡実測図5)	165
第106図	Ⅲ-H-8号住居跡実測図(6)	166
第107図	Ⅲ地区出土遺物実測図1)	168
第108図	Ⅲ地区出土遺物実測図2)	169
第109図	城の前遺跡出土の古銭	172
第110図	Ⅲ-H-8号住居跡遺物出土状態	173
第111図	城の前遺跡Ⅰ地区の遺構(弥生時代)	175
第112図	城の前遺跡Ⅱ地区の遺構(弥生時代)	176
第113図	城の前遺跡Ⅰ地区の遺構(古墳～歴史時代)	182
第114図	城の前遺跡Ⅱ地区の遺構(古墳～歴史時代)	183

第 I 章 発掘調査の経緯と概要



第 1 図 城の前遺跡発掘調査風景

1 発掘調査の経過

城の前遺跡が、いつごろ発見されたのか、記録の上では判然としない。しかし、大正11年の「小⁽¹⁾県郡史」は、旧県村に、八名の上・長坂の2遺跡を載せているが、城の前の名は見えない。このことから、この遺跡の発見は、昭和期に入ってからと考えられよう。

そして、いわゆる戦前には、これらの資料がほとんどないことから、公式の記録としては、「信濃史料」の縄文・打製石斧、弥生・土器の記述が、恐らく最初のものであろう。⁽²⁾

この遺跡は、その後南端を走る信越線の複線化に伴って、昭和42年に広範な分布調査が行なわれ、縄文・弥生・古墳および歴史時代の各期にわたる複合遺跡であることが判明した。さらに昭和44年には、同事業計画に伴う発掘調査が実施された。この発掘調査対象区域は、遺跡南端の段丘崖下であり、結局南端部の遺跡内から流出したと推考される縄文期と歴史時代（平安末・室町・江戸の各時期）の遺物を検出したに過ぎなかった。

しかし、当該土地の所有者は、最近になって、農耕時や島の整備に際して、弥生後期の箱清水式土器（壺・甕等のほぼ完形品）、およびⅢ地区（第2図）発掘地点のやや南側から、北宋銭や一部南宋銭を含むかなりの量の古銭を掘り出している。

また、昨年（昭和49年）は、関越自動車道上越線の建設予定地域内の分布調査が行なわれ、この遺跡の所在、時期等が再確認されている。⁽⁵⁾

今回の調査は、この地籍が長野県企業局の行なう住宅団地造成により、かなり広範に現状変更が予知されたので、東部町教育委員会が調査主体となり、実際の調査を上小考古学研究会に委託して実施した緊急発掘調査である。

埋蔵文化財包蔵地「城の前遺跡」発掘調査委託契約書

昭和50年1月31日

委託者 東部町教育委員会

教育長 別府 基保

受託者 上田市川辺町869番地の6

上小考古学会会長 小林 幹男

東部町城の前遺跡発掘調査（以下「発掘調査」という）の実施に関する業務（以下「業務」という）について委託者、東部町教育委員会（以下「甲」という）と受託者、上小考古学会会長小林幹男（以下「乙」という）との間に次のとおり委託契約を締結する。

（総則）

第1条 乙は別紙の「発掘調査実施計画書」に従って業務を実施するものとする。

（期間）

第2条 乙は、昭和50年3月31日までに現場における発掘作業を終了し、昭和50年12月31日まで

にいきさいの業務を完了するものとする。

(委託料及び支払い方法)

第3条 甲が業務に関する費用として、乙に支払う金額は、金 4,900,000円以内とする。

2. 前項の費用の支払いは、業務開始後1カ月以内に内金 4,600,000円を概算払いする。

(作業の実施)

第4条 乙は業務を実施するにあたっては、甲の施行する事業の工事工程に支障のないよう努めるものとする。

2. 乙は業務の実施にあたっては、作業個所に作業表示旗を掲げ、関係者に腕章を着用させるものとする。

(作業日誌)

第5条 乙は発掘調査の実施中において、「作業日誌」を記録しなければならない。

(出土品の取扱い)

第6条 発掘された出土品の処置については、甲、乙協議のうえ乙が甲の名において法令の定むるところにより処置するものとする。

(中間報告)

第7条 甲は必要と認められる場合は、乙に対し業務の進行状況について報告を求めることができるものとする。

(決算及び精算)

第8条 乙は業務が完了したときは、業務に要した費用について決算を行い、決算書を甲に提出するものとする。

2. 甲が前項の決算書の提出を受けたときは、当該決算書に基づき第3条により約定した金額以内において、甲、乙協議して精算を行なうものとする。

(発掘調査報告書)

第9条 乙は業務を完了したときは、「発掘調査報告書」を添えて「発掘調査完了報告書」を甲に提出するものとする。

(疑議の協議) 義

第10条 この契約に定めるもののほか、この契約の実施に関し、疑義が生じた場合には、甲、乙協議して決定するものとする。

上記契約の締結を証するため、本契約書2通を作成し、両者記名押印のうえ、各自1通を保有する。

調査は、昭和50年2月25日に着手された。調査の方法は、測量杭を基準点として、Ⅰ地区では、西から東へA→T、北から南へⅠ→14の4m×4mの170グリッド、2,720㎡を設定し、Ⅱ地区では、北から南へⅠ→11、東から西へA→Kの4m×4mの75グリッド、1,200㎡を設定し、Ⅲ地

区では、北から南へA・B、東から西へ1→31の2m×2mの60グリッド、240㎡、合計4,160㎡を設定し、Ⅰ地区からⅢ・Ⅱ地区の順序で調査を実施した(第2図)。

この結果、Ⅰ地区では144グリッド、2,304㎡を発掘して、弥生期の住居跡20、古墳時代および歴史時代の住居跡等73を検出し、Ⅱ地区では、45グリッド、720㎡を発掘して、弥生期の住居跡7、古墳時代と歴史時代の住居跡7、土埴4を発掘し、さらにⅢ地区でも60グリッド、240㎡を発掘して、弥生期の住居跡等5、古墳時代および歴史時代の住居跡8などを検出した。この間に検出した遺物は、土器・鉄器・古銭・吹子口など、段ボール箱25個にもおよんだ。特に今回の調査で注目されたのは、弥生期の製鉄遺構と環溝遺構、古墳時代と歴史時代の鍛冶工房跡の発見であろう。そして、これらから検出された出土遺物は、さらに精緻な化学的・物理学的分析資料が必要である。

出土遺物の整理は、6月初旬から休日などを利用して行ない、およそ3ヶ月の日時を費した。復元・実測等の作業は、これと平行して行ない、8月末から報告書執筆に着手した。

今回の調査が、このように多大の成果を収めて無事完了できたのは、地元の皆さんのご協力と、多くの大学生・高校生の努力の賜物である。東部町は、県下でも有数の埋蔵文化財の宝庫であり、一面また最近の開発で、最も破壊の激しい地域でもある。この文化財に対する熱意を結集して、今後の文化財保護に一層の努力を望みたい。

註1 小県郡役所「小県郡史」大正11年 小県時報局

註2 信濃史料刊行会「信濃史料・第1巻上」昭和31年 信濃史料刊行会

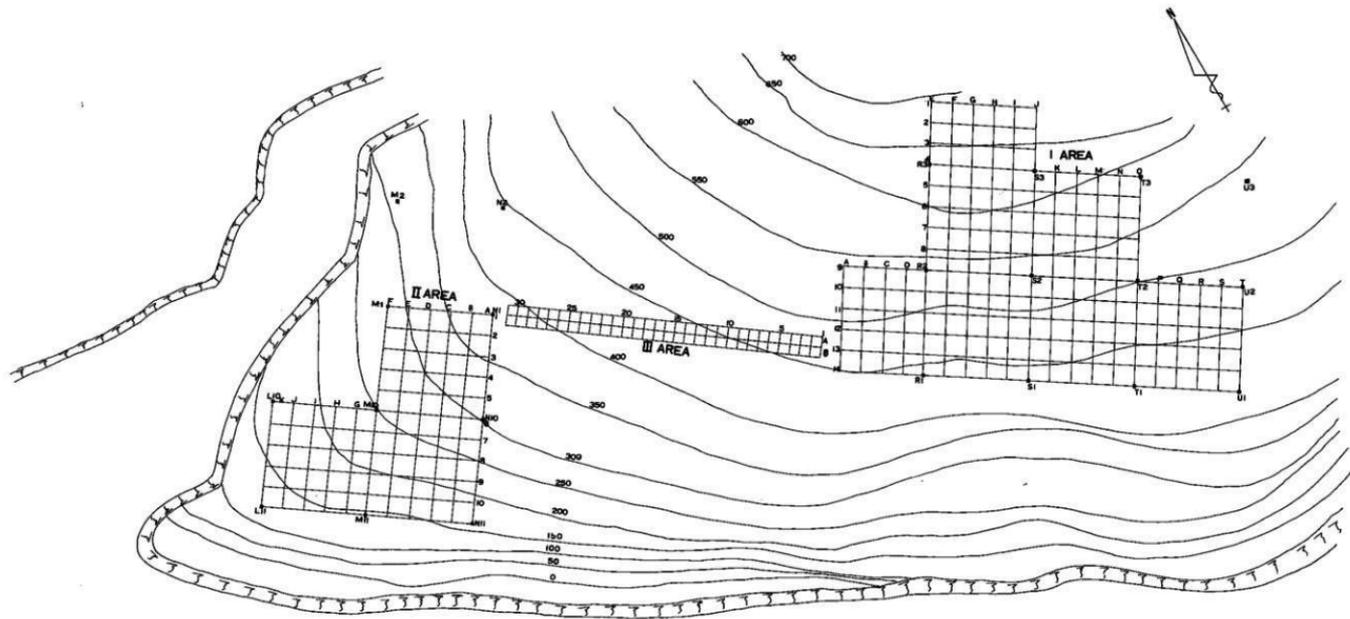
註3 長野県教育委員会「国鉄複線化等開発地域内埋蔵文化財緊急分布調査報告書」
1968年 長野県教育委員会

註4 長野県教育委員会「信越本線滋野・大屋間複線化工事事業地内埋蔵文化財緊急発掘調査報告書」1970年 長野県教育委員会

註5 長野県教育委員会「関越自動車道上越線建設予定地域内埋蔵文化財緊急分布調査報告書」
1975年 長野県教育委員会

2 調査団の構成

- | | |
|------------------|-----------------------------|
| (1) 発掘調査の主体(委託者) | 東部町教育委員会 |
| (2) 発掘調査の受託者 | 上小考古学研究会(会長 小林幹男) |
| (3) 発掘担当者(調査主任) | 小林幹男 日本考古学協会員
上田市文化財調査委員 |
| (4) 調査員 | 川上元 日本考古学協会員
上田市博物館学芸員 |



第2攻城の前遺跡全図

岩 佐 今朝人	上小考古学研究会員 東部町祇津小学校教諭
塩 入 秀 敏	上小考古学研究会員 上田女子短期大学助手
小 野 仁 志	上小考古学研究会員 長野県上田高等学校教諭
児 玉 卓 文	上小考古学研究会員 長野県飯山照丘高等学校教諭
猪 熊 啓 司	上小考古学研究会員 長野県上田千曲高等学校教諭

(5) 調査補助員

遺物係(c) 篠原若枝(明治大)・実測係(c)土屋喜好(日本工業大)

小林その(大東文化大)・依田るり子(二松学舎大)・柳田和代(新潟大)・塚田豊子(新潟大)・土屋弘子(新潟大)・井出友子(新潟大)・富沢幸子(立正女子大)・竹内美智子(立正大)・小林綾子(明治学院大)・木村知津子(共立女子大)・古谷光子(信州大)・望月美千代(信州大)・藪悦子(信州大)・長越信秀(東京写真大)・田子光浩(中大)・清水美佐子(東京女子短大)・原昭子(大妻女子短大)・小林香代子(東洋短大)・大井町子(武蔵野女子大)・樋村留美子(女子美術短大)・土屋幸子(共立女子短大)・久保田晴美(東京女子短大)

(6) 協力者

地 元 東部町有志の皆さん(45名)

高校生 長野県上田染谷丘高等学校歴史班(39名)

長野県上田高等学校郷土史研究班(11名)

長野県上田千曲高等学校考古学同好会(15名)

長野県小県東部高等学校有志(3名)

長野県小諸高校高等学校有志(1名)

(7) 調査事務局 東部町教育委員会事務局(事務局員)岩井千賀子

3 調査日誌

2月25日(火) 晴時々曇

調査方法、実測図の縮尺等について協議する。その結果、調査方法は測量杭を基準にして、4m×4mのグリッド法により、Ⅰ地区およびⅢ地区から参加人員に応じて着手することにした。実測図は全測図を300分の1、遺構図を20分の1、部分図を10分の1の縮尺に統一することにした。

事務局に依頼しておいた器材の搬入が遅れ、10時過ぎに設置、地形測量に入る。その後も器資材の遅れに悩まされ、調査団との連絡の方法に、研究が望まれた。

日中には凍土が解け、雑草と泥土、南南東の強風に悩まされながら、I地区とIII地区の地形測量をほぼ完了する。

2月26日(水) 晴

昨日に続いてII地区の地形測量と、I地区およびIII地区のグリッドの設定をする。III地区は中央の道路部分で、幅員が狭いため、中心杭を基準に、2m×2mのグリッドを北側へ東から西に向ってA1からA30、南側へ同様にB1からB30を設定した。I地区では、西北の道路沿いから測量杭を基準に、西から東へE→J、北から南へ1→8の40グリッドを設定した。

2月27日(木) 曇

人員の関係で、III地区から発掘に着手し、夕刻までに39グリッドを発掘、Y-1号住居跡と、弥生式土器片1,024、土師器片137、須恵器片42を検出した。

I地区でも午後から発掘に着手、11グリッドを発掘して、H-1号住居跡と弥生式土器片604、土師器片166、須恵器片70、灰釉陶器片4、鉄器片2を検出した。午後から北風が激しく、寒さにふるえながら調査を行なう。

2月28日(金) 晴

III地区とI地区の発掘作業を行なう。III地区では18グリッドを発掘、Y-2・3号住居跡を検出。Y-2号とH-1号の発掘に着手した。出土遺物は、弥生式土器片588、土師器片54、須恵器片22、灰釉陶器片6、鉄鏃1などであった。

I地区でも前日の作業を継続し、Y-1・2号、H-2号、弥生式土器片769、土師器片66、須恵器片96、灰釉陶器片16などを検出した。本日よりY-1号の発掘に着手した。

3月1日(土) 晴

I地区では、53グリッドを発掘、Y-3~11、H-3~14を検出する。本日より遺構の検出が相継ぎ、一覧表で所在、発掘着手・完了・実測完了を示し、脱漏のないようにした。以下記述の便宜のために、一括表示をしておく。

I-Y

遺構番号	グリッド番号	発掘着手	発掘完了	実測完了	遺構番号	グリッド番号	発掘着手	発掘完了	実測完了
Y-1	H~1	2・28 ^A	3・1 ^B	3・3 ^B	Y-7	D~13	3・13	3・15	3・18
Y-2	H~2	3・1	3・1	3・5	Y-8	G~1	3・1	3・3	3・3
Y-3	C~13	3・9	3・11	3・18	Y-9	H~3	3・9	3・11	3・14
Y-4	H・F~1	3・3	3・5	3・11	Y-10	H~5	3・9	3・9	3・9
Y-5	F~1	3・1	3・5	3・14	Y-11	I~6	3・3	3・5	3・5
Y-6	F~1	3・1	3・5	3・11	Y-12	G~8	3・3	3・4	3・8

Y-13	F~8	3・8	3・9	3・9	Y-17	F~2	3・1	3・5	3・9
Y-14	A~12	3・8	3・8	3・13	Y-18	I~8	3・9	3・11	3・11
Y-15	G~7	3・9	3・9	3・13	Y-19	D~10	3・12	3・12	3・12
Y-16	D~11	3・9	3・12	3・13	Y-20	C~13	3・4	3・15	3・18

I-H

遺 番	構 号	グリッド 番 号	発 着	掘 手	発 完	掘 了	実 測	遺 番	構 号	グリッド 番 号	発 着	掘 手	発 完	掘 了	実 測
H-1		F・G~3	3・1	3・1	3・3	3・3		H-28		F~9	3・4	3・8	3・8	3・9	
H-2		H~2	3・1	3・1	3・3	3・3		H-29		F~10	3・4	3・8	3・8	3・9	
H-3		F~1	3・1	3・1	3・4	3・4		H-30		I~8・9	3・4	3・9	3・9	3・11	
H-4		G~1	3・3	3・4	3・5	3・5		H-31		B・C~12	3・5	3・8	3・8	3・8	
H-5		E~2	3・3	3・8	3・9	3・9		H-32		B・C~10	3・9	3・11	3・11	3・13	
H-6		E~1	3・3	3・4	3・11	3・11		H-33		F~2	3・4	3・5	3・5	3・12	
H-7		F~7	3・11	3・11	3・14	3・14		H-34		H~9	3・8	3・8	3・8	3・8	
H-8		E~4	3・3	3・4	3・5	3・5		H-35		H・I~9	3・5	3・8	3・8	3・8	
H-9		E~3	3・3	3・9	3・9	3・9		H-36		I~9	3・5	3・8	3・8	3・8	
H-10		H~1	3・3	3・8	3・9	3・9		H-37		B~10	3・8	3・9	3・9	3・13	
H-11		G~3	3・3	3・3	3・4	3・4		H-38		B・C~9	3・8	3・9	3・9	3・11	
H-12		G~5	3・1	3・3	3・4	3・4		H-39		C~12	3・11	3・12	3・12	3・12	
H-13		H~5	3・3	3・3	3・4	3・4		H-40		I・J~7	3・8	3・11	3・11	3・11	
H-14		G~6	3・8	3・9	3・9	3・9		H-41		S~10	3・11	3・11	3・11	3・14	
H-15		E~4	3・9	3・11	3・14	3・14		H-42		C・D~9	3・8	3・9	3・9	3・13	
H-16		F~5	3・9	3・11	3・14	3・14		H-43		C~10	3・9	3・12	3・12	3・12	
H-17		E~4	3・9	3・11	3・14	3・14		H-44		E・F~4	3・12	3・13	3・13	3・14	
H-18		F~6	3・11	3・12	3・14	3・14		H-45		C~11	3・11	3・12	3・12	3・12	
H-19		F~6・7	3・9	3・12	3・14	3・14		H-46		D・E~10	3・8	3・9	3・9	3・13	
H-20		F~6・7	3・3	3・5	3・8	3・8		H-47		S~9	3・11	3・11	3・11	3・14	
H-21		L~3	3・3	3・12	3・12	3・12		H-48		E~11	3・9	3・11	3・11	3・13	
H-22		G~7	3・8	3・8	3・8	3・8		H-49		K~10	3・9	3・11	3・11	3・12	
H-23		E~7	3・3	3・9	3・9	3・9		H-50		K~10	3・9	3・11	3・11	3・12	
H-24		A~9	3・8	3・9	3・12	3・12		H-51		L~10	3・9	3・11	3・11	3・12	
H-25		A~10	3・11	3・11	3・12	3・12		H-52		M~10	3・8	3・13	3・13	3・13	
H-26		A~10	3・11	3・11	3・12	3・12		H-53		H~3・4	3・9	3・9	3・9	3・14	
H-27		G~9	3・4	3・9	3・9	3・9		H-54		R~12	3・11	3・11	3・11	3・14	

H-55	R~9	3・11	3・11	3・14	H-65	H~10	3・13	3・16	3・16
H-56	R・S~10	3・11	3・13	3・14	H-66	H~12	3・15	3・16	3・16
H-57	R~10	3・11	3・13	3・14	H-67	I~10	3・15	3・16	3・18
H-58	R~11・12	3・11	3・11	3・14	H-68	I~12	3・15	3・16	3・17
H-59	S~13	3・11	3・11	3・14	H-69	I~13	3・15	3・16	3・17
H-60	S~12・13	3・11	3・11	3・14	H-70	J~11	3・15	3・16	3・18
H-61	F~7	3・13	3・14	3・14	H-71	J~10・11	3・15	3・16	3・18
H-62	F~6・7	3・13	3・15	3・14	H-62	E~13	3・15	3・16	3・18
H-63	G~12	3・13	3・16	3・16	H-73	R~13	3・11	3・11	3・14
H-64	F~12・13	3・13	3・16	3・18	H 7				

Ⅲ～Y

遺番号	グリッド番号	発掘着手	発掘完了	実測完了	遺番号	グリッド番号	発掘着手	発掘完了	実測完了
Y-1	B~13・14	3・5 ^H _B	3・7 ^H _B	3・14 ^B	Y-4	B~7・8	3・4	3・4	3・4
Y-2	B~15・16・17	2・28	3・1	3・2	Y-5	A~13・14	3・17	3・18	3・18
Y-3	A~18	3・1	3・2	3・4					

Ⅲ～H

遺番号	グリッド番号	発掘着手	発掘完了	実測完了	遺番号	グリッド番号	発掘着手	発掘完了	実測完了
H-1	A~9	2・28 ^B	3・1 ^H _B	3・1 ^B	H-5	B~19~21	3・5	3・9	3・11
H-2	B~11・12	3・5	3・9	3・11	H-6	A・B~25・26	3・8	3・13	3・11
H-3	B~20	3・5	3・9	3・11	H-7	A・B~4・5	3・5	3・9	3・11
H-4	A~21	3・5	3・9	3・11	H-8	A・B~2・3	3・8	3・9	3・11

3月2日(日) 晴

I地区に西から東へA→D、北から南へ9→14のグリッドを設定して、20グリッドを発掘した。

I・Ⅲ地区とも前日の発掘および実測作業を継続する。

3月3日(月) 曇後晴

I地区E9→13、F・G・H・I9→13グリッドを設定して調査を行なう。

3月4日(火) 晴

I地区Iグリッドの東へJ→N、4→13グリッドを設定して、鋭意遺構の検出と発掘・精査を行なう。

朝日・毎日・読売・中日・信濃毎日の各新聞社・NHK・SBCの各放送局取材に見える。別府教育長・深井助役が現地視察をされる。

3月5日(水) 曇後吹雪

前日の作業を継続し、出土遺物の整理を行なう。

3月6日(木) 雪

降雪のため、作業を中止する。

3月7日(金) 曇

積雪のため、今日も作業を中止する。

3月8日(土) 晴

I地区のO→S、9-13グリッドを設定して、調査を行なう。

併行してIII地区の精査を行ない、H-3~8を検出する。

3月9日(日) 晴

I・III地区の作業を継続する。

3月10日(月) 雨後晴

雨のため作業を中止する。

3月11日(火) 晴

I・III地区で、前日の発掘・遺構の精査・実測を継続する。

今日からII地区のグリッドの設定、発掘作業を行なう。

3月12日(水) 晴

I・III地区で、遺構の精査・実測、II地区で発掘を継続する。

3月13日(木) 晴

I・II地区で、前日の作業を継続する。III地区で検出された製鉄跡遺構の精査に着手する。

3月14日(金) 晴

各地区とも前日の作業を継続し、III地区の一部埋戻しと、II地区の遺構の精査を行なう。

II-Y

遺構番号	グリッド番号	発着掘手	発掘完了	実測完了	遺構番号	グリッド番号	発着掘手	発掘完了	実測完了
Y-1	D-2	3 ^A ・14 ^B	3 ^A ・16 ^B	3 ^A ・17 ^B	Y-5	C-3	3・14	3・16	3・16
Y-2	D-5	3・14	3・16	3・16	Y-6	D-1・2	3・14	3・16	3・16
Y-3	D-3	3・16	3・16	3・17	Y-7	D・E-6	3・14	3・16	3・16
Y-4	E-2	3・16	3・16	3・17					

II-H

遺構番号	グリッド番号	発着掘手	発掘完了	実測完了	遺構番号	グリッド番号	発着掘手	発掘完了	実測完了
H-1	A-1	3 ^A ・14 ^B	3 ^A ・15 ^B	3 ^A ・15 ^B	H-5	E-2	3・16	3・16	3・17
H-2	A-3	3・14	3・16	3・18	H-6	D-2	3・16	3・16	3・17
H-3	G・H-7	3・14	3・15	3・15	H-7	C-1	3・14	3・16	3・17
H-4	D-2	2・14	3・16	3・17					

3月15日(土) 晴

I地区では、F～Hの10～13グリッドを精査し、遺構を追求する。II地区では、前日の作業を継続し、III地区では製鉄跡遺構の精査を行なう。

3月16日(日) 晴

I地区では、遺構の追求と実測、環溝の検出に努める。II地区では、遺構の精査を完了し、III地区では、製鉄跡遺構の追求を継続した。

3月17日(月) 晴

I地区では実測と環溝の追求を続ける。II地区では発掘を完了し、残りの実測を行なう。III地区は、今日も製鉄跡遺構の精査を続ける。

3月18日(火) 小雪後晴

各地区の実測と照合、整理を行ない、現地の調査作業を完了した。

3月20日(木)

実測図を点検し、若干の補充調査と関連調査を行ない、東部町教育委員会に調査事務・出土遺物・器材等の引継ぎを行なう。



第3図 城の前遺跡発掘調査団

第II章 遺跡の立地と環境



第4図 城の前遺跡と周辺の遺跡 1 : 25, 000

1 地理的環境

城の前遺跡は、千曲川を隔てて、北佐久郡北御牧村と接する東部町の中央南端部にあり、小県郡東部町大字田中宇城の前681～844番地-3地籍に所在する。

この遺跡が所在する東部平野は、二つの峯をあたかも烏帽子のように連ねてそびえる烏帽子岳(2,065.6m)、火口壁の東方の一部を失って、今は三方の壁を残す三方が峯(2,040.1m)、その東方に続く高峯山(2,105m)の南麓に広がる広大な火山裾野である。その鞍部や谷あいには発した河川は西から瀬沢川・成沢川・金原川・三分川・求女川・所沢川・西沢川・大石沢川・深沢川などが、南流あるいは南南西流して、土砂を押し出し、複雑な扇状地面をつくっている。現在の集落は、その扇頂部と扇端部、あるいは河川沿いの扇央部に多く分布し、その集落をつなぐように、主要道路も山麓線と扇端部をおよそ東西に走っている。

城の前遺跡は、この広大な扇状地のほぼ中央扇端部にあり、千曲川の北岸段丘崖に近い畑地上に位置している。遺跡の北方に接して、県道田中・望月線が走り、西方には、東部町の中心街田中の家並が続いている。

遺跡付近は、千曲川に向って、落差の小さな三つの段丘面をつくっているが、城の前遺跡は、その第2段丘面の全域に広がり、東西約200m、南北約100mの規模と推定される。遺跡の東北には、かつて豊かな水量の湧水があり、飲料水としても用いられたというのが、東南方に緩く傾斜する遺跡の東方を、いまもわずかに水が流れ、その先は低湿な水田地帯になっている。遺跡の西側は、1～2mの深さに開折された帯状の窪地となり、遺跡全体の微地形は、北側中央を高所とする緩い半球状を呈し、周辺に向っておよそ2.8°の勾配で傾斜している(第2図)。

第2段丘面の標高は、北方でおよそ535m、これと2mほどの落差をもって、第3段丘面が帯状に東西方向へ伸びているが、その中央やや南寄りを信越線が東西に走り、さらにその西端が深い段丘崖となって、千曲川の河床面に続いている(第4図)。

城の前遺跡は、このように千曲川に向って南面傾斜した日当りのよい畑地で、東部に押し出しの砂礫層を認めるが、その他は礫を含んだ火山灰のいわゆる黒ボクに覆われている。蛇行する千曲川は、ダム建設以来水量が減り、昔日の面影をとどめていない。しかし、その南岸には、羽毛山の集落があり、背後に巉巖たる数10mの絶壁がそばだって、特に春の桜の季節が見事である。絶壁の上は広大な八重原台地が展開している(第4図)。

遺跡の北方に眼を移せば、広大な火山裾野の彼方に、小県東部三山の烏帽子岳・三方が峯が望まれ、遙か東方には、東信濃の象徴でもある浅間火山(2,542m)が、白い噴煙をたなびかせて、長い裾野を美しく地平線に連ねている。

2 歴史的環境

烏帽子岳南面の広大な火山裾野は、縄文時代以後、各時代にわたる埋蔵文化財の宝庫である。しかし、この地域の埋蔵文化財の保護の状況は、必ずしも良好でなく、例年数件の破壊が、文化財トロールによって発見・報告され、考古学研究者はもちろん、多くの文化財関係者の間でも、よく話題になっている。

まず、今回の調査対象遺跡である城の前遺跡の周辺、および関連地域について概観すれば、柵津付近を扇頂部とする三分川、および所沢川にはさまれた地域は、まず扇頂部の柵津付近と、扇端部の田中・加沢・常田付近に、遺跡が集中している。

⁽¹⁾信濃史料によれば、柵津地区には、東町の塚原（縄文）・油田（縄文中期）・真行寺（縄文前・中・後期、弥生後期、土師前・後期）・桜畑（縄文中・後期）・練沢（縄文中期）・宮川（縄文中期）・五輪原（縄文・土師期）角屋（縄文）、西町の古大日（縄文）・古見立（縄文中期）・横町（縄文）・立町（縄文）・宮ノ入（縄文中・後期）・上ノ坂（縄文）・城山（縄文）・山越（縄文中・後期）・向町（縄文）・町屋（縄文）などの遺跡があり、また、田中・加沢・常田地区には、善福寺（縄文中期）・若宮（縄文中期・弥生後期・土師後期）大門前（弥生後期）・八名の上（縄文・弥生中期）・城の前（縄文・弥生）・久保田（弥生）・高呂添（縄文中期・弥生後期）・羽黒（縄文中・後期・弥生後期、須恵後期）・薬師（縄文・弥生）・伊勢原（縄文中期・弥生）伊豆宮（縄文中期・弥生後期）などの遺跡が記載されている（第4図）。

しかし、その後、田中・加沢・常田地区では、昭和42年夏の信越線複線化に伴う分布調査によって、北裏（土師後期）・天神前（土師後期）・日向（縄文中期・土師後期）・原（縄文中期・土師鏡石（縄文中期・土師後期）・堂庭（縄文中期・土師後期）・赤石A・B（土師後期）・柳反（土師後期）・石合（土師後期）などの遺跡が発見・追加された。そして、さらに昭和44年の信越線複線化工事に伴う緊急調査⁽³⁾によって、八名の上・城の前・善福寺・大門・石合・赤石A・Bの遺跡が第1次・第2次の2期にわたって発掘調査された（第4図）。

この結果、八名の上・城の前の両遺跡は、調査区域が遺跡の末端であったこともあって、大きな成果は得られなかったが、善福寺遺跡では、中世の土坑、土師期の住居跡、赤石B遺跡では、国分期の住居跡などが検出され、他の遺跡でも、大きな成果をあげることができた。

また、この調査に先だて、昭和43年の11月と翌年の1月には、菅平有料道路建設に伴う緊急発掘調査が行なわれ、柵津地籍では、元会下遺跡と桜畑遺跡の調査が行なわれた。桜畑遺跡の調査は、予期以上の成果をあげ、縄文時代前期の関山平行期の住居跡をはじめ、土師期の住居跡、土坑など検出し、さらに縄文時代早期の押型文土器片などを発見した。

上小地方の開発は、その後も急速に進み、遺跡の破壊は、目に余るものがあった。上小考古学研究会では、各市町村教育委員会と共催して、研究のための基礎資料の収集と文化財保護のために、

上小地方における市町村の全地域にわたって、年度計画で分布調査を実施した。東部町の椋津地域では、昭和48年夏にこの調査を行ない、新たに金井小路遺跡（土師）などを発見した。

このような数次にわたる調査によって、椋津地籍の遺跡は、すでに縄文時代早期には始まり、前期の関山期には、桜畑をはじめとして、かなりの範囲に広がりを見せ、中期には扇頂・扇端の各地籍に、縄文文化の急激な発展をみせていることが知られた。しかし、後期には、やや退化の傾向を示し、晩期になると、文化の推移が把握できないほどに衰微している。その理由がなへんにあるのか、いまの研究段階では、解明されるに至っていない。

この地籍の弥生文化は、中期の百瀬期にはじまっている。すでに八名の上遺跡では、この時期の文化の存在が知られている。今回の調査は、さらに、この地域の弥生文化の研究に多くの具体的な資料を提供する成果をあげた。

弥生時代の遺跡の分布は、扇頂部にも真行寺・桜畑・古大日など、僅かに認められるが、大部分は扇端部に分布し、後期の箱清水Ⅰ・Ⅱ式が主体となっている。

古墳時代から歴史時代の遺跡は、扇頂部と扇端部はもちろん、南流する扇央の河川沿いに、かなり広範に分布している。その時期は、鬼高期以後の後・晩期が主体と思われる。しかし、具体的調査が、必ずしも十分でない現状では、前・中期文化の様相を把握することができない。

今回の調査は、弥生時代後期の製鉄跡遺構と、土師後・晩期の鍛冶工房遺構を発見するなど、学問的にも貴重な成果をあげた。しかし、昭和42年の分布調査⁽⁵⁾によって発見された西原遺跡は、鉄滓・吹き口の発見によって、古代鍛冶工房遺構と推考されたが、K工場の建設に際して、全く未調査のまま破壊されてしまった。

城の前遺跡は、今回の調査によって、縄文中期、弥生後期、土師中・後・晩期、および中世から近世にわたる一大複合遺跡であることが判明した。そして、この周辺には、八名の上・羽黒・舞台善福寺・若宮など、同様な各期の複合遺跡があり、久保田・日向・大門前・伊豆宮・伊勢原・薬師高呂添なども、ほとんどが2時期以上にわたる複合遺跡である（第4図）。

そして、これら遺跡の学術的解明は、各期の集落の構造、相互の有機的關係など、斯学の巨視的分野と、住居跡の構造、層序の編年の追求、土器の器形・文様の地方的特色、周辺諸地域文化との関連等微視的な研究分野にも大きな貢献をすることは、まさに自明のことと思われるが、未調査のまま刻々破壊されてゆく現実をみるとき遺憾というよりも、心からの憤りを感じるのである。

特に、東に隣接する善福寺遺跡は、中世加沢善福寺の廃寺跡であることが知られ、また、灰粘陶器などと共に、鉄鏃・鉄滓などを出土しているので、城の前遺跡と同様な工房跡的性格をもつものとして注目される。

しかし、この遺跡も、近年しだいに周辺から蚕食されている。これらの現状に対して、早急に具体的対策が望まれる。

註1 信濃史料刊行会「信濃史料第1巻上」 昭和31年 信濃史料刊行会

- 註2 長野県教育委員会「国鉄複線等開発地域内埋蔵文化財分布調査報告書」
1968年 長野県教育委員会
- 註3 長野県教育委員会「信越本線滋野・大屋間複線化工事事業地内埋蔵文化財緊急発掘調査報告書」 1970年 長野県教育委員会
- 註4 有料道路発掘調査団「桜畑等埋蔵文化財緊急調査報告書」
昭和44年 長野県企業局
- 註5 註2 書47ページ西原遺跡の項
- 註6 註3に同じ

第Ⅲ章 発見された遺構と遺物



第5図 城の前遺跡Ⅰ地区全景

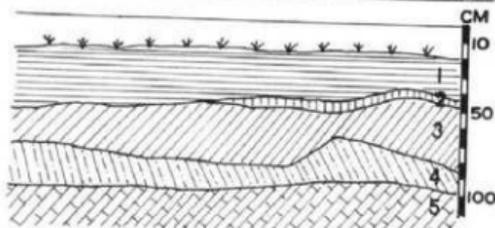
1 I 地区の遺構と遺物

今回の調査は、遺跡のほぼ中央から北西方へ設計された道路部分を基準にして、東側をI地区、西側をII地区、道路部分をIII地区としてグリッドを設定した(第2図)。

I地区の範囲は、遺跡のほぼ中央から東側部分で、測量杭を基準にして、W32°NからE32°Sの方位(以下これを便宜上東西とする)が約80m、N32°EからS32°Wの方位(以下これを便宜上南北とする)が約60mにわたって遺跡が分布している。

地層のプロファイルは、遺跡中央の北西部分の覆土が深く、I地区の中央を南へ押出した砂礫層を境にして、南東部は急速に浅くなっている(第8図)。

I-H-25号住居跡の北壁部分で計測した地層のプロファイルは、黒褐色を呈する砂質壤土の表土層(第6図1)が、約20cm~35cmあり、南側部分がやや深くなっている。その下層の北側部分に、細かい砂礫のまじった5cm~8cmほどの薄い茶褐色の埴壤土層がある。部分的に粘土塊も混入しているの、恐らく天地返しの際の下層の残土であろう。第3層は、黒色の砂質壤土で、小さな礫を



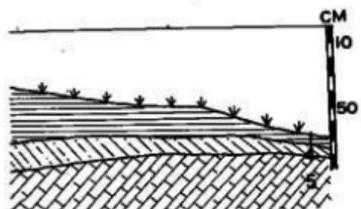
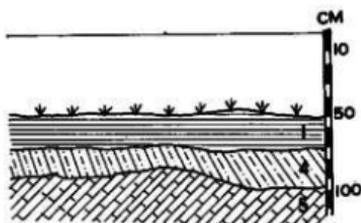
第6図 城の前遺跡I-H-25号住居跡北側断面(実測図1:4)

- 1—表土層 2—茶褐色埴壤土層 3—黒色砂質土層
4—茶褐色砂質土層 5—黄褐色ローム層

る。厚さは14cm~24cmほどで、南側が厚く、全地層が緩く南面傾斜している。第3層は、明るい黄褐色の粘土層である(第7図上)。

含み、土器の破片なども、この層から多く検出した。第4層は、やや茶褐色を呈する砂質壤土で、第3層の下層と共に、遺構内に流入した覆土である。その下層からは、完形の環形の土器が検出され、第5層は、明るい黄褐色の粘土層(床面)となっていた(第6図)。

グリッドN-4東壁の地表は、前述のI-H-25号住居跡上面の地表より47cmほど低く、僅かに南面傾斜している。表土層は黒褐色を呈する砂質壤土で、かなり多くの礫が混入し、18cm~26cmほどの不規則な層位をなしている。第2層は、I-H-25号住居跡床面の覆土とはほぼ同じで、茶褐色を呈する砂質壤土に礫が多く混入してい



第7図 城の前遺跡 I-N-4東壁(上)
I-S-13東壁(下)断面図 1:40

がみられないことなどから、この押しは、歴史時代の比較的新しい時期に、一度に行なわれたものと考えられる。従って、遺構の分布は、この礫層下にも当然認められるものと思われるが、押しによる破壊のため、検出には至らなかった。

I地区から検出された遺構は、弥生後期の住居跡20、古墳時代および歴史時代(後・晩期)の住居跡あるいは鍛冶工房遺構を含めて73、土塚1などであった。

特に、遺跡の中央部にあたるI地区の北西部分は、遺構が幾重にも複合して検出され、春先の泥土が調査作業を妨ぎ、苦心の連続であった。

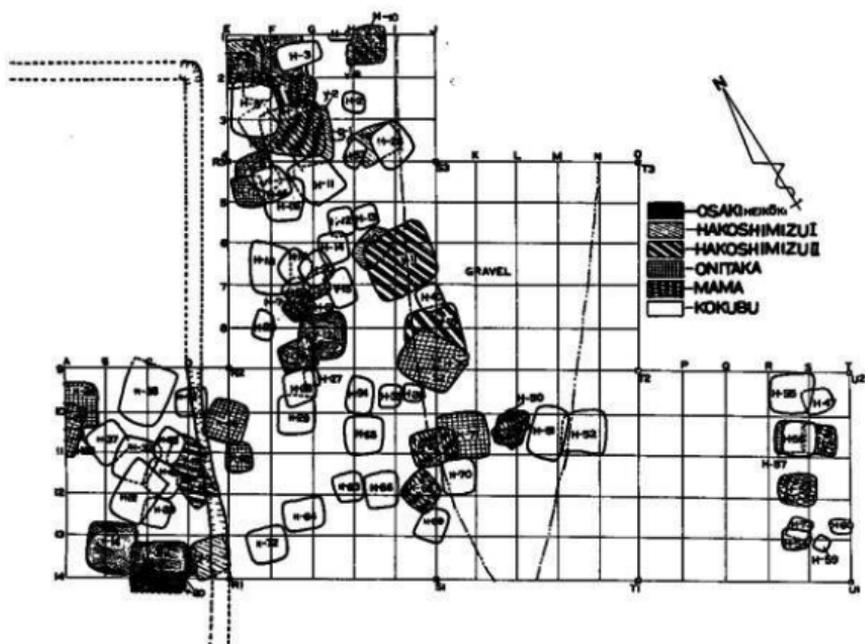
A 弥生時代の遺構

I地区から検出された弥生時代の遺構は、後期の尾崎期 平行期に比定される住居跡が6、箱清水I期の住居跡が5、箱清水II期の住居跡が9、および箱清水II期の終末期ごろと推定されるV字状の環溝遺構などである(第8図)。

また、出土遺物で注目すべきものは、箱清水II期のY-11号住居跡から検出された鉄剣形の鉄器片と、同期のY-15号住居跡から検出された鉄滓などである。これらは遺跡のほぼ中央部分で検出されたIII地区の製鉄跡遺構と共に、この遺構のもつ性格と、この地方の技術史的研究の上に、注目すべき成果といえることができる。

グリッドI-S-13東壁の地層のプロファイルは(第7図下)、黒褐色の砂質壤土からなる表土層が、北側では35cm、南側に向かってしだいに薄くなり、南端部ではわずかに8cmになっている。第2層は、茶褐色を呈する砂質壤土で、砂礫がかなり混入している。この層も北側が19cmで、南側に向かってしだいに薄くなり、南端部は7cmほどある。全体の微地形は、この辺から南面傾斜がきつくなり(第2図)、土壌が南側に向かって流出したためであろう。

I地区中央を南面へ押し出した礫層は、弥生・土師各期の遺構に流入し、あるいは壁の一部を破壊している。礫層の層序にほとんど変化



第8図 城の前遺跡Ⅰ地区の住居跡分布図 1:600

(1) Y-1号住居跡 (9図)

この遺構は、H-1グリッドを中心に検出された後期の箱溝水Ⅱ期の住居跡である。遺構のプランは、長軸方位がN35°Eにつくられた隅丸長方形で、長径が心線部分で3.98m、短径が2.80mで壁高が27~30cmを測る。床面はほぼ水平で、中央やや北寄りに、炉址と思われるかなりの厚さの焼土層が検出された。そして、この東側に丹彩のあるほぼ完形の壺形土器や鉢形土器、高環形土器、および変形土器の破片などが検出された(図版21)。

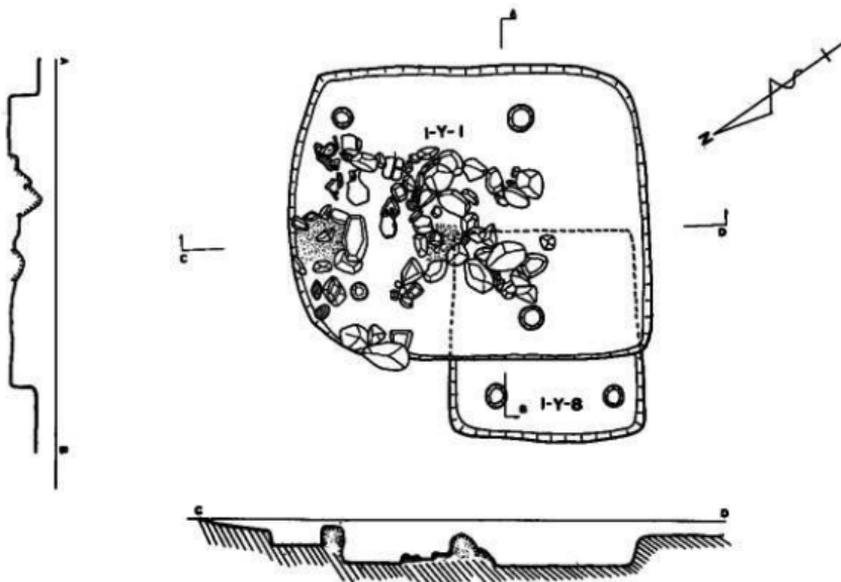
しかし、精査の結果、この弥生後期の完形遺物を伴う遺構と北壁を共用した土師鬼高期の遺物を伴出した石組かまどが検出され、両者がどのような関係にあったのか、調査員一同理解に苦しんだ。

いずれにしても、この竪穴住居跡が、完形の弥生期の遺物や破片、炉址などをもっているのが、弥生期の遺構であったことはほぼ間違いない。しかし、一方でまた、同じプランの遺構の中に、土師期の石組かまどがあり(第35図・図版3)、その中に完形の環形土器が検出された。そして、完形の弥生式土器のセットが検出されたのは、通常土師器のセットが検出される焚口であった。

この事実は、弥生期の遺構が埋設した後に、偶然にほぼ同じプランで、直上に土師期の住居跡が構築され、たまたま出土した弥生式土器のセットを、土師期の人たちが利用していたことを物語る

ものであろう。

住居跡内には、かなり多くの大小の礫が流入し、柱穴はやや北寄りの位置に4個が検出され、それらはほぼ四隅に対称的に配置されていた。また床面は硬く踏み固められていた。そして、この住居跡は、西壁部分で箱清水Ⅰ期のY-8号住居跡を切っている。



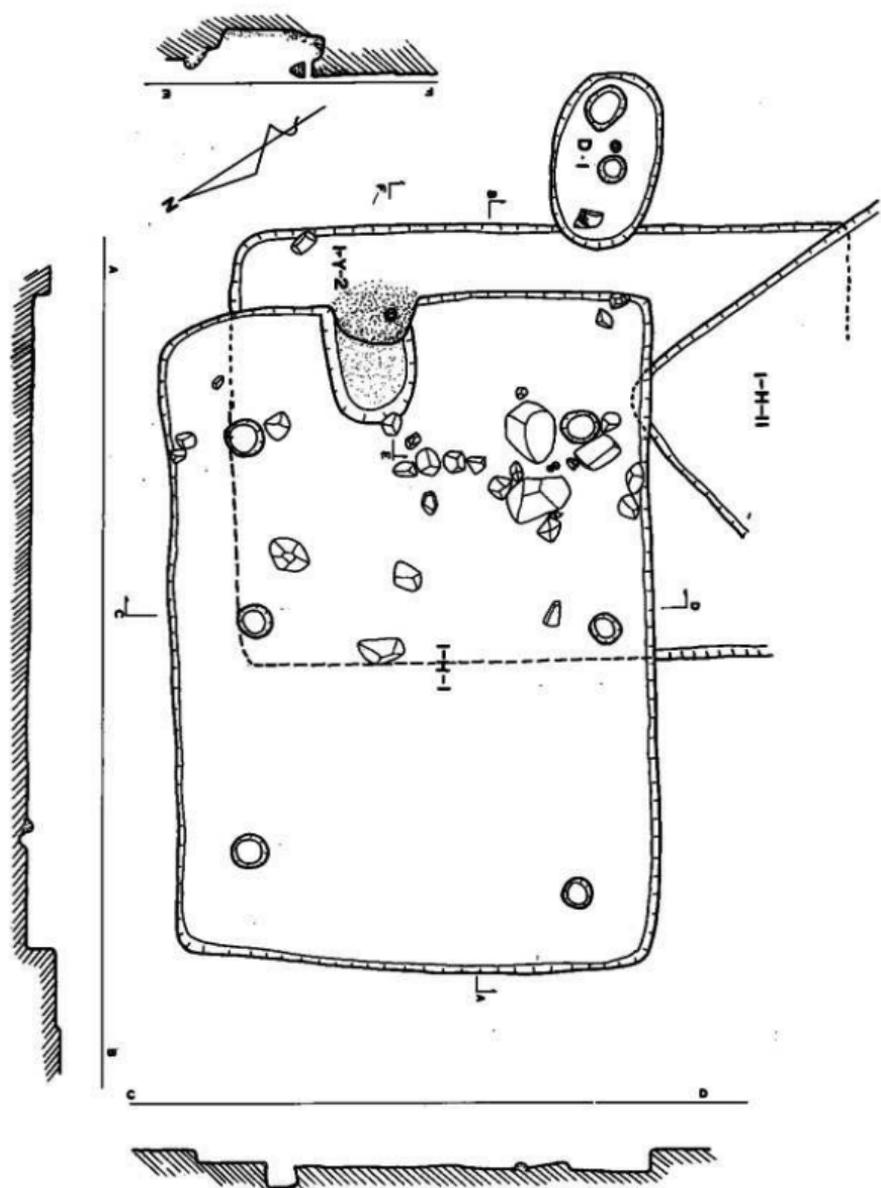
第9図 城の前遺跡Ⅰ地区遺構実測図(1)1:60

(2) Y-2号住居跡 (第10図)

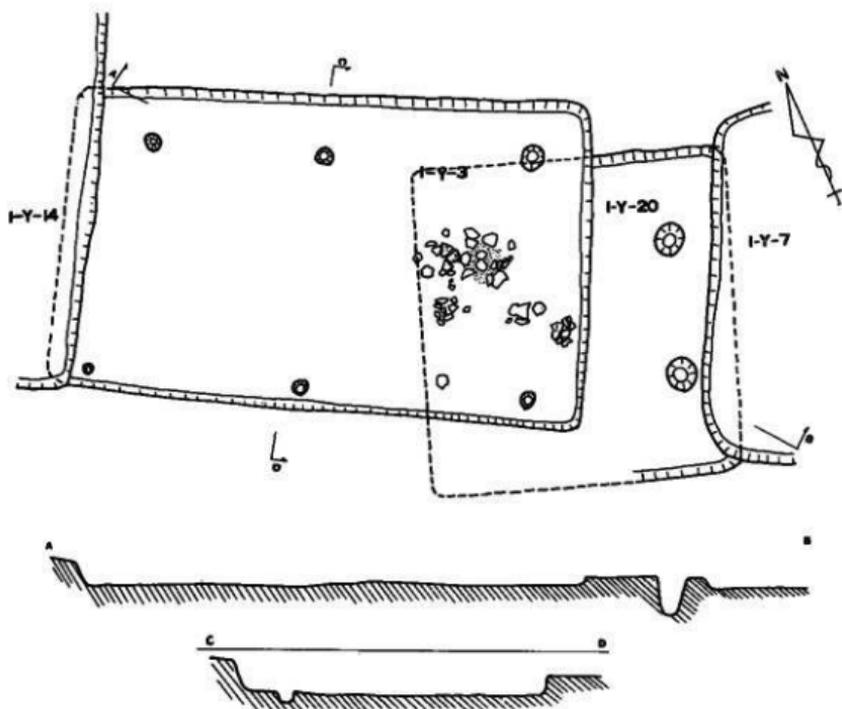
この遺構は、F・G-2・3グリッドを中心に検出された後期の箱清水Ⅱ期の住居跡である。平面プランは、西側の大半がH-1号住居跡、南側の一部をH-11号住居跡によって切られているため、残された壁の線をたよりに復元すれば、長軸心線の方位がN28°E、長径が5.40m、短径が3.80mの隅丸長方形と推考される。

床面はほぼ水平で、硬く踏み締められているが、壁は遺構面が地表より20cm前後の浅い位置にあったため、耕作等によって削られ、わずかに5～6cmの高さしか残っていない。

出土遺物は、丹彩の施された壺形土器片や櫛描波状文のある甍形土器片で、いずれも器形は小破片のため判然としない。



第10図 城の前遺跡I地区遺構実測図(2) 1:60



第11図 城の前遺跡Ⅰ地区遺構実測図(3) 1:60

(3) Y-3号住居跡 (第11・19図)

この遺構は、B・C-13グリッド内で検出された弥生後期の尾崎期、平行期の住居跡で、西壁際の一部をY-14号住居跡によって切られ、東側でY-20号住居跡を切っている。

平面プランは、長軸心線の方位が、 $N60^{\circ}W$ 、長径がおよそ5.20m、短径が3.08mの隅丸長方形である。床面はほぼ水平で、南・北の壁に沿って、それぞれ3個、計6個の柱穴が対称的につくられている。

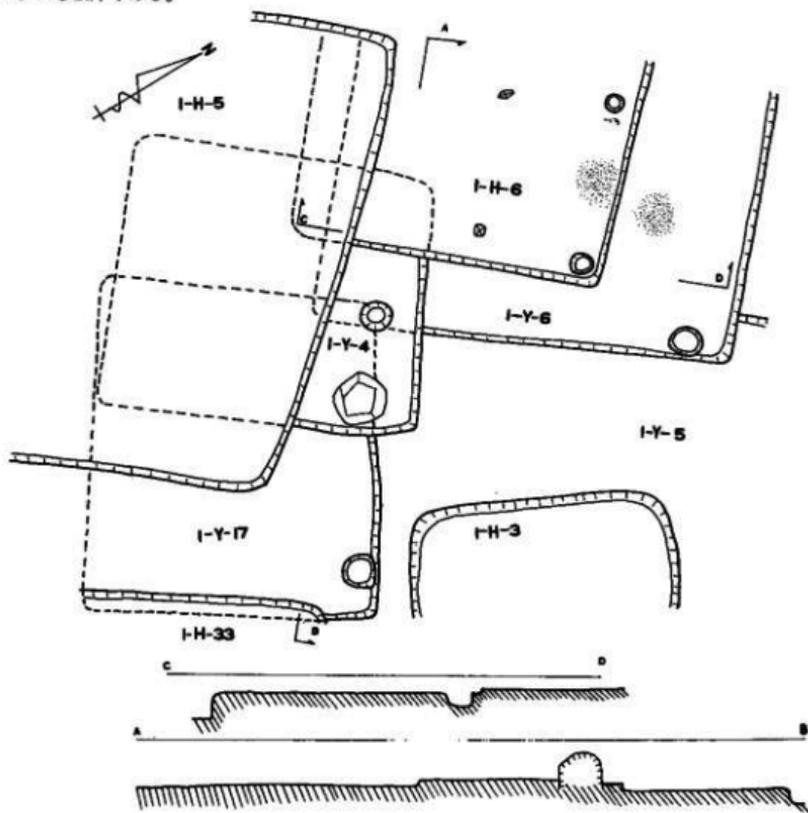
炉址と推定される焼土層は、住居跡の東半分のほぼ中央にあり、周囲から多量の壺形土器片と壺形土器片・高坏・台付甕・甕形土器などの破片が検出された。壺形土器の口縁は、外反りしてあり大きく開き、径29cm、内外面に丹彩があり、頸部に右下がりのへら描沈線斜文が施文されている(第26図-4)。また、壺形土器は、口辺と胴部に櫛描斜文、あるいは山形文を施文し、頸部に櫛描簾状文と波状文を施文するもの(第28図-2)、口辺と胴部に櫛描波状文を描き、頸部に櫛描簾状文を施文するもの(同図1・3)がある。

この住居跡の壁高は、およそ23cmを計測したが、上面は地表よりわずかに20cm前後の位置にあり、耕作等による削平が考えられる。

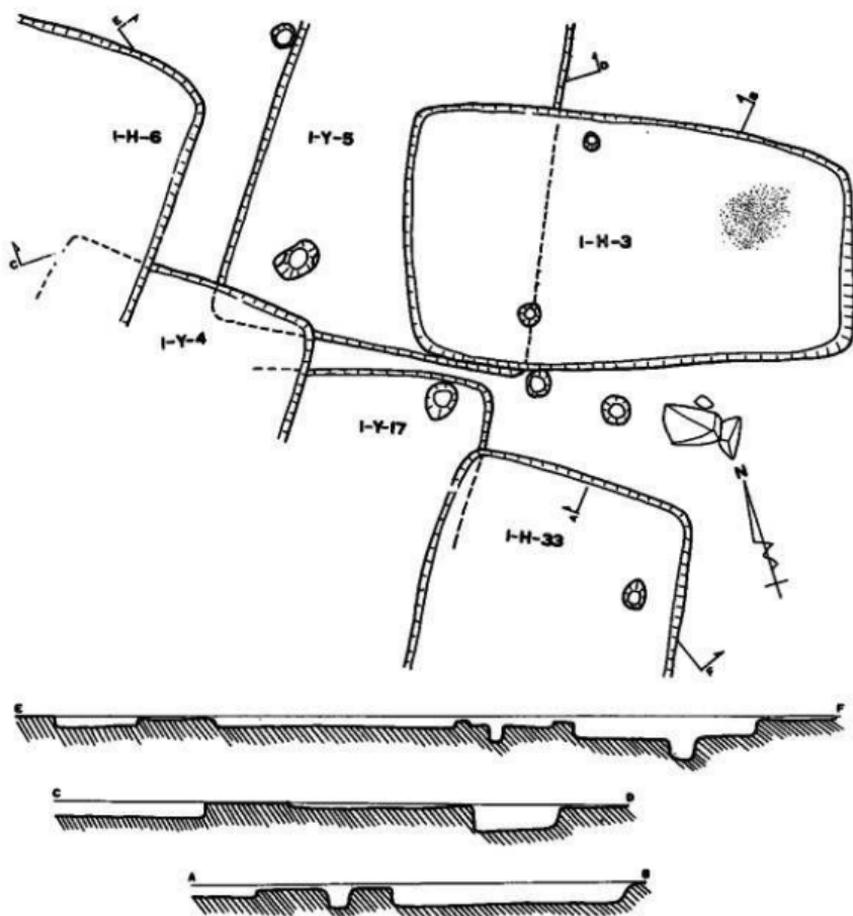
(4) Y-4号住居跡 (第12図)

この遺構は、E-1・2グリッドで検出された後期の箱清水Ⅱ期の住居跡である。平面プランは、隅丸長方形と推考されるが、南側をH-5号住居跡、西側をH-6号住居跡によって切られ、わずかに北東隅の一角を残すのみで、プランは確認できないが、Y-17号住居跡の床土をはって構築している。

出土遺物は、丹彩のある変形土器と帯描波状文が口辺および胴部に施文された変形土器などで、いずれも破片である。



第12図 城の前遺跡Ⅰ地区遺構実測図(4) 1:60



第13図 城の前遺跡I地区遺構実測図(5) 1:60

(5) Y-5号住居跡 (第13図)

この遺構は、E・F-1グリッドを中心に検出された後期の尾崎期、平行期の住居跡である。平面プランは、長軸心線の方位が $N32^{\circ}E$ 、ややゆがんだ隅丸長方形で、南西隅に柱穴状ピットが検出された。遺構の北壁は、調査区外の道路下に続き、全体のプランは確認できなかったが、短径およそ3.10m、長径4.00m前後の規模と思われる。壁は地表から浅い位置にあったため、耕作等によってしだいに削平され、わずかに10cmの高さを残すのみであった。

出土遺物は、丹彩のある壺形土器・高坏形土器・鉢形土器、および櫛描波状文の施文された壺形などで、いずれも破片である。

(6) Y-6号住居跡(第12図)

この遺構は、E-1・2グリッドを中心に検出された後期の箱清水I期の住居跡である。遺構の大部分が、H-6号住居跡とY-4号住居跡によって切られ、また、北西側は調査区外へ続いているため、全体のプランは把握できなかった。しかし、検出された部分によってプランを推考すれば長軸心線がN40°Eにつくられた隅丸長方形で、長径がおよそ4.10m前後、短径が3.00m前後と推定される。壁高はY-5号住居跡と同様に削平され、10cmほど1か残っていない。床面はほぼ水平で硬く、北壁寄りに炉址と推考される焼土層があり、柱穴は東壁際の両端に、ほぼ対称的につくられていた。

出土遺物は少なく、壺形土器片と壺形土器片が少量検出された。

(7) Y-7号住居跡(第11・24図)

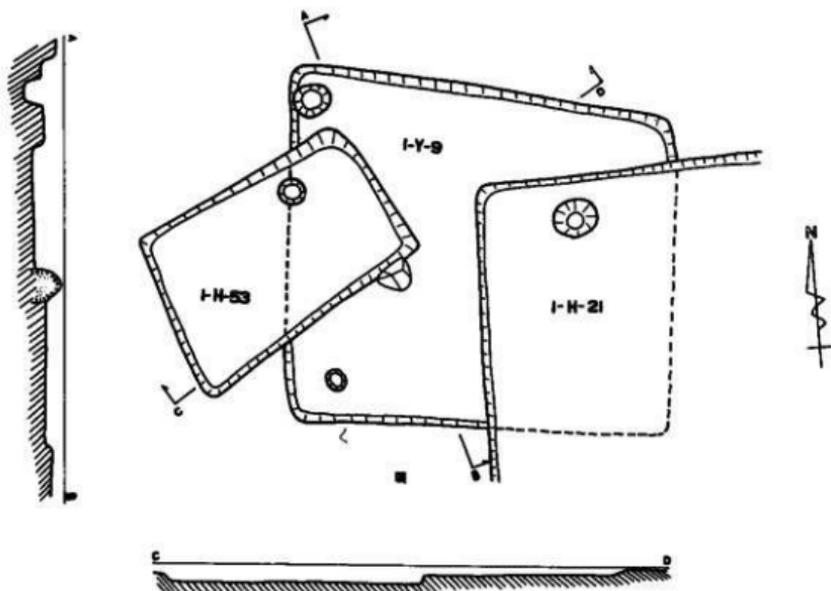
この遺構は、D-13グリッド内で検出された後期の箱清水I期の住居跡である。平面プランは、遺構のほぼ中央を方形にのびるV字状の環溝によって切られているが、残った壁面によって復元すれば、長軸心線がN24°E、長径が3.54m、短径が2.74mにつくられた隅丸長方形である。床面はほぼ水平で、壁高はおよそ30cmである。出土遺物は、壺形土器片と壺形土器片など少量であった。

(8) Y-8号住居跡(第9図)

この遺構は、G・H-1グリッドで検出された後期の箱清水I期の住居跡である。平面プランは遺構の東側の大部分がH-10号住居跡とY-1号住居跡によって切られているため明らかでない。残された西側のプランは、径1.90mと小型で、西壁に沿って2個の柱穴状ピットが検出されている。出土遺物は、壺形土器片などの小破片が微量であった。

(9) Y-9号住居跡(第14・34図)

この遺構は、H-3グリッドを中心に検出された後期の箱清水I期の住居跡である。平面プランは、長軸心線の方位がN20°Wで、長径が3.74m、短径が3.25mの隅丸長方形である。床面はほぼ水平で、西壁沿いに2個の柱穴状ピットが検出された。壁の上面は、地表からわずか20cm前後であったため、耕作等によって削平され、残存部分は8cmほどであった。出土遺物は、いずれも小破片で、器形を復元できるものはない。



第14図 城の前遺跡Ⅰ地区遺構実測図(6) 1:60

⑩ Y-10号住居跡 (第15図)

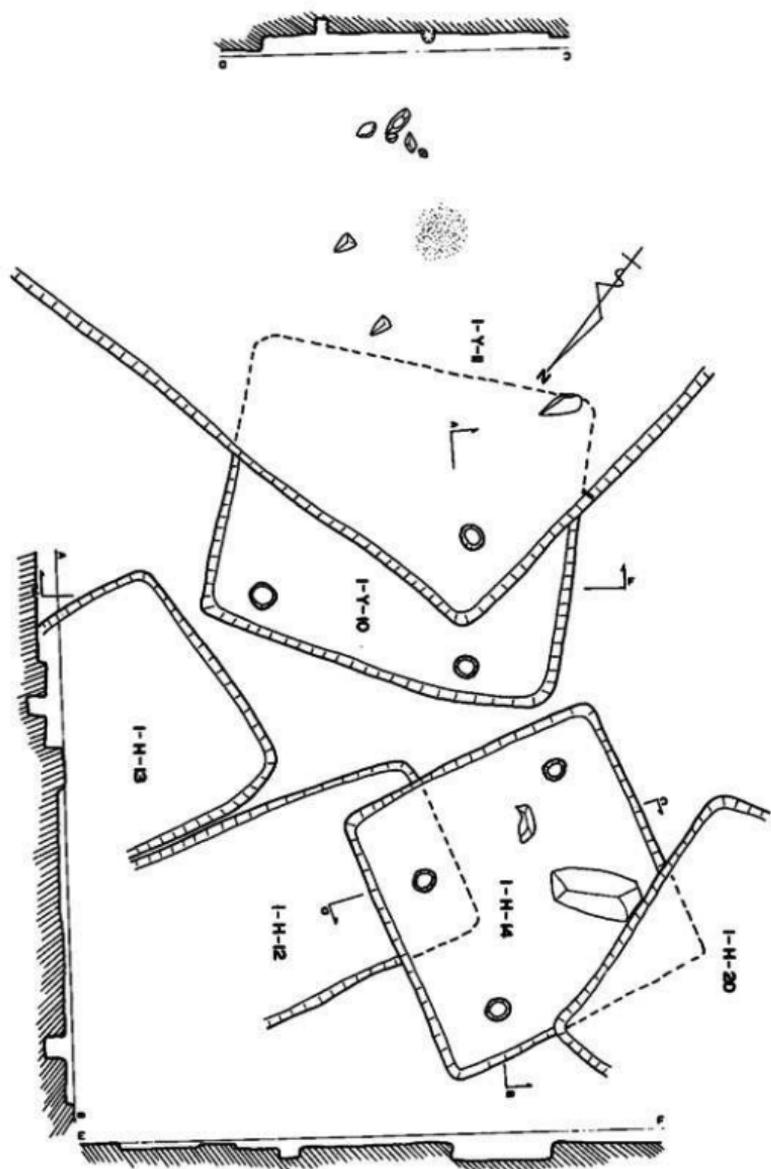
この遺構は、H-5・6グリッドを中心に検出された後期の箱清水Ⅰ期の住居跡である。遺構は南東の大部分がY-11号住居跡によって切られているが、長軸線がN70°Eにつくられ、長径が3.52m、短径がおよそ3.00m前後の隅丸長方形プランである。床面はほぼ水平で、北壁沿いに2個の柱穴が検出された。

出土遺物は、甍形土器や甍形土器の小破片で完形できるものはない。

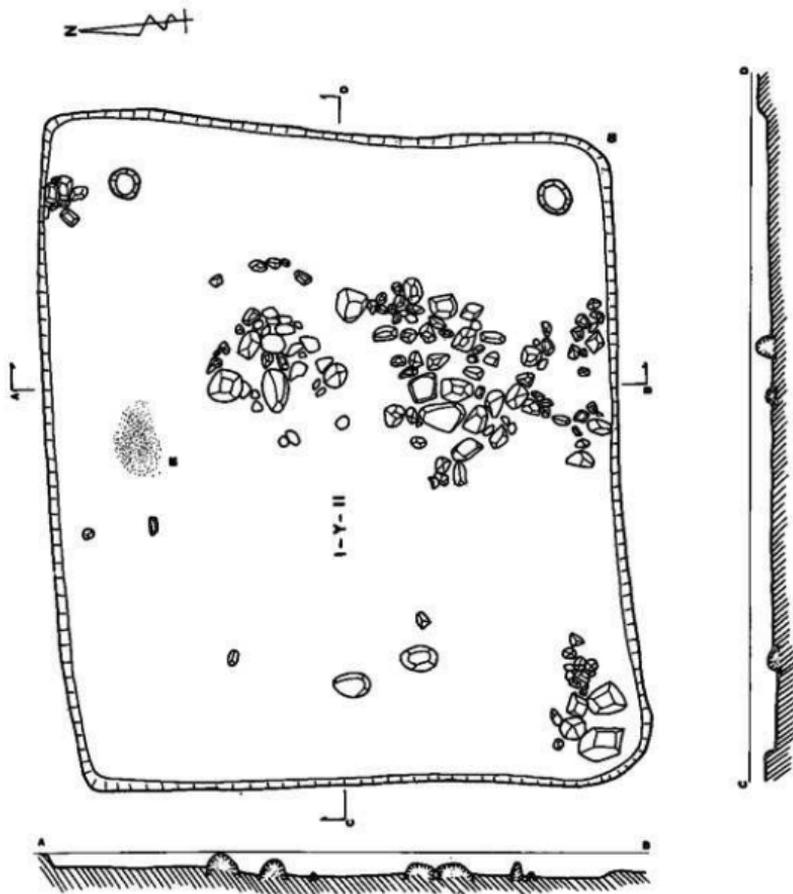
⑪ Y-11号住居跡 (第16図)

この遺構は、H-1-5・6・7グリッドで検出された後期の箱清水Ⅱ期の住居跡である。平面プランは、長軸線方位がN80°Wにつくられ、長径が6.40m、短径が5.60mの隅丸長方形である。床面はほぼ水平で、北壁寄りに炉址と推考される焼土層があり、東壁沿いの両隅に柱穴状ピットが検出された。しかし、床面には多くの礫が流入し、東壁の一部を壊している。

出土遺物は、前述の現長16.3cm両刃の鉄剣形鉄器片と、大型の変形鉄器片などで、かなりの量に達したが、いずれも破片で完形できるものは検出されていない。



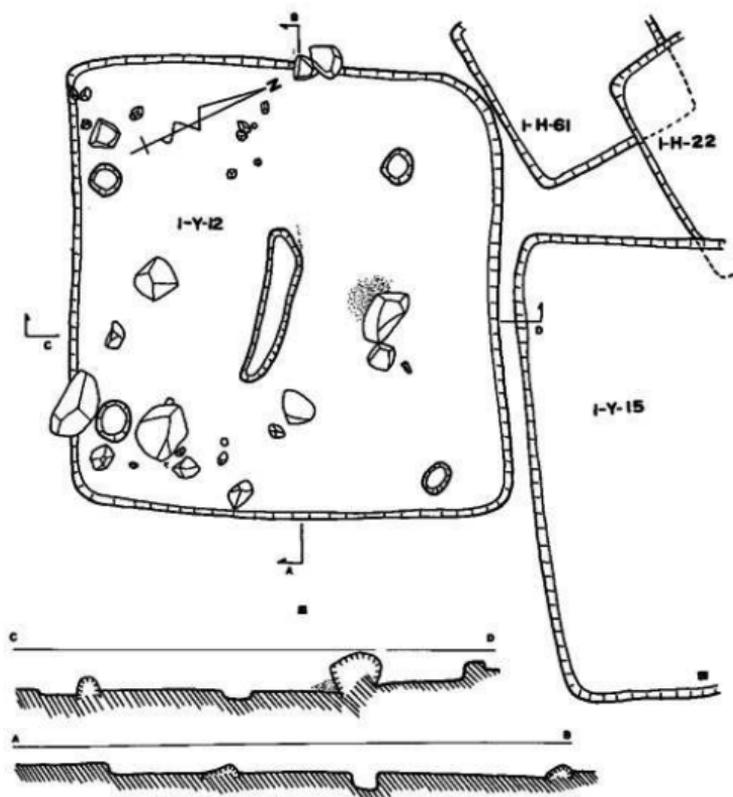
第15図 城の前遺跡I地区遺構実測図(7) 1:60



第16図 城の前遺跡Ⅰ地区遺構実測図(8) 1:60

(12) Y-12号住居跡 (第17図)

この遺構は、F・G-7・8グリッドで検出された後期の尾崎期、平行期の住居跡である。平面プランは、長軸心線の方位がN65°Wで、長径が4.43m、短径が4.15mの隅丸長方形である。床面はほぼ水平で、四隅に径35cm、深さ20~25cmの柱穴があり、中央やや北壁寄りに、炉址と思われる厚い焼土層が検出された。また、遺構のほぼ中央に、東西1.50m、南北30cmの舟形状ビットがあり床面にはかなりの礫が流入していた。出土遺物は、胴部に右下がりの櫛描波状文のある斐形土器片などが検出されている。

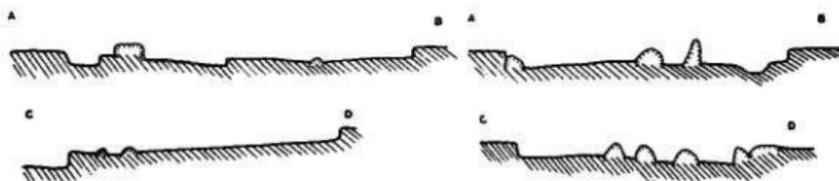
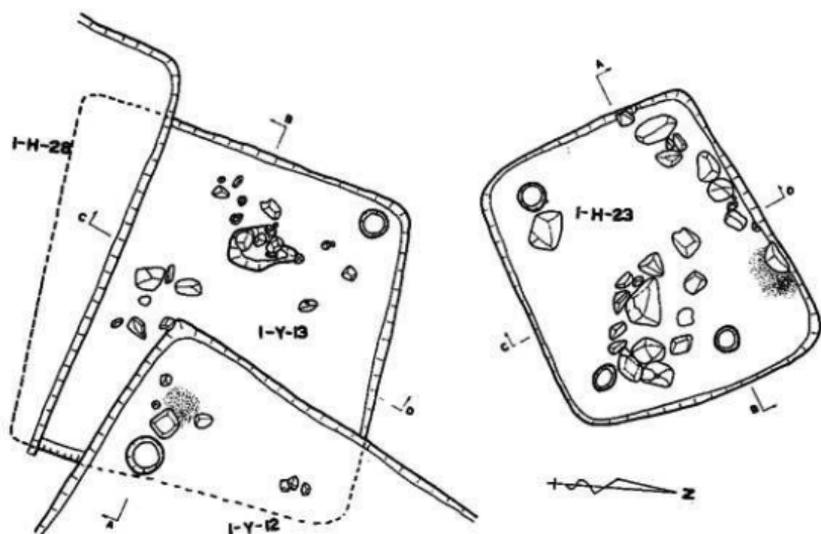


第17図 城の前遺跡Ⅰ地区遺構実測図(9) 1:60

(13) Y-13号住居跡 (第18図)

この遺構は、F・G-8・9グリッドで検出された後期の尾崎期・平行期の住居跡である。平面プランは、北東の四半分がY-12号住居跡によって切られ、南壁際がH-28号住居跡によって切られ、必ずしも明らかでない。しかし、長軸心線の方位がN70°W、東西径(長径と推定)が3.40mのほぼ隅丸方形プランと思われる。床面はほぼ水平で、中央東壁寄りに炉址と思われる焼土層が検出され、柱穴は北西隅の1個だけが検出された。

出土遺物は、丹彩・頸部に太い櫛描簾状文のある壺形土器片と、櫛描波状文のある甕形土器片などである。

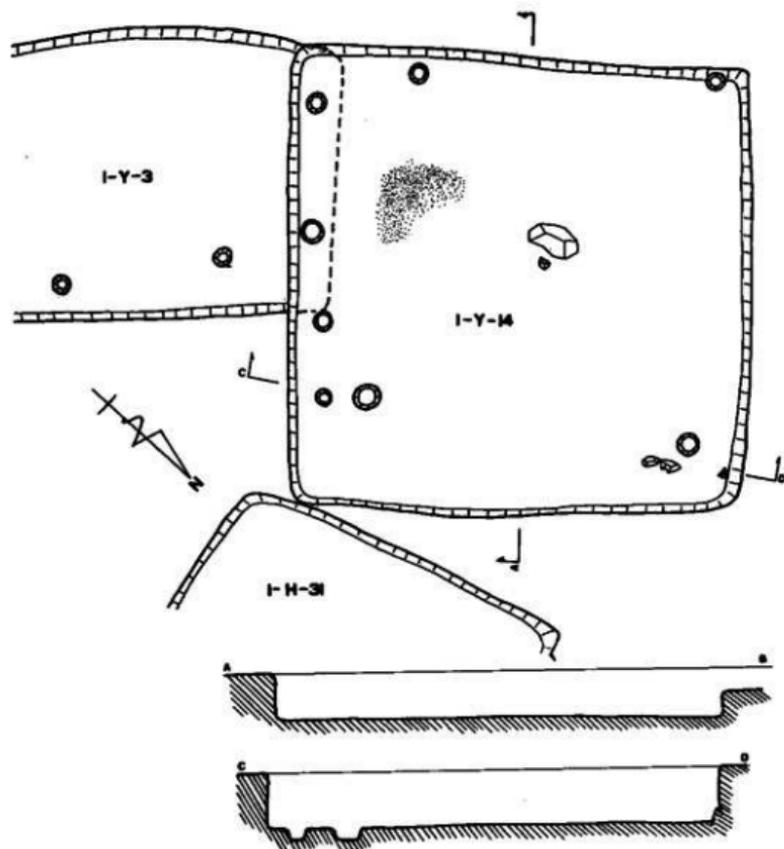


第18図 城の前遺跡I地区遺構実測図(1) 1:60

⑭ Y-14号住居跡 (第15・19図)

この遺構は、A・B-12・13グリッドで検出された後期の尾崎期・平行期の住居跡である。平面プランは、長軸心線の方位がN45°E、長径が4.50m、短径が4.47mの隅丸方形である。床面はほぼ水平で、南東隅寄りに炉址と思われる焼土層が検出された。壁高はおよそ52cmを測り、比較的保存がよく、東壁部分でY-3号住居跡を切っている。柱穴状のピットは計8個を検出したが、いずれも10～15cmほどの深さでやや浅い。

出土遺物は、丹彩があり、頸部に幅広い櫛描瀝状文を施文する壺形土器、および上胴部に櫛描山形文を施文する壺形土器などが検出された。しかし、いずれも小破片で完形できるものではない。

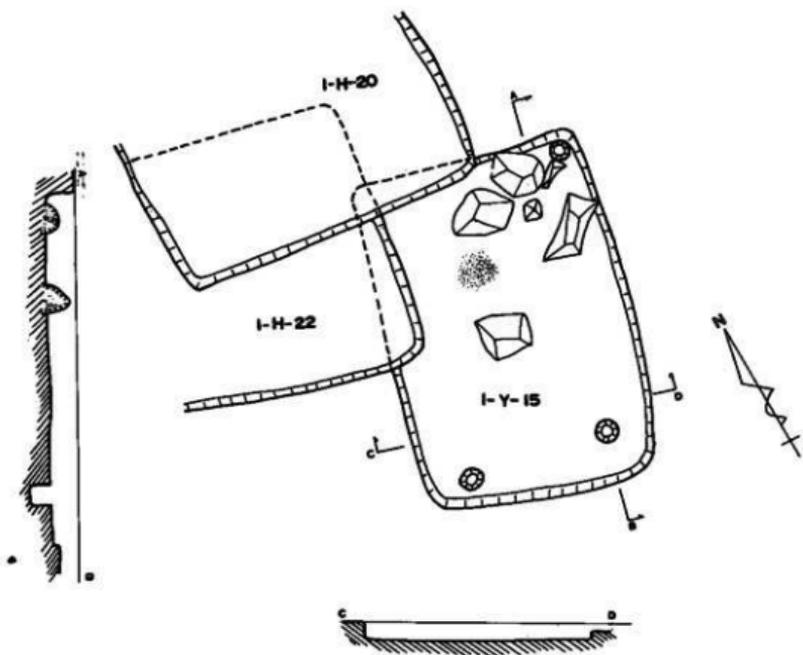


第19図 城の前遺跡I地区遺構実測図(1) 1:60

(15) Y-15号住居跡 (第20図)

この遺構は、G-6・7グリッドを中心に検出された後期の箱清水Ⅱ期の小さな住居跡である。平面プランは、北西隅をH-20号住居跡とH-22号住居跡によって切られているが、長軸心線の方がN18°E、長径が3.45m、短径が2.43mの隅丸長方形である。床面はほぼ水平で、北西隅を除く3隅に柱穴と思われるピットが検出され、また北壁寄りの大石の脇に、炉址と思われる厚い焼土層が検出された。壁高はおよそ20~25cmであるが、東壁部分は、Y-11号住居跡と同様に、押し出によって削られている。

出土遺物は、変形土器の小破片と北東隅の大石の間から鉄滓が検出された。この遺構は、Y17号



第20図 城の前遺跡Ⅰ地区遺構実測図(Ⅱ) 1:60

住居跡と共に特に小規模であり、単なる住居跡ではなく、他の用途を持っていたことも考えられる。

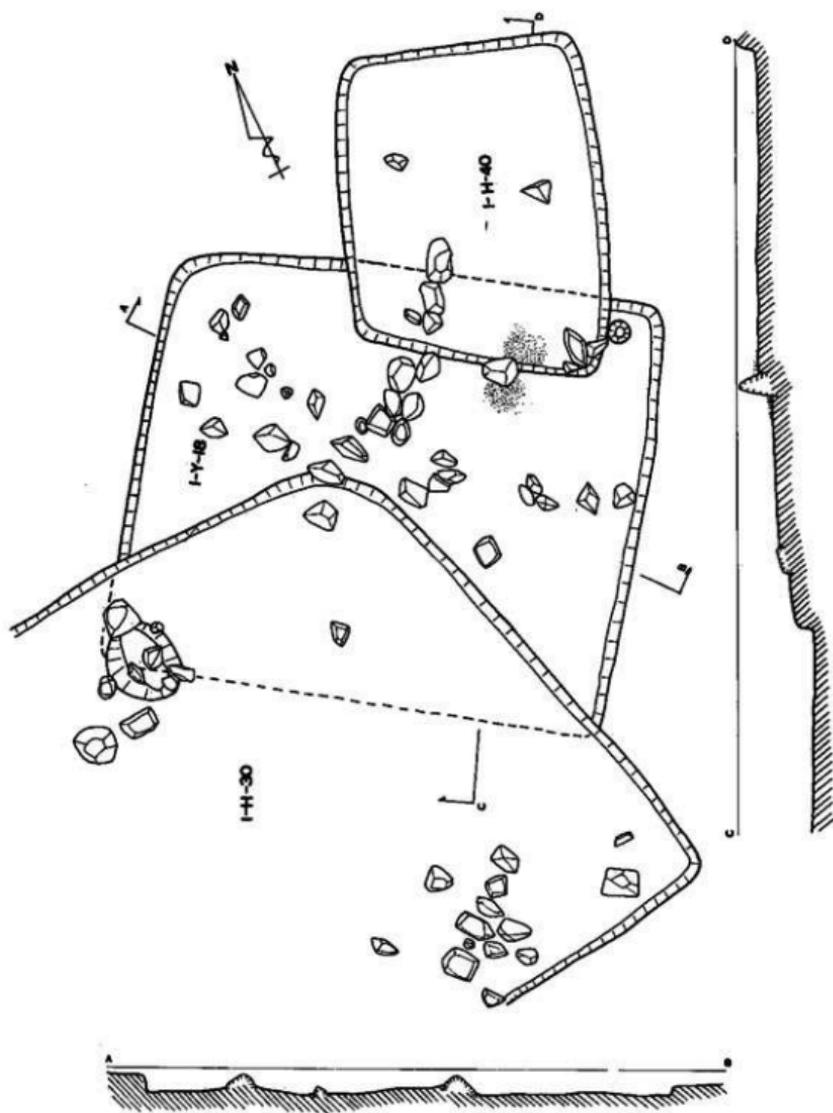
(6) Y-16号住居跡 (第24図)

この遺構は、C・B-11・12グリッドで検出された後期の箱清水Ⅱ期の住居跡である。遺構の東側の大部分は、V字状に掘られた環溝によって切られているが、長軸心線の方位がN74°E、長径が3.50m、短径が3.08mの隅丸長方形プランである。

出土遺物は、丹彩・小口径の壺形土器の口辺部、および櫛描波状文の変形土器片などが検出されている。

(7) Y-17号住居跡 (第12・32図)

この遺構は、F-1・2グリッドで検出された後期の箱清水Ⅱ期の住居跡である。平面プランは、遺構の南側大部分がH-5号住居跡によって切られているので、必ずしも明らかでないが、長軸心線の方位がN24°E、東西径が2.65mの隅丸長方形と推定される。出土遺物は、いずれも小破片で、



第21図 城の前遺跡I地区遺構実測図(1/60)

完形できるものはない。

(18) Y-18号住居跡 (第21図)

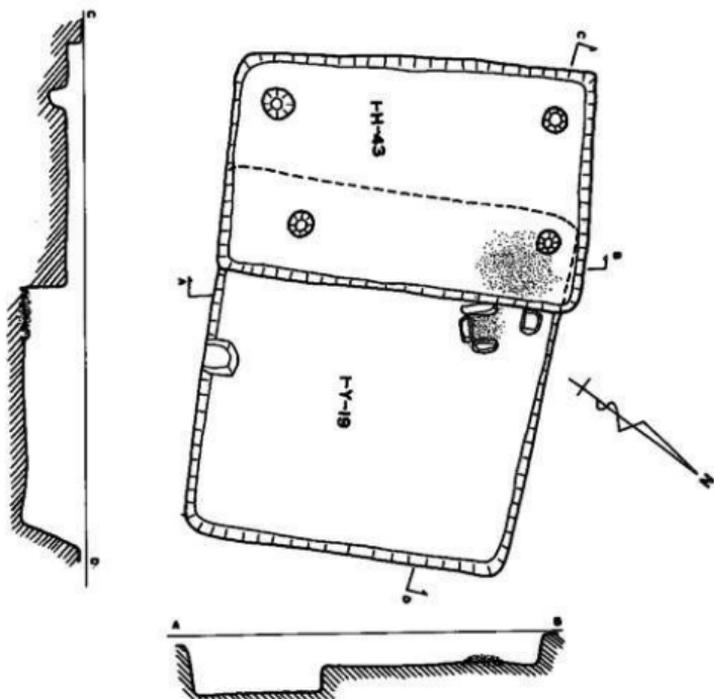
この遺構は、I・J-7・8グリッドで検出された後期箱清水Ⅱ期の住居跡である。住居跡の南半分は、H-30号住居跡によって切られているが、長軸心線の方がN40°W、東西径が4.94m、南北径は明らかでないが、およそ4.70m前後と推定される。

床面はほぼ水平で、北壁東寄りに炉址と思われる焼土層が検出された。住居跡内には多くの礫が流入し、東壁の一部が壊されている。壁高はおよそ20cm、柱穴は北東隅に1個が検出された。

出土遺物は、丹彩のある口径14.8cm、高さ7.3cmの完形の鉢形土器(第27図3)や壺形土器・高坏形土器、および甕形土器の破片などが検出されている。

(19) Y-19号住居跡 (第22・24図)

この遺構は、C・B-10・11グリッドで検出された後期の箱清水Ⅱ期の住居跡である。遺構は、



第22図 城の前遺跡Ⅰ地区遺構実測図(14 1:60)

西壁側がH-43号住居跡の張り床によって覆われていたが、長軸心線の方位がN70°E、長径が3.54m、短径が3.33mの隅丸長方形プランである。

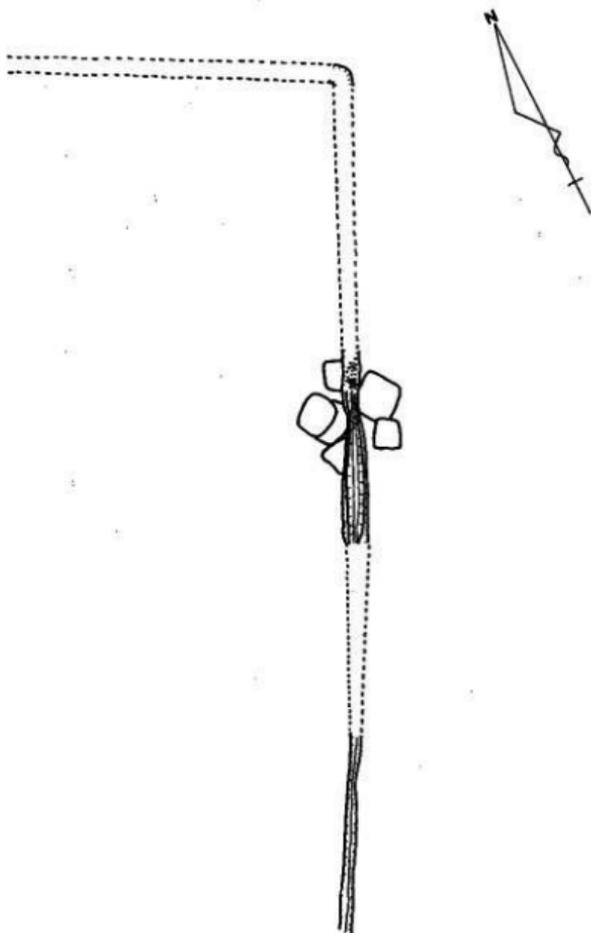
床面はほぼ水平で、北壁やや西寄りに、コの字形の石組を伴う炉址が検出された。炉址の石組は、側壁が35cm奥壁の幅が内径26cmの比較的小型のものであった。

出土遺物は、口縁に突起のある高坏形土器や壺形土器、および壺形土器などの破片が検出された。

20 Y-20号住居跡
(第11図)

この遺構は、C・D-13グリッドで検出された後期の尾崎期平行期の住居跡である。平面プランは、東西壁がY-7号住居跡とY-3号住居跡によって切られ、明らかでない。

しかし、検出された部分によって遺構を復元すれば、径3.15mほどの隅丸方形と考えられる。出土遺物は、いずれも小破片で、器形を復元できるものはない。



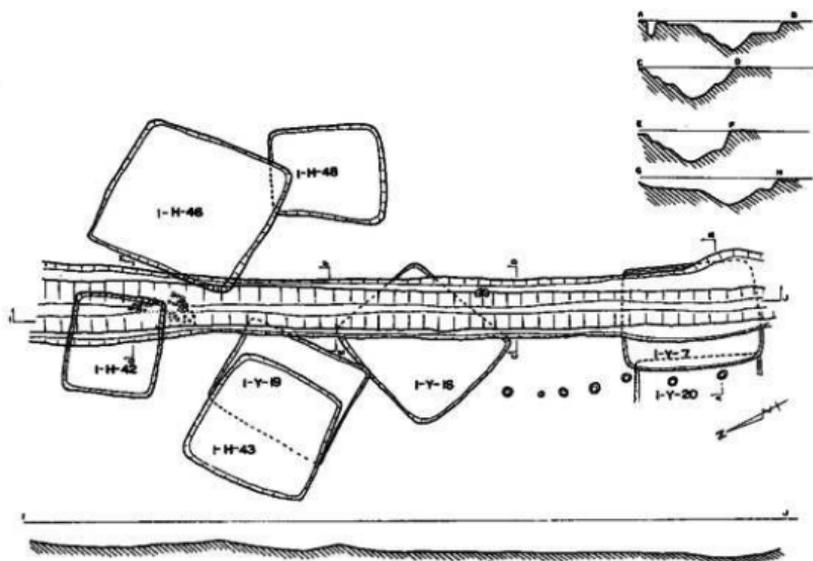
第23図 城の前遺跡 I 地区環溝全測図(5:1 : 600)

20 環溝遺構 (第23・24図)

この遺構は、最初D-12・13グリッドで検出され(第8図)、その性格を明らかにするため鋭意精査を続けた。

遺構は上・下2段となり、上段は場所によってやや規模の差はあるが、上面の幅がおよそ2m前後で、下面の幅がおよそ1.50m前後、深さ30cmほどのV字状に削り、両壁ともそこに幅およそ20cmの段をつくり、下段V字の上面の幅がおよそ1.10m、深さ50cm前後のV字状に削ってつくった溝状遺構であることが判明した。この溝状遺構は、さらに追求すると、長軸心線の方位がN25°Eに向かって延長し、E-1グリッドの西側3.50mの位置でほぼ直角に北西へ延びていることを確認した。しかしその先は、調査区外のグルミ畑内まで延びていることを確認しただけで、調査を断念した。そして調査予定区の南側は、新たにトレンチを設定して追求すると、ほぼ同一方位で段丘末端まで延長していることが明らかになった。こうして確認された環溝遺構の南北の全長は約128m、さらに、Ⅱ・Ⅲ地区で西側の環溝を追求した結果、Ⅲ地区の23グリッドで同様な遺構を検出したので(第94図)、東西の全長はおよそ62mと推定される。

環溝遺構内の出土遺物は、弥生中期の百瀬式土器片を径4.3cmほどの内盤状に加工したものと、他はボタン状粘土板などを伴う後期箱清水Ⅱ期終末期土器片である。この遺構の複合状態をみると、後期箱清水Ⅰ期の7号住居跡と箱清水Ⅱ期の16号および19号住居跡を切つてつくり、土師期の遺



第24図 城の前遺跡Ⅰ地区環溝実測図(16) 1:200

構は、床を張って構築しているので、弥生後期箱清水Ⅱ期終末期の遺構と考えることができよう。

B 弥生時代の出土遺物

今回の調査で検出された遺物は、後期の尾崎式平行期の土器と推定される壺形土器（第26図2～4・6・7・9・14・16～18）、高坏形土器（第27図5・11）、甕形土器（第27図6・7、第28図1～3・5～10、第29図1・5）、台付甕形土器（第27図8）、甕形土器（第27図9）、鉢形土器（第27図10）、箱清水Ⅰ式の壺形土器（第26図8）、甕形土器片、高坏形土器片、箱清水Ⅱ式の壺形土器（第25図1～6・第26図5・9～14）、高坏形土器（第26図15、第27図4）、甕形土器（第28図4・11、第29図2～4・6～9）、鉢形土器（第27図1～3）などである。

(1) 壺形土器（第25・26図）

a 尾崎式平行期の土器（第26図）

検出された土器は、いずれも破片で、突形できるものはないが、各部の形状からおよその器形を知ることができる。

口辺部の器形は、大型で口縁が強く外反りするもの（4）と、やや小型で外反りの弱いもの（7）がある。頸部はやや長く、幅の広い櫛描縷状文と太く幅の狭い櫛描縷状文、および右下がりのヘラ描平行沈線文の3種の文様が認められる。胴部の器形は、無果花形で、胴部の張りの強いものと弱いものがあり、下腹部に弱い稜線のあるものがある。器面はヘラで調整され、いずれも赤色塗彩が施されている。

b 箱清水Ⅰ式土器（第26図）

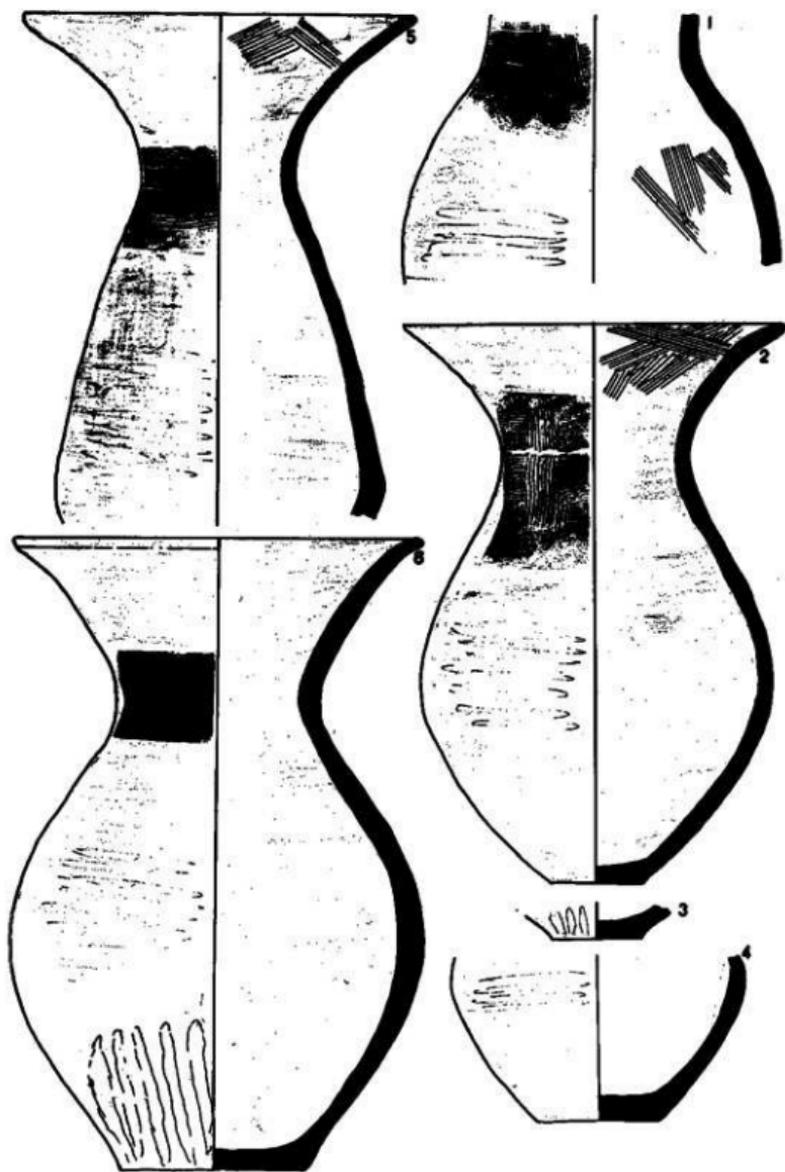
8の土器は、口径が14.2cm、口縁部が内湾気味に立ち上がり、頸部で強く外反りしている。器面はヘラ磨き調整され、内外面ともに赤色塗彩がある。

胴部はいずれも破片で、完形できるものはないが、無果花形を呈し、下胴が張り、下腹部で明確な稜線をつくっている。

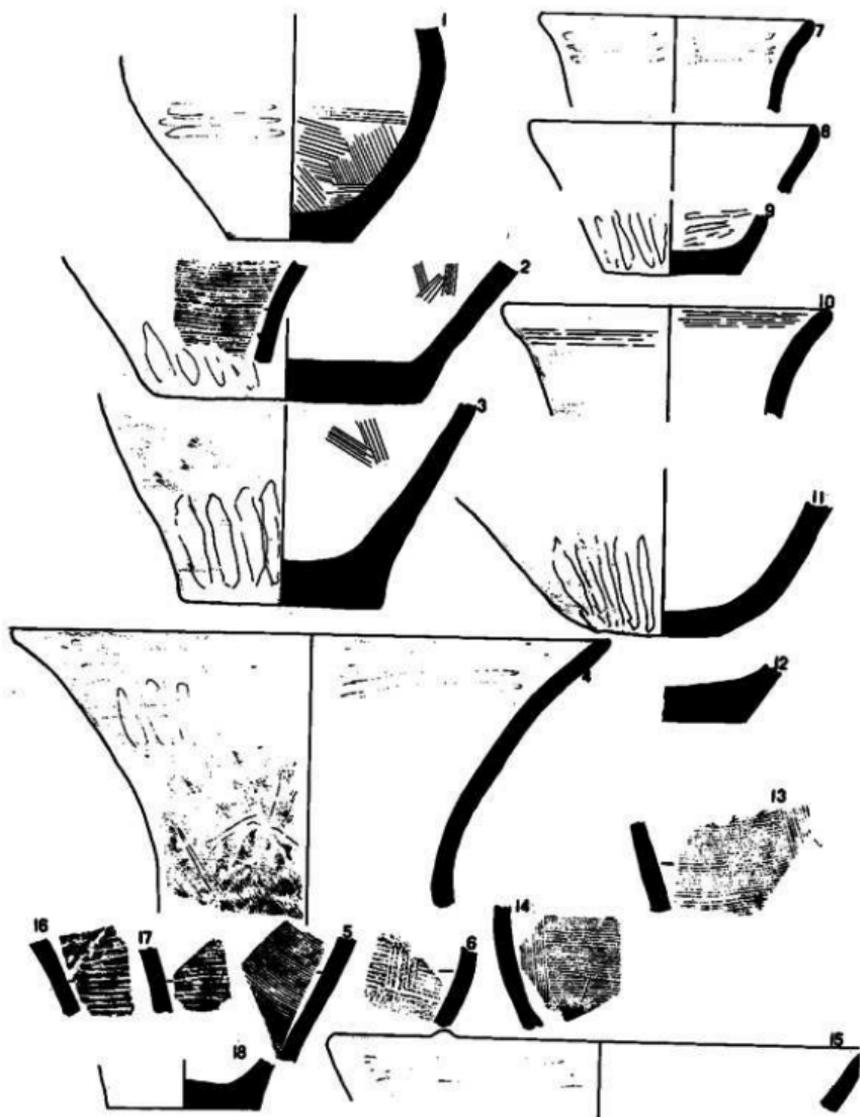
c 箱清水Ⅱ式土器（第25・26図）

Y-1号住居跡から、ほぼ完形の土器が検出されている（第25図）。器形は頸部のくびれ、肩および上胴の張りなどによって、およそ4類型に分類できる。5の土器は、口径およそ19cm、口縁端は丸味をおび、口辺部が強く弓なりに外反りして頸部でくびれ、肩および上胴はなだらかに垂れて張りがなく、全体がやや無果花形を呈している。

2の土器は、口径およそ18.5cm、口辺は緩い外反りカーブを描いて、やや長い頸部に続いている。肩の張りはほとんどなく、なだらかにのびて張りのある胴部に続き、最大径はおよそ17cmで中胴部にある。



第25図 城の前遺跡I地区Y-1出土遺物(壺形土器)実測図(1)1:3



第26図 城の前遺跡I地区出土遺物(弥生式土器)実測図(2)1:3

6の土器は、口径約20cm、丸い口縁端にわずかな立ちあがりをつくり、口辺部は強く「く」の字形に外反りして、頸部で強いくびれをつくり、張りのある胴部に続いている。胴部の最大径は中胴部にあり、径約20.2cm、口径よりもやや大きい。1の器形は、頸部が2に類似し、胴部は6に似る。3の底部は5の器形に近いものであろう。

第26図10の口辺部は、前述第25図の2・5・6の3器形よりも口辺部が厚手で、外反りが弱い。そして、他はいずれも器面をへら磨き調整しているのに対して、粗いハケ状の工具で調整している。

11の底部は、下胴部に張りがあり、箱清水Ⅱ式の従来の蓋形土器にはみられない珍しい器形である。

(2) 鉢形土器 (第27図)

a 尾崎式平行期の土器

下胴と底部のみで、全体の器形は明らかでない。器形は、断面方形の低い器台の上に、下胴が逆八の字形に開き、外形は甌形土器の底部に似ている。器面は茶褐色を呈し、へら磨調整されている。

b 箱清水Ⅱ式土器 (第27図～3図)

器形は、いずれもわずかに内湾する口縁から、弱い内湾カーブを描いて、ほとんど直斜状に下胴へ続き、下胴から底部へは、そのまゝ弱く内湾するものと(1)、逆に弱く外反りするもの(2・3)の2器形がある。

器面は、いずれもへら磨き調整され、赤色塗彩のあるもの(2・3)と、素焼きで茶褐色を呈するもの(1)の2手法がある。

口径は1が12.6cm、2が14.7cm、3が15cm、器高：口径の比は、1が1.82、2が1：2.07、3が1：2.05で、2・3の器形が比較的良好に似ている。

(3) 高坏形土器 (第26・27図)

a 尾崎式平行期の土器 (第27図5・11)

いずれもY-3号住居跡から検出された土器で、坏部と脚部が別々に検出されている。

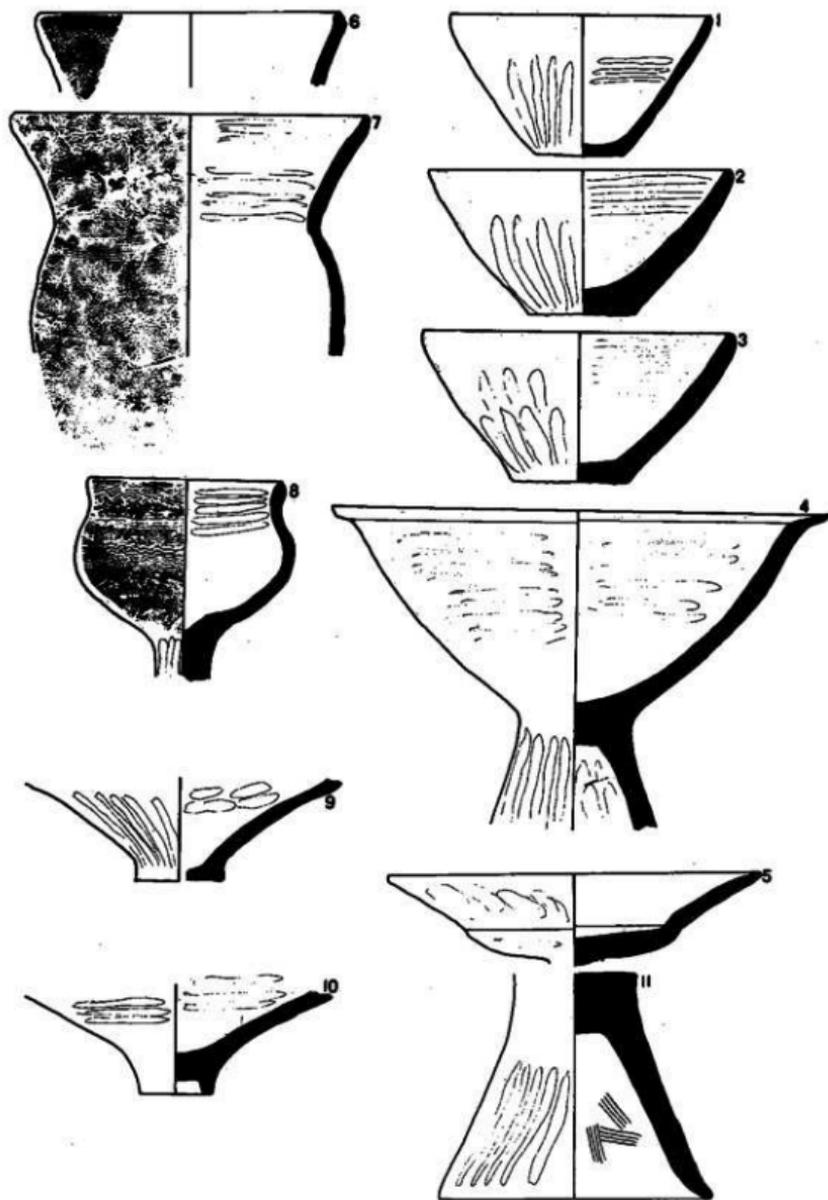
5は口径が18cm、口縁が直斜状に開き、下腹部で外反りから内湾に逆転して稜をつくり、わずかに丸味をつかって接着部に続いている。器面は茶褐色を呈し、へら磨調整されている。

11は大型土器の脚部で、器高がおよそ11cm、断面梯形状を呈し、上胴部でゆるく外反りしている。器面は赤色塗彩があり、へら磨き調整されている。

b 箱清水Ⅱ式土器 (第26図15、第27図4)

検出された土器は、大部分が小破片で、器形が明らかなものは少ない。

4はY-1号住居跡から検出された土器である。口径は24cm、口縁が唇状外反りで、胴部が緩く内湾し、坏部の器形は、丸味のある内湾深鉢状を呈する。器面は赤色塗彩があり、へら磨き調整さ



第27図 城の前遺跡Ⅰ地区出土遺物(弥生式土器)実測図(3)1:3

れ、脚部は断面梯形で、下胴部以下を欠損している。

15はY-19号住居跡から検出された口辺部破片で、口縁に山形突起をつけている。

(4) 台付壺形土器 (第27図)

8はY-3号住居跡で検出された尾崎式平行期の土器である。口径は10.4cm、口縁が厚い唇状の外反りである。頸部は緩く弓なりにカーブし、肩部から胴部がやや張り最大径が10.7cm、下胴は急に収縮して器台部に続いている。器面は暗茶褐色を呈し、ヘラ磨き調整の後、口縁から腹部にかけて、細かい3本の櫛目を横描きに反復して、精緻な波状文を描いている。

器台は径2.7cmの太さで棒状につくり、末端がラッパ状に開く器形と思われるが、下胴以下が欠損しているためつまびらかでない。

(5) 甗用鉢形土器 (第27図)

底部径4.3cm、ほぼ中央に径8mmの穴を穿ち、底部断面はおおよそ長方形を呈する。下胴は大きく「八」の字形に開き、腹部で張りのある内弯カーブを描いているように思われるが、上部が欠損しているので判然としない。

器面は暗茶褐色を呈し、ヘラ磨き調整されている。この土器は、Y-3号住居跡から検出されたもので、尾崎式平行期の土器と推考される。

(6) 壺形土器 (第27・28・29)

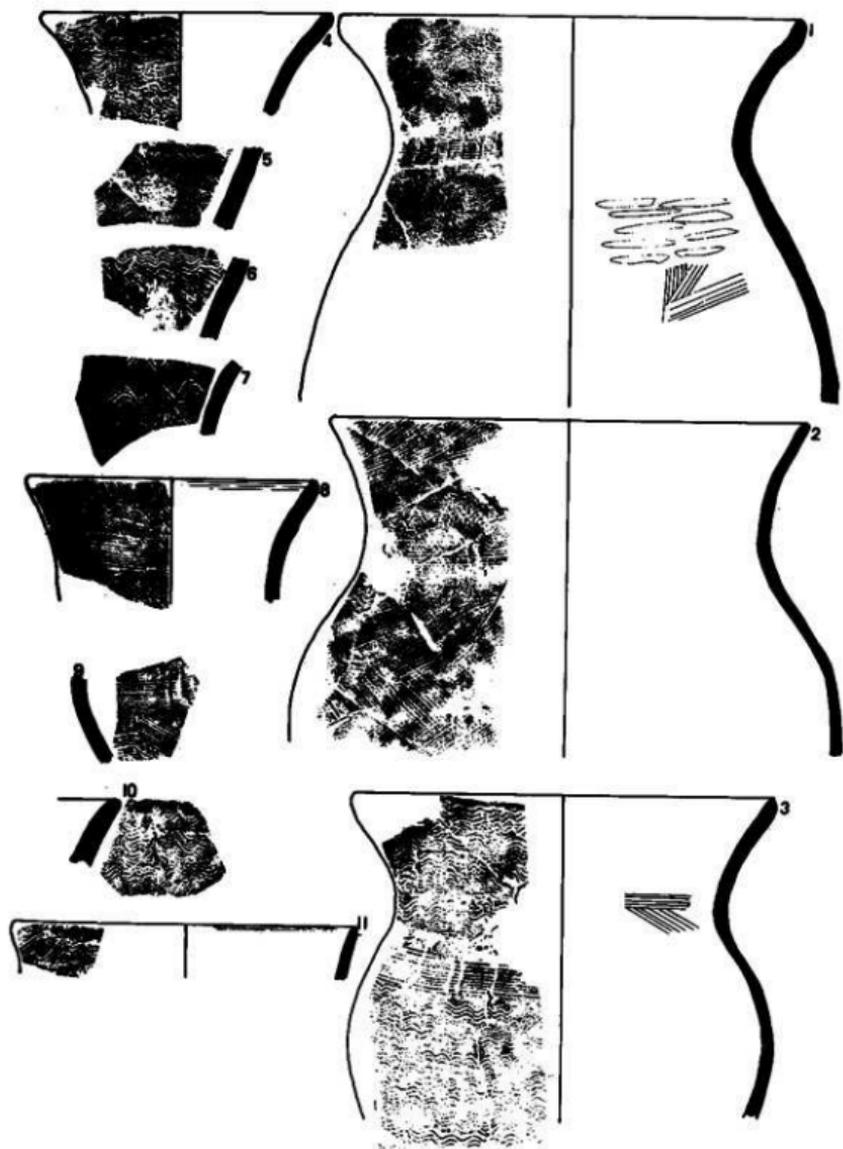
a 尾崎式平行期の土器

まず口辺部の器形は、口縁端が内弯して立ち、頸部に向って外反りし「く」の字形を呈するもの(第27図6・7、第28図1)と、口縁端に丸味があり、口辺部の外反りが強いもの(第28図2・8・11、第29図1)、および口辺部の外反りが強く、「く」の字形を呈するもの(第28図3・8、第29図5)の3類型に分類することができる。

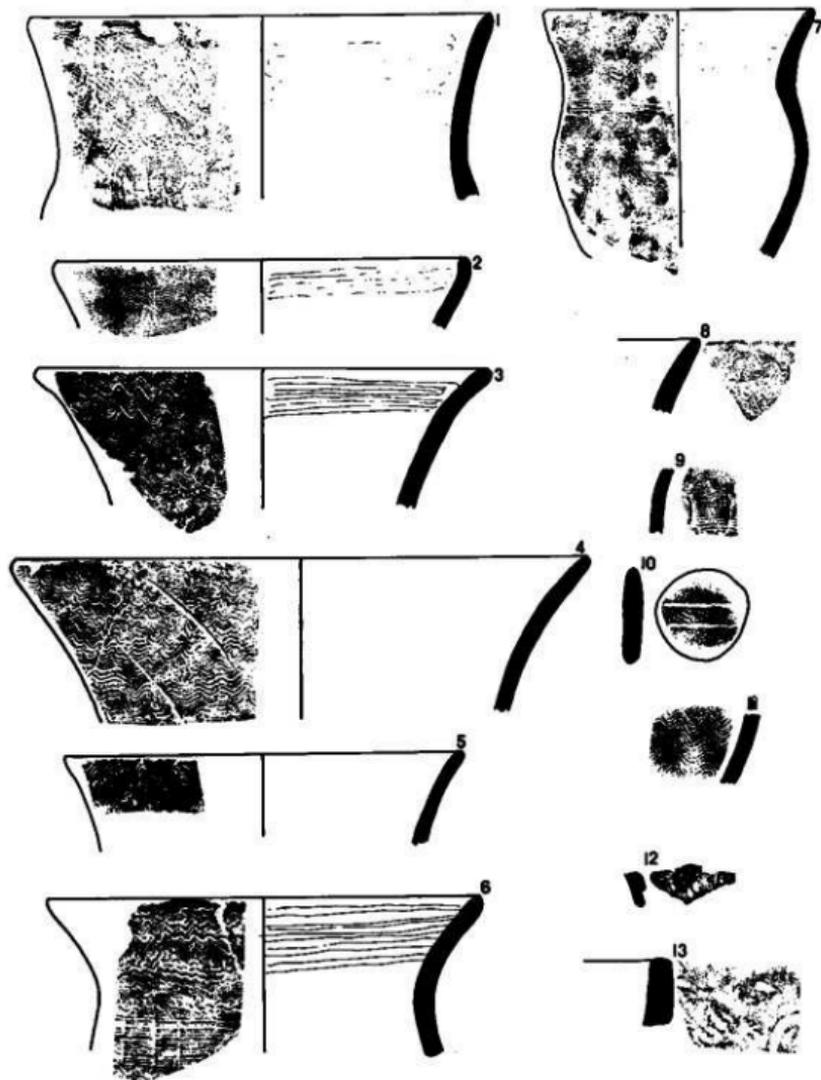
胴部の器形は、概して肩部から胴部に半円の弧を描く張りの強いものが多い。しかし、第28図1のように、肩部はほとんど張りがなく、なで肩状で、中胴に最大径をもつものなどがある。器面はいずれも暗茶褐色を呈するが、文様は口辺と胴部に櫛描波状文を施文し、頸部に櫛描簾状文を巡らすものと、頸部には櫛描簾状文とその上下に櫛描波状文を巡らし、口辺と胴部には櫛描山形文、あるいは櫛描沈線斜文を施文するものがある。前者は概して頸部のくびれの強い器形に多く、後者はくびれの弱いものに多い。この遺跡から検出された壺形土器は、比較的胎土が良質で、焼成も良く、硬質で文様も鮮明である。

b 箱清水Ⅰ式土器

各遺構から検出されたこの期の土器は、いずれも小破片で、完形できるものがない。その破片の



第28図 城の前遺跡 I 地区出土遺物 (弥生式土器) 実測図(4) 1 : 3



第29図 城の前遺跡Ⅰ地区出土遺物(弥生式土器)実測図(5) 1:3

各部分によって、器形を復元すれば、口辺部は深く外反りし、頸部で「く」の字形を呈し、胴部は張りのあるカーブを描いているものが多い、器面は暗茶褐色で、口辺と胴部の上半部分に櫛描波状文、頸部に櫛描波状文が施文されている。器形は比較的大型のものが多い。

c 箱清水Ⅱ式土器 (第28・29図)

器形は概して小型化の傾向をたどっている。口辺部の器形は、口縁端が内湾して立ち気味になり、その下は反転して外反りするもの(第29図2)、深く外反りして、頸部で強い「く」の字形を呈するもの(第28図4、第29図3・4)、および外反りも弱く、口辺部もやや小さいもの(第28図11、第29図6・7・8)の3類型が認められる。また、頸部には、ボタン状の粘土板を伴うものも検出されている(第29図12)。

胴部の張りは、小さくなる傾向が認められる。器面は、いずれも暗茶褐色を呈し、口辺と胴部には、やや乱れた櫛描波状文、頸部には櫛描波状文、あるいは櫛描平行沈線文が施文されている。

(7) 鉄器 (第80図)

Y-11号住居跡の床面覆土から検出されたもので、現長16.3cm、現最大幅2.7cmの両刃の鉄剣形鉄器の切先部分である。刀身は、かなりの部分が切損しているため、器形が判然としない。しかし、Ⅲ地区のY-2号住居跡からも鉄鏃が検出されているので、これらの鉄器は、Ⅲ地区の製鉄跡遺構となんらかの関係をもつものであろう。

C 古墳時代と歴史時代の遺構

I地区から検出された遺構は、後期の鬼高期12、晩期の真間期9、国分期49、時期不詳3の計73である。しかし、この地区は、中央部分が厚い礫層によって破壊され、その周辺にも遺構が検出されているので、さらに多くの遺構があったものと推考される。また、時期不詳の遺構は、第26号・第27号・第50号であるが、第26号遺構は、鬼高期の第25号、および第24号遺構によって切られ、プランの大部分を失っている。この遺構は、同期の鬼高期の遺構と推考したが、第25号住居跡から検出した遺物の中に、中期の和泉式の高坏坏部が含まれているので、切られた第26号住居跡が、中期の和泉期のものである可能性も大きい。

第27号遺構は、西側の大半部分を晩期の国分期によって切られ、プランも規模の小さい国分期の特色を示している。また、第50号遺構は、晩期の真間期の第49号住居跡によって切られ、遺物はほとんど滅失しているが、第49号住居跡およびその周辺から検出されている遺物は、いずれも真間式に比定されるものであるから、第50号遺構も真間期のもと考えてよからう。

この遺跡は、今回の調査でかなりの鉄滓を出土し、また、たたら跡と推考された遺構や吹子の羽口が検出されて注目された。I地区で鉄滓が検出されたのは、第3・11・16・18・20・21・24・30

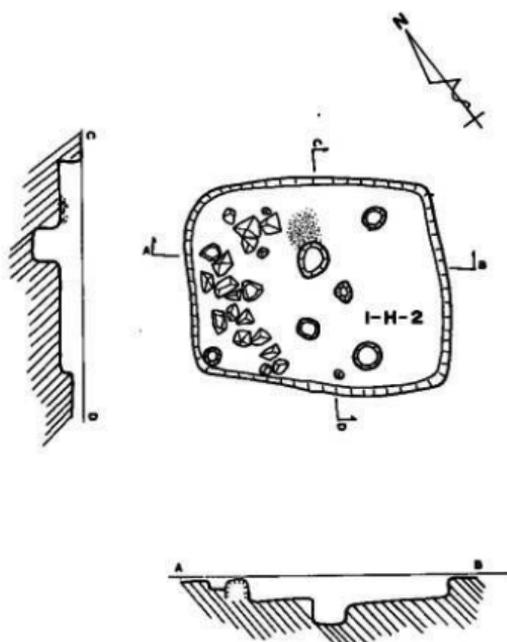
40・42・44の11遺構である。さらに第11・16・18・21・24・30・42号の7遺構には、石組と粘土でつくられたたたら跡と思われる遺構があり、第11・24・42号の3遺構からは、吹子の羽口が検出されている。また、第3・8・43・70号の4遺構からは、刀子などの武器や円盤状の用途不明の鉄器が検出されている。

(1) H-1号住居跡 (第10・32図)

この遺構は、E・F・G-2・3グリッドで検出された晩期の真間期の住居跡である。

平面プランは、長軸心線の方位がN35°Wにつくられ、長径が5.93m、短径が4.22mの隅丸長方形である。壁高は、耕作土の直下でやや削平され、現高約18cm、床面に径25cm、深さ23cmほどの柱穴が南・北壁に沿って6個検出され、東壁では奥行1m、幅78cm、床面を15cmほど掘りくぼめた粘土かまどが検出された。

この遺構は、東壁部分でY-2号住居跡、南壁東部でH-11号住居跡、北壁部分でY-17号とH-33号住居跡、北壁部分でH-9号住居跡を切る、北西隅部分がH-5号住居跡によって切られている。



出土遺物は、坏形土器・変形土器などの土師器と須恵器で、ほとんどが小破片である。土師器の坏形土器は、口縁が内弯し、腹部で弱い稜角をつくり、厚手・丸底の浅い器形(67-2)と、口辺部が直斜将に外反りし、腹部が弱く張り、下腹部でわずかに反り、糸切り上げ底、内面黒磨の(第67図1・3)の2器形がある。前者は高さ：口径の比が1：3.82、後者の比が1：3.08である。

第30図 城の前遺跡I地区遺構実測図(1) 1：60

(2) H-2号住居跡 (第30図)

この遺構は、G・H-2で検出された国分期の小規模の住居跡である。

遺構の平面プランは、長軸と緯線の方位がN48°Wにつくられ、長径が2.30m、短径が1.92m、中央北壁寄りに焼土があり、壁高がおよそ18cmを測る隅丸長方形である。床面は中央部分がややくぼみ、西壁床面にかなりの礫があり、柱穴状ピットは中央と3隅で検出された。しかし、いかにも規模が小さく、住居跡としては疑問が残る。

出土遺物は、土師器の坏・変形土器・須恵器の坏形土器などで、いずれも破片のため器形を復元できるものはない(第67図5・6)。

(3) H-3号遺構 (第13・31図)

この遺構は、F・G-1グリッドから検出された国分期の遺構で、遺構の北東部分の焼土層付近から鉄滓を出土している。

遺構の平面プランは、長軸と緯線の方位がN70°Wにつくられ、長径が4.18m、短径が2.12m、壁高がおよそ25cmにつくられた隅丸長方形である。床面はほぼ水平で、北東隅寄りに径約70cmほどの焼土層が検出された。この遺構は、Y-5号住居跡を切ってつくられ、南壁外側に3個、床面に2個の柱穴状ピットを検出したが、対称性を欠き、建物の構造上に問題が残る。

出土遺物は、前述鉄滓のほか、土師器の内面黒磨の坏形土器・台付坏形土器、丸底の変形土器、小形の変形土器、須恵器の大型の変形土器、壺形土器、坏形土器、および現全長が18.5cm、刀身現長11.5cm、刀身の幅1.6cmで切先部分を欠く刀子などが検出されている(図版34)。

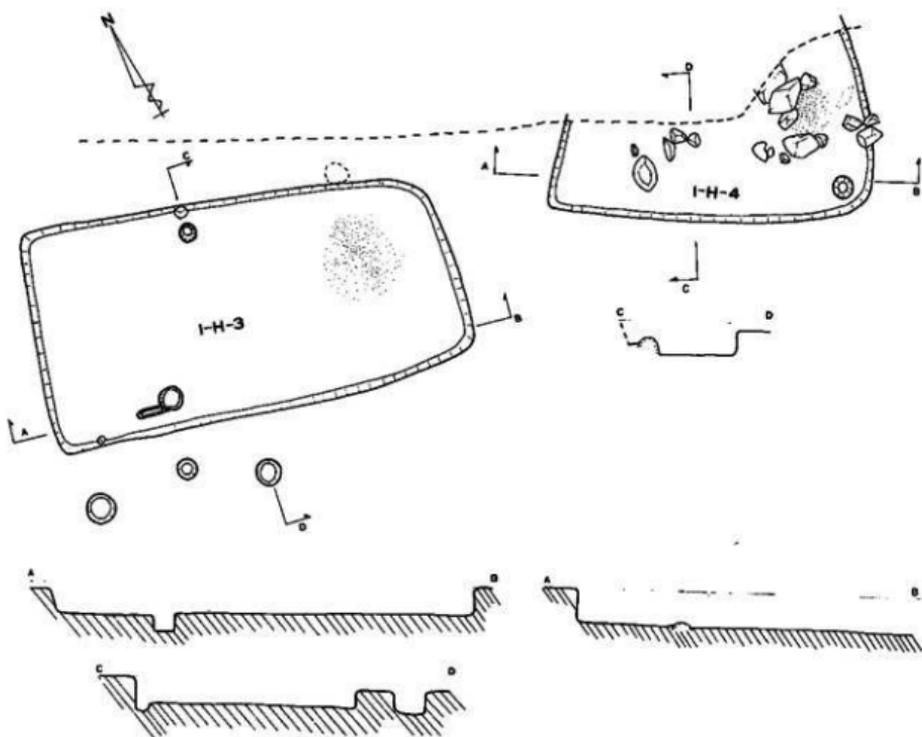
(4) H-4号住居跡 (第31図)

この遺構は、G・H-1グリッドの北端部分で検出された国分期の住居跡で、北半部分を追究するため、G・Hグリッドを北方へ拡張したが、道路の下まで続いていたので、調査を途中で断念した。

平面プランは、必ずしも明らかでないが、東西径が約3m、壁高がおよそ30cmの隅丸長方形と推考される。住居跡の東壁際には、焼けた角形の凝灰岩と広範な焼土層、および大小の安山岩が検出され、この部分に石組かまどがつくられていたことを示していた。

出土遺物は、土師器の坏・台付皿形土器、大型の変形土器、須恵器の坏形土器・変形土器などである。

土師器の坏形土器は(第67図)、口縁が内弯するものと直斜状に外反りするもの、内面を黒磨しているものと素焼状のものがあり、器高:口径の比もやや浅目の第64図10と、深い11・12がある。因に前者の器高:口径の比は、1:4.9、後者の同比は、1:3.23と1:3.68である。



第31図 城の前遺跡I地区遺構実測図(2) 1:60

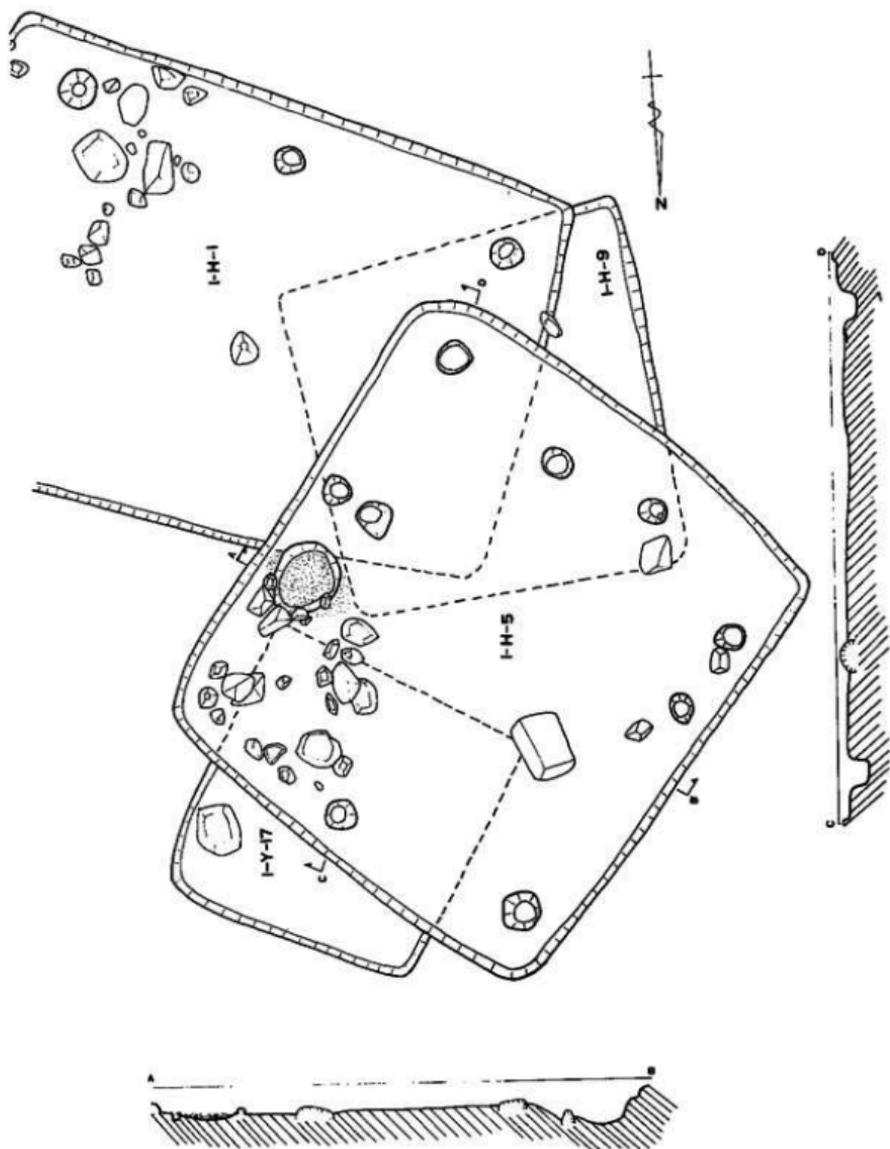
土師器の台付皿形土器は、坏部と器台部の破片で、完形品はない。口縁は直斜状外反りで、器台は断面方形である（第71図2・3）。変形土器は、上胴部と下胴部の破片である（第73図5・6）。

須恵器の坏形土器は、底部から口縁に向って直斜状に外反りし、口径13.8cm、高さ4.5cm、器面は灰青色を呈し、底部は糸切り上げ底である（第77図1）。変形土器は、いずれも口辺部の破片で、完形できるものはない（第78図5・6）。

(5) H-5号住居跡（第32図）

この遺構は、E・F-2・3グリッドを中心に検出された国分期の住居跡である。

遺構の平面プランは、長軸線の方角がN40°E、長径が5.27m、短径が4.64mの隅丸長方形で



第32図 城の前遺跡I地区遺構実測図(3) 1:60

ある。床面はほぼ水平で、各壁に沿った位置から柱穴状のピットを検出したが、いずれも径30cm前後、深さ約20cmで、位置が不規則であった。

かまど跡は、心線が東壁際の北壁から約2mの位置で検出された。焼土層の範囲は、東西径約90cm、南北径約65cm、中央部分に向かって凹レンズ状に7cmほどくぼみ、周辺には強い火を受けた安山岩質の石が散在していた。以上の状況からこのかまど跡は、石組によってつくられたものと推考される。

この住居跡は、Y-4・17号住居跡、H-1・6・9号住居跡と複合し、これらを切ってつくられた最も新しい時期の住居跡である。

出土遺物は、土師器の坏形土器や変形土器などである。坏形土器は（第67図13）、口縁が唇状に外反りし、胴部にやや丸味があり、内面は黒磨である。変形土器は（第73図7）、口縁が22cm、口縁がわずかに内湾して立ち気味になり、頸部は弱い「く」の字形を描き、胴部はほとんど張りがない。器面は茶褐色を呈し、ヘラ削りの後、ハケ状の工具で調整している。

(6) H-6号住居跡（第12図）

この遺構は、E-1・2グリッドの西端で検出された真間期の住居跡である。平面プランは、西側の約半分が調査区外に続き、南側がH-5号住居跡によって切られているため、必ずしも明らかでない。南北径は経3m強程度で、東西に長い隅丸長方形である。この場合、長軸心線の方位は、およそN80°Wになる。床面はほぼ水平で、東壁沿いに柱穴状のピット2個を検出し、そのほぼ中間に、径40cmほどの焼土層が検出された。しかし、壁上面のレベルは、地表からわずかに30cmほどしかなく、耕作等によって削平され、壁高7cmを測るのみであった。

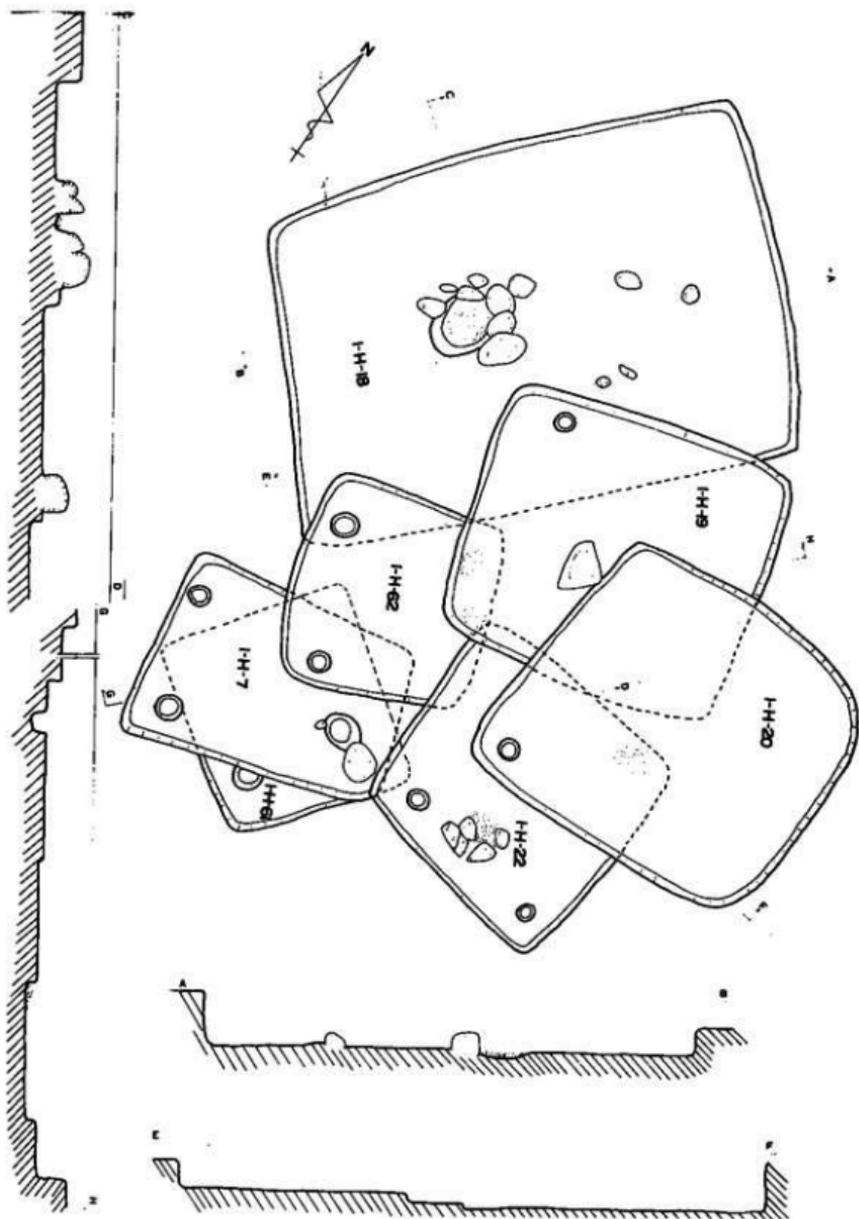
出土遺物は、土師器の坏・変形土器、須恵器の変形土器などであるが、いずれも破片で完形できるものはない。

(7) H-7号住居跡（第33図）

この遺構は、F-7グリッドで検出された真間期の住居跡で、北東隅をH-62住居跡によって切られ、南壁でH-61号住居跡を切っている。

遺構の平面プランは、長軸心線の方位がN40°Wにつくられ、長径が約2.60m、短径が1.93mの隅丸長方形である。床面はほぼ水平で、西壁沿いに径20cm、深さ15cmほどの柱穴状ピット2、東壁中央寄りに1個を検出したが、かまど跡は発見できなかった。壁面は硬く、壁高はおよそ30cmを測る。

出土遺物は、土師器の坏形土器・変形土器、須恵器の坏形土器・台付坏形土器および壺形土器などである。坏形土器は、口縁が緩く外反りするものと（第67図14・15）、先端が嘴状でわずかに内湾するもの（第67図16）があり、底部は丸底と平底の2器形がある。



第33図 城の前遺跡Ⅰ地区遺構実測図(4) 1:60

(8) H-8号住居跡 (第34・39図)

この遺構は、E・F-4グリッドを中心に検出された国分期の住居跡である。遺構の平面プランは、長軸心線がW0°、長径が2.87m、短径が2.70mの隅丸長方形である。床面はほぼ水平で、東壁際中央に石組を伴う焼土層が検出され、石組かまどが崩壊したものであることがわかった。石組は厚さ10cmほどの平石を立てて用い、それを前後に長く並べている。東壁の外側には、径9cmほどの煙出口が検出され、煙道がかまどの内部に続いていた。柱穴状のピットは、東北隅の1個が検出され、壁高およそ33cmを測る。この遺構は、南東部分がH-44号住居跡によって切られ、また、北壁部分でH-15号住居跡、西壁部分でH-17号住居跡を切っている。

出土遺物は、土師器の坏(第67図17・18)・台付皿(第71図7)・高坏(第72図7)・甕(第73図8)および壺形土器片などである。坏形土器は、口縁が直斜状に開き、先端が嘴状で、胴部の張りは極めて弱く、底部は糸切り上げ底と(17)、へら削り平底の2器形がある。17は口径が大きく、高さ：口径の比が1：4.08で、内面黒磨である。18は口径がやや小さく、高さ：口径の比が1：2.2である。台付皿形土器は、口縁が外反りで、皿部が浅く、器台部は断面梯形である。皿部の内面は黒磨で、器面はロク口状の擦痕が顕著で、器高：口径の比が1：5.24である。高坏形土器は、器台部の完形品1個のほかはすべて破片で、器形を復元できるものはない。器台部は、胴部が太く径5cmを測り、肉も厚く底部がラッパ状に開いている。甕形土器は、口辺部の破片で、口縁が嘴状でわずかに外反りし、胴部はほとんど張りがなく、へら磨きされている。

また、この遺構からは、径6.1cmの紡錘車状の円盤の軸がL字形に折れた用途不明の鉄器(第80図9)が検出された。

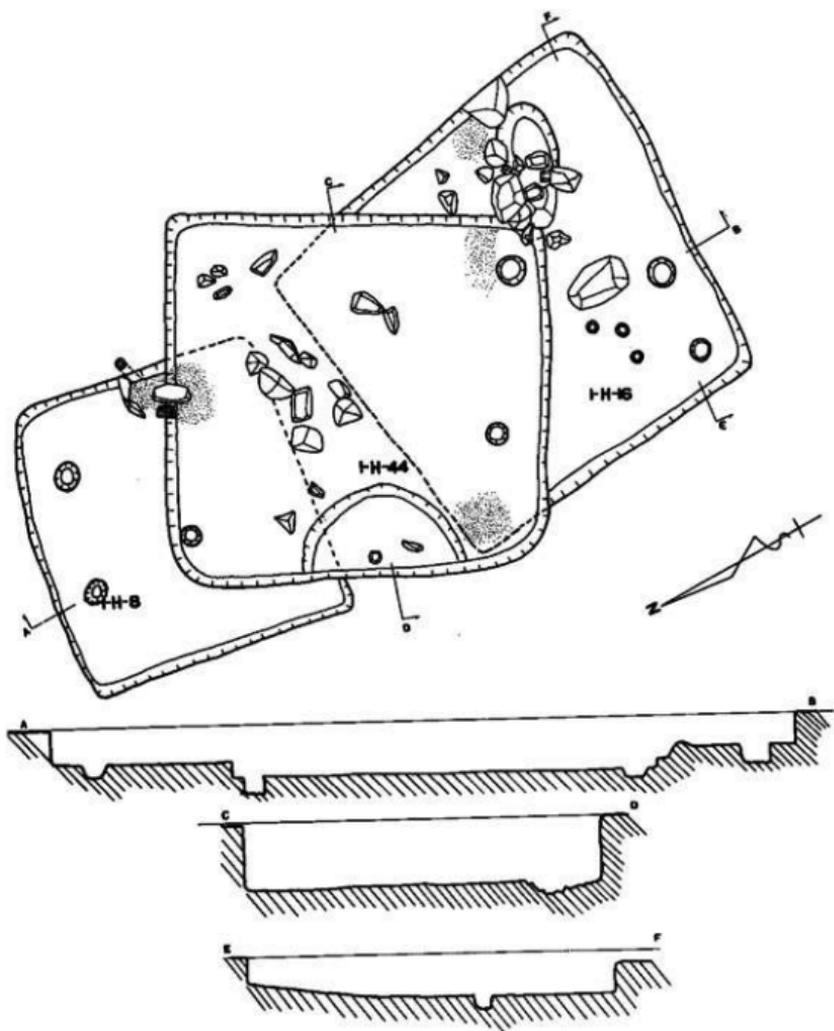
(9) H-9号住居跡 (第32図)

この遺構は、E-2・3グリッドを中心に検出された鬼高期の住居跡である。遺構の平面プランは、南西隅の一部を残すのみで、大部分がH-1号住居跡とH-5号住居跡によって切られているため明らかでない。

出土遺物は、土師器の坏形土器(第68図1～3)・台付坏形土器・甕形土器、須恵器の大型の甕形土器(第78図3)などの破片が検出されている。坏形土器は、口縁が先端で外反りし、胴部が緩く内弯するものと(1)、口縁と胴部が内弯しているもの(2・3)の2器形がある。須恵器の甕形土器は、胴部の破片で、器形は判然としないが、器面が青褐色を呈し、タタキ目で整形されている。

(10) H-10号住居跡 (第9・35図)

この遺構は、H-1グリッドで、Y-1号住居跡を追求する過程で、北壁際に石組かまどが検出

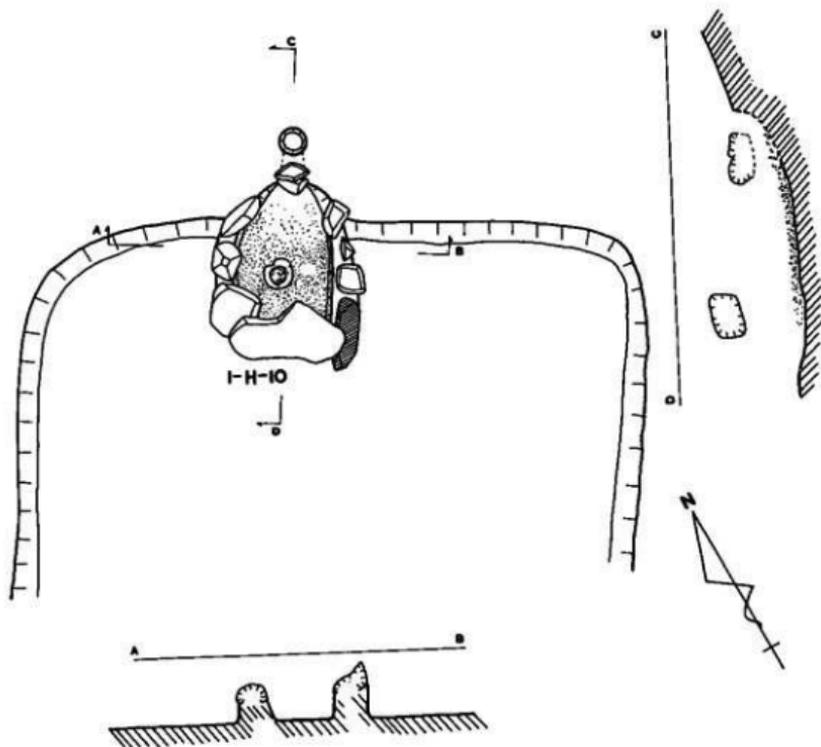


第34図 城の前遺跡 I 地区遺構実測図(5) 1 : 60

され、そのかまど内に鬼高期の坏形土器を検出した住居跡で、調査中から疑問が多く、調査員一同を悩ませた遺構である。

遺構の長軸心線の方がN35°Eにつくられ、長径が3.98m、短径が2.80mの隅丸長方形プランである。石組かまど跡は(第35図)、北壁の中央やや西寄りにつくられ、小型の礫と粘土で奥行約78cm、厚さ10~12cmの側壁を築き、平面プランは胴張りで、間口内径が約40cm、天井に平らな石をのせている(図版3)。しかし、Y-1号住居跡の項で述べたとおり、石組かまど跡の前には、ほぼ完形の弥生後期箱清水Ⅱ期の壺・甕・高坏・鉢形土器のセットが検出され(図版21)、かまど跡の内部には鬼高期の坏形土器が検出された。これらの矛盾は、前述のとおり弥生後期の箱清水Ⅱ期の住居跡の上に、ほとんど同一プランで土師期の遺構が構築され、内部から出土した弥生後期の箱清水Ⅱ式の土器セットを使用していたものと考えざるを得ない。

かまど跡内部から検出された坏形土器は、口縁が嘴状外反りで、胴部が緩く張り、底部はヘラ削



第35図 城の前遺跡Ⅰ地区遺構実測図(6)1:30

りによって整形されている。また、遺構内から検出された変形土器は（第73図10）、口縁の先端部が外反りして頸部で「く」の字形を描き、胴部は緩く張っている。器面は艶のあるこげ茶色を呈し、ヘラ磨によって調整されている。

⑩ H-11号遺構（第36・37図）

この遺構は、H・1-5～7グリッドで検出され、北西隅寄りにたたら跡とその内部から吹子の羽口、および多くの鉄滓などを検出した国分期の遺構である。

遺構の平面プランは、長軸心線の方がN26°Wにつくられ、長径が5.02m、短径がおよそ4.20mの隅丸長方形である。

壁高は約10cmほどで、上面が耕作によって削平されている。床面には、東・西両壁に沿って径およそ30cm、深さ20cmの柱穴状ピットが検出され、それらは計6個が、およそ3個ずつ壁に沿って対称的に配置されていた。また、東壁際の南寄りに、径35cmほどの焼土層が検出されたが、住居跡と推定するには資料が不足である。

たたら跡と推考される遺構は、長軸心線の方がN50°Eにつくられ、長径（奥行き）が92cm、最大幅が62cmの卵形で、周囲に高さ25cm、基部の厚さ約38cmの粘土堤をつくり、奥と間口に大きな角石を配し、焚口の石の間に吹子の羽口を置いていた。遺構の内部はボール状にくぼみ、最深部がおよそ25cm、底に砂と松材の木炭が認められ、かなりの鉄滓がその間から検出された（図版6）。

吹子の羽口は（第79図）、径8.3cmで先端に厚く緑青色の灰釉が付着し、中央からやや偏して径2.1cmの穴がつけられ、胎土にははらと思われるすきが含まれていた。しかし、羽口の基部は欠損して、全形は明らかでない。

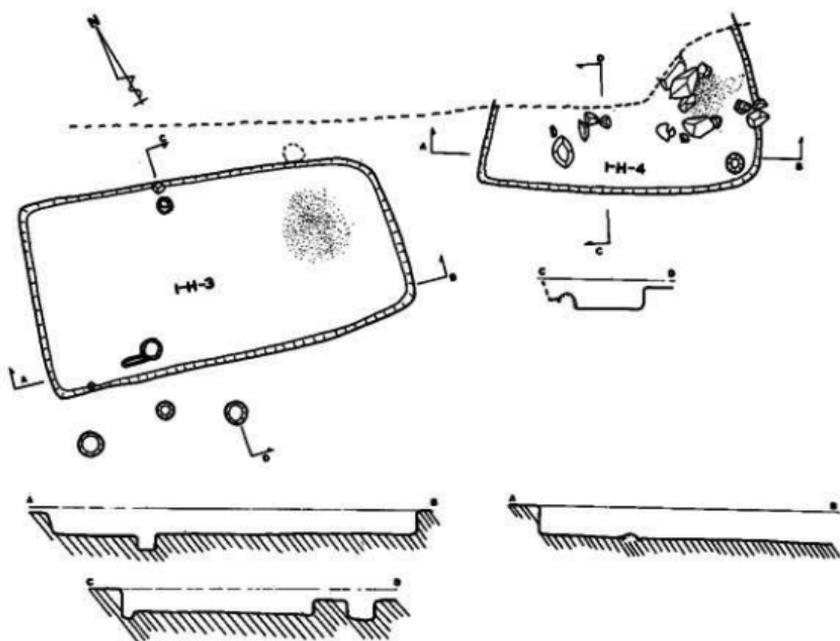
出土遺物は、土師器の環形土器（第68図）・台付環形土器（第71図）・変形土器（第73図）、須恵器の環形土器（第77図）および変形土器、灰釉の台付埴形陶器などである。

環形土器は、口縁が外反りするものと内弯型を認めるが、完形できるものはない。台付環形土器は、口縁端部がわずかに外反りし、胴部は内弯し、内面黒磨であるが、器台部を欠損して完形できるものはない。変形土器は、口辺と底部の破片であり、底部には葉脈痕がつけられている。

須恵器と灰釉陶器は、大部分が破片であり、完形できるものは少ないが、第77図4の須恵器の環形土器は、口辺と上胴部が緩く外反りし、下胴部が張っている。口径は11.9cm、器高が2.9cmで、浅く小型である。

⑪ H-12号住居跡（第15・38図）

この遺構は、G-5グリッドで検出された国分期の住居跡である。平面プランは、長軸心線の方がN8°Wにつくられ、長径が3.25m、短径が2.13mの隅丸長方形である。床面には4隅に径およそ25～30cm、深さ10cm前後の柱穴が対称的につくられ、壁高がおよそ20cm、東壁際の北寄りに、



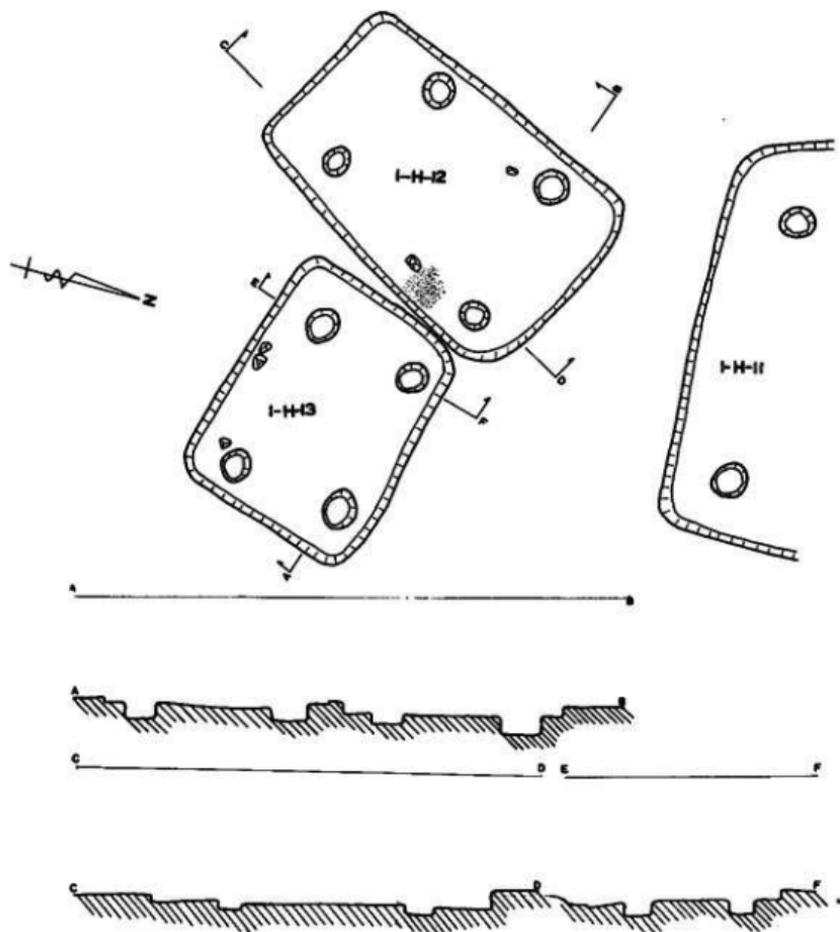
第37図 城の前遺跡Ⅰ地区遺構実測図(8)1:30

出土遺物は、土師器の坏形土器（第68図）と灰釉の埴形陶器（第77図）などで、いずれも破片である。坏形土器は、口縁端が尖り、胴部が緩く内弯して、内面黒磨、器面が暗茶褐色を呈している。灰釉陶器は、器面が灰白色で、口縁に釉が付着し、口辺部が緩く内弯している。

04 H-14号住居跡（第15図）

この遺構は、G-5・6グリッドで検出された国分期の住居跡である。この遺構は、長軸心線の方角がN82°Wにつくられ、長径が2.80m、短径が2.74mのおよそ隅丸方形である。床面はほぼ水平で、西南隅寄りに大きな石があり、この先がH-20号住居跡によって切られている。柱穴はこの西南隅を除く3隅で検出され、径約20cm、深さ約18cmであった。

出土遺物は土師器の坏形土器、および須恵器の甕および壺形土器の破片などで、器形が判然とするものはない。



第38図 城の前遺跡Ⅰ地区遺構実測図(9) 1:60

(15) H-15号住居跡 (第39図)

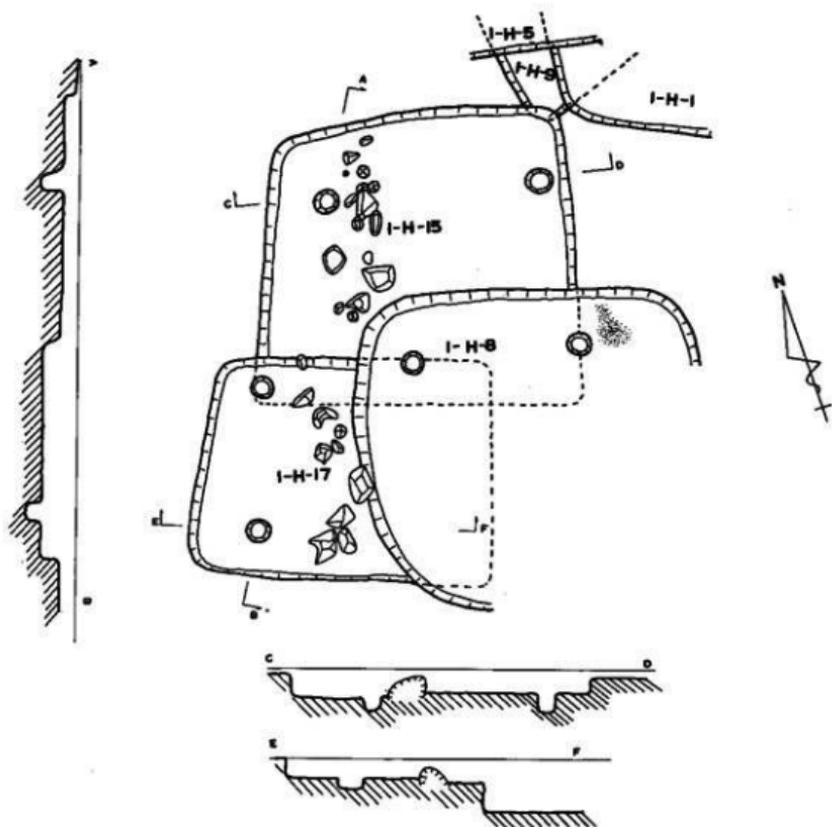
この遺構は、E-4・5グリッドで検出された鬼高期の住居跡である。平面プランは、遺構の南側がH-8号住居跡とH-17号住居跡によって切られているため明らかでないが、東西径およそ3mである。床面はほぼ水平で、西壁寄りにかなり礫が散在し、北壁寄りに径2.5cmの柱穴が、東

西に対称的に配されていた。壁の上面は、地表から浅いため、耕作等によって削平されて、現壁高が約10cmほどであった。

出土遺物は、土師器の坏形土器・高坏の脚胴部（第72図）・変形土器（第76図）、須恵器の台付坏形土器（第77図）および壺形土器などである。

高坏形土器の脚部は、上胴部の径が約3.8cm、器面が茶褐色を呈し、へら屑調整によっている。器形は底部と坏部が欠損しているため明らかでないが、胴部は下胴部に向わずかに開いている。

変形土器は、口辺部を欠いているが、胴部はほぼ完形である。器形は頸部が強くとびれ、胴部が



第39図 城の前遺跡Ⅰ地区遺構実測図(10 1:60)

マートに張り、底部に向って急に縮約している。胴部の最大径は上胴にあり、径23.5cm、底部径が6.5cmである。台付坏形土器は、底部と器台部の破片で、器台部の断面は台形である。

(16) H-16号遺構 (第34図)

この遺構は、E・F-4・5グリッドで検出された国分期の遺構で、東壁寄りに、たたら跡とその内部から吹き羽口片および鉄滓が検出されている。

遺構の平面プランは、およそ北側の半分がH-44号住居跡によって切られているため明らかでないが、東西径はおよそ3.60mである。

たたら跡は、長軸心線の方位がN70°W、長径(奥行き)が1.10m、最大幅が55cm、長卵形の平面プランで、焚口の両側に大小の石を積んでいる。遺構の内部は、ボール状にくぼみ、内部から木炭吹子の羽口および鉄滓などが検出された(図版10)。

出土遺物は、土師器の坏形土器(第68図)・台付皿形土器(第71図)・高坏形土器の脚部(第72図)・甕形土器(第74図)、須恵器の坏形土器(第77図)および査形土器などが検出された。

検出された遺物は、いずれも破片で完形できるものではないが、およそ器形の特徴を伺うことができる。

(17) H-17号住居跡 (第39図)

この遺構は、E-4・5グリッドで検出された鬼高期の住居跡であるが、平面プランは、遺構の東側がH-8号住居跡によって切られているため明らかでないが、南北径が2.15mで、長軸心線の方位がN58°Wの隅丸長方形と考えられる。柱穴は、南北壁の西壁寄りに、径20cm、深さ18cmのピットがほぼ対称的に配された。床面には、大小の礫が散在し、壁高はおよそ18cmを測る。

出土遺物は、土師器の坏形土器(第68図)・甕形土器(第74図)、須恵器の坏形土器などであるが、いずれも破片で、完形できるものはない。

(18) H-18号遺構 (第33図)

この遺構は、E・F-6・7グリッドで検出された国分期の遺構で、ほぼ中央にたたら跡がつけられ、多量の鉄滓が検出された。

平面プランは、長軸心線の方位がN38°Eにつくられ、長径が4.95m、短径が3.50mの隅丸長方形である。東壁の大部分は、H-19・H-62号の2住居跡によって切られているが、西壁の壁高はおよそ23cmである。

たたら跡は、中央に近い南西寄りにあり、長軸心線の方位がN18°E、長径(奥行き)が80cm、最大幅が55cmの楕円形プランで、焚口の両側に石を積んでいる。

構造は、H-16号遺構のたたら跡に近似し、内部がボール状にくぼみ、木炭・灰・鉄滓などが検

出された(図版11)。

出土遺物は、土師器の環形土器(第68図)・台付埴形土器(第71図)・高環形土器・甕形土器、須恵器の壺形土器などである。しかし、いずれも破片で完形できるものはない。

(19) H-19号住居跡(第33図)

この遺構は、F-6グリッドで検出された国分期の住居跡である。平面プランは、西南隅をH-20号住居跡によって切られているが、長軸心線の方位が $N66^{\circ}E$ につくられ、長径が2.95m、短径が2.68mの隅丸長方形である。柱穴は西南隅に1個だけが検出され、かまど址と推定される焼土層は、南壁のやや東寄りから検出された。床面は水平で、壁高が28cmを測る。

出土遺物は、土師器の糸切り上げ底・内面黒磨の環形土器(第68図)・台付埴形土器(第71図)・甕および壺形土器の口辺部(第74図)・埴形土器(74図)、須恵器の環形土器および灰釉の台付埴形陶器(第77図)などが検出されている。

(20) H-20号住居跡(第33・40図)

この遺構は、F・G-6グリッドを中心に検出された国分期の住居跡で、Y-15・H-14・19・22号の各住居跡と複合し、これらを切られている。

平面プランは、長軸心線の方位が $N75^{\circ}E$ につくられ、長径が3.2m、短径が2.84mの隅丸長方形である。床面はほぼ水平で、数個の礫が散在し、壁高が東壁で60cmを測り、かまど址と推考される焼土層が、西壁際のやや南寄りから検出された。また、この遺構内から数個の鉄滓を検出したが、これに伴う遺構がなく、なんらかの理由で持ち込まれたものであろう。

出土遺物は、土師器の完形の環形土器(第68図16)と破片、台付腕形土器・台付環形土器および甕形土器(第74図)、須恵器の大型の甕形土器、灰釉の台付埴形陶器などが検出されている。土師器の完形の環形土器は、口縁が唇状を呈して緩く外反りし、胴部は直斜状に近い内湾形で、底部は平底である。器面は茶褐色を呈し、ヘラ磨の上にロクロ状の擦痕を残している。口径は13.8cm、器高が4.9cm、底部径6.9cmである。これ以外の検出された環形土器は、いずれも破片であるが、糸切り上げ底、内面黒磨によっている。

(21) H-21号遺構(第41図)

この遺構は、H・I-3・4グリッドで検出された国分期の遺構で、南東隅寄りにたたら跡がつくられていた。平面プランは、長軸心線の方位が $N6^{\circ}W$ につくられ、長径が3.58m、短径が3.38mの隅丸長方形である。壁の上面は、耕作等によって削平され、現壁高がおおよそ13cm、柱穴状ピットは北東隅を除く3つのコーナーで検出され、おおよそ25cm、深さ20cmを測る。

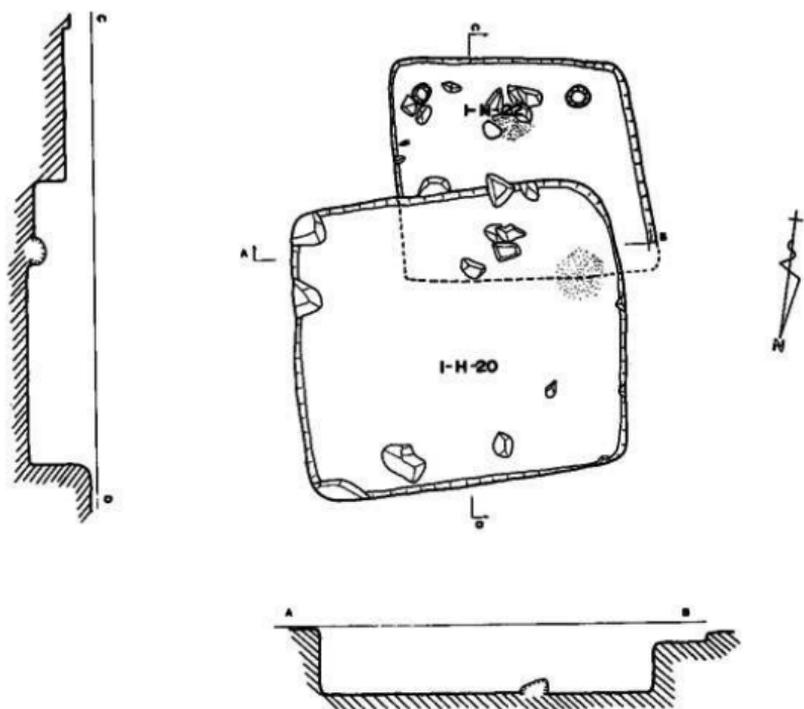
遺構の南東隅で検出されたたたら跡は、長軸心線の方位が $N72^{\circ}E$ につくられ、長径(奥行き)

が80cm、最大幅が55cm、平面プランはおよそ卵形で、側壁の積石はほとんど崩壊していたが、内部はボール状にくぼみ、木炭や鉄滓・吹子の羽口片などが検出された。

出土遺物は、土師器の内面黒磨・糸切り上げ底の坏形土器（第68図）・変形土器、須恵器の坏形土器などが検出されている。しかし、いずれも破片で、器形を復元できるものはない。

② H-22号住居跡（第33・40図）

この遺構は、F・G-6・7グリッドで検出された国分期の住居跡である。平面プランは、遺構の北側がH-19号と20号住居跡によって切られているため明らかでないが、東西径2.38mの隅丸長方形と推考される。床面はほぼ水平で、南壁寄りの東西に柱穴状ピットが検出され、ほぼ中央に焼



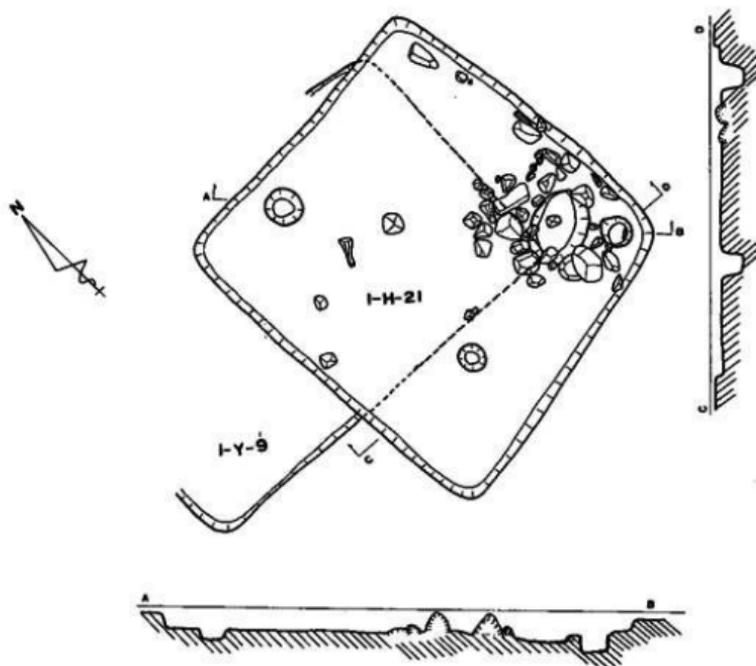
第40図 城の前遺跡I地区遺構実測図(1) 1:60

土層と焼けた角石が検出された。

出土遺物は、土師器の完形の坏形土器（第68図20）・台付坏形土器（第71図）・変形土器および壺形土器（第74図）、須恵器の細頸瓶、灰釉の台付腕形土器などが検出されている。完形の坏形土器は、口縁の端部がわずかに外反りし、胴部は緩く内弯して、承切り上げ底の底部に続いている。器形は口径が13.9cm、器高が4.7cm、底部径が6.5cmでやや深い坏形土器である。

④ H-23号住居跡（第18図）

この遺構は、E-7・8グリッドを中心に検出された国分期の住居跡である。遺構の平面プランは、長軸心線の方位がN64°Eにつくられ、長径が2.90m、短径が2.50mの隅丸長方形である。床面には大小の礫が北と東壁寄りのおよそ半分に散在し、柱穴が北西隅を除く3コーナーの対称的位置



第41図 城の前遺跡I地区遺構実測図(2) 1:60

置で検出され、また壁高はおよそ15cmで、北壁際の東寄りに径50cmほどの焼土層が検出された。

出土遺物は、土師器の内面黒磨・糸切り上げ底の環形土器（第69図）、完形の台付皿形土器（71図8）および台付壇形土器（第71図16）などが検出されている。台付皿形土器は、器肉が厚く、口辺部がわずかに外反りし、器台は断面長方形で、底部が糸切りによっている。

24 H-24号遺構（第42・43図）

この遺構は、A-9・10グリッドで検出された鬼高期の遺構であり、北壁寄りにたたら跡と吹子の羽口、およびるつばに利用された厚手の環形土器（第79図）などが検出された。

遺構の平面プランは、長軸心線の方位がN18°Eにつくられ、短径は調査区外に続いているため明らかでないが、長径はおよそ4.72mである。床面はほぼ水平で、壁高18cmを測る。

たたら跡は、長軸心線の方位がN18°Wにつくられ、長径（奥行き）が85cm、最大幅が60cm、焚口の側壁に石を積み、横15cm、縦10cmほどの穴を前面につくっている。内部はボール状にわずかにくぼみ、木炭や灰と数個の鉄滓が検出された（図版4）。また、前面から吹子の羽口の破片が検出され、後部の端からるつばに使用されたと考えられる環形土器が発見された。この環形土器は（第79図2）、口縁端がわずかに尖り、口径が13.3cm、器高が4.6cm、底部径が8.2cm、胴部は緩い内弯カーブを描き、内面はおよそ直斜状で、胎土にわら状のすきを入れ、底部の肉厚が1.9cmと鈍重なほどに厚く、内面に緑青色の灰釉が盛り上がり、器面はヘラ磨調整によっている。

遺構内から検出されたその他の遺物は、土師器の環形土器と高環形土器であるが、いずれも破片で完形できるものはない。

25 H-25号住居跡（第42図）

この遺構は、A-10グリッドを中心に検出された鬼高期の住居跡で、遺構の西側の大部分が、調査区外の畑地内に延びていた。

遺構の平面プランは、全掘されていないので、必ずしも明らかでないが、長軸心線の方位がN40°E、長径が4.70mと推考される。床面はほぼ水平で、壁高40cmを測り、南東隅の東壁際から完形の坏が、南側では単独で、北東側では3枚重なって検出され（図版22）、また、中央やや北寄りでは、高環形土器の坏部破片が、およそ完形に復元できる状態で検出された。

環形土器は、口縁の先端部が尖って外反りするもの（5・7）、尖って内弯するもの（9）、唇状で外反りするもの3器形があり、胴部は概して緩く内弯し、急速に縮約するが、上胴で張るものもある（7）。底部は上げ底と丸底があり、器面は淡茶褐色で、ヘラ磨き調整されている。

高環形土器の坏部は、口縁部が立ち気味に内弯し、下胴は直斜状に縮約して接着部に続いている。器面はこげ茶色を呈し、ヘラを口縁から下胴に向けてなすり、調整している。この器形と手法は、明らかに中期の和泉式に比定されるもので、他の遺物の時期と矛盾している。これは複合する他の

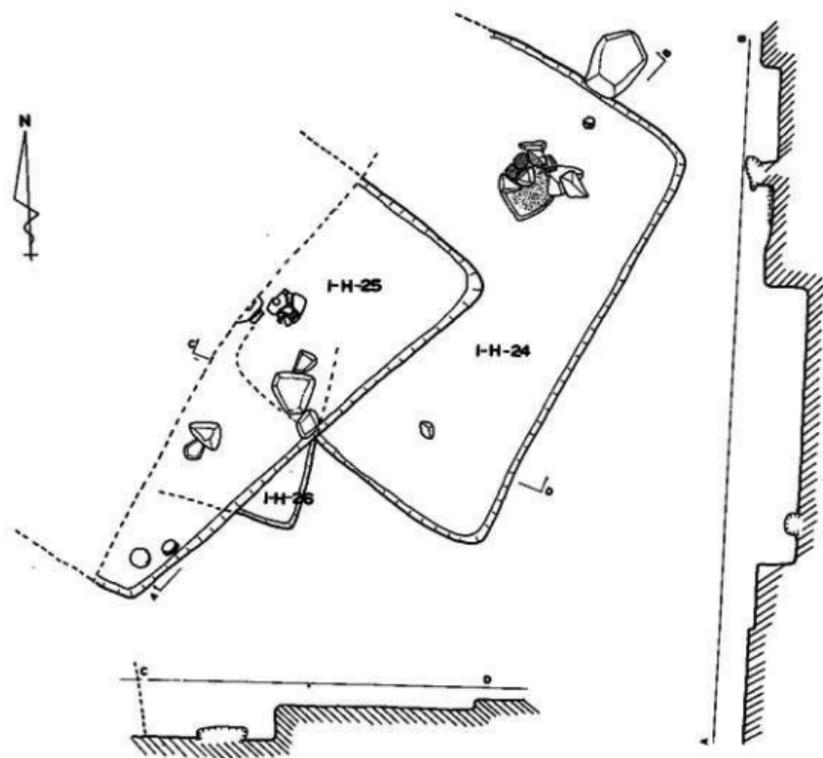
遺構のものが、この遺構に混入していることが考えられる。

埴形土器は、口縁端が丸く、口辺部が弱く外反りし、頸部が「く」の字形を呈し、胴部は丸味をもった内弯カーブを描いている。その他、中型の埴形土器の口辺部破片が検出されている。

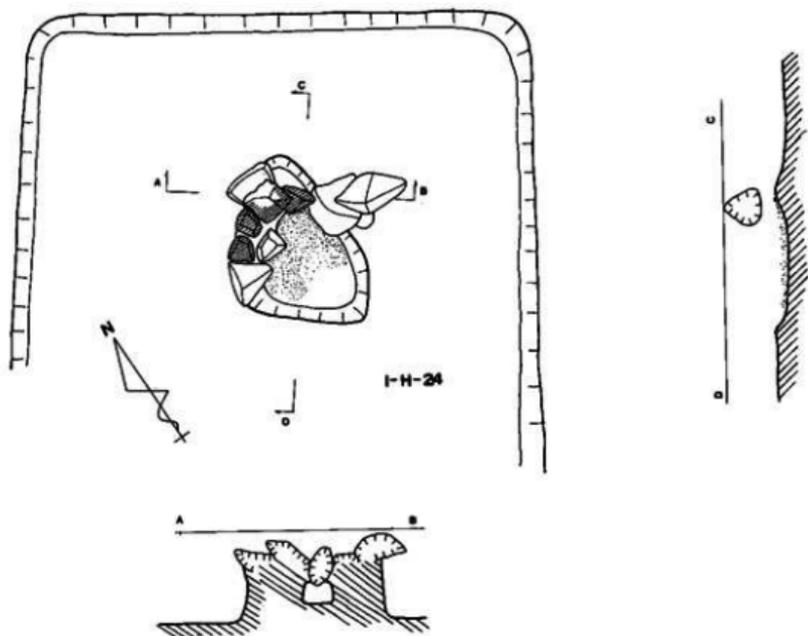
②6 H-26号住居跡 (第42図)

この遺構は、A-10グリッドを中心に検出されたが、現在は南東の一隅を残すのみで、大部分がH-25号住居跡によって切られているため、プランを知ることができない。

また、出土遺物は、いずれも小破片のみで、器形は明らかでなく、一応鬼高期と推考したが、前



第42図 城の前遺跡I地区遺構実測図⑬ 1:60



第43図 城の前遺跡 I 地区遺構実測図(14 1 : 60

述のとおり複合しているH-25号住居跡内から和泉期の高坏形土器の坏部が検出されているので、和泉期にさかのぼる可能性もある。

㉑) H-27号住居 (第44図)

この遺構は、F・G-9グリッドで検出された遺構で、H-28号住居跡によって西側の大部分が切られている。平面プランは明らかでないが、南北径が1.25mで、国分期のH-28号住居跡によって切られていることから、国分期によくみられる小規模の隅丸方形プランの遺構であろう。出土遺物は、いずれも小破片で、器形は判然としませんが、内面黒磨の坏形土器の小破片が含まれている。

㉒) H-28号住居跡 (第44図)

この遺構は、F-9グリッドを中心に検出された国分期の住居跡である。遺構の平面プランは、

長軸心線の方位がN16°Eにつくられ、長径が2.93m、短径が2.70mのややゆがんだ隅丸長方形である。床面には、大小の礫が散在し、北東隅に50×60cmの焼土層が検出された。

出土遺物は、完形の内面黒磨の坏形土器（第69図9・10）や変形土器の破片が検出されている。坏形土器は、口縁端が尖り、わずかに胴部が内湾し、口径が19.5cm、内面黒磨の土器と（9）、口径が11.4cmで、器高が大きく、厚手で口縁から立ち気味に内湾する器形の土器がある。

29) H-29号住居跡（第44図）

この遺構は、F-9・10グリッドを中心に検出された国分期の住居跡である。遺構の平面プランは、長軸心線の方位がN34°Eにつくられ、長径が3.52m、短径が3.45mの隅丸長方形である。遺構の北壁の大部分は、H-28号住居跡によって切られているが、西壁のほぼ中央に、奥行が72cm、間口内径が40cm、角石を側壁に並べて構築した石組かまどがよく遺存し、西壁際には全面に焼土層が分布し、更に南壁の東壁寄りと、東壁の北壁寄りに径45cmほどの円形に分布する焼土層が検出された。これらの広範な焼土層の分布が、どのような理由によるのか明らかでない。

出土遺物は、土師器の内面黒磨の坏形土器および変形土器などが検出されている。しかし、いずれも小破片で、器形を復元できるものはない。

30) H-30号遺構（第21・45図）

この遺構は、I・G-7・8グリッドを中心に検出された鬼高期の遺構で、北壁寄りにたたら跡と鉄滓などが検出されている。

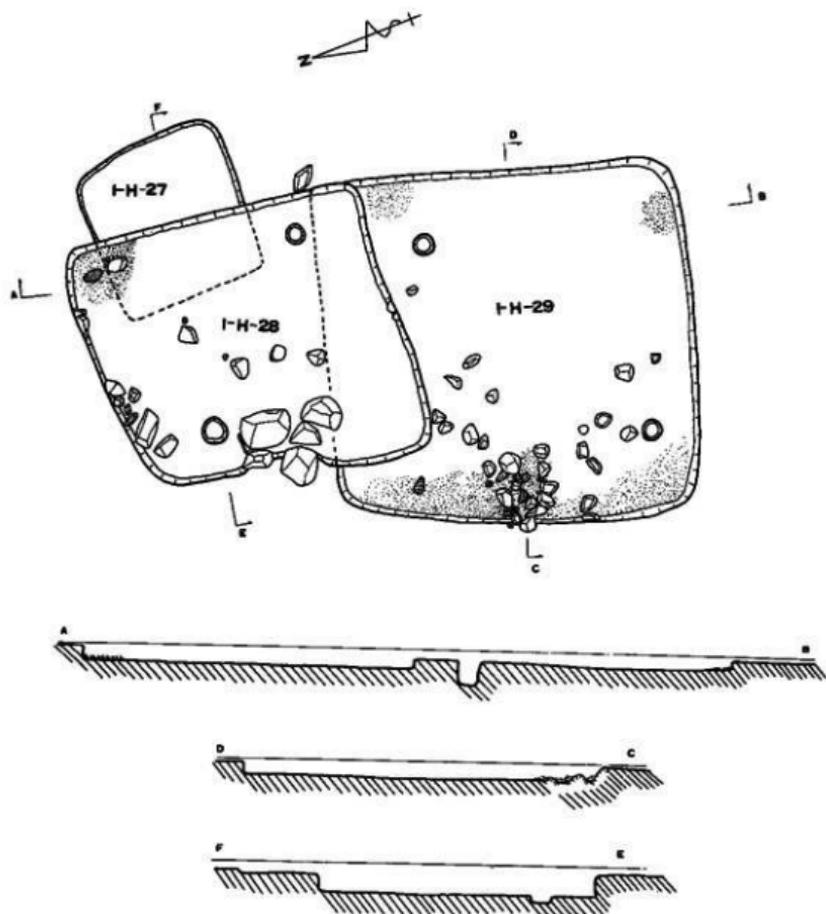
遺構の平面プランは、長軸心線がN16°Eにつくられ、長径が6.37m、短径が4.90mの隅丸長方形である。床面には大小の礫が散在し、たたら跡は北壁寄りのほぼ中央につくられていた。たたら跡は、長軸心線の方位がN10°Wにつくられ、長径（奥行き）が75cm、最大幅が63cm、平面プランはややゆがんだ卵形で、すでに周りの積石は崩れ、周辺に散在していた。内部は他のたたら跡と同様にボール状にくぼみ、木炭や鉄滓が検出され、その北東際から径95×50cmにわたって灰層が検出された。

出土遺物は、土師器の完形の坏形土器（第69図11・12）・鉢形土器（第72図5・6）・高坏形土器（第72図14・15）・変形土器（第74図11）・須恵器の坏形土器（第77図11・13）および長頸瓶（第78図9）などが検出されている。

31) H-31号住居跡（第46・47図）

この遺構は、B・C-11・12グリッドで検出された国分期の住居跡である。平面プランは、長軸心線がN74°Eにつくられ、長径が5.42m、短径が4.01mの隅丸長方形である。この遺構は、南・東壁でH-39・45号の2住居跡を切り、北壁の壁高は28cmを測る。床面はほぼ水平で、北壁の西寄

り部分に、奥行85cm、焚口内径約40cmの石組かまどが構築されていた。石組かまどは、平石を側壁に左右3個ずつ立てて用い、中央に角石を立てて分焰柱とし、天井にも66×30cmの長方形の平石と、径51cmほどの円形の平石をのせていた。かまど跡の内部は、焼土層が厚く堆積し、その上から変形土器の破片が検出された。

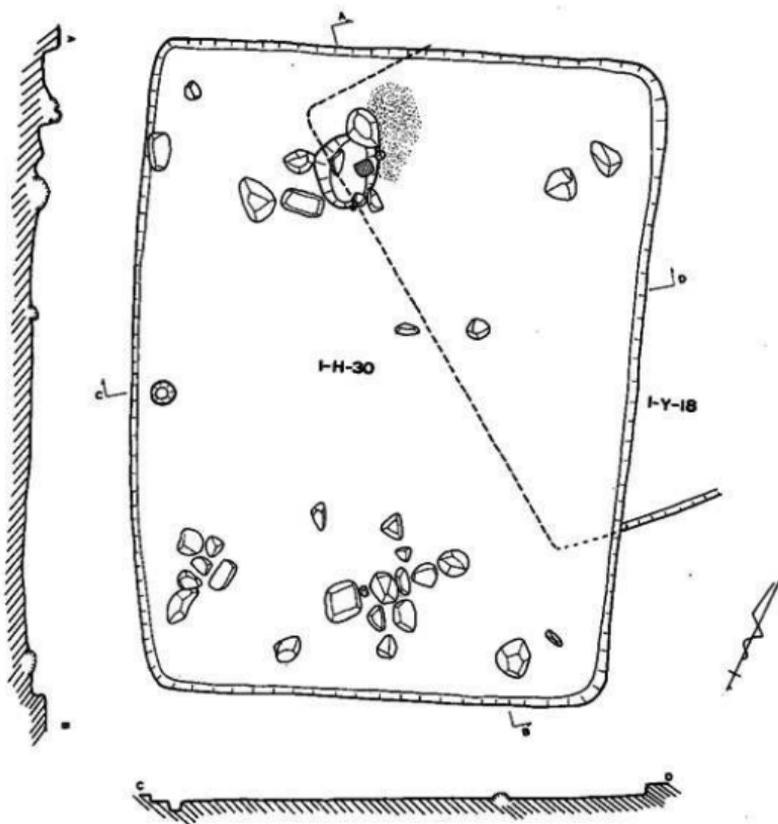


第44図 城の前遺跡Ⅰ地区遺構実測図(15) 1:60

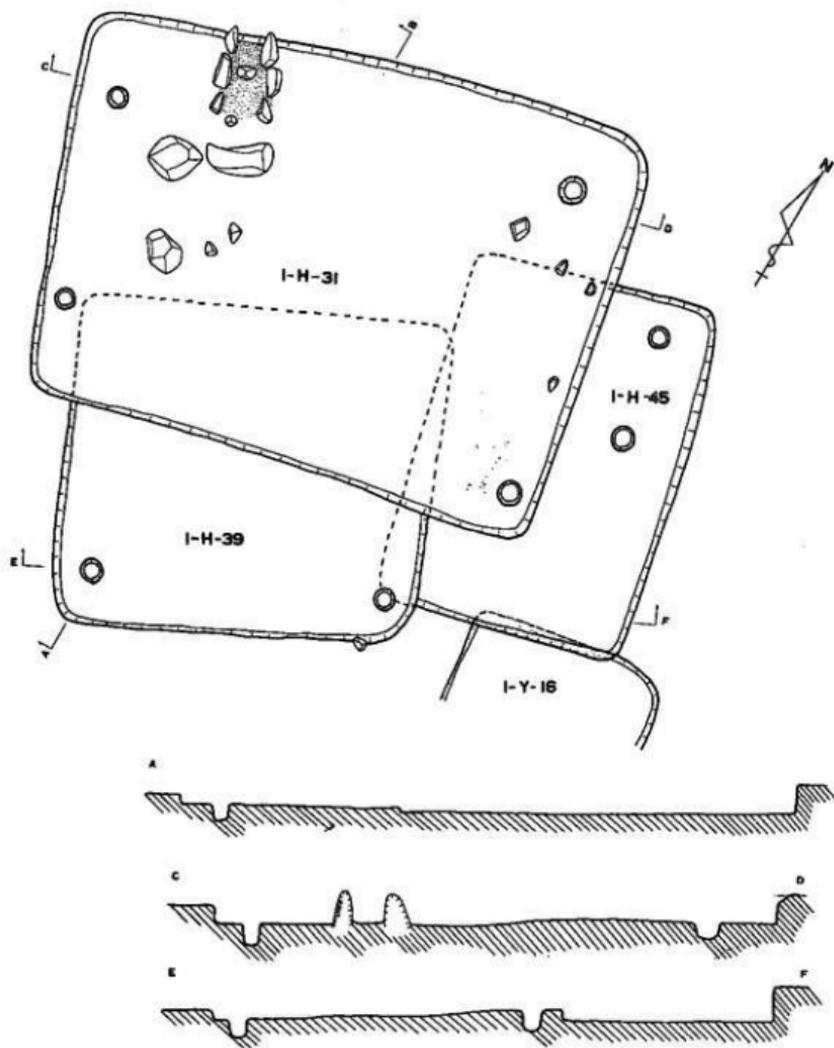
出土遺物は、大部分が破片であったが、その量はきわめて多く、土師器の完形品を含む坏形土器（第69図13～17）・ミニチアのような高坏形土器（第72図16）・鉢形土器（第74図12）および変形土器と壺形土器（第74図13～15・第75図15・16）、須恵器の壺形土器、細頸瓶の破片などが検出されている。

(32) H-32号住居跡（第48図）

この遺構は、B・C-10・11グリッドで検出された国分期の住居跡である。遺構の平面プランは、



第45図 城の前遺跡Ⅰ地区遺構実測図(16) 1:60



第46図 城の前遺跡Ⅰ地区遺構実測図(17) 1:60

東壁と南壁の大部分がH-31号およびH-41号住居跡によって切られているため明らかでないが、

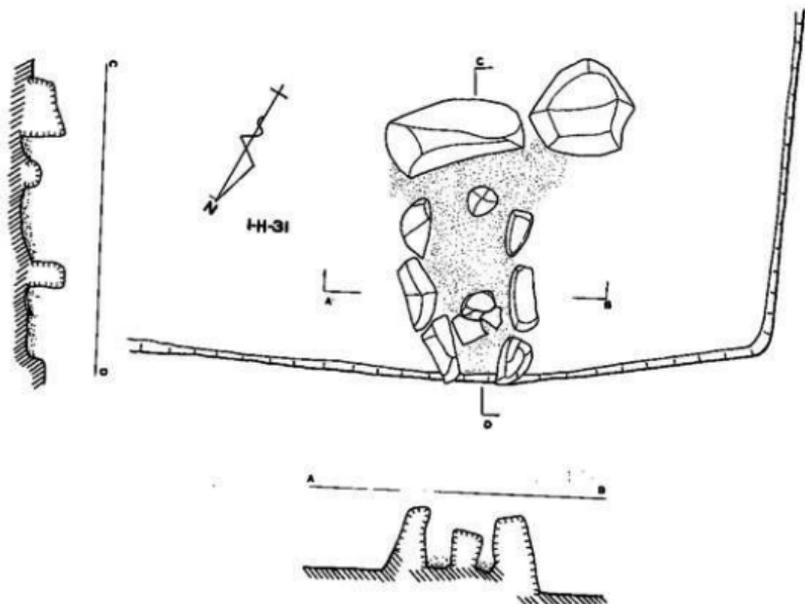
南北の径は4.28m、西壁沿いに2個の柱穴が東西隅に対象的に検出された。

出土物は、土師器の環形土器・変形土器・須恵器の環形土器および台付皿形土器、灰釉の台付腕形陶器（第77図12・14）などである。

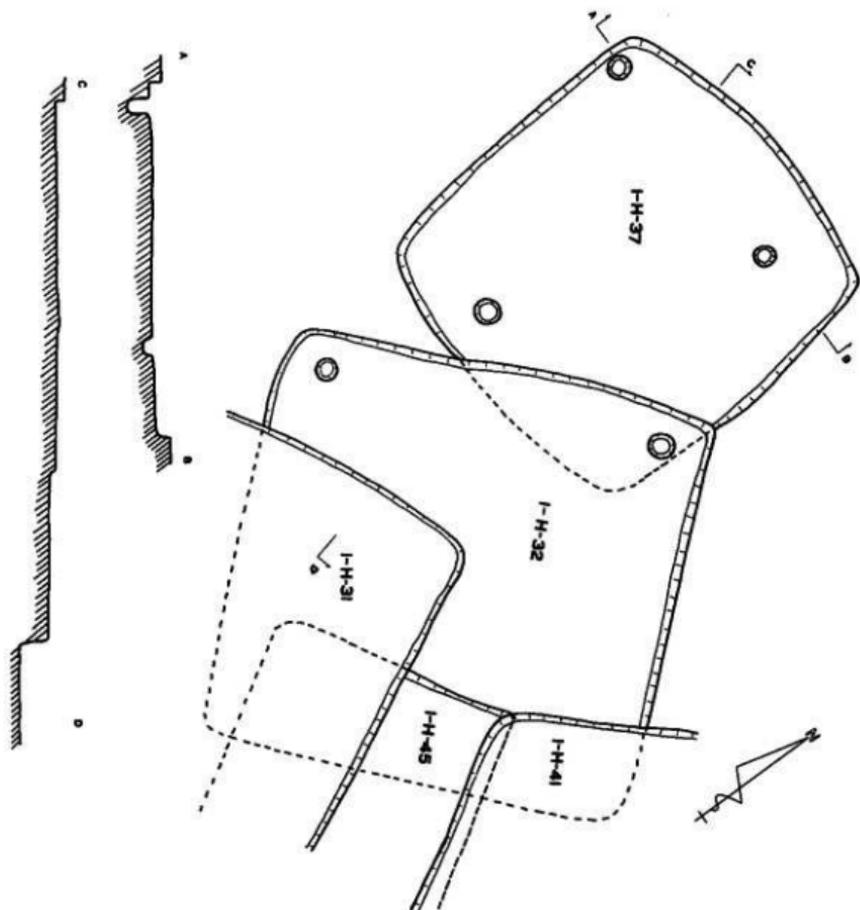
③ H-33号住居跡（第49図）

この遺構は、F-2グリッドを中心に検出された真間期の遺構であり、南壁寄りのほぼ中央部に、長径1.60m、最大幅1.10mのややゆがんだ楕円形のピットがあり、たたら跡の構造とよく似ているが、鉄滓などが全く検出されていないので、一応住居跡として分類した。しかしたたら跡の可能性が大きい。

遺構の平面プランは、長軸心線の方位がN68°Wにつくられ、長径が5.22m、短径が4.58mの隅丸長方形で、東壁の壁高が25cm、東西両壁に沿った中央寄りの不自然な位置に、径が45cm、深さ32



第47図 城の前遺跡I地区遺構実測図(③) 1:30



第48図 城の前遺跡Ⅰ地区遺構実測図(19) 1:60

cmほどの大きな柱穴状ピットが検出されている。たたら跡状のピットは、長軸心線の方位が $N4^{\circ}W$ につくられ、南側に礫が堆積し、西脇にかなりの焼土層が検出されている。

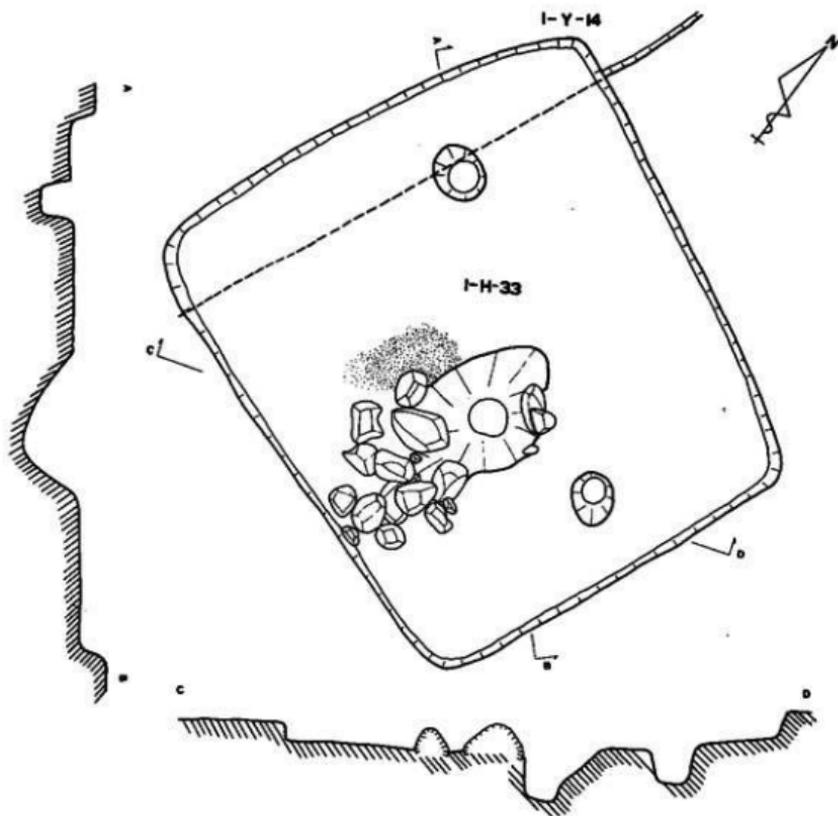
出土遺物は、土師器の完形の坏形土器(第70図1・2)をはじめ、変形土器の破片などが検出されている。

34 H-34号住居跡(第50図)

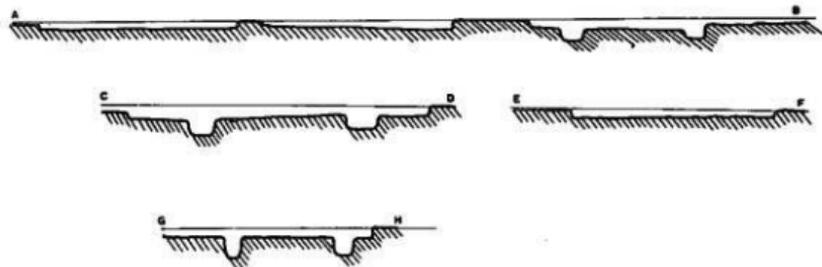
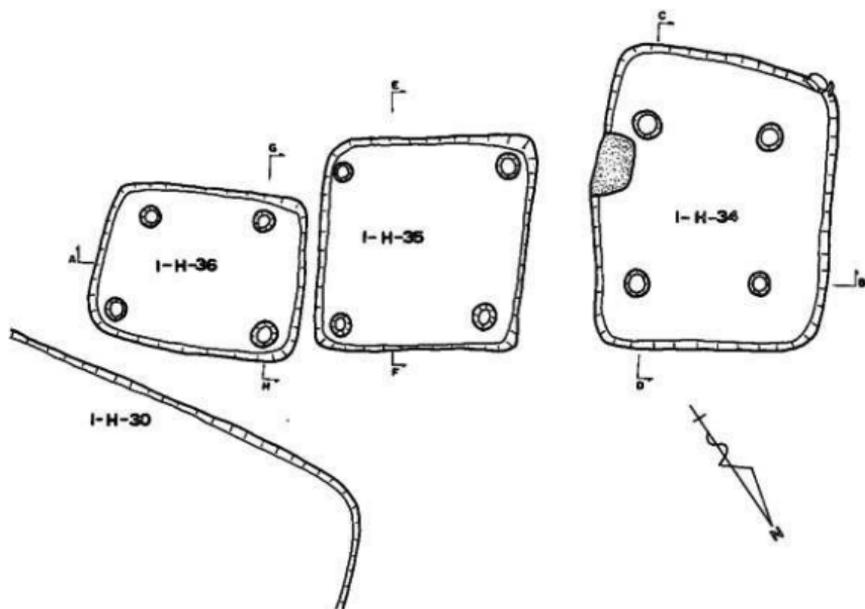
この遺構は、G・H-9グリッドを中心に検出された国分期の住居跡である。遺構の平面プラン

は、長軸心線の方位が $N32^{\circ}E$ につくられ、長径が2.92m、短径が2.32mのややゆがんだ隅丸長方形で、東壁の中央南寄りにかまど跡と推考される焼土層が検出された。床面はほぼ水平で、四隅の対称的位置に径26cm、深さ12cmほどの浅い柱穴状ピッドが検出された。

出土遺物は、土師器の変形土器と須恵器の坏形土器（第77図15・16）などであるが、いずれも破片で器形を復元できるものはない。



第49図 城の前遺跡 [地区遺構実測図] 1:60



第50図 城の前遺跡Ⅰ地区遺構実測図(2) 1:60

⑮ H-35号住居跡 (第50図)

この遺構は、H・I-9グリッドで検出された国分期の住居跡である。遺構の平面プランは、長軸心線の方位がN44°Eにつくられ、長径が2.08m、短径が2.01mのおよそ隅丸方形である。壁の上面は、耕作等によって削平され、壁の現高がおよそ9cm、床面の四隅に径24cm、深さ15cmの柱穴

状ビットが検出された。

出土遺物は、土師器の内面黒磨の坏形土器片が少量検出されている。

㉟ H-36号住居跡（第50図）

この遺構は、1-9グリッドで検出された国分期の住居跡である。遺構の平面プランは、長軸心線の方位がN52°Wにつくられ、長径が2.04m、短径が1.62mの隅丸長方形である。四隅には径約20cm、深さ20cm前後の柱穴状ビットが検出されている。

出土遺物は、土師器の坏形土器・台付坏形土器、須恵器の坏形土器、灰釉の台付坏形土器などであるが、いずれも破片で、器形を復元できるものはない。

㊱ H-37号住居跡（第48図）

この遺構は、A・B-10・11グリッドで検出された国分期の住居跡である。遺構の平面プランは、長軸心線の方位がN36°Wにつくられ、長径が3.65m、短径が3.54mのおよそ隅丸方形である。床面はほぼ水平で、壁高およそ12cmを測る。

出土遺物は、内面黒磨・糸切上げ底の坏形土器片などが検出されている。

㊲ H-38号住居跡（第51図）

この遺構は、B・C-9グリッドを中心に検出された国分期の住居跡である。遺構の平面プランは、長軸心線の方位がN50°Eにつくられ、長径が5.26m、短径が3.83mの隅丸長方形である。遺構の北西隅は、調査区外に続いているため精査できなかったが、他の3つのコーナーには、径28cm、深さ20cmほどの柱穴が検出され、北西隅寄りに径55cmの焼土層が検出された。

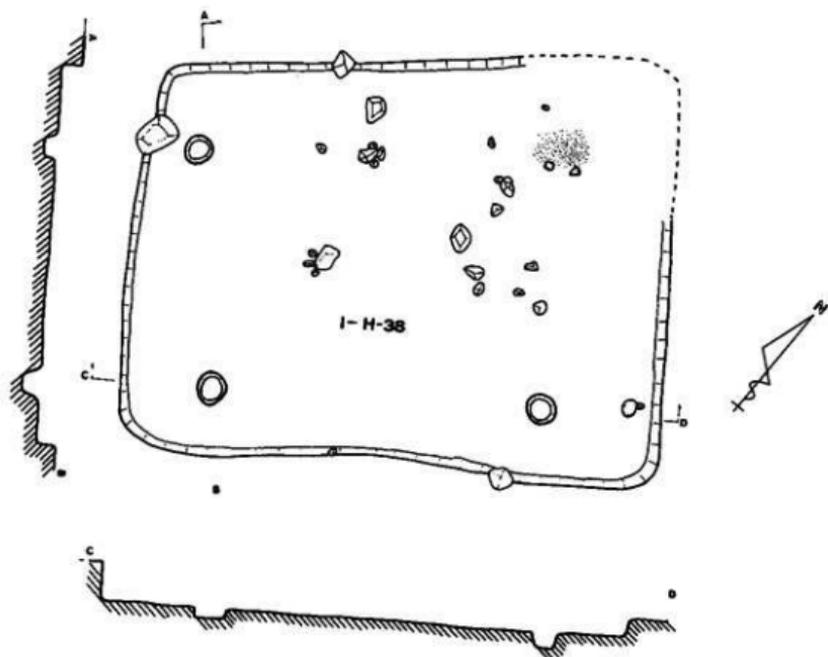
出土遺物は、土師器の坏形土器や変形土器の破片が少量検出されている。

㊳ H-39号住居跡（第46図）

この遺構は、B・C-12グリッドで検出された国分期の住居跡である。遺構の平面プランは、北半分がH-31号住居跡によって切られているため明らかでないが、東西径が3.60mで、長軸心線の方位がN38°Eにつくられているものと推考される。

床面は東側でH-45号住居跡の床上にはって水平につくり、南壁沿の東西隅に径22cm、深さ18cmの柱穴が検出された。

出土遺物は、土師器の坏形土器・高坏形土器の脚胴部（第72図）・変形土器および壺形土器（第75図）、須恵器の坏形土器の蓋（第77図17）・内面青海波文の変形土器（第78図10）などが検出されている。



第51図 城の前遺跡Ⅰ地区遺構実測図(2) 1:60

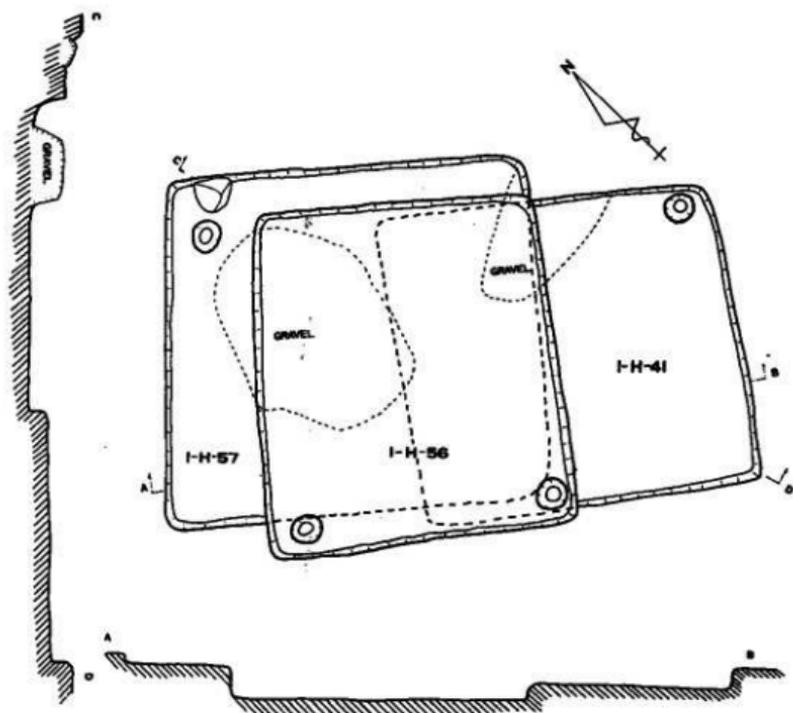
(40) H-40号住居跡 (第21図)

この遺構は、I・J-7グリッドで検出された国分期の住居跡である。遺構の平面プランは、長軸心線の方位がN24°Eにつくられ、長径が3.11m、短径が2.55mの隅丸長方形である。この遺構は、南側でY-18号住居跡と複合し、その部分の床をはってつくり、この南壁のやや東寄りに、径60cmほどの焼土層と石組の一部を検出した。

出土遺物は、土師器の内面黒磨・糸切り上げ底の環形土器(第70図3)、変形土器・壺形土器(第75図3・4)および鉄滓を少量検出している。しかし、遺構内には、たたら跡と思われるものの遺存がない。

(41) H-41号住居跡 (第52図)

この遺構は、S-10グリッドを中心に検出された真間期の住居跡である。遺構の平面プランは、



第52図 城の前遺跡 I 地区遺構実測図(2) 1:60

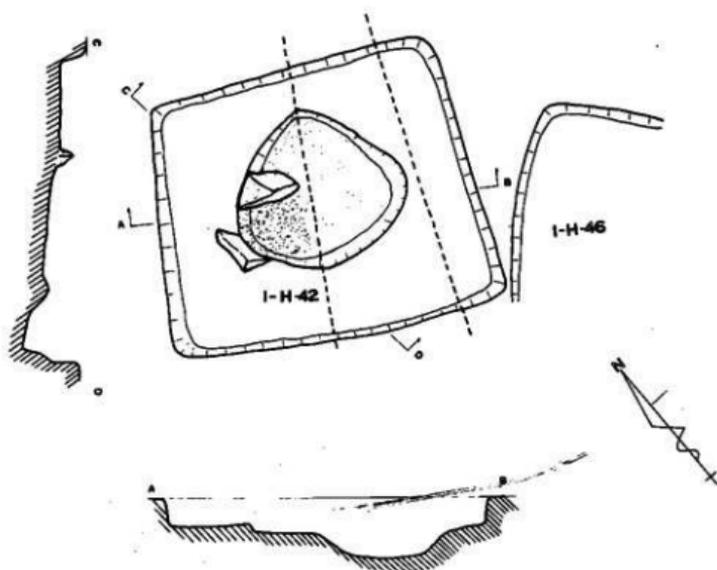
西側の部分がH-56号住居跡によって切られているため明らかなでないが、3.00m 前後の隅丸長方形プランと推考され、壁高は19cmを測る。

出土遺物は、土師器の坏形土器（第70図4・5）・高坏形土器の脚部（第73図1）および変形土器（第75図10）などである。

(42) H-42号遺構（第24・53）

この遺構は、C・D-9グリッドを中心に検出された国分期の遺構で、ほぼ中央にたたら跡と推考される楕円形の遺構と配石が認められ、内部から吹子の羽口片と相当量の鉄滓が検出された。

遺構の平面プランは、長軸心線の方位がN62°Wにつくられ、長径が3.10m、短径が2.61mの隅丸長方形である。たたら跡の平面プランは、長軸心線の方位がN86°W、長径（奥行き）が52m、



第53図 城の前遺跡Ⅰ地区遺構実測図② 1 : 60

最大幅が1.45mのややゆがんだ楕円形で、間口の左右に長目の角石が配されている。遺構の東側には、弥生後期箱清水Ⅱ期の環溝が南北に走り、この遺構の床はその上にはってつくられている。

出土遺物は、土師器の内面黒磨の坏形土器・高坏形土器、須恵器の台付坏形土器、および壺形土器などが検出されている。しかし、いずれも破片で器形を復元できるものはない。

④ H-43号住居跡（第22・24図）

この遺構は、C-10・11グリッドで検出された国分期の住居跡であるが、遺構の平面プランは、長軸心線の方位がN26°Wにつくられ、長径が3.56m、短径が2.25mの隅丸長方形で、四隅に径25cm、深さ18cmの柱穴状ピットがあり、北東隅に近い東壁に径70cmほどの焼土層が検出された。

出土遺物は、土師器の坏形土器・甕形土器および壺形土器（第75図5～7）、須恵器の甕形土器などである。

(44) H-44号住居跡 (第34図)

この遺構は、E・F-4グリッドで検出された国分期の遺構であり、西壁際に径1.57m、半径が87cm、最深部分の深さが15cmを測る半円形のピット、および数個の鉄滓を検出したが、他のたたら跡の構造とは異り、たたら跡とは断定し難い。床面にはかなりの礫が散在し、長軸心線の方がN44°E、長径が3.72m、短径が3.47mの隅丸長方形プランである。焼土層は、遺構の北壁中央部分と、東壁南端部分、および西壁南端部分の3個所で検出したが、前2者は、H-8号住居跡の石組かまど跡、あるいはH-16号遺構のたたら跡の一角にあたり、これらの焼土層がH-44号遺構に入り込んでいるものと思われる。壁高は60cmを測り、柱穴は北東隅を除く3隅から径約22cm、深さ18cmほどのやや小さいものが検出された。

出土遺物は、土師器の坏形土器・台付皿形土器(第71図9・10)・変形土器、須恵器の壺形土器、および灰釉の台付埴形土器などが検出されている。

(45) H-45号住居跡 (第46図)

この遺構は、C-11グリッドを中心に検出された国分期の住居跡である。遺構の平面プランは、西側の大部分をH-31号住居跡とH-39号住居跡によって切られているため明らかでないが、南北径が3.50m、長軸心線の方がN18°Wにつくられた隅丸長方形と推考される。床面は水平で、東壁沿いの北半部分に径23cm、深さ18cmほどの柱穴2個を検出し、壁高34cmを測る。

出土遺物は、土師器の坏形土器、須恵器の坏形土器底部(第77図19)および灰釉の台付埴形陶器(第77図18)などである。

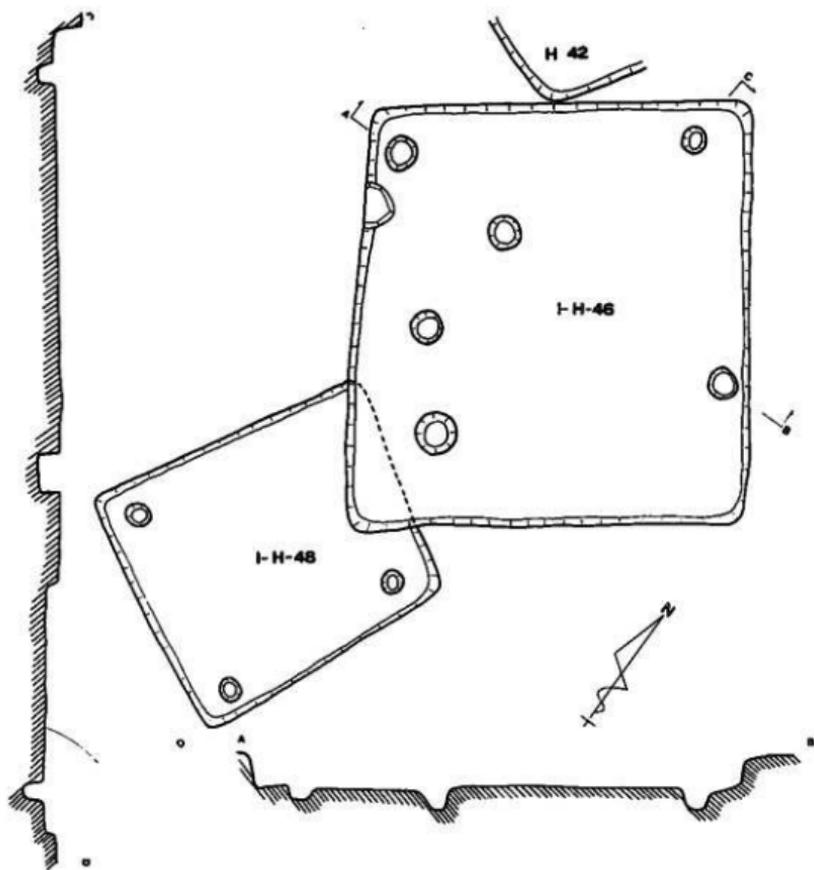
(46) H-46号住居跡 (第24・54図)

この遺構は、D・E-9・10グリッドで検出された鬼高期の住居跡である。遺構の平面プランは、長軸心線の方がN34°Wにつくられ、長径が4.04m、短径が3.81mの隅丸長方形である。床面はほぼ水平で、南東部分を弥生後期精溜水Ⅱ期の環溝の上にはり、柱穴状ピットは、径25~40cm、深さ20cmほどで、東西両壁に沿って5個、やや北西隅寄りの中央部分に1個の計6個が検出され、壁高は35cmを測る。

出土遺物は、土師器の坏形土器(第70図6・7)・高坏形土器の脚部(第73図2)・変形土器の口辺部(第75図9)、および灰釉の台付埴形土器の破片などが検出されている。

(47) H-47号住居跡 (第55図)

この遺構は、S-9グリッドを中心に検出された国分期の住居跡である。遺構の平面プランは、長軸心線の方がN1°Eにつくられ、長径が2.84m、短径が2.70mの隅丸長方形である。遺構は



第54図 城の前遺跡Ⅰ地区遺構実測図(25) 1:60

西壁部分でH-55号住居跡を切ってつくられているが、北壁から中央に向って大量の礫が流入し、床面の原形を壊している。

出土遺物は、土師器の坏形土器（第70図8）と変形土器の破片が少量検出されている。

(40) H-48号住居跡 (第24・54図)

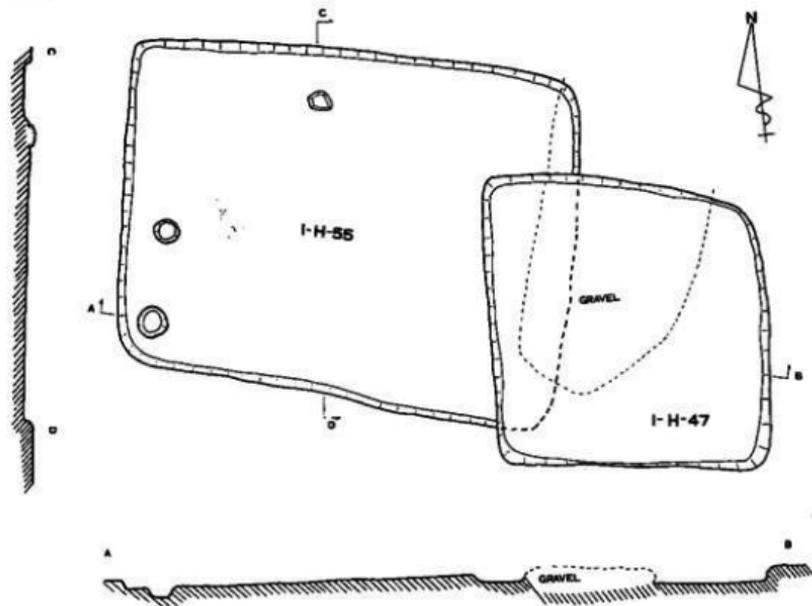
この遺構は、D・E-11・12グリッドで検出された鬼高期の住居跡であり、H-46号住居跡と複合して、北壁の大部分が切られている。遺構の平面プランは、長軸心線の方位が 20° Eにつくられ、長径が2.74m、短径が2.45mの隅丸長方形である。床面はほぼ水平で、北西隅を除く3隅に径20cm、深さ20cmほどの柱穴状ピットが検出され、壁高およそ10cmを測る。

出土遺物は、底部に柳葉状の線文のある坏形土器(第70図9)・高坏形土器の脚部(第73図3・4)などが検出されている。

(41) H-49号住居跡 (第56図)

この遺構は、K・L-9・10グリッドで検出された真間期の住居跡である。遺構の平面プランは、長軸心線の方位が $N56^{\circ} W$ につくられ、長径が3.40m、短径が3.00mの隅丸長方形である。この遺構は、H-50号住居跡と星形に複合し、これを切つてつくられ、壁高25cmを測り、床面西側に大小の礫が带状に散布している。

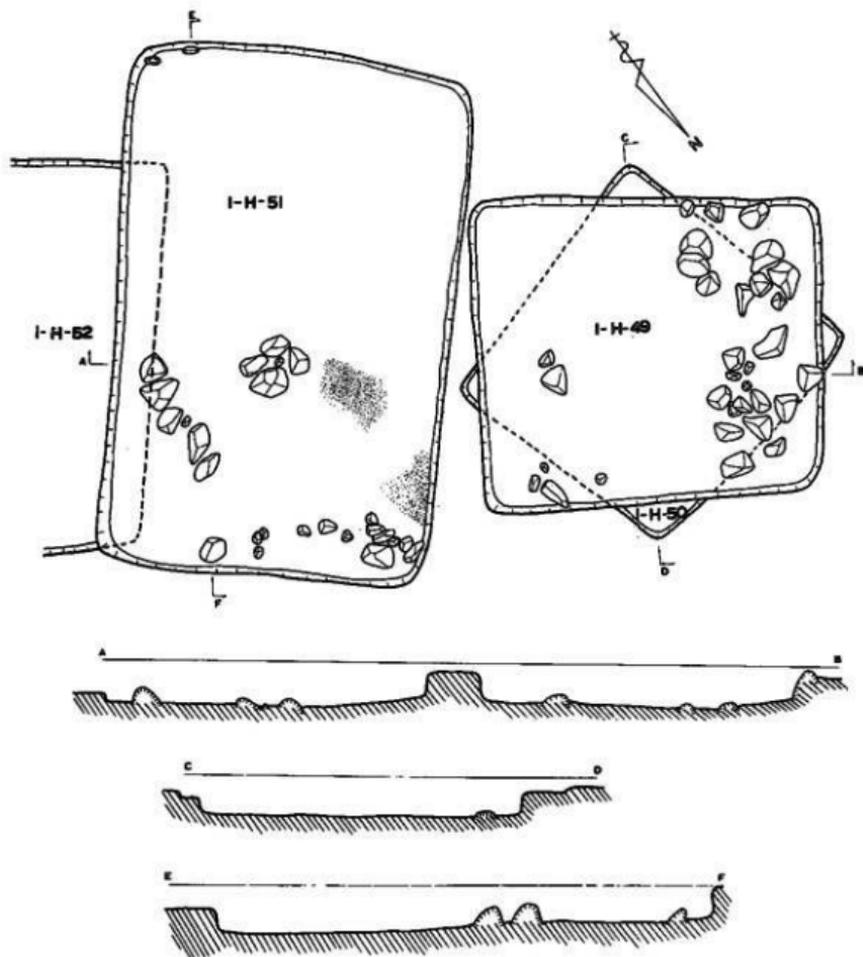
出土遺物は、ほぼ完形できる坏形土器(第70図10・11)が2点と、その他の小破片が検出されている。



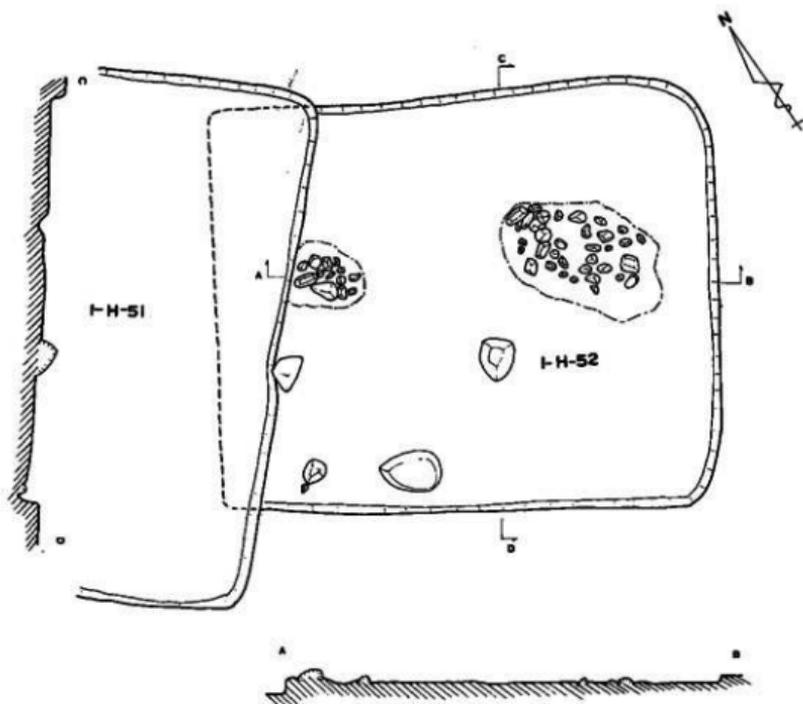
第55図 城の前遺跡Ⅰ地区遺構実測図(2) 1:60

50 H-50号住居跡 (第56図)

この遺構は、H-49号住居跡と星形に複合し、プランの大部分を失って、わずかに4隅を遺存している。平面プランは、N16°Wにつくられ、長径が2.75m、短径が2.48mの隅丸長方形である。時期は、出土遺物がほとんどなく、明らかでないが、真間期の住居跡によって切られ、付近から真間期の遺物のみ検出されているので、同期の遺構と考えて大過あるまい。



第56図 城の前遺跡I地区遺構実測図(27) 1:60



第57図 城の前遺跡I地区遺構実測図(2) 1:60

50 H-51号住居跡(第56図)

この遺構は、L-10グリッドを中心に検出された国分期の住居跡である。遺構の平面プランは、長軸心線がN42°Eにつくられ、長径が5.00m、短径が3.22mの隅丸長方形である。床面には、北壁寄りに礫が散在し、西壁の北隅寄りと、西壁寄りのほぼ中央に、かなりの焼土層が検出され、壁高およそ23cmを測る。

出土遺物は、土師器の坏形土器・台付坏形土器・高坏形土器・変形土器、須恵器の坏形土器(第77図20)などが検出されている。

52 H-52号住居跡(第56・57図)

この遺構は、M-10グリッドを中心に検出された国分期の住居跡である。平面プランは、西壁部

分がH-51号住居跡によって切られているため明らかでないが、南北径が4.31m、長軸心線の方位がN58°Wにつくられている隅丸長方形と考える。

出土遺物は、土師器の台付坑形土器（第71図18）、須恵器の坏形土器の底部（第77図21）などで出土量は微量である。

53 H-53号遺構（第14図）

この遺構は、G・H-3・4グリッドで検出された国分期の小竪穴状遺構である。平面プランは、長軸心線の方位が、N62°Eにつくられ、長径が2.53m、短径が1.50mの隅丸長方形である。壁上面は、耕作等によってかなり削平され、壁高およそ10cmを測り、北壁沿いの東寄りに径27cm、深さ18cmの柱穴状ピットを検出した。

出土遺物は、内面黒磨の坏形土器片などが微量検出されている。

54 H-54号住居跡（第58図）

この遺構は、R-12・13グリッドを中心に検出された国分期の住居跡である。遺構の平面プランは、長軸心線の方位がN45°Wにつくられ、長径が3.16m、短径が2.08mの隅丸長方形である。床面はほぼ水平で、南壁寄りに大小の礫が散在し、東壁のほぼ中央に、長径43cm、厚さ17cmほどの平石を立てて構築した石組かまど跡が検出された。

出土遺物は、土師器の坏形土器と須恵器の厚さ2.5cmを測る厚手の変形土器片（第78図14）などが検出されている。

55 H-55号住居跡（第55図）

この遺構は、R・S-9グリッドで検出された国分期の住居跡である。遺構の平面プランは、長軸心線の方位がN76°Wにつくられ、長径が4.41m、短径が3.43mの隅丸長方形である。床面はほぼ水平で、西壁沿いの南側に径25～30cm、深さ12cmほどの柱穴状ピットが検出された。

出土遺物は、土師器の坏形土器や変形土器片などであるが、いずれも小破片で、器形を復元できるものはない。

56 H-56号住居跡（第52図）

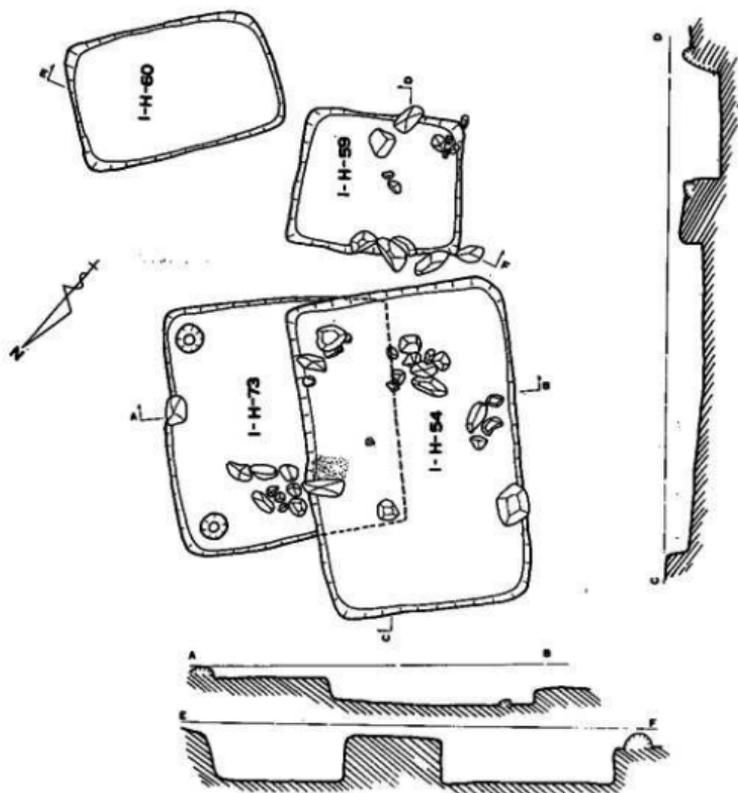
この遺構は、R・S-10グリッドで検出された国分期の住居跡である。平面プランは、長軸心線の方位がN32°Eにつくられ、長径が3.35m、短径が2.94mの隅丸長方形プランである。床面には北西と北東隅から厚く礫層が堆積し、西壁の壁高は30cmを測り、南壁沿いの東西両側に、径23cm、深さ20cmの2個の柱穴状ピットが検出された。

出土遺物は、土師器の変形土器、および須恵器の壺形土器の破片（第78図15）などが検出されて

いる。

(57) H-57号住居跡 (第52図)

この遺構は、R-10グリッドを中心に検出された鬼高期の住居跡である。平面プランは、遺構の大部分がH-56号住居跡によって切られているが、長軸心線の方位がN50° Wにつくられ、長径が3.50m、短径が3.43mの隅丸長方形である。壁高は削平されてわずかに8cmを測り、床面の北西隅



第58図 城の前遺跡 I地区遺構実測図(2) 1:60

に径31cm、深さ18cmの柱穴状ピット1個が検出された。

出土遺物は、坏形土器と変形土器の小破片が検出されている。

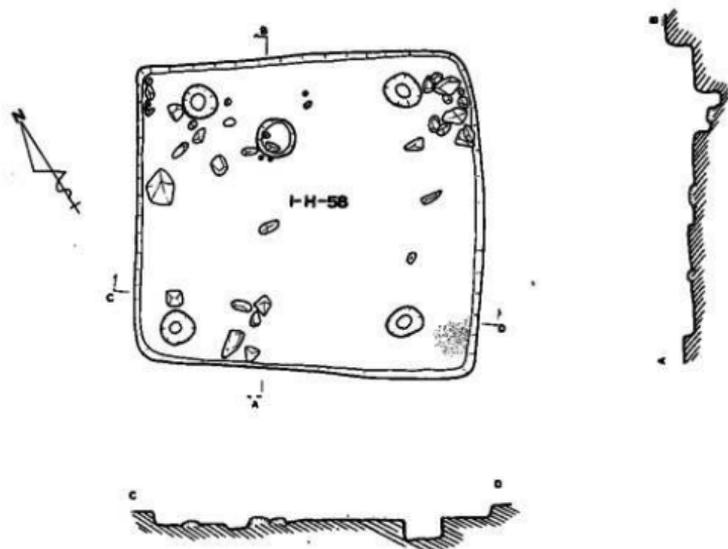
50 H-58号住居跡 (第59図)

この遺構は、R・S-11グリッドを中心に検出された真間期の住居跡である。平面プランは、長軸心線の方位が $N70^{\circ}W$ につくられ、長径が3.25m、短径が3.14mの隅丸長方形である。床面はほぼ水平で、4隅に径35cm、深さ20cmの柱穴状ピットが検出され、東壁の南端部分に径35cmほどの焼土層が検出された。

出土遺物は、内面黒磨の坏形土器(第70図12・13)や変形土器の破片が検出されている。

59 H-59号遺構 (第58図)

この遺構は、S-12・13グリッドで検出された国分期の小規模な堅穴遺構である。平面プランは、長軸心線の方位が $N52^{\circ}E$ につくられ、長径が1.65m、短径1.37mの隅丸長方形で、壁高45cmを測る。床面には、大小の礫が散在し、精査したが柱穴や焼土層は検出できなかった。また、出土遺物



第59図 城の前遺跡I地区遺構実測図30 1:60

も、ほとんど小破片で、器形を復元できるものはなく、国分期によくみられる小竪穴遺構の一つと考える。

60 H-60号遺構 (第58図)

この遺構は、S-12グリッドで検出された国分期の小竪穴状遺構である。遺構の平面プランは、長軸心線の方位がN33°Eにつくられ、長径が2.50m、短径が1.28mの隅丸長方形で、壁高45cmを測る隅丸長方形の竪穴状遺構である。床面は黄茶褐色の粘土層を水平に削ってつくっているが、柱穴のビットは検出されなかった。また、出土遺物もほとんど小破片で、器形を復元できるものはない。

61 H-61号住居跡 (第33図)

この遺構は、F-7グリッドを中心に検出された鬼高期の住居跡である。遺構の平面プランは、大部分がH-7号住居跡によって切られ、南東の一隅を残すのみで、判然としない。壁高15cmを測り、南東隅に径30cm、深さ25cmの柱穴が検出された。

出土遺物は、坏形土器の小破片のみで、器形を復元できるものはない。

62 H-62号住居跡 (第33図)

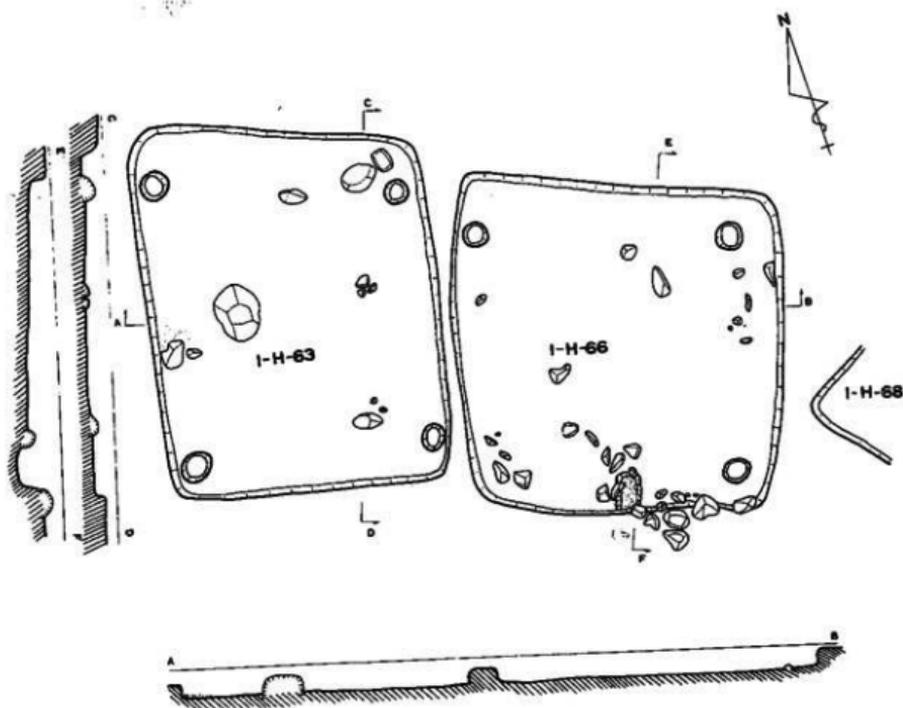
この遺構は、F-6・7グリッドで検出された国分期の住居跡で、東壁部分がH-19号住居跡とH-22号住居跡によって切られている。平面プランは明らかでないが、南北径が2.12mで、長軸心線の方位がN20°Wにつくられた隅丸長方形と考える。床面はほぼ水平で、西壁沿いの南北両隅寄りに、径28cm、深さ20cmの柱穴状ビットが2個検出されている。また、H-19号住居跡の南壁端に検出された焼土層は、この遺構に関係するものであろう。

出土遺物は、土師器の坏形土器(第70図14・15)・須恵器の坏形土器、および灰釉の台付埴形陶器などが検出されている。

63 H-63号住居跡 (第60図)

この遺構は、G・H-11・12グリッドで検出された国分期の住居跡である。平面プランは、長軸心線の方位がN12°Eにつくられ、長径が3.62m、短径が2.85mの隅丸長方形である。床面はほぼ水平で、4隅に径27~35cm、深さ20cmほどの柱穴状ビットが検出され、壁高15cmを測る。

出土遺物は、土師器の坏形土器・埴形土器・壺形土器(第75図11)、および須恵器の壺形土器(第78図16)および小型の埴形土器(第77図22)などが検出されている。

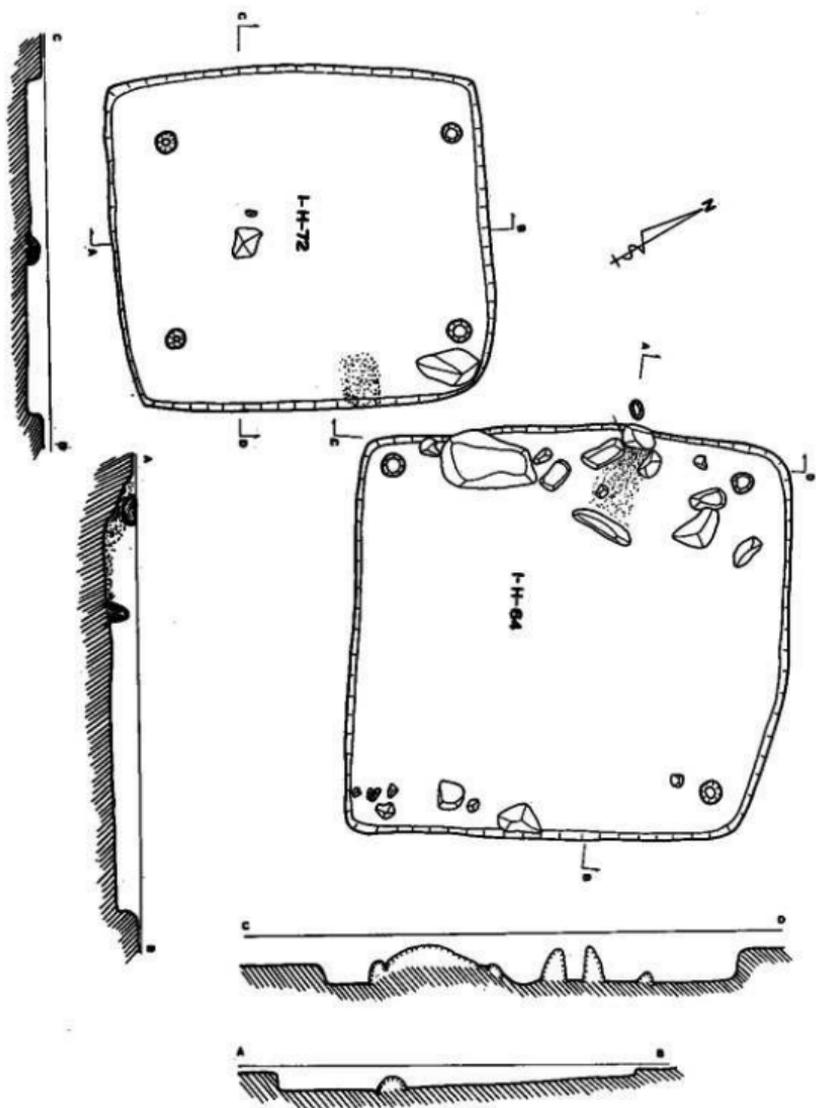


第60図 城の前遺跡I地区遺構実測図(3) 1:60

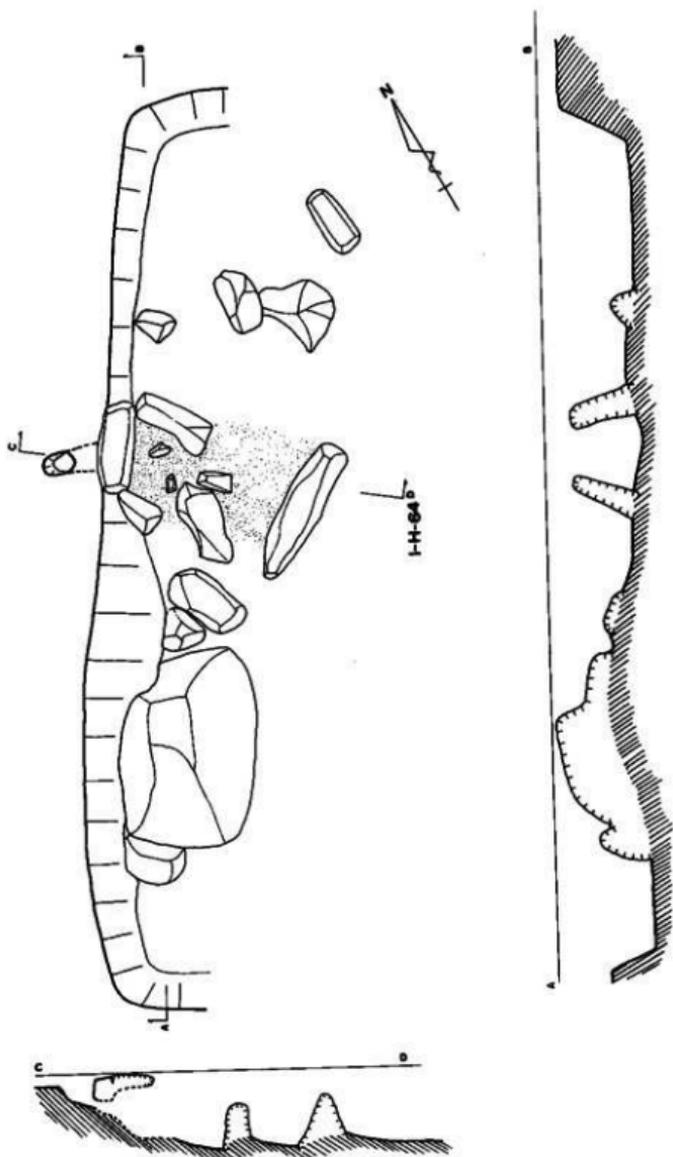
64 H-64号住居跡 (第61・62図)

この遺構は、F・G-12グリッドで検出された国分期の住居跡である。平面プランは、長軸心線の方位がN30°Eにつくられ、長径が4.23m、短径が4.04mの隅丸長方形である。床面の南東隅を除く3隅からは、径23cm、深さ20cmほどの柱穴状ピット3個が検出され、西壁の中央やや北寄りから規模の大きい石組かまどが検出された。石組かまどは、かなり崩壊しているが、奥行きがおよそ70cm、焚口内径が35~40cmぐらい、側壁に長さ40cm、厚さ17cm、幅30~35cmほどの角形の平石を立てて用い、奥壁から54cmほどのかまどの中央部に6×16cm、長さ25cmほどの角石を立てて分焰柱としている(図版15)。かまど跡の前には、長さ71cm、厚さ20cm、高さ30cmほどの大石が置かれ、焼土層は奥壁からこの石の際まで、奥行き約1m、幅55cmほどにわたって分布し、奥壁から外側に向けて、径10cmの煙道が通じていた。

出土遺物は、土師器の環形土器(第70図16)・変形土器(第75図12・13)・台付環形土器、灰釉の台付壙形土器(第77図28)などが検出されている。



第61図 城の前遺跡Ⅰ地区遺構実測図(32) 1:60

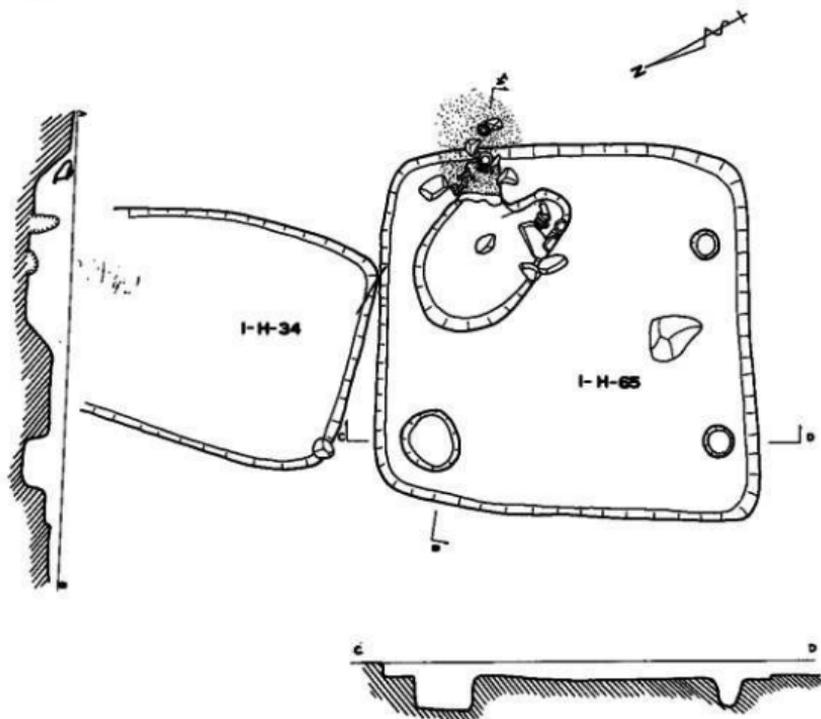


第62図 城の前遺跡I地区遺構実測図(3) 1:30

63 H-65号住居跡 (第63・64図)

この遺構は、G・H-10グリッドを中心に検出された国分期の住居跡である。遺構の平面プランは、長軸心線の方位がN60°Wにつくられ、長径が3.57m、短径が3.51mの隅丸方形プランである。床面はほぼ水平で、南東部に長径が1.65m、短径が1.12m、長軸心線の方位がN20°W、深さが25cmほどの楕円形のピットがありそこから東壁の北端部に奥行き1.30m、最大幅63cmのかまどが検出された。かまど跡の焚口には、長さ45cm、厚さ18cm、幅30cmほどの平石を立て、煙道は東壁の外に開口していた(図16版)。今回の調査で検出された遺構の中には、このような構造をもつかまど跡はなく、ピットとかまどがどのような関係にあつたのか明らかでない。かまど跡の壁面には、3個の台付坏形土器が検出され、焼土層は遺構の周辺にまで厚く分布していた。

出土遺物は、かまど跡から検出された台付坏形土器(第71図11)と変形土器の小破片などである。

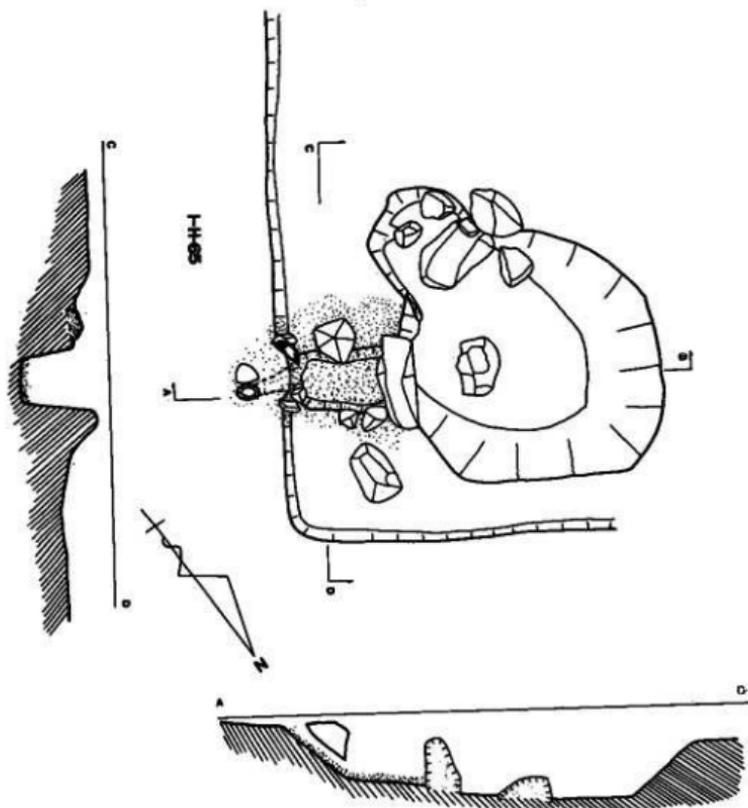


第63図 城の前遺跡I地町実測図(94) 1:60

66 H-66号住居跡 (第60図)

この遺構は、H-11・12グリッドで検出された国分期の住居跡である。平面プランは、長軸心線の方位がN48°Wにつくられ、長径が3.23m、短径が3.20mの隅丸方形である。床面には、南壁と東壁沿いに、小さな碟が散在し、南西隅を除く3隅に径26cm、深さ18cmほどの柱穴状ピットが検出された。また、南壁のほぼ中央に奥行き40cm、幅25cm、深さ15cmほどの小ピットがあり、中に灰白色の砂が詰まっていた。この砂の用途は明らかでないが、たたら跡の工房に使うものではなかったかと思われる。

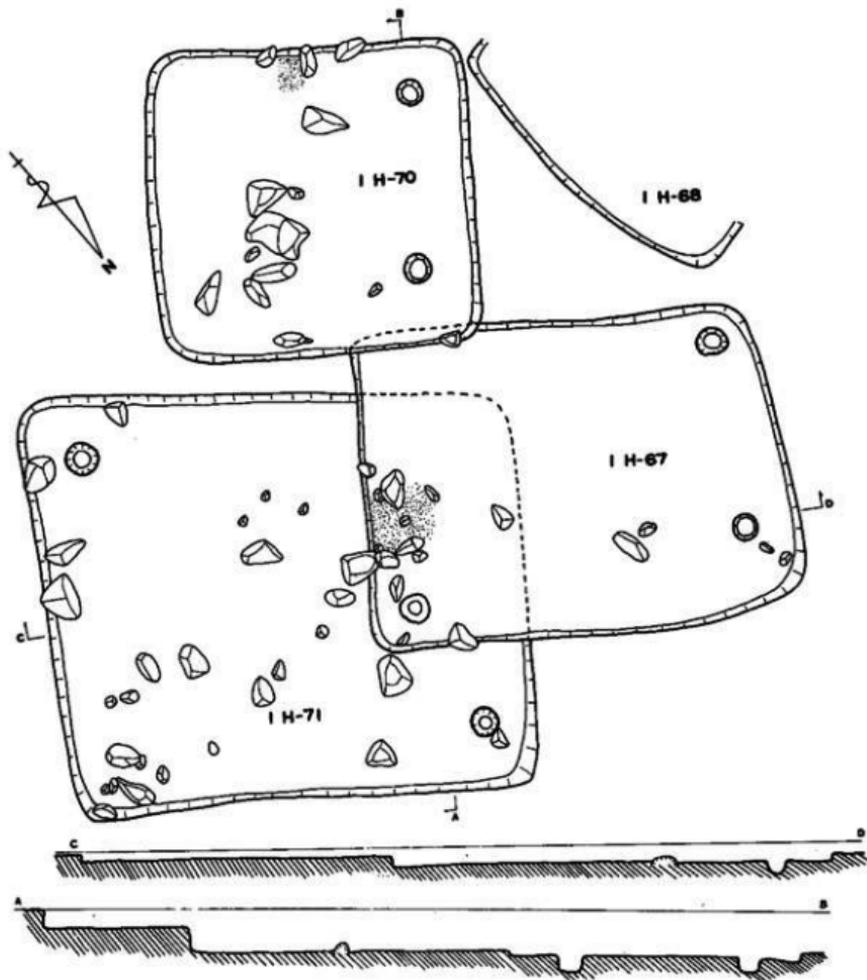
出土遺物は、土師器の環形土器 (第70図17・18)・高環形土器、および須恵器の環形土器などが検出されている。



第64図 城の前遺跡I地区遺構実測図(3) 1:30

67 H-67号住居跡 (65図)

この遺構は、1・J-10・11グリッドで検出された真間期の住居跡である。平面プランは、長軸線の方角がN48° Wにつくられ、長径が4・10m、短径が3・10mの隅丸長方形であり、床面はほぼ水平で、西壁沿いに径25~30cm、深さ15cmほどの柱穴状ピットが検出されて、



第65図 城の前遺跡I地区遺構実測図36 1:60

壁のほぼ中央に石組かまどが検出された。かまどの石組は、すでに崩壊しているが、平石を立てて用い、奥行きがおよそ60cm、焚口の内径が40cmほどと推考される。

出土遺物は、土師器の環形土器と変形土器の小破片で、器形を完形できるものはない。

68 H-68号住居跡(第66図)

この遺構は、1-11・12グリッドで検出された真間期の住居跡である。平面プランは、長軸心線の方位がN74°Eにつくられ、長径が3.24m・短径が2.78mの隅丸長方形である。床面はほぼ水平で、4隅に径20~25cm、深さ20cmほどの柱穴状ピットが検出され、壁高およそ12cm、上部がかなり農耕時に削平されている。かまど跡と推定される焼土層が、北壁の西寄りに検出され、奥行が65cm、幅およそ40cmを測る。

出土遺物は、土師器の環形土器、変形土器・および須恵器の環形土器などであるが、いずれも小破片である。

69 H-69号住居跡(66図)

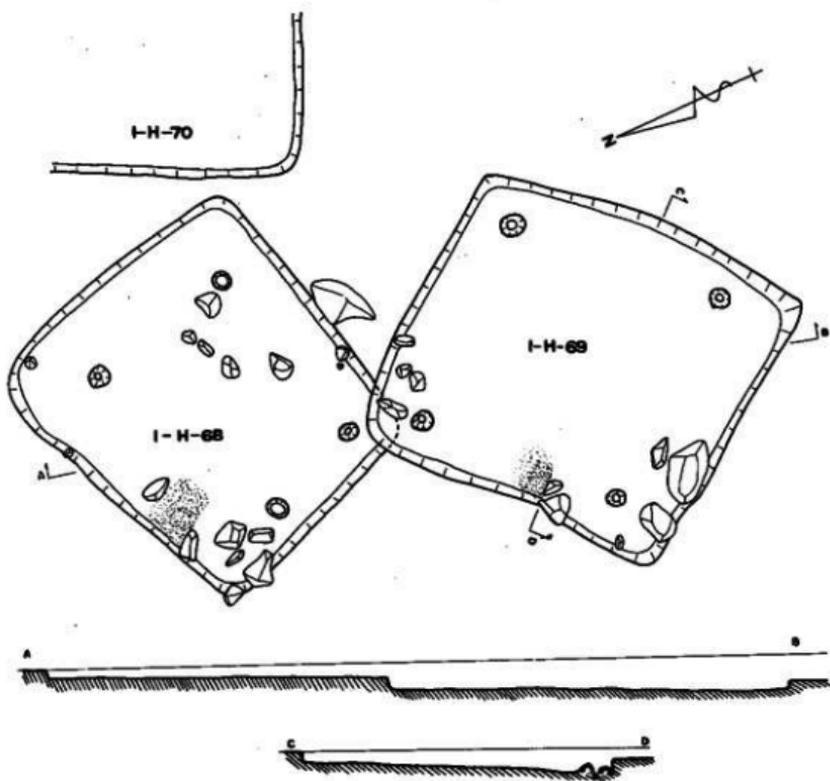
この遺構は1-G-12・13グリッドで検出された国分期の住居跡である。平面プランは、長軸心線の方位がN42°Eにつくられ、長径が3.35m、短径が3.04mの隅丸長方形で、H-68号住居跡と複合し、その東南隅を切っている。かまど跡は、すでに崩壊していたが、焼土層が奥行き53cm、幅35cmほどにわたって検出され、壁高12cmを測る。しかし壁の上面は、農耕時にかなり削平されており、特に西壁部分の削平が著しい。柱穴状ピットは、床面のおよそ4隅に検出され、径18cm~25cm、深さ22cmを測る。

出土遺物は、いずれも小破片であるが、内面黒磨の土師器の環形土器片などが少量検出されている。

70 H-70号住居跡(第65図)

この遺構は、J-11グリッドで検出された国分期の住居跡である。平面プランは、長軸心線の方位がN50°Wにつくられ、長径が3.15m、短径が3.00mの隅丸方形に近い長方形である。壁高はわずかに10cmを測り、南壁のほぼ中央に、石組を伴うかまど跡が検出され、焼土層の範囲は、奥行が約43cm、幅が30cmほどである。柱穴状ピットは精査したが、西壁に沿った南北に2個を検出したのみである。床面には、ローム層に食い込んで、径50cmにもおよぶ大石が散らしていた。

出土遺物は、土師器の環形土器片などが微量検出されている。



第66図 城の前遺跡I地区遺構実測図切 1:60

⑦ H-71号住居跡 (第65図)

この遺構は、J・K-10・11グリッドで検出された鬼高期の住居跡である。遺構の平面プランは、長軸心線の方位がN54°Wにつくられ、長径が4.57m、短径が3.93mの隅丸長方形プランである。遺構は南西隅をH-67号住居跡によって切られているが、北壁の壁高はおよそ18cmを測り、北西隅に径33cm、深さ20cmほどの柱穴状ピットが検出された。

出土遺物は、土師器の坏形土器、埴形土器、および須恵器の坏形土器などが検出されている。

72 H-72号住居跡 (第61図)

この遺構は、E・F-12・13グリッドで検出された国分期の住居跡である。平面プランは、長軸心線の方位がN29°Eにつくられ、長径が3.66m、短径が3.33mの隅丸長方形である。床面はほぼ水平で、4隅に径20~24cm、深さ18cmほどの柱穴状ピットが検出され、壁高17cmを測り、東壁のやや北寄りに、奥行50cm、幅35cmの焼土層が検出された。

出土遺物は、内面黒磨の不形土器片などが少量検出されている。

73 H-73号住居跡 (第58図)

この遺構は、R-12グリッドを中心に検出された国分期の住居跡である。平面プランは、南側のおよそ半分がH-54号住居跡によつて切られているため明らかでないが、東西径が2.43mの隅丸方形と推考される。壁高はおよそ13cmを測り、北壁に沿つて径27cm、深さ23cmの柱穴が検出された。

出土遺物は、土師器の坏形土器の糸切り上げ底の底部、および須恵器の坏形土器片などが検出されている。

74 D-1号土葦跡 (第10図)

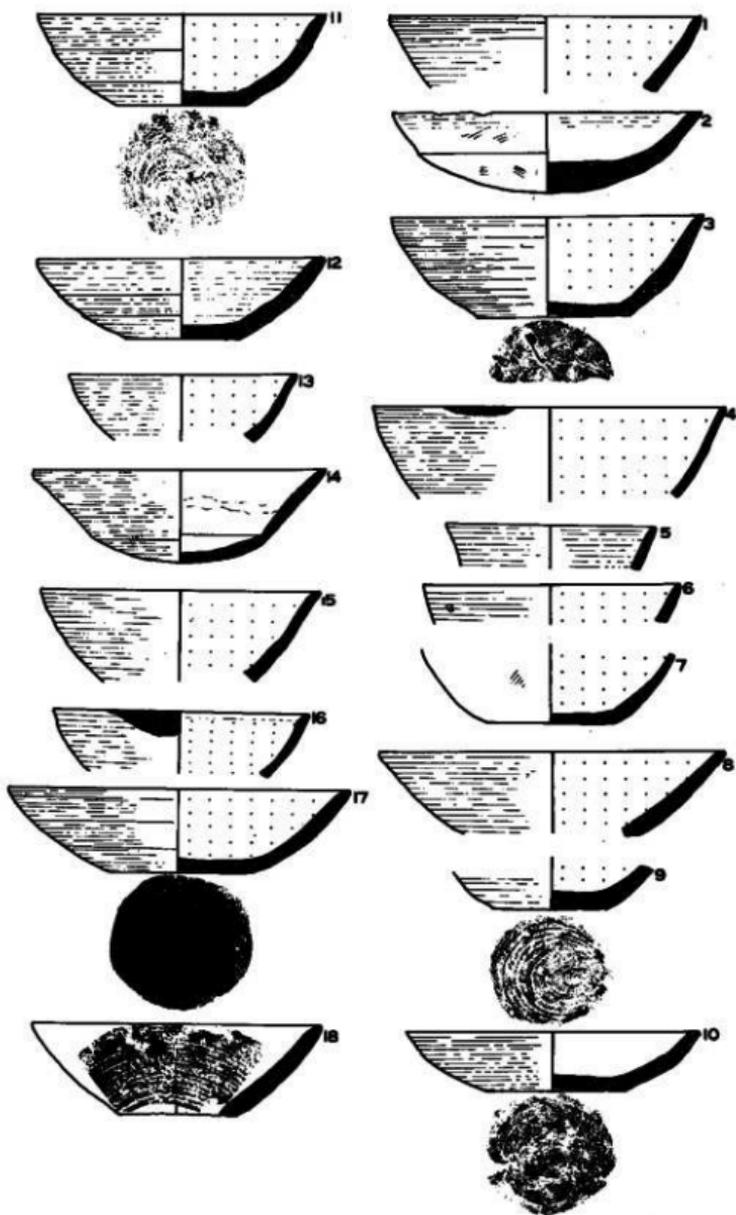
この遺構は、G-3グリッドで検出された鬼高期の土葦跡である。平面プランは、長軸心の方位がN30°Wにつくられ、長径が1.54m、短径が94cmの楕円形である。ほぼ中央と東壁寄りに柱穴状のピットがあり、西壁際に菱形土器の口辺部が検出された。

D 古墳時代と歴史時代の出土遺物

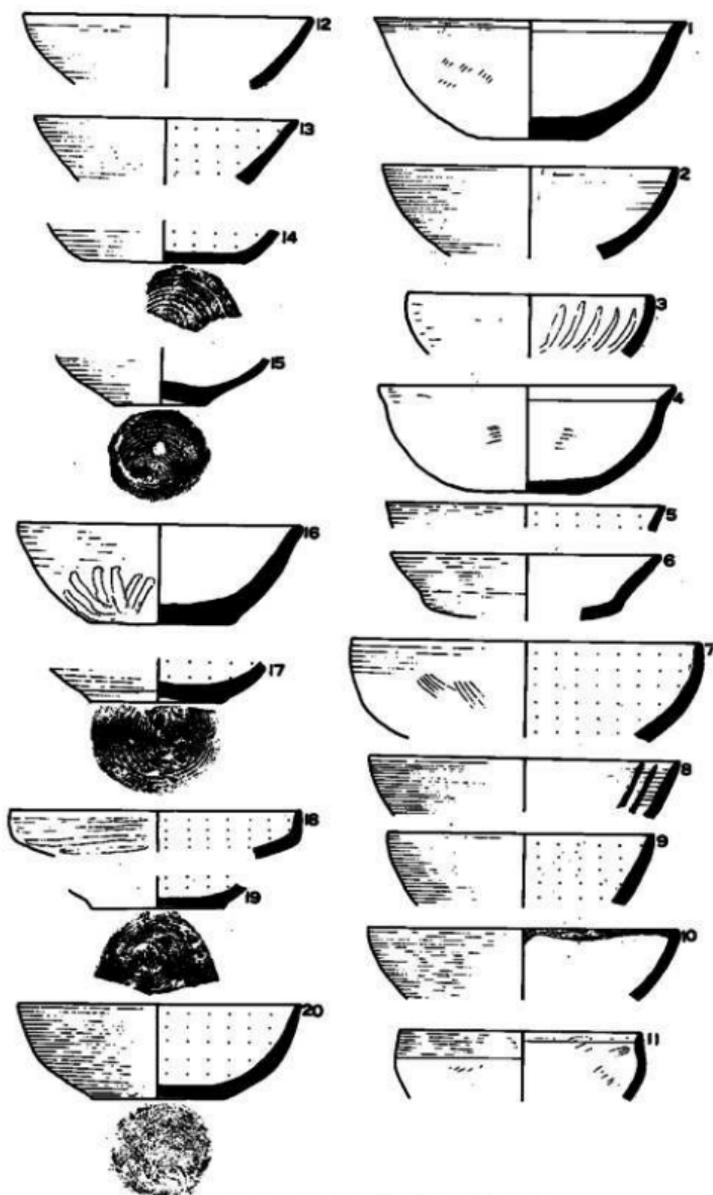
a 土師器 (第67~76図)

I地区から検出された土師器は、和泉・鬼高・真間・国分の各期にわたり坏形土器・台付皿形土器・台付坏形土器・鉢形土器・高坏形土器・菱形土器・壺形土器などである。次の各項で各器形の土器を概観し、略述することにした。

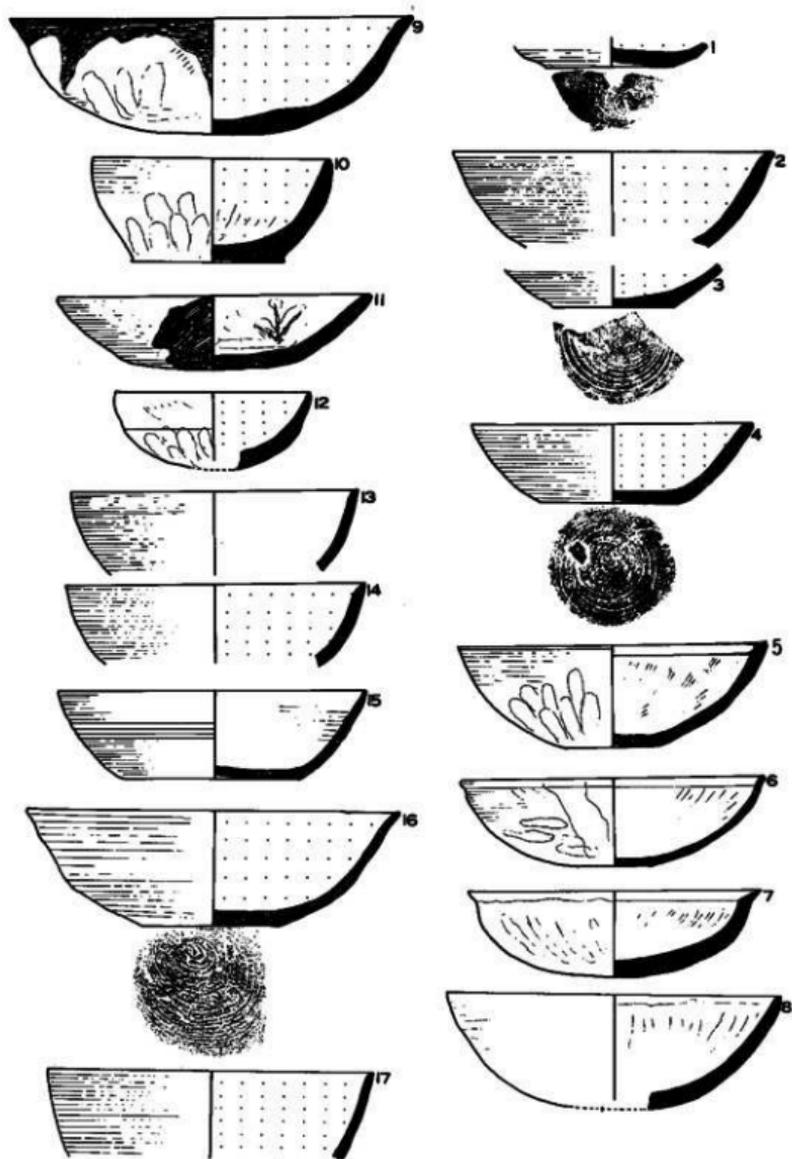
(1) 坏形土器 (第67~70)



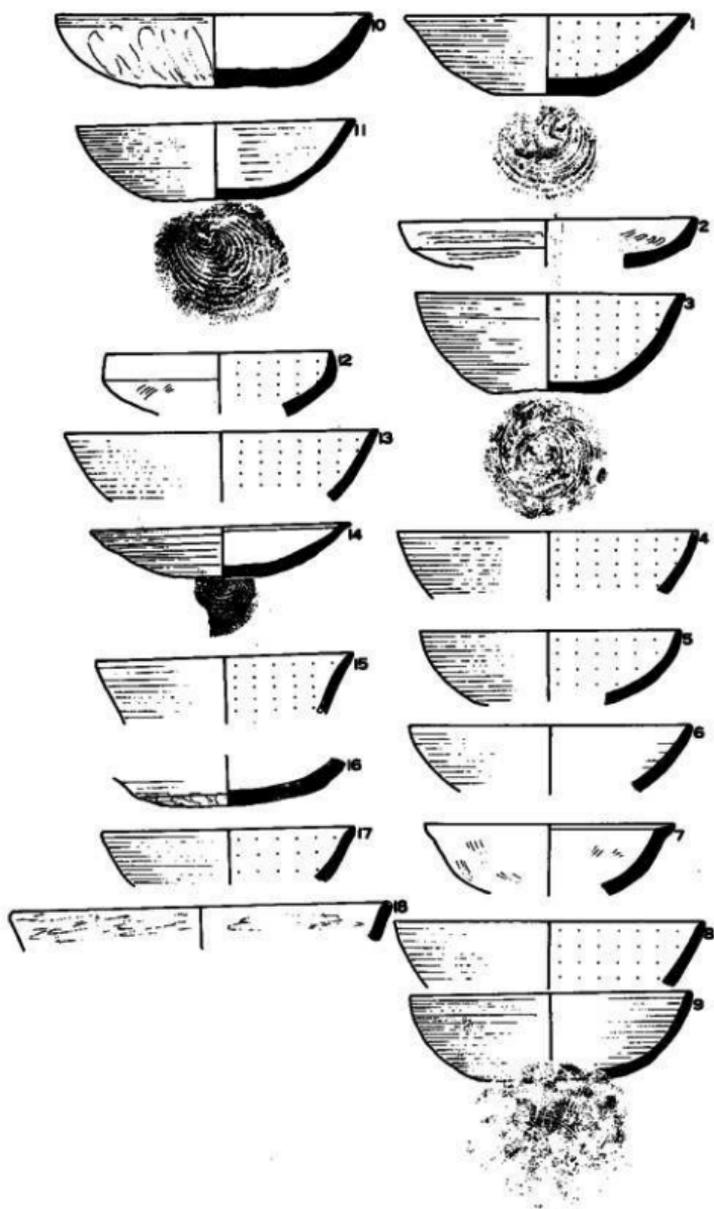
第67図 城の前遺跡Ⅰ地区出土遺物（土師器）実測図(1) 1 : 3



第68図 城の前遺跡Ⅰ地区出土遺物(土師器)実測図(2) 1:3



第69図 城の前遺跡I地区出土遺物(土師器)実測図(3) 1:3



第70図 城の前遺跡I地区出土遺物(土師器)実測図(4) 1:3

この器形の土器は、鬼高・真間・園分の各期のものが検出されている。本項では、説明を簡潔にするため、器形と手法を類型化し、口辺部の器形は、外反りするものをⅠ、直斜状のものをⅡ、内弯するものをⅢに分類し、内面黒磨を A、この手法によらないものを B、底部が糸切りによるものを a、ヘラ工具による平底形を b、丸底形を c に分類して説明し、さらに器形の細部については若干の補説をすることにした。

(イ) 鬼高式土器 (第68~70図)

整理番号	類型	口径 (A)	器高 (B)	底部径 (C)	$\frac{A}{B}$	$\frac{C}{B}$	$\frac{A}{C}$	色調	遺構番号	挿図番号
1	I-B-b	15.1	5.7	5.3	2.64	0.89	2.84	こげ茶色	H-9	68-1
2	I-B-b	14.3	5.2	5.2	2.75	1.0	2.75	暗茶色	H-10	68-4
3	I-B-b	14.7	4.4	3.8	3.34	0.86	3.86	淡茶色	H-25	69-6
4	I-B-b	12.7	—	—	—	—	—	橙 色	H-46	70-7
5	I-B-c	14.2	4.1	—	3.46	—	—	赤茶色	H-25	69-7
6	II-B-c	15.1	3.7	—	4.08	—	—	赤褐色	H-30	69-11
7	III-B	14.4	—	—	—	—	—	淡赤茶色	H-9	68-2
8	III-B	11.4	—	—	—	—	—	濃茶色	H-9	68-3
9	III-B	11.6	—	—	—	—	—	暗茶色	H-17	68-11
10	III-B	14.4	—	—	—	—	—	茶褐色	H-46	70-6
11	III-B-b	15.1	5.0	4.5	3.02	0.9	3.35	淡茶色	H-25	69-5
12	III-B-b	14.4	5.0	5.3	2.88	1.06	2.71	淡茶色	H-48	70-9
13	III-B-c	16.2	5.6	—	2.89	—	—	橙 色	H-25	69-8
14	III-B-c	9.6	3.7	—	2.59	—	—	暗褐色	H-30	69-12

上表は、器形と手法を類型化し、注記の計測値、および比をまとめたものである。

口縁が外反りする器形は、口縁端が嘴状を呈し、頸部外面では弱い「く」の字形を描き、内面では稜角をつくり、胴部が丸く張り、下胴でだいに縮約して、平底の底部に続いている(6)。

口辺部が内弯する器形は、口縁端が鈍く尖り、胴部が緩く張るもの(7・12・13)、口縁端が丸く、やや立ち気味に胴部で張るもの(8)、口縁が嘴状で、内面に稜角をつくり、立ち気味に胴部で張るもの(9)、および胴部で緩く張り、急速に縮約するもの(11)などがある。

器面は、概してヘラ磨き調整しているものが多い。また、第70図-9(12)の底部は、ヘラで整形した後、ハケ状の工具で調整しているが、そのほぼ中央に径3cm、最大幅7mmのヘラ書きさ

れた柳葉状の沈線文様がある。また、第69図12は、丸底で半球形に似た器形をもち、器面はヘラ磨きにより調整し、内面は黒褐色を呈している。

この時期の環形土器は、例数も少ないが、例えば同一遺構（H-25）から検出されたものも（第69図5～8）、かなりの器形上の差異を示し、ほとんどが類似性をもたない。

(□) 真間式土器（第67・70図）

この時期の環形土器は、概しい器高の低いものが多く、皿形土器に近い器形をもっている。しかし、出土資料の大部分は、小破片で検出され、器形を復元できるものが少ない。

完形、および一部復元された資料によれば、口辺部の器形は、外反りと内弯の2器形で、丸底が2例、大部分は内面黒磨の手法によっている。

整理番号	類型	口径 (A)	器高 (B)	底部径 (C)	$\frac{A}{B}$	$\frac{C}{B}$	$\frac{A}{C}$	色調	遺構 番号	挿図 番号
1	I-A-a	15.1	4.9	9.4	3.08	1.91	1.6	茶褐色	H-1	67-3
2	I-A	17.1	—	—	—	—	—	淡茶色	H-1	67-4
3	I-A	13.6	—	—	—	—	—	暗褐色	H-7	67-15
4	I-B-c	14.9	3.9	—	3.82	—	—	暗橙色	H-1	67-2
5	I-B-c	14.3	4.6	—	3.11	—	—	赤茶色	H-7	67-14
6	Ⅲ-A-a	14.6	4.0	5.0	3.65	1.25	2.92	淡赤茶色	H-33	70-1
7	Ⅲ-A	15.1	—	—	—	—	—	茶褐色	H-1	67-1
8	Ⅲ-A	12.5	—	—	—	—	—	茶褐色	H-7	67-16
9	Ⅲ-A	15.3	—	—	—	—	—	淡赤茶色	H-41	70-4
10	Ⅲ-A	13.3	—	—	—	—	—	黄土色	H-41	70-5
11	Ⅲ-A	11.4	—	—	—	—	—	黒褐色	H-58	70-12
12	Ⅲ-A	16.0	—	—	—	—	—	茶褐色	H-58	70-13
13	Ⅲ-B	15.2	—	—	—	—	—	黄土色	H-33	70-2
14	Ⅲ-B	14.2	3.8	6.2	3.73	1.63	2.29	黄土色	H-49	70-11
15	Ⅲ-B	16.2	3.5	8.6	4.62	2.45	1.88	茶褐色	H-49	70-10

口辺部が外反りする器形は(1)、口縁が緩く外反りし、下胴でわずかに張るもの(2・3)、厚手で下胴が張り、糸切り上げ底のもの(1)、厚手で底部が丸底のもの(4)、口辺部が弓なりに反り、端部が嘴状を呈し、下胴でわずかな稜角を描き、上げ底をつくるもの(5)などがある。

口辺部が内弯するものは(Ⅲ)、口縁がわずかに立き気味に内弯し、上胴部に弱い稜角をつくり内面黒磨によるもの(11)、ハケ調整によるもの(13)、口縁端が尖り、口辺部が緩く内弯し内面黒磨によるもの(7・12)、口縁端が丸く底部に向つて縮約のやや大きいもの(6・12)底部径が大きく皿形を呈するもの(15)、口辺部の内弯がやや強く、胴部で張りのあるカーブを描くもの(8)などがある。

器面は、ヘラ(13)あるいはハケ目で調整しているものもあるが(11)、ほとんどはロクロ状の擦痕を残し、胎土・焼成ともに良好なものが多い。

(ハ) 国分式土器(第67~70図)

整理番号	類型	口径 (A)	器高 (B)	底部径 (C)	$\frac{A}{B}$	$\frac{C}{B}$	$\frac{A}{C}$	色調	造構 番号	挿図 番号
1	I-A-a	16.6	4.1	7.0	4.04	1.7	2.37	淡茶色	H-8	67-8
2	I-A-a	18.0	5.7	6.5	3.15	1.14	2.89	茶褐色	H-31	69-16
3	I-A-a	13.7	5.0	5.9	2.74	1.18	2.32	茶褐色	H-40	70-3
4	I-A-c	19.5	5.6		3.48			茶褐色	H-28	69-9
5	I-A	11.0						茶褐色	H-5	67-13
6	I-A	13.5						茶褐色	H-11	68-5
7	I-A	15.6						淡茶色	H-23	69-2
8	I-A	13.1						茶褐色	H-62	70-15
9	I-A	12.9						茶褐色	H-66	70-17
10	I-B-a	14.3	2.9	8.0	4.93	2.75	1.78	茶褐色	H-4	67-10
11	I-B-a	13.3	2.4	4.4	5.54	1.83	3.92	赤茶色	H-62	70-14
12	I-B-b	13.8	4.9	6.9	2.83	1.4	2.81	茶褐色	H-20	68-16
13	I-B	10.1					3.02	赤茶色	H-2	67-5
14	I-B	13.1						暗褐色	H-11	68-6
15	I-B	19.3						茶褐色	H-66	70-18
16	Ⅱ-A-a	13.7	3.8	6.8	3.6	1.78	2.01	茶褐色	H-23	69-4
17	Ⅱ-A	12.4						茶褐色	H-2	67-6

18	Ⅱ-A	16.8						淡褐色	H-4	67-8
19	Ⅱ-A	12.9						茶褐色	H-18	68-13
20	Ⅱ-A	15.8						暗褐色	H-47	70-8
21	Ⅱ-B-a	14.9	4.3	8.5	3.46	1.97	1.75	淡茶色	H-31	69-15
22	Ⅱ-B-b	14.1	4.4	5.9	3.20	1.34	2.38	暗橙色	H-8	67-18
23	Ⅱ-B	15.0						赤茶色	H-13	68-8
24	Ⅲ-A-a	13.9	4.3	6.2	3.23	1.44	2.24	茶褐色	H-4	67-11
25	Ⅲ-A-a	13.9	4.7	6.5	2.95	1.38	2.13	黄土色	H-22	68-20
26	Ⅲ-A-b	11.6	5.0	7.1	2.32	1.42	1.63	黄土色	H-28	69-10
27	Ⅲ-A	16.9						茶褐色	H-11	68-7
28	Ⅲ-A	13.7						暗茶色	H-13	68-9
29	Ⅲ-A	14.2						暗褐色	H-21	68-18
30	Ⅲ-A	14.5						茶褐色	H-31	69-14
31	Ⅲ-A	15.8						茶褐色	H-31	69-17
32	Ⅲ-B-a	14.0	3.8	5.7	3.68	1.5	2.45	茶褐色	H-4	67-12
33	Ⅲ-B	15.2						茶褐色	H-16	68-10
34	Ⅲ-B	14.1						茶褐色	H-18	68-12
35	-B-	13.9						橙 色	H-31	69-13
36	-A-a			5.5				灰茶色	H-4	67-9
37	-A-a			8.0				茶褐色	H-18	68-14
38	-A-a			6.4				こげ茶色	H-20	68-17
39	-A-a			6.6				茶褐色	H-21	68-19
40	-A-a			6.2				暗褐色	H-23	69-1
41	-A-a			6.0				茶褐色	H-23	69-3
42	-A-b			6.0				こげ茶色	H-3	67-7
43	-B-a			4.5				黒褐色	H-19	68-15

この時期の土器は、内面黒磨と糸切り上げ底を特色とし、器面はほとんどロクロ状の擦痕が残り、胎土・焼成ともに良好なものが多い。また、この時期の土器は、台付環形土器や皿形土器・灰釉陶

器を多く伴出している。

口辺部が外反りするものは(Ⅰ)、口辺部がほとんど直斜状にのびて、口辺部でわずかに外反りするもの(Ⅰ)、口縁端が薄い唇状を呈し、胴部が緩く張り、内面黒磨によるもの(2・3・4・4・5・7・)、胴部が緩く内弯し、口縁部でわずかに外反りし、糸切り上げ底につくられているもの(10・11)などがある。

胴部から口辺部が直斜状につくられた器形は(Ⅱ)、口縁端が尖るもの(19・22・23・)と、丸味のあるもの(18)などがあり、底部は概して糸切り上げ底が多い。

口辺部が内弯するものは(Ⅲ)、口縁端が唇状を呈し、胴部が緩く張り、糸切り上げ底につくられているもの(24・25・36)、口縁端が尖り、口辺部が立ち気味に緩い胴張りカーブを描くもの(26)、緩いカーブを描きながら、下腹部に向つて急速に縮約するもの(28・14)、口縁端に丸味があり、上胴部が強く張り、下胴に向つて急速に縮約するもの(27)と上胴で弱い稜角をつくり、底部に向つて鋭角的に縮約するもの(29)などがある。

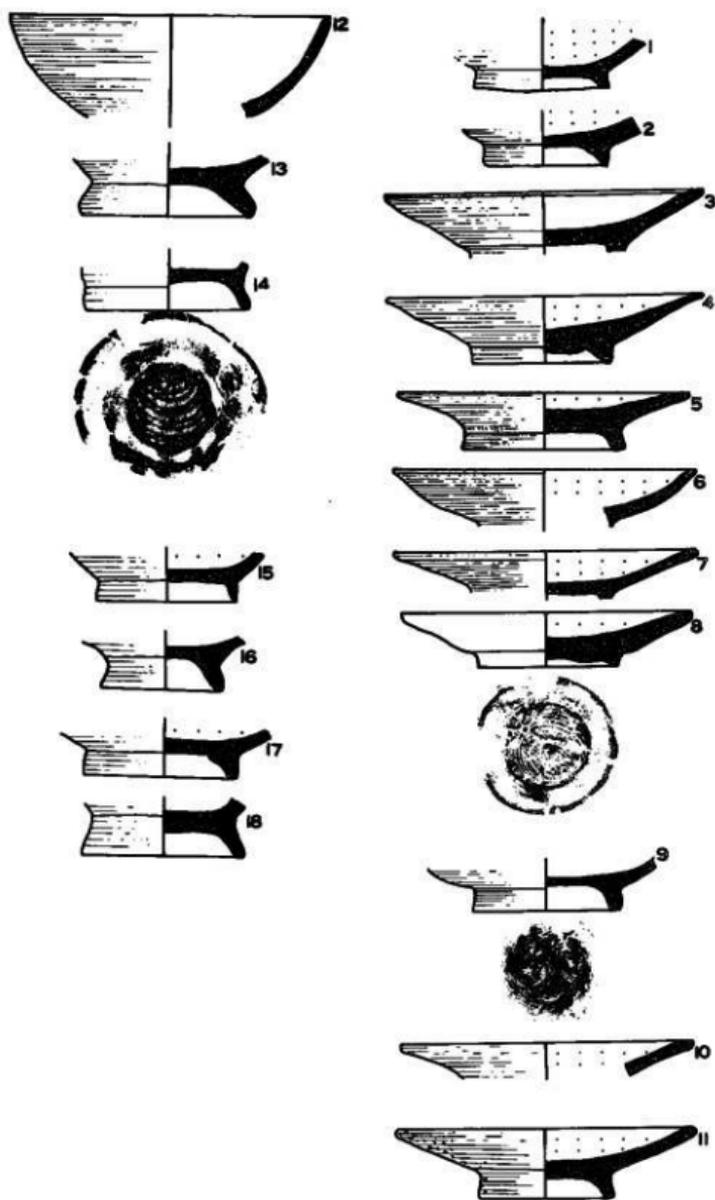
(2) 台付皿形土器(第71図)

この器形の土器は、いずれも区分期に比定されるもので、口縁部が外反りする器形は(Ⅰ)、口縁端が丸味のある唇状を呈し、そこから直線に近い外反りカーブを描いて器台との接着部に続き、器台は断面方形を呈するもの(2)、断面梯形を呈するもの(1)、および接着部で小さく内弯し器台は底部が糸切りで、断面逆台形を呈するもの(3)などがある。

口辺部が直斜を呈するものは(Ⅱ)、口縁端が立ち気味になり、内面に稜角をつくり、器台は断面長方形と推考されるもの1点である(6)。

口辺部が内弯するものは(Ⅲ)、口縁端が丸く、胴部は緩い内弯カーブを描き、器台は断面長方形に近い台形を呈するものである(7)。器面はロクロ状の擦痕がよく残り、内面黒磨によるものが多い。

整理番号	類型	口径(A)	器高(B)	器台底部径(A)	$\frac{A}{B}$	$\frac{C}{B}$	$\frac{A}{C}$	色調	遺構番号	挿図番号
1	I-A-a	13.1	2.5	7.4	5.24	2.96	1.77	茶褐色	H-8	71-5
2	I-A-a	14.3	3.0	7.2	4.76	2.4	1.98	茶褐色	H-4	71-4
3	I-A-a	13.1	2.5	6.2	5.24	2.48	2.11	茶褐色	H-23	71-8
4	I-A-a	13.7					1.	黒褐色	H-16	71-7
5	I-A	13.2						淡黒褐色	H-44	71-10



第71図 城の前遺跡I地区出土遺物(土師器)実測図(5) 1:3

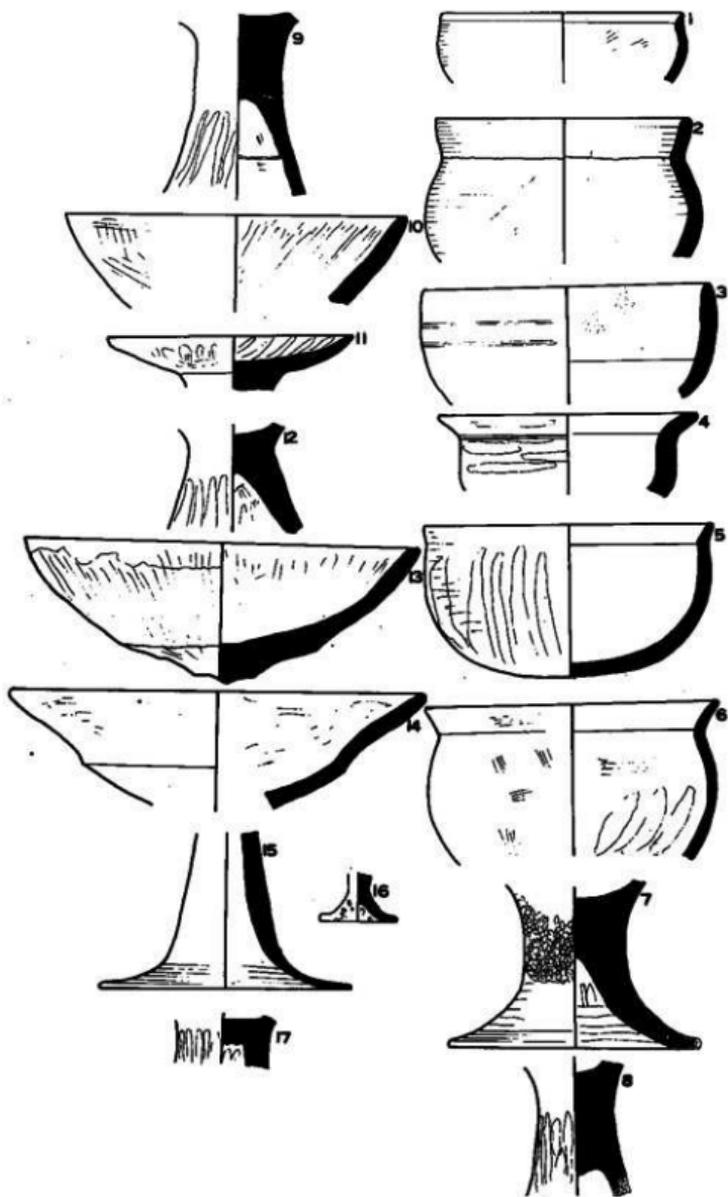
6	Ⅱ-B-a	14.3						茶褐色	H-4	71-3
7	Ⅲ-A-a	13.2	3.1	6.1	4.25	1.96	2.16	茶褐色	H-65	71-11
8	Ⅲ-A-a			6.2				赤茶色	H-22	71-15
9	Ⅲ-A-a			6.8				赤褐色	H-23	71-17
10	Ⅲ-A	13.6						茶褐色	H-11	71-6
11	Ⅲ-B-a			6.6				茶褐色	H-44	71-9
12	Ⅲ-B-a			7.7				淡赤茶色	H-18	71-13
13	Ⅲ-B-a			7.4				茶褐色	H-19	71-14
14	Ⅲ-B-a			5.4				茶褐色	H-23	71-16
15	Ⅲ-B-a			7.4				茶褐色	H-52	71-18
16	Ⅲ-B	14.4						淡茶褐色	H-8	71-12
17	-A-a			6.1				灰茶色	H-3	71-1
18	-A-b			5.1				赤茶色	H-4	71-2

(3) 台付 埴形土器 (第71図)

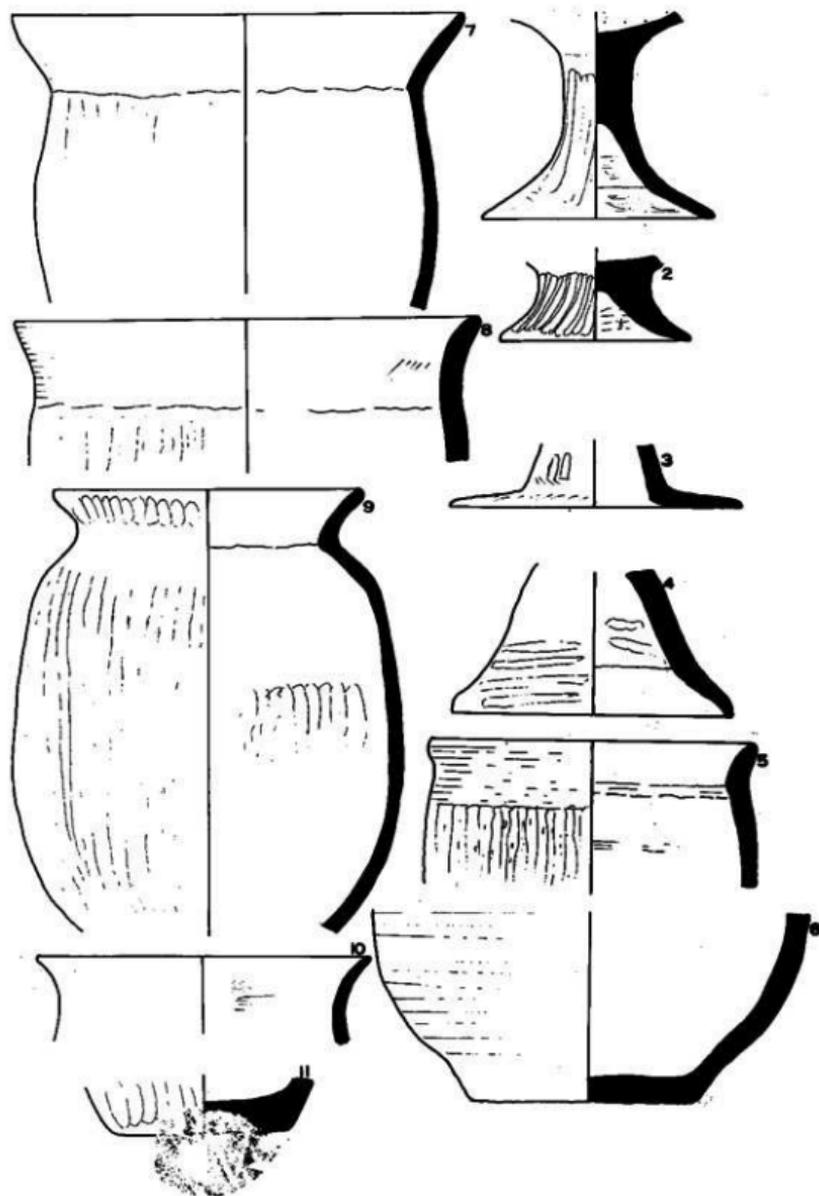
この器形の土器はいずれも国分期に比定されるもので、坏部破片と器台部が検出され、完形できるものはない。口縁端は丸く、胴部で緩い内弯カーブを描き(16)、器台部は裾部に向つて大きく開く断面台形のものが多く、器台胴部は緩い内弯カーブを描くものと直斜状のものがある。

(4) 鉢形土器 (第72・第74図)

この器形の土器は、鬼高期に比定されるものと国分期に比定されるもの(第74図12)1例がある。器形は口縁が嘴状を呈し、頸部でわずかにくびれ、胴部が緩く張り、口縁内部に弱い稜角をつくり、器面は明るい茶褐色を呈し、ヘラ調整の後ハケで仕上げているもの(1・5・12)、口縁端が丸く、頸部で「く」の字形を描き、胴部が丸く張るもの(2)、口縁が唇状でやや尖るもの(6)、口縁端が尖り、胴部が埴形に立つもの(3)、および口縁が唇状で、胴部の張りが弱いもの(4)などがある。国分期の1例は、鬼高期のものより大型で、口径20.6cmを測る。



第72図 城の前遺跡I地区出土遺物(土師器)実測図(6) 1:3



第73図 城の前遺跡Ⅰ地区出土遺物(土師器)実測図(7) 1:3

(5) 高坏形土器 (第72・73図)

この器形の土器は、和泉式 (第72図10・13・第73図3)・鬼高式 (第72図8・11・12・14・15、第73図2・4)・真間式 (第73図1)・国分式 (第72図7・9・16・17)などに比定されるものである。

(イ) 和泉式土器 (第72図10・13・第73図3)

遺物は坏部がH-25号住居跡、脚部がH-48号住居跡から検出されているが、この遺構は、いずれも鬼高期のものであり、なんらかの理由でこの遺構内に混入したものであろう。

坏部は、10が口径16.7cm、13が19.2cm、口縁端は丸く、口辺部が直斜状を呈し、胴部で緩い内寄カーブを描き、接着部に向つて縮約している。器面は薄いチョコレート色を呈し、内外面ともハケ状の工具で調整されている。

脚部は裾に向つてしだいにふくらみをもち、胴部が緩く張るもので、裾部はやや鈍角のL字形に開き、底部径は14.2cmを測る。器面は赤茶褐色を呈し、ヘラ磨きと裾部にハケ目による調整を併用している。

(ロ) 鬼高式土器 (第72図8・11・12・14・15、第73図2・4)

器形をおよそ復元できるものは坏部2点と脚部5点である。坏部は口径が12.1cm、下胴から口縁にかけて緩い内寄カーブを描きながら肉厚はしだいに薄くなり、器高1.7cmを測る小型なもの(11)、口径20cm、口縁端が丸く、口辺部は弓なりに外反りし、胴部で稜角をつくり、接着部に向つて急速に縮約するもの(14)がある。器面はいずれも淡茶褐色を呈し、ヘラとハケを併用して調整している。

脚部の器形は、胴部最小径：器高の比が1：2.56と比較的器高が高く、裾部に向つてラツバ状に開き、底部径12.2cmを測るもの(12)、同比が1：0.89と低く、器台形に八字に開き、底部径9.3を測るもの(2)、同比が1：1.25と器高に対して胴部径が大きく、胴部が張つて裾部で外反りし、末端が内寄して立ち、底部径13.7cmを測るものなどがある(4)。器面は概してヘラ調整によるものが多く、淡赤茶褐を呈している。

(ハ) 真間式土器 (第73図L)

この土器は、胴部が柱状で、裾部が大きくラツバ状に開き、底部径11.3を測る。胴部最小径：器高の比は1：2.75で、器面は淡茶褐色を呈し、ヘラ磨きにより調整されている。

(ニ) 国分式土器 (第72図7・9・16・17)

検出された遺物は、いずれも脚部のみで、完形できるものはない。

7は胴部最小径：器高の比が1：1、28で胴部径が4、95cmを測り、裾部に向つて大きく外反りし、裾部はラツパ状に開き、底部径12cmを測る。器面は茶褐色を呈し、ヘラ状の工具で調整しているが、胴部がかなり剥落している。

16は器高が2、1cm、底部径が3、8cmのいわゆるミニアチュア土器で、胴部から裾部に向つて弓なりに外反りし、器面は茶褐色を呈する。

9・17は、ほぼ同器形の土器と思われるが、いずれも裾部を欠いている。9は上胴径が4、2cmを測り、緩い外反りカーブを描いて裾部にのび、器面はヘラ磨き調整によつている。

(6) 変形土器 (第73～75)

この器形の土器は、いずれも破片で、器形を完形できるものはないが、出土量が多い。

(イ) 鬼高式土器 (第73図・10、第74図2・9・10、第75図9・14)

口辺部の器形は、強く弓なりに外反りするもの(第73図10・第74図9)と、口縁端が丸く頸部で弱い「く」の字形を呈するもの(第74図10・第75図9)、小さく外反りして下に丸い凸帯をつくるもの(第74図2)、弱く外反りして、胴部が直胴状につくられているもの(第75図14)などがある。器面は茶褐色またわ赤茶褐色を呈し、ヘラを横になでて調整したものが多い

(ロ) 真間式土器 (第75図10)

検出されたのは、口縁端が丸く、口辺部が弓なりに外反りし、器面をヘラ磨き調整したものである。口径23、8cmを測り、器面は赤茶褐色を呈する。

(ハ) 国分式土器 (第73図5～8・11・第74図1・3・4・7・13・14・

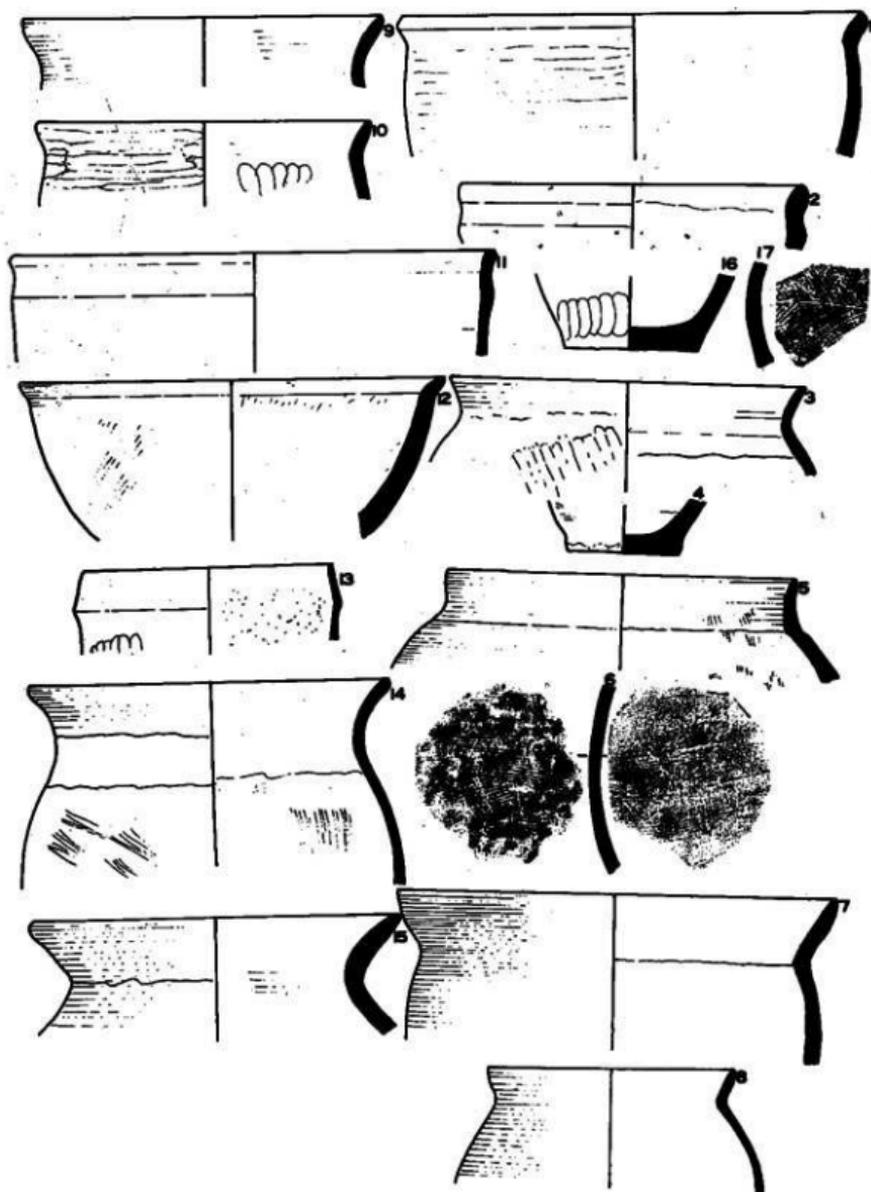
16・17・第75図1・3・4・7・8)

この時期の変形土器は、口縁端が丸く、口辺部が弱い外反りで、器面を胴部では縦に、口辺部では横にヘラ磨き調整したもの(第73図5・8)、口縁端が丸く、口縁部が緩く内寄り、頸部で弱い「く」の字形をつくり、胴部にわずかな張りがあり、器面をヘラ磨き調整したもの(第73図7)、口縁端がわずかに尖り、頸部で「く」の字形を呈し、上胴が張るもの(第74図3・7・14第75図1・3)、口縁端が丸く、口辺部が弓なりに外反りするもの(第75図8)、および口縁部がわずかに内寄り、弱い稜角をつくるもの(第74図13)などがある。底部の器形は平底で下胴が張るもの(第73図6)、底部に葉脈痕のつけられたもの(第73図11)などがあり、かなりバラエティーに富んでいる。

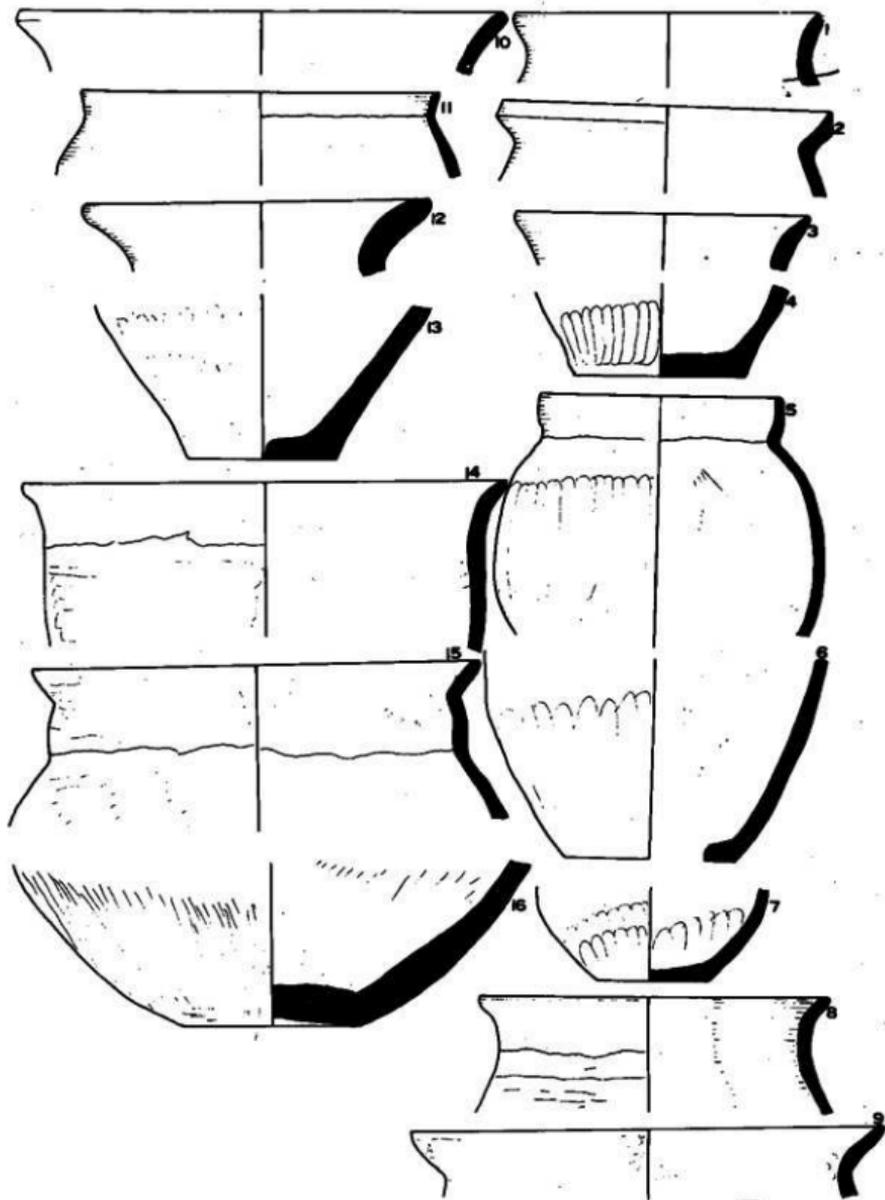
(7) 壺形土器 (第73図～第76図)

(イ) 鬼高式土器 (第73図9・第76図1)

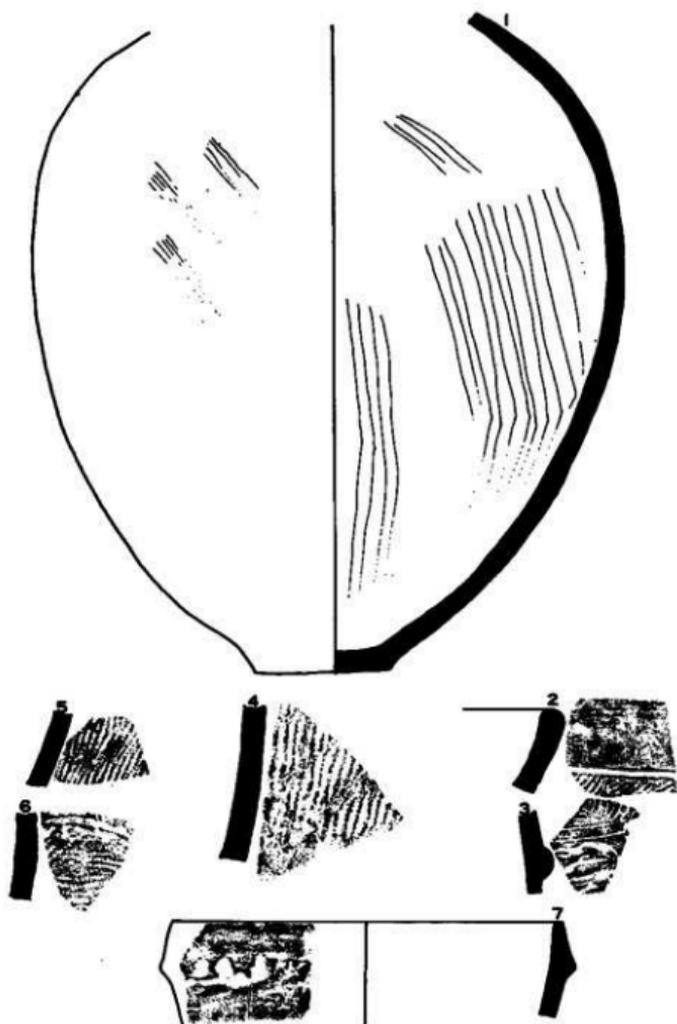
9は口縁端が丸く、口径14、9cmを測り、口辺部は弓なりに外反りして頸部で強く「く」字形を描



第74図 城の前遺跡Ⅰ地区出土遺物(土師器)実測図(8) 1:3



第75図 城の前遺跡I地区出土遺物(土師器)実測図(9) 1:3



第76図 城の前遺跡Ⅰ～Ⅲ地区出土遺物（土師器・縄文式土器）実測図(10) 1 : 3

き、胴部は肩から緩やかな張りをもっている。器面は茶褐色を呈し、ヘラ削りによって整形している。

1は口辺部を失っているが、現高30.7cmを測り、胴部が球形に強く張り、底部径が6.5cm、胴部最大径が28.5cmである。器面はヘラ整形の後ハケ状の工具で調整している。

(ロ) 国分式土器 (第74図5・15 第75図5・15)

第74図5は、口辺部が立ち気味に外反りし、上胴部に向つて大きく張り、口径16.8cmを測る。第75図5は、口辺部が緩く内弯し、頸部で「く」の字形を描き、胴部は球形に張っている。

第74図15は、口辺部が強く外反りし、頸部で「く」の字形を描き、上胴が強く外反りし、頸部で「く」の字形を描き、上胴が張る器形で、口径が17.7cmを測る。

第75図15は、口縁が小さく外反りし、口辺部中央で緩く内弯気味に張り、上胴部に広がる器形で、口径21.7cmを測る。

(8) 甗形土器 (第75図6)

この器形は、国分期に比定されるものが1個だけ検出されている。底部は平底で、ほぼ中央部に径5.2cmの穴を穿ち、下胴は緩く張っている。

b須恵器 (第77・78図)

器形は坏形土器・台付皿形土器・台付坑形土器・有蓋坏形土器・壺形土器・甗形土器・細頸などがある。

(1) 坏形土器 (77)

この器形には、鬼高期・真間期および国分期の3時期のものがある。

(イ) 鬼高式土器 (第77図11・13)

11は口辺部が緩く外反りし、下胴がわずかに張る。器面は青褐色で、ロクロ状の擦痕がよく残り、口径11.6cmを測る。

13は口縁端が尖り、口辺部がわずかに内弯し、口径17.3cmを測る。

(ロ) 真間式土器 (第77図18・19)

口縁端が丸く、小型の形の器形と(18)、糸切り上げ底の底部(19)が検出されている。器面はいずれもロクロ状の擦痕がよく残り、灰青色を呈している。

(ハ) 国分式土器 (第77図1・3~5・8・11・13・15~16・20~22)

器形は口辺部が外反りするものをⅠ・直斜状のものをⅡ・内弯するものをⅢ、糸切り底をa・ヘラ工具によるものをbに分類して下表に示す。

整理 番号	類 型	口 径 (A)	器 高 (B)	底部径 (C)	$\frac{A}{B}$	$\frac{C}{B}$	$\frac{A}{C}$	挿 図 番 号	遺 構 番 号
1	I - a	12.0	4.7	6.0	2.55	1.27	2.0	77-20	H-51
2	I	16.1						77-5	H-11
3	I - b	11.9	2.7		4.40			77-4	H-11
4	II - a	13.8	4.5	7.0	3.06	1.55	1.97	77-1	H-4
5	II	15.4						77-3	H-11
6	II	13.7						77-15	H-34
7	III - a			6.2				77-16	H-34
8	III - b			6.4				77-21	H-52
9	III	13.4						77-8	H-16

口辺部が外反りする器形は、いずれも口縁端が丸く、薄手で胎土・焼成がよく、下腹部が張つている。

IIの器形は、口縁端が丸く、下胴に向つて急速に縮約するものと(1・15)、口縁端が尖り、やや立つもの(3)がある。

IIIの器形は、口縁端がわずかに尖り、下胴に向つて緩く内弯気味に縮約するもので、底部は糸切りとヘラ削りの2手法がある。

(2) 台付皿形土器(第77図)と台付碗形土器(第77図25)

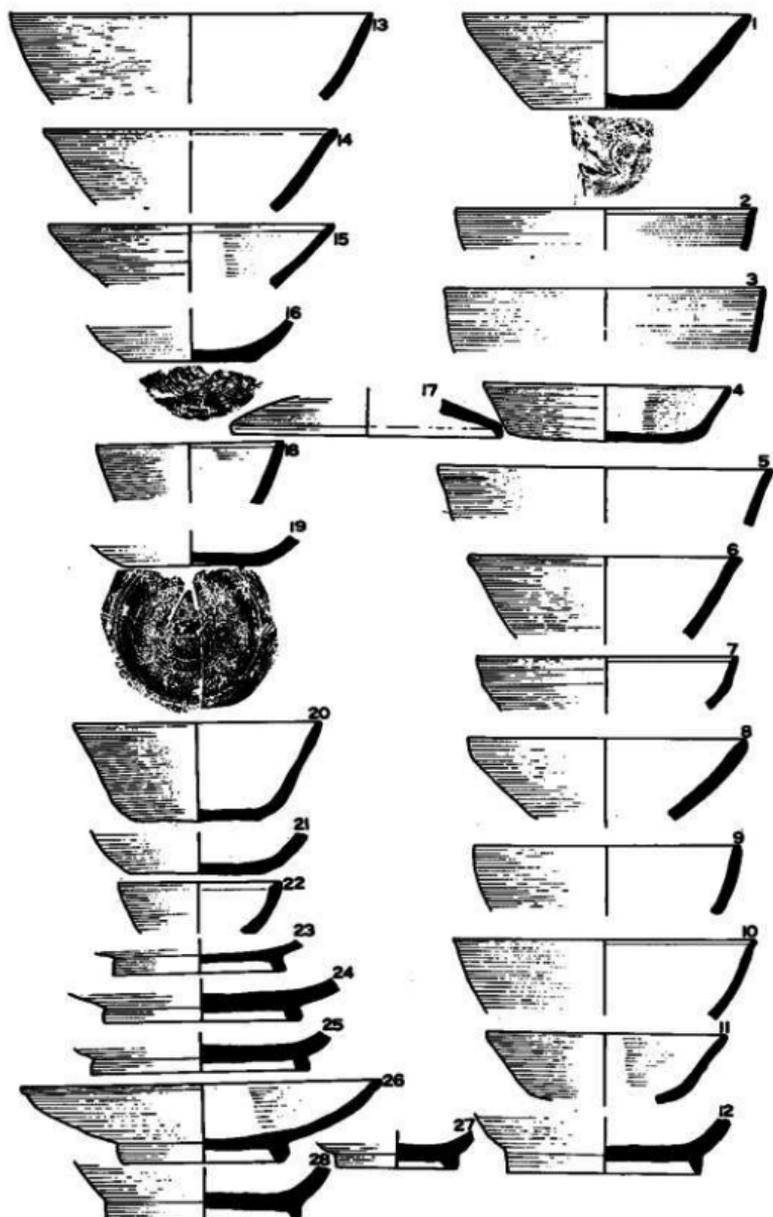
23と24は、真間期に比定される土器で、器台部と下胴部が検出されている。器台部は外面がやや張る断面台形で、下胴はいずれも弱い張りを示している。

26は国分期の土器で、口縁部がわずかに外反りし、胴部は緩い張りをもちて急速に底部へ縮約し、器台部は底部が小さい丸味のある逆台形である。口径は17.3cm、器高が3.9cm、底部径が7.6cmを測る。

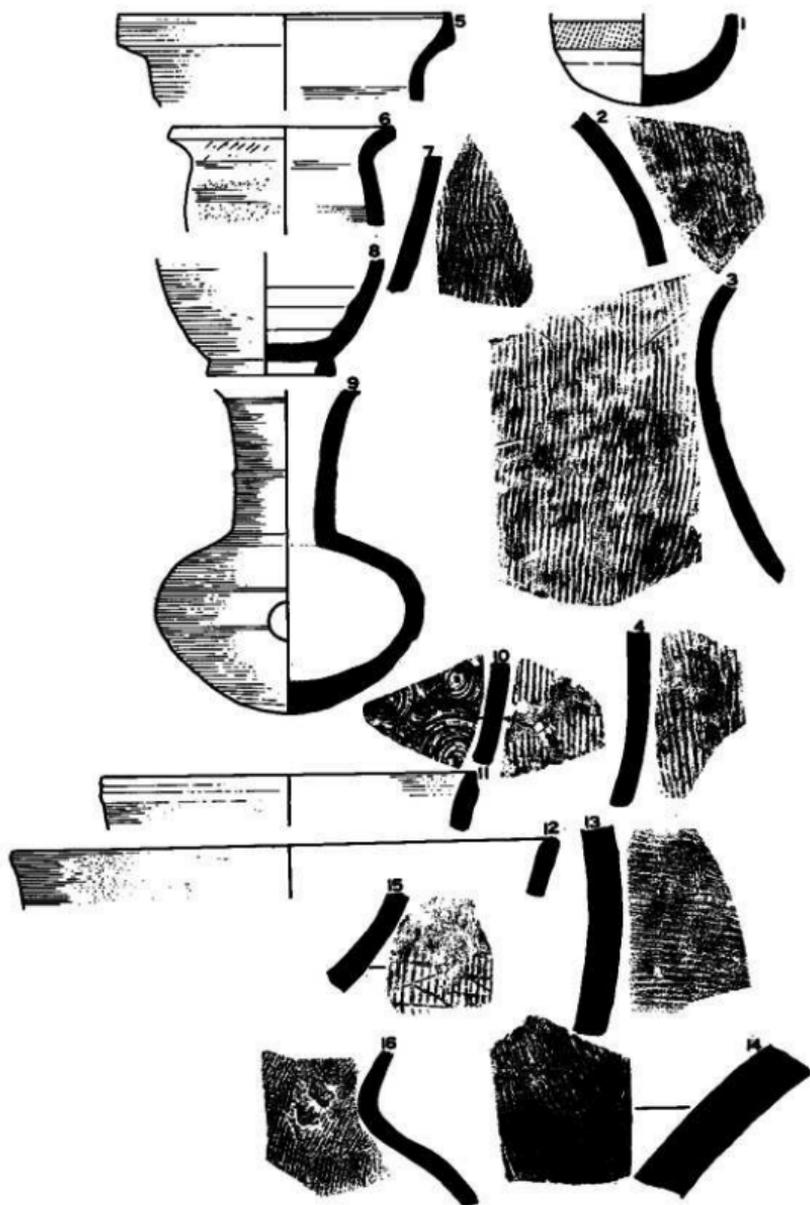
25は鬼高期に比定される土器で、器台が断面台形を呈し、下胴に張りがある。

(3) 有蓋坏形土器(第77図17)

蓋部の下胴破片が検出されている。この土器は、国分期に比定されるもので、底部末端が嘴状を呈して立ち、下胴部にわずかな張りがある。底部径は9cmを測る。



第77図 城の前遺跡I地区出土遺物(須恵器・灰釉陶器)実測図(10 1:3)



第78図 城の前遺跡Ⅰ地区出土遺物(須恵器)実測図(1/3)

(4) 壺形土器 (第78図)

この器形の土器は、大小の破片が相当量検出されているが、いずれも破片で、器形を完形できるものはない。16は口辺部が強く外反りし、頸部で「く」の字形を描き、器面は櫛状の工具で沈線斜文をつけ、調整している。

2と3の胴部は、張りが強く、タタキ目で整形している。

(5) 壺形土器 (第78図)

大部分は小破片である。器面はタタキ目により整形したものが多く、内面に青海波文をつけるものもある(10)。5は口縁が嘴状で立ち、下に弱い稜角をつくって頸部で外反りしている。6は口辺部が強く外反りし、頸部で「く」の字形をつくり、胴の張りは弱い。5・6は国分期に比定される土器である。

(6) 壺形土器 (第78図9)

この土器は、鬼高期のH-30号住居跡から検出されたものであり、口辺部を欠いているが、他は完形である。頸部はおよそ6、7cmで、緩く外反りし、胴部が楕円形に張って径13cmを測る。器面は青褐色を呈し、ロクロ状の擦痕がよく残り、胴部の中央に径1、7cmほどの穴が1個穿たれている。

(7) 細頸瓶 (第78図8)

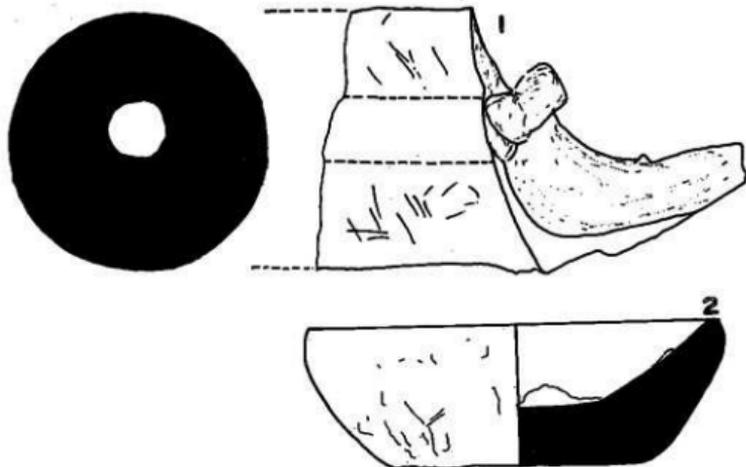
胴部の下半身が検出され、器形は完形できないが、底部径6、2cmを測り、器台の断面は梯形である。器面は青褐色を呈し、下胴が緩く張り、内面にはほぼ等間隔の波形の凸帯が認められて、胎土は緻密で、焼成も良好である。

c 施釉陶器 (第77図)

器形は埴形陶器と台付埴形陶器があり、いずれも国分期に比定されるものである。埴形陶器の器形は、口縁部が唇状にわずかに外反りし、胴部が緩く内弯カーブを描くもの(6・10・14)、胴部がやや立ち気味に内弯カーブを描くもの(2)、口縁端が尖り、その内面に弱い稜角をつくり、胴部の張りがやや強いもの(7)などがある。

台付埴形陶器の器形は、器台底部の先端が尖り、断面が梯形で、底部の先端が丸く、器形は前者に似るもの(27)などがある。

d たたら跡の遺物



第79図 城の前遺跡Ⅰ地区遺構実測図(13) 1:2

たたら跡、およびその周辺から検出された関連遺物は、吹子の羽口とるつぽに使われたと推考される環形土器、およびその製品と思われる刀子などの鉄器である。

(1) 吹子羽口(第79図)

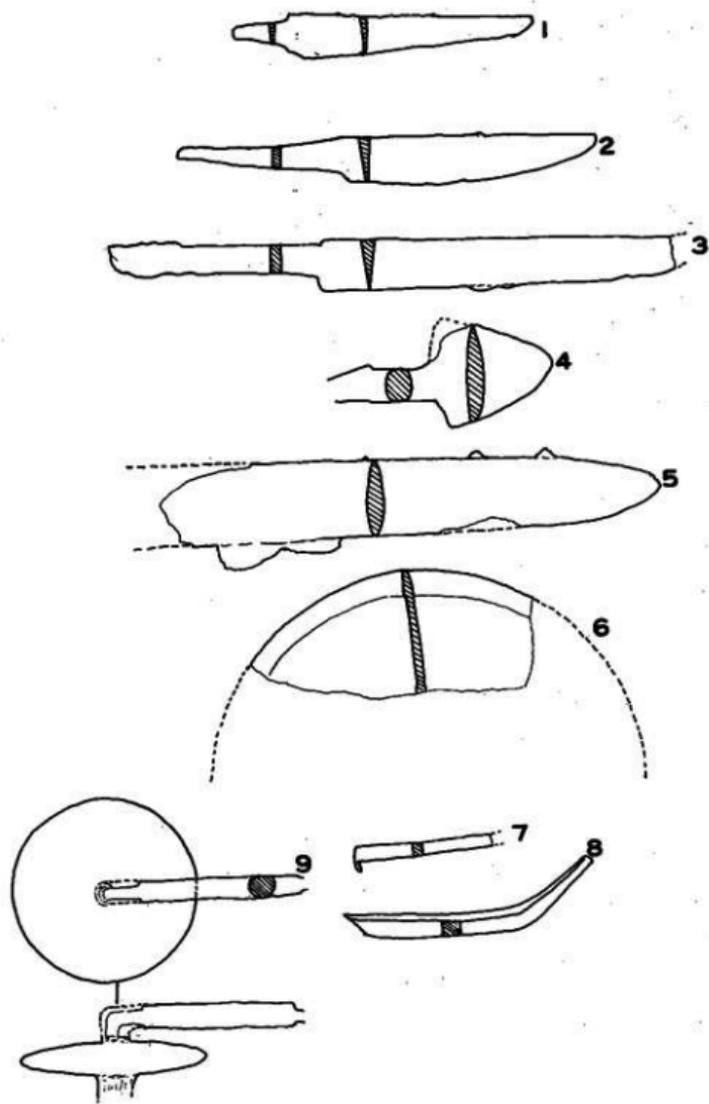
この遺物は、H-11号住居跡からほぼ完形に近いものが、さらにH-21・H-24・H-42号遺構などからは破片が検出されている。復元した後者の器形は、ほとんど前者と同器形と思われる。前者については、H-11号住居跡の項で述べてあるので重複をさける。

(2) 環形土器(79図)

この土器は、H-24号遺構のたたら跡内から、鉄滓や木炭などと共に検出されたもので、土器の内面に厚く緑青色の灰釉がかかり、るつぽとして作られた特殊な土器であることが、わら状のすきが胎土に入れられていることなどからも伺われる。なお器形については、H-24号遺構の項で詳述した。

● 鉄器(第80図)

Ⅰ地区から検出された鉄器は、H-3号遺構とH43号住居跡から検出された刀子、H-8号住居跡から検出された用途不明の紡錘車に軸をつけた器形の鉄器、またH-70号住居跡から検出された径14、2cmの円形の鉄器片などである。それぞれの器形と計測値については、各遺構の項で詳述してある。



第80図 城の前遺跡 I~III地区出土遺物実測図(14) 1:2



第81図 I-H-25住居跡遺物の出土状態

2 II地区の遺構と遺物

II地区は、遺跡の西端部分で、N1測量杭を基準にして南方へ1~11グリッド、西方



第82図 城の前遺跡II地区の住居跡分布図 1:600

へA~Fグリッド、M10測量杭を基準にしてG10~K10グリッドを設定して、A-1グリッドから西南方へと調査した(82)。

しかし、検出された遺構の分布はおよそ8グリッドの北端を境界にして、それより南方には全く検出されなかった。この付近の地層は、表土層がおよそ20~25cm、その下層



は直ちに黄褐色の粘土層に続いていた。すべての遺構は、この粘土層を掘って構築されている。

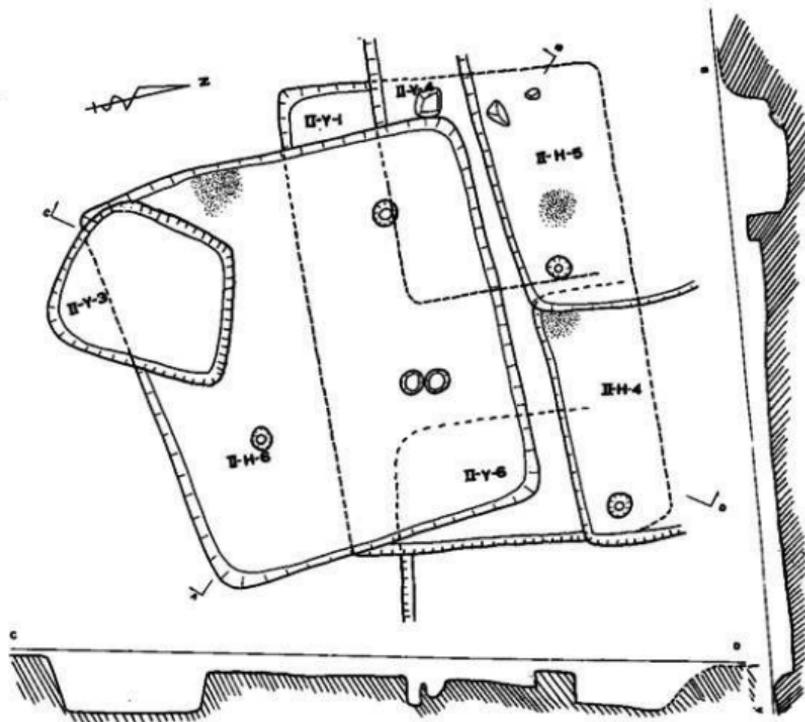
A 弥生時代の遺構

Ⅱ地区から検出された弥生時代の遺構は、後期尾崎期に比定される住居跡が1、箱清水Ⅰ期の住居跡が2、箱清水Ⅱ期の住居跡が2、小竪穴遺構か2などである(第82図)。

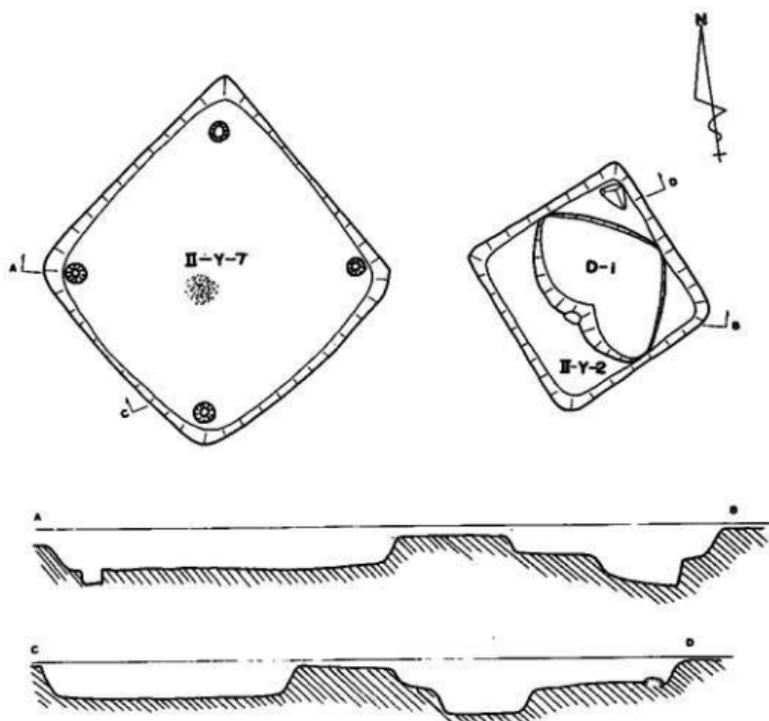
(1) Y-1号住居跡(第83図)

この遺構は、D・E-2・3グリッドで検出された箱清水Ⅰ期の住居跡である。平面プランは、H-4・5号住居跡、およびY-4号住居跡によつて大部分を切られているため明らかでないが東西径5.30mを測る隅丸長方形と推考される。

出土遺物は、やや粗い櫛歯波状文を施した変形土器片などが微量検出されている。



第83図 城の前遺跡Ⅱ地区遺構実測図(1) 1:60



第84図 城の前遺跡Ⅱ地区遺構実測図(2) 1:60

(2) Y-2号壑穴遺構 (第84図)

この遺構は、D・E-5・6グリッドで検出された箱清水Ⅱ期の壑穴状遺構であり、床面の中央やや東寄りをD-1号土塚によって切られている。平面プランは、長軸心線の方がN56°Eにつくられ、長径が1.82m、短径が1.76mの方形に近い隅丸長方形である。床面はほぼ水平で、壁高およそ30cmを測り、かなりの量の土器片が、床面と直上の覆土から検出された。

出土遺物は、口径18.3cmを測る浅鉢形土器・壺形土器・高環形土器の器台部および変形土器片などである。

(3) Y-3号壑穴遺構 (第83図)

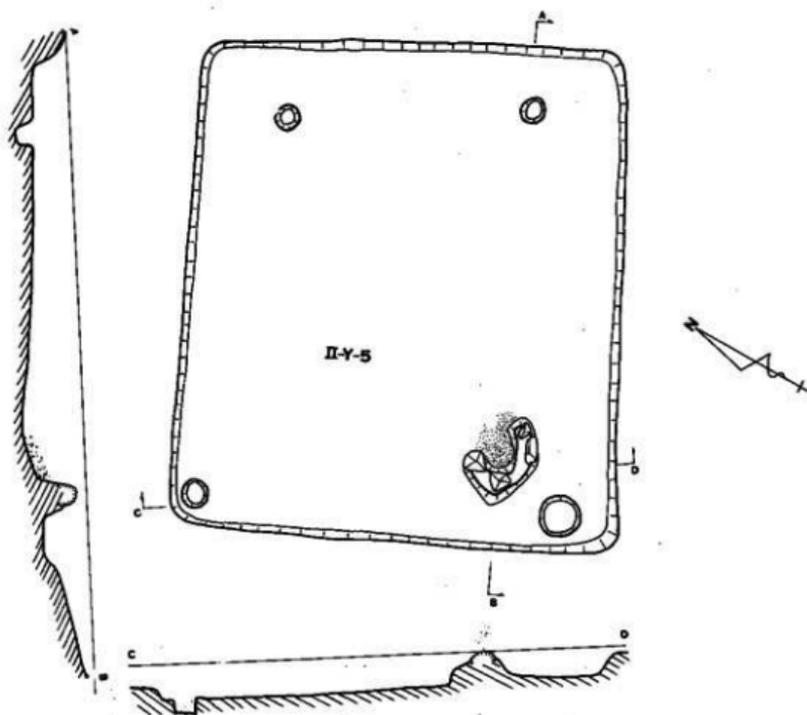
この遺構は、D-3グリッドを中心に検出された箱清水Ⅱ期の竪穴遺構である。平面プランは、長軸心線の方位がN32°Eにつくられ、長径が1.96m、短径が1.77mの台形に近い隅丸長方形である。壁高は57cmを測り、特に深い構造をもっている。出土遺物は、変形土器の小破片で、器形を完形できるものはない。

(4) Y-4号住居跡(第83図)

この遺構は、E-1・2グリッドで検出された箱清水Ⅰ期の住居跡である。遺構の大部分は、H-5・6号住居跡によつて切られ、西北側が調査予定区外に続いていたため、プランを確認できなかった。

出土遺物は、赤色塗彩のある壺形土器と、櫛歯波状文の変形土器の小破片が微量検出されている。

(5) Y-5号住居跡(第85図)



第85図 城の前遺跡Ⅱ地区遺構実測図(3) 1:60

この遺構は、C-2・3グリッドを中心に検出された箱清水Ⅱ期の住居跡である。

遺構の平面プランは、長軸心線の方位がN78°Eにつくられ、長径が4.88m、径が4.23mの隅丸長方形で、東壁で測る壁高が30mである。床面はほぼ水平であるが、南西隅の一部がやや高く、その前面に粘土かまどに似た形態の炉が検出され、遺物もおよそこの付近から多く検出されている。柱穴状のピットは、西壁沿いのものが南北隅寄りに検出され、東壁沿いのものは、南北端よりやや中央寄りに検出され、南西隅のものは、径40cm、深さ30cmを測り他の3個は、径25cm前後、深さ15cmほどであった。

出土遺物は、壺形土器の下胴部と甕形土器の小破片である。

(6) Y-6号住居跡 (第83図)

この遺構は、D-1・2グリッドを中心に検出された箱清水Ⅱ期の住居跡である。平面プランは西壁がH-4・6号住居跡によつて切られ、東壁側の大部分が掘削した残土の下に続いていたため追突を断念し、南壁と出土遺物によつて遺構の所在を確認するにとどめた。

出土遺物は、器面を櫛状の工具で上下に整形した後で櫛描波状文を施した甕形土器片、赤色塗彩のある壺形土器片などが少量検出されている。

(7) Y-7号住居跡 (第84図)

この遺構は、D・E-5・6グリッドで検出された尾崎期平行期の住居跡である。平面プランは長軸心線の方位がN52°Wにつくられ、長径が2.68m、短径が2.65mの隅丸方形である。床面はほぼ水平で、中央やや西寄りに、炉址と思われる径30cmほどの焼土層があり、4隅に径20cm前後、深さ15cmほどの小型の柱穴状ピットが検出され、壁高23cmを測る。

出土遺物は、太い櫛状の工具で描かれた沈線斜文のある甕形土器、および壺形土器の底部が検出されている。

B 弥生時代の出土遺物

Ⅱ地区の各遺構から検出された弥生式土器は、壺形土器・高坏形土器・甕形土器および鉢形土器などである。

(1) 壺形土器 (第86図)

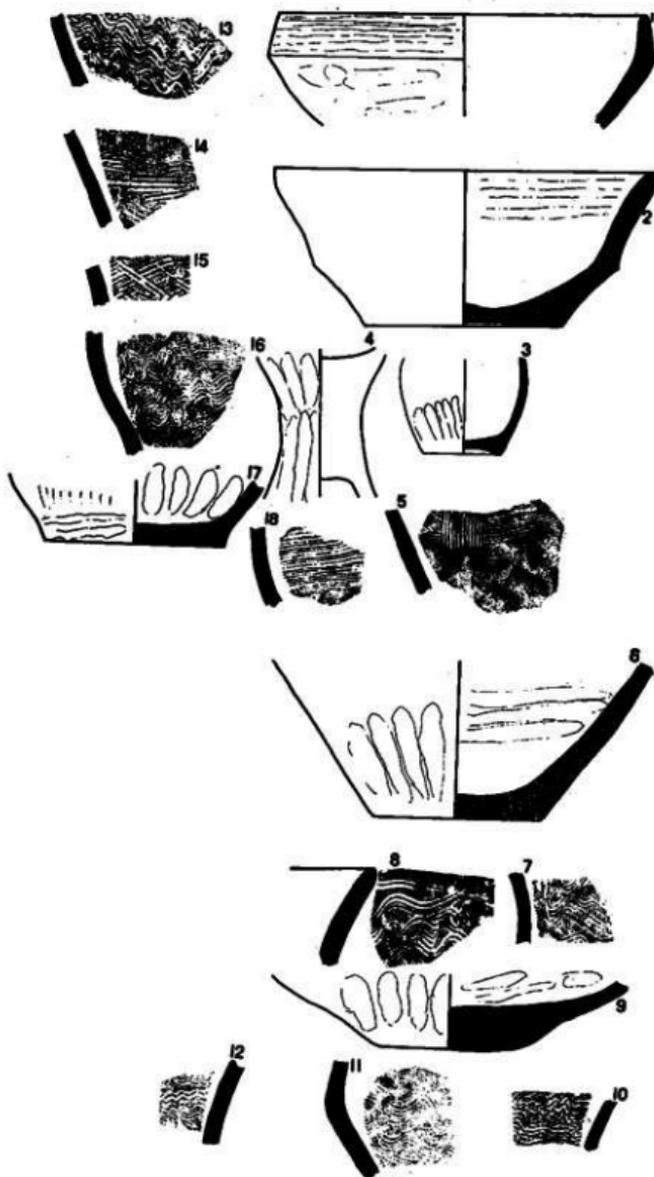
尾崎式平行期のもの(17・18)と箱清水Ⅱ式のもの(5・6)が検出されている。しかし、いずれも破片で、器形を完形できるものはない。

17は尾崎式
 平行期の土器の
 底部であり、下
 胴は緩く張り、
 底部の端に強い
 稜肉を強つてい
 る。器面は茶褐
 色を呈し、ヘラ
 磨きにより調整
 されている。

6は箱清水Ⅱ
 式土器の底部で
 ある。器面は茶
 褐色を呈し、ヘ
 ラ磨き調整され
 ているが、下胴
 は直斜状で、底
 部の稜肉が弱い

(2) 高塚形土器
 (第86図4)

この土器は、
 箱清水Ⅱ式に比
 定されるもので
 脚部を欠く脚部
 破片である。胴
 部が緩く外反り
 脚部は底部に向
 って急に開いて
 いる。器面は茶
 褐色を呈し、ヘ
 ラ磨きにより調
 整されている



第86図 城の前遺跡Ⅱ地区出土遺物(弥生式土器)実測図(1) 1:3

(3) 壺形土器 (第86図3・7~16)

検出された土器は、いずれも破片で、器形を完形できるものはないが、尾崎式平行期、箱清水Ⅰ式およびⅡ式の土器が検出されている。

13~16は、尾崎式平行期の土器で、口辺部と肩部に櫛描波状文を施文し、胴部に櫛描沈線斜文を施文している。

7は胴部の小破片で、箱清水Ⅰ式に比定されるものである。胴部は緩く張り、櫛状の工具で掻いて整形し、その上に粗い櫛描波状文を施文している。

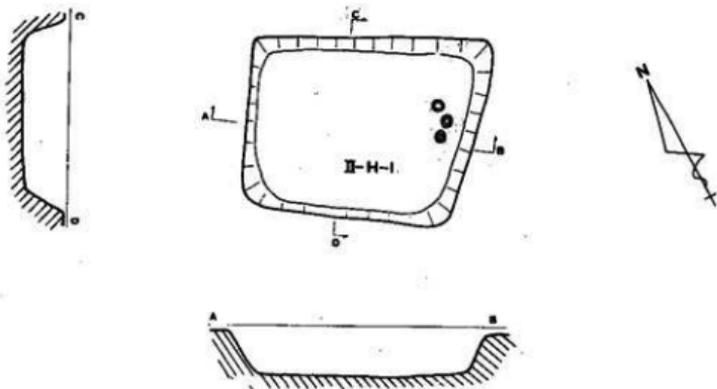
8は箱清水Ⅱ式に比定される土器の口辺部で、口縁端が丸く、口辺部は緩く外反りし、器面に粗い櫛描波状文を施文している。9は下胴が張り、底部で緩く外反りし、丸底気味の底部に続いている。

(4) 鉢形土器 (第86図1・2)

箱清水Ⅱ式に比定される土器である。1は口縁端が丸く、口辺部から胴部にかけて緩く内弯し、肩部に稜角をつくっている。2は口縁端がわずかに尖り、口辺部は緩く外反りし、胴部で三角波形の稜角をつくり、下胴もわずかに外反りして、底部で鈍角の稜角をつくり、底部は上げ底である。器面は茶褐色を呈し、ヘラ工具で研摩調整している。

C 古墳時代と歴史の遺構

Ⅱ地区で検出されたこの時期の遺構は、鬼高期の住居跡2、小竪穴遺構1、真間期の住居跡1、国分期の住居跡3、土壇4などである。



第87図 城の前遺跡Ⅱ地区遺構実測図(1) 1:60

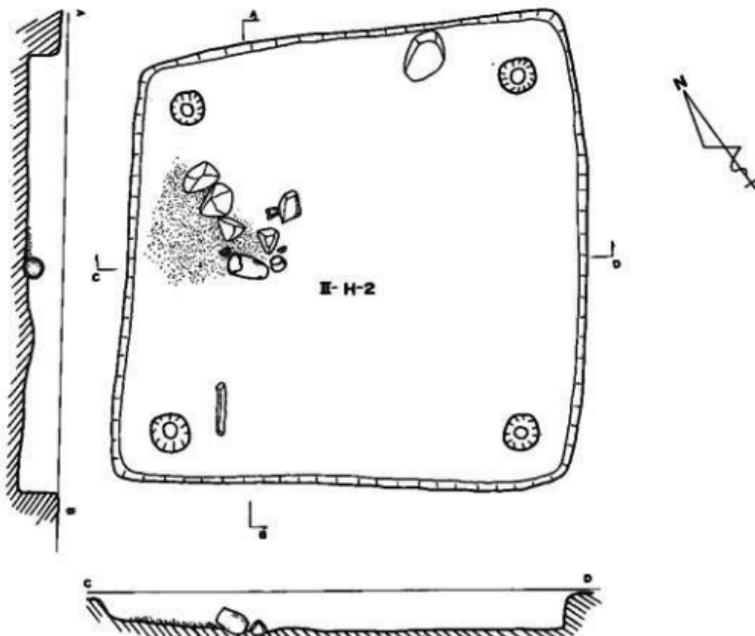
(1) H-1号遺構 (第87図)

この遺構は、A-1・2グリッドで検出された鬼高期の小竪穴遺構である。平面プランは、長軸心線の方位がN62°Wにつくられ、長径が2.21m、短径が1.80mの隅丸長方形である。床面は黄褐色の粘土層を深く掘ってつくられ、壁高が東壁でおよそ40cm、西壁で45cmを測る。柱穴は精査したが発見されず、ただ東壁際の中央やや北寄りに、径12~13cmの小ピット3個が検出された。

出土遺物は、土師器の口径17.6cmを測るやや大型の坏形土器、および須恵器の変形土器片などである。

(2) H-2号住居跡 (第88図)

この遺構は、A・B-3・4グリッドで検出された鬼高期の住居跡である。平面プランは、長軸心線の方位がN34°Eにつくられ、長径が4.47m、短径が4.42mのややゆがんだ隅丸長方形である。床面は西壁寄りの中央部がやや高く、壁高が25cmで、他の壁高は40cmを測る。かまど址と推考される焼土層は、西壁際の中央やや北寄りにあり、径1.10mの範囲に厚く分布し、東側に



第88図 城の前遺跡II地区遺構実測図(2) 1:60

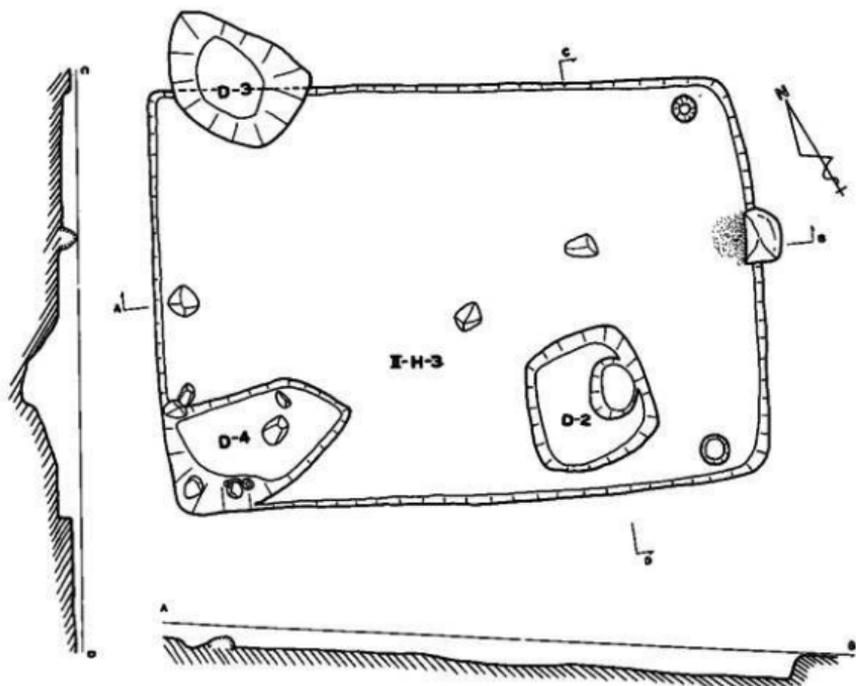
径38cm×25mほどの石があり、さらに焚口では、ほぼ完形の甕形土器と鉢形土器が検出された。柱穴は、遺構のおよそ4隅で検出され、径およそ40cm、深さ25cmを測る。

出土遺物は、前述の土器の他土師器の環形土器などが検出されている。

(3) H-3号住居跡 (第89図)

この遺構は、G・H-6・7グリッドで検出された鬼高期の住居跡である。平面プランは、長軸心線の方位がE20°Sにつくられ、長径が4.80m、短径が4.30mの隅丸長方形である。床面は3個の土域によつて切られているが、東壁沿いの柱穴状ピットが検出され、壁高26cmを測り、東壁のほぼ中央に、やや小規模のかまど址と推考される焼土層が検出された。

出土遺物は、土師器の高環形土器・鉢形土器・環形土器・甕形土器、および須恵器の台付環形土などが検出されている。



第89図 城の前遺跡II地区遺構実測図(3) 1:60

(4) H-4号住居跡 (第83図)

この遺構は、D・E-1・2グリッドで検出された真間期の住居跡である。平面プランは、遺構の北半分が残土の下に続き、西壁がH-5号住居跡によつて切られているため明らかでないが、南北径およそ3.2mを測る隅丸方形と推考される。壁高は南壁で35cmを測り、南東隅に径30cm深さ25cmほどの柱穴が検出され、南壁がH-5号住居跡と接する付近で、かまど址と推考される焼土層が検出された。

出土遺物は、土師器の坏形土器、須恵器の台付坏形土器などが検出されている。

(5) H-5号住居跡 (第83図)

この遺構、E-1・2グリッドで検出された国分期の住居跡である。プランは、遺構の西北側が残土の下にのびていたため明らかでないが、南北径がおよそ3.6m、東西径がおよそ4.3mの隅丸長方形と推考される。壁高は南壁でおよそ40cmを測り、南東隅に径およそ27cm、深さ約20cmの柱穴が検出され、南東隅寄りの径40cmの範囲に厚い焼土層が検出された。

出土遺物は、土師器の内面黒磨、糸切り上げ底の坏形土器、および台付坏形土器の器台などが検出された。

(6) H-6号住居跡 (第83図)

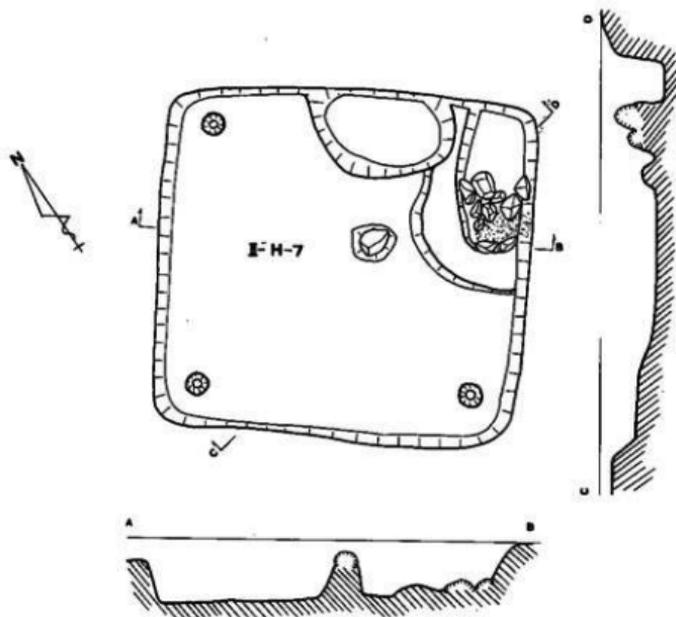
この遺構は、D・E-2・3グリッドで検出された国分期の住居跡である。平面プランは、長軸心線の方位がN88°Eにつくられ、長径が4.57m、短径が4.10mのゆがんだ隅丸長方形である。遺構の南西隅には、Y-3号遺構があり、H-6号住居跡は、その上に床をはつてつくり、このコーナを除く3隅のやや中央寄りに、径25cm、深さ20cmほどの柱穴が検出され、西壁の南寄りにかまど址と思われる焼土層が検出された。

出土遺物は、内面黒磨の坏形土器など出土量は少量である。

(7) H-7号住居跡 (第90図)

この遺構は、C-1グリッドで検出された国分期の住居跡である。平面プランは、長軸心線の方位がN58°Wにつくられ、長径が3.57m、短径が3.42mの隅丸長方形である。壁高は43cmを測り、東壁の北寄りに崩れた石組かまど址が検出され、この周辺がわずかにくぼんでいた。また、東壁のほぼ中央に、長径が140cm、最大幅が85cm、長軸心線の方位がN48°Wにつくられた土壇状のピットが検出された。また、北東隅を除く3隅で、径およそ20cm、深さ18cmの柱穴状ピットが検出された。

出土遺物は、土師器の坏形土器・台付坏形土器および甍形土器などが検出されている。



第90図 城の前遺跡Ⅱ地区遺構実測図(4) 1 : 60

(8) D-1号土壇(第84図)

この遺構は、D-5グリッドのY-2号遺構を切つてつくられ、長軸心線の方位が $N36^{\circ}W$ につくられ、長径が1.65m、最大幅が1.10mのハート形に近い楕円形で、国分期に比定される遺構である。

(9) D-2号土壇(第89図)

この遺構は、G-7グリッドで検出された遺構で、鬼高期のH-3号住居跡の床面を切つてつくられている。長軸心線の方位が $N6^{\circ}W$ につくられ、長径が1.29m、短径が1.19mの長方形に近い楕円形である。

⑩ D-3号土壇(第89図)

この遺構は、H-6グリッドで検出され、H-3号住居跡の北壁の一部分を切つてつくられている。

いる。平面プランは、長軸線の方角がE50。Sにつくられ、長径が1.50m、短径が1.02mを測る。中心部分の深さは、およそ30cmで、壁上端よりしだいに深くなり舟の側壁状に斜めに削られている。

⑪ D-4号土壇(第89図)

この遺構は、H-7グリッドで検出され、H-3号住居跡の南西隅に床面を切つてつくられている。平面プランは、長軸線の方角がN60°Eにつくられ、長径が1.85m、最大幅が1.25mのややゆがんだ卵形である。底部は舟底形に掘られ、深さおよそ35cmを測る。

D 古墳時代と歴史時代の出土遺物

● 土師器

Ⅱ地区から検出された土師器は、坏形土器・鉢形土器・甕形土器・埴形土器・高坏形土器・台付埴形土器などの器形で、鬼高期・真間期、および国分期に比定されるものである。

(1) 坏形土器(第91図)

イ) 鬼高式土器(第91図)

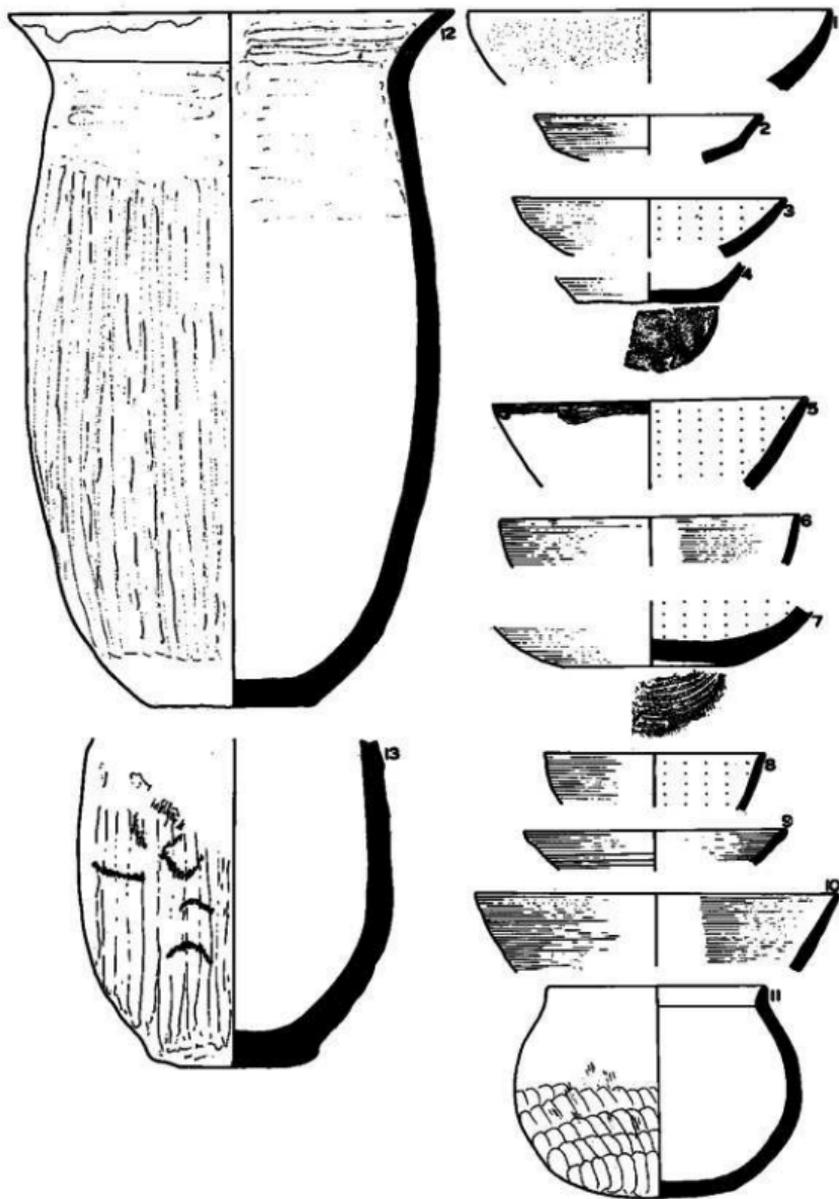
口縁端が尖り、口辺部は立ち気味に内弯して、胴部で急速に縮約している。器面は明るい茶褐色を呈し、胎土がやや粗い。

ロ) 真間式土器(第91図2～4)

2は口縁端が丸く、口辺部が緩く外反りし、胴部で弱い稜内をつくり、下胴部は急速に縮約している。器面は橙色で、ロクロ状の擦痕が残っている。3は口縁端が尖り、胴部が緩く内弯し、内面黒磨である。4は糸切り平底で、下胴が張っている。

ハ) 国分式土器(第91図5～9)

口縁端は、丸形(5・8・9)とわずかに尖るもの(6)がある。口辺部の器形は、直料状のもの(5)、立ち気味でわずかに内弯するもの(6)、口縁でわずかに外反りし、胴部が内弯するもの(8・9)などがあり、底部は糸切り上げ底で、内面黒磨によるのが多い。



第91図 城の前遺跡Ⅱ地区出土遺物実測図(1) 1 : 3

(2) 鉢形土器 (第91図11)

H-2号住居跡で検出された鬼高期の土器である。口縁端は嘴状を呈し、口辺部は立ち気味に外反りし、頸部で反転して、胴部が大きく張り、最大径は中胴にあり、底部は丸底である。口径が10.4cmを測り、器面は赤茶褐色を呈し、下胴をヘラ磨きにより調整し、一部にハケを用いている。

(3) 甕形土器 (第91・92図)

器形が明らかな土器は、H-2号住居跡から検出された鬼高期の土器のみである。

12は口径が21.4cm、器高が33.7cm、口縁端は嘴状で、口辺部が強く外反りし、頸部は弱い「く」の字形を呈し、胴部の張りも弱く、最大径は中胴にあり、径20cmを測る。器面は淡い茶褐色を呈し、調整はヘラにより、口辺と頸部では横に、胴部では縦に使って仕上げている。

13は胴部のみで、口辺部を欠いている。胴部は緩く張り、最大径が下胴部付近にあり、径15.1cmを測る。器面は茶褐色を呈し、ヘラ磨き調整によっている。

1は下胴以下を欠いているが、口縁端は丸く、口辺部の外反りは、12よりも弱い。胴部は緩く張り、口径15.1cm、胴部径14.7cmを測る。

6と7は胴部の破片であるが、器面を櫛状の工具で削って施文している。6は鬼高期、7は真間期の遺構内から検出されたものである。

(4) 増形土器 (第92図2)

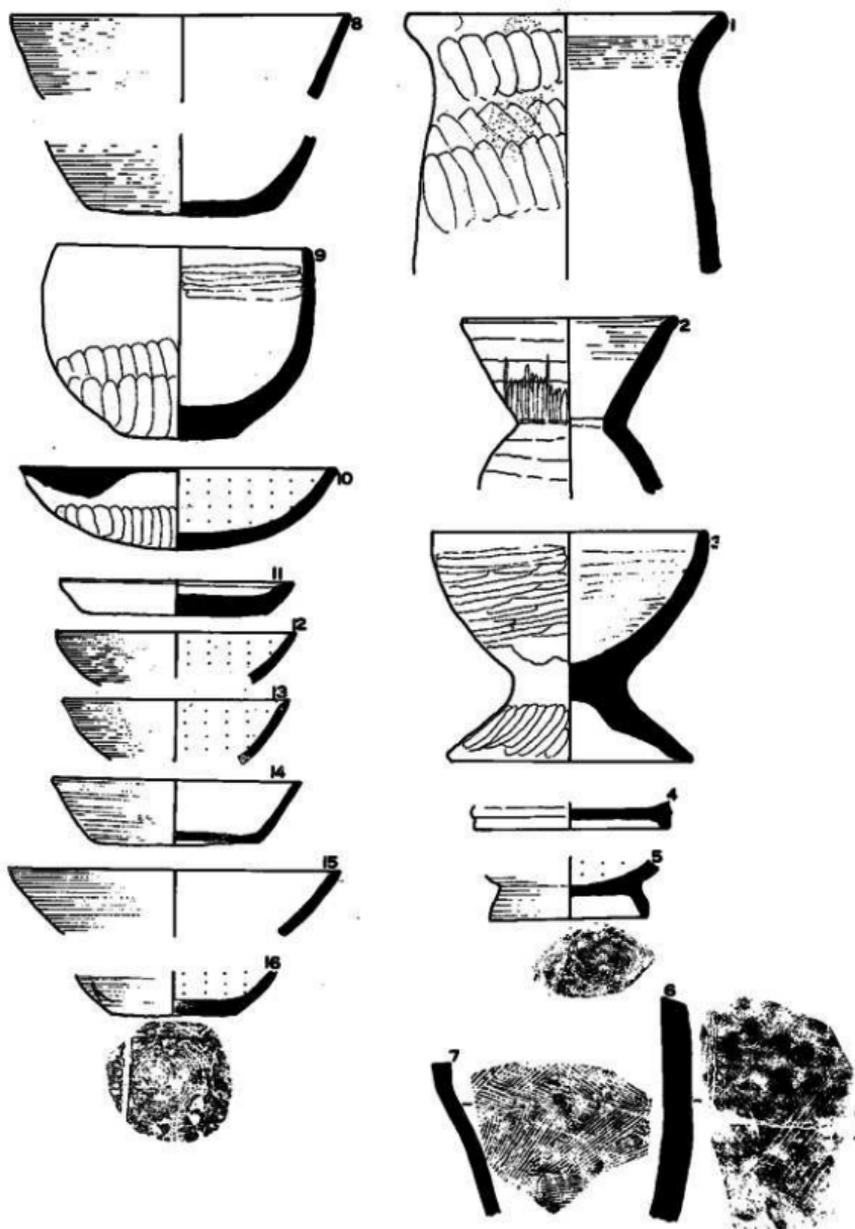
口縁端は丸く、口辺部が外反りして、頸部で強い「く」の字形をつくり、下胴を欠くが、胴部は丸く張っている。口径が10.3cmを測り、器面はこげ茶色で、鬼高期のH-2号住居跡のかまど脇で検出されたものであ。

(5) 高坏形土器 (第92図3)

この土器は、鬼高期のH-2号住居跡から検出されたものである。口径が13.1cmで、口縁端が丸く、口辺部が立ち気味に内弯し、下胴部は接着部に向って急速に縮約し、そこで強い「く」の字形を描き、脚部はほとんど直斜状にのびている。口径が13.1cm、器高11cmを測り、脚底部径は11.7cmである。器面は暗茶褐色を呈し、坏部はヘラを横に使い、脚部では縦に流して調整している。

(6) 台付甕形土器 (第92図5)

この土器は、H-7号住居跡から検出された国分期の器台部破片である。器台部の外面は緩く内弯し、先端がわずかに尖り、底部は承切りによっている。坏部の下胴は緩く張り、接着部で強い「く」の字形をつくり、内面黒磨である。



第92図 城の前遺跡Ⅱ(1~7)・Ⅲ(8~16)地区出土遺物実測図(2) 1:3

b 須恵器 (第91~93図)

検出された須恵器の器形は、坏形土器、台付坏形土器の器台部、および大型の壺形土器などである。

(1) 坏形土器 (第91図10)

口縁端はやや尖り、口径17.5cmを測り、口縁部でわずかに反り、胴部は緩く内弯している。器面は暗灰色を呈し、ロクロ状の擦痕がよく残っている。

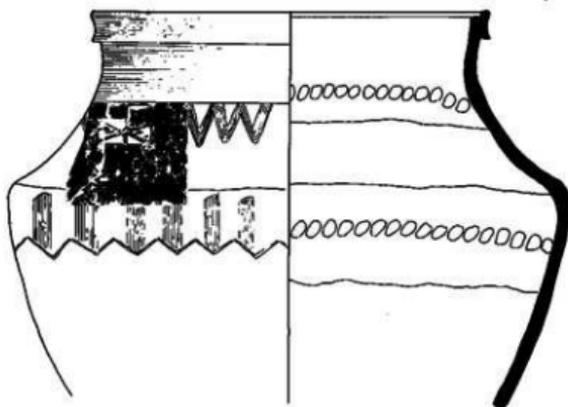
(2) 台付坏形土器 (第92図4)

器台部の破片のみで、器形は判然としない。器台部は断面長方形で、底部径9.4cmを測り、器面は灰褐色を呈する。

(3) 壺形土器 (第93図)

この土器は、国分期のH-7号住居跡で検出されたものである。口縁部の上端外側には、幅が2.4cmほどの粘土紐を回して複合口縁状につくり、接着部下端で段落し、口辺部は

緩く外反りして、頸部でもわずかに外反りのカーブを描き、肩部で強く張り、下胴に向つてしだいに縮約している。器面は青褐色を呈し、頸部に三角波形の文様と長方形の中に×印と縦の直線を組み合わせた窯印状のたたき文をつけている。口径は34.7cmを測り、最大幅が胴部にあり、径48.6cmで、その下に縦の擦文と山形の連続文を横に描いている。整形は捲き上げ法により、内部に指先で2段の指突文様をつけている。



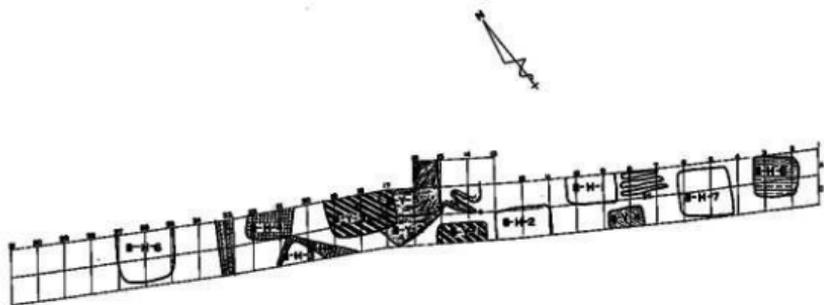
第93図 城の前遺跡Ⅲ地区遺構実測図(1) 1:60

C 鉄器 (第80図7・8)

この遺構は、鬼高期のH-3号住居跡から検出されたものである。7は先端を欠損しているが、一辺が約4mmの角釘状で、現長4.55cmを測る。頭部はつぶれて、L字形に薄くはみ出している。8は頭部が切出し状に尖り、一辺が約4mmの角状で、先端はしだいに細くなっている。

(3) III地区の遺構と遺物

III地区は、I地区とII地区を結ぶ道路建設予定地で、幅員が8m、延長がおよそ62mほどの範囲である。調査区は道路の中心杭を基準にして、南北へそれぞれ2mの点をとり、その外側は、残土を処理するためのスペースと予定した。このため検出した遺構の大部分は、調査区の外へと続き、全掘してプランを確認することができなかつた。しかし、調査区のほぼ中央から、弥生後期箱清水II式併行期と推定される精錬のための製鉄跡遺構が検出されるなど多大の成果を収めることができた。



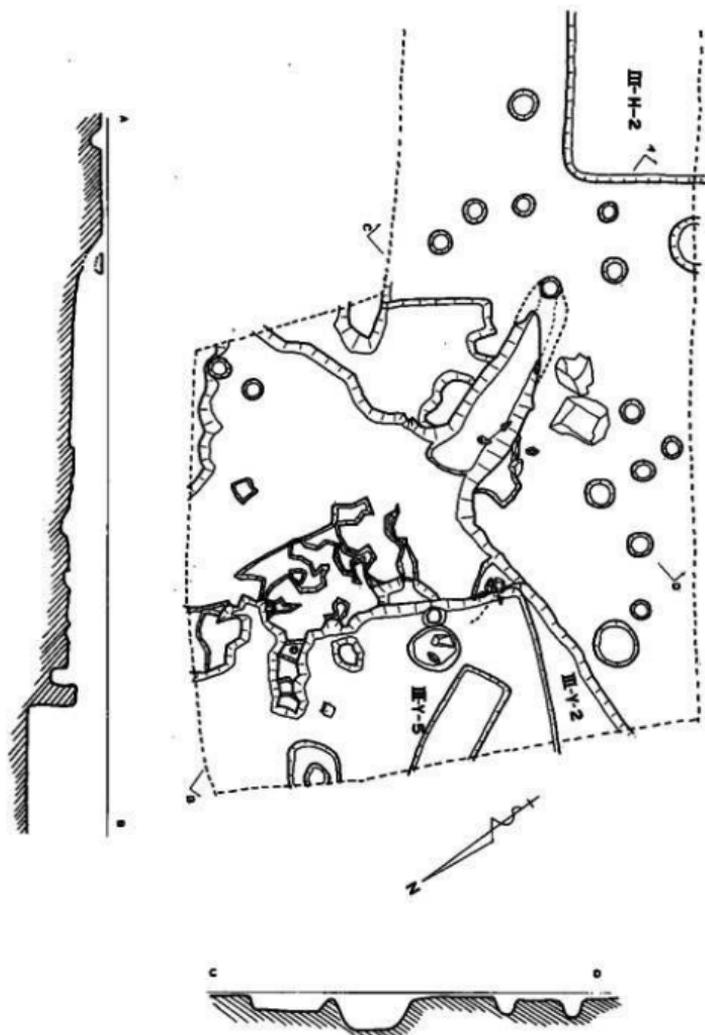
第94図 城の前遺跡III地区の住居跡分布図 1:500

A 弥生時代の遺構

検出された弥生期の遺構は、前述の製鉄跡遺構と環溝遺構が各1、尾崎期平行期の住居跡が2、箱清水I期の住居跡が1、箱清水II期の住居跡と竪穴遺構が各1などである。このうち製鉄跡遺構は、グリッドを1部(A、-13・14・15)北方へ拡張して、およそその全貌を確認することができた。しかし、他の遺構は、いずれも調査区外へと続き、全掘できなかつたのは残念である。

(1) S-2製鉄跡遺構 (第95図)

この遺構は、第III層の黒色砂質壤土層で発見されたが、遺構は西北の一部をY-2、Y-5号住居跡と複合し、その床面をはつて構築されているが、その一部が損壊していた。しかし遺構本体は



第95図 城の前遺跡Ⅲ地区遺構実測図(1) 1 : 60

ほぼその原形を留めており、保存状態は良好である。

中央部分の伊遺構は、粘土で構築された後、稼働中の焼結を受けて極めて堅緻な状態で発見され

た。プランは、長軸をほぼ南北にとり、2、15mを測り、最大幅は北辺より中央部にかけて60cm、それより南にかけては、しだいに細まり煙道となつている。深さは中央部において25cmを測り、全体が船底状を呈している。このうち南側半分は、上部も粘土で堅められ、煙道を形成し、径20cmの穴をもつて地上へ抜けている。

さらに、炉遺構の側壁は、燃焼口付近より直角に東南に折れて段を形成し、南と北に平坦な2面を造り出している。このうち上部の面は、炉遺構より2m程の範囲一面にわたり焼結を受けており堅緻である。この面には、計13箇所の柱穴と思われるピットが、炉遺構をとり囲むように発見された。そのプランは、おおむね径20～25cm、深さ25～30cmを測る。

1段下のテラス状の拡がりには、その西側から北側部分にかけて、Y-2、Y-5号住居跡と複合し、一部が崩壊して、規模を把むことは不可能であつたが4～5mの拡がりを有していたと思われる。

そのテラス状の面には、炉遺構の燃焼口より50cm隔てて、径 ほぼ1、50mの範囲で鉄滓が出土した。

この遺構の性格は、精練の製鉄跡と思われるが、台地の傾斜が東から西に向つているのに対し、ほぼ直角に交又させて長軸をとり構築されている。これは、この製鉄跡が、南より北にかけ2段に平坦面を造り、上段中央に炉を設け、燃焼口を下段北側に開口させていることより、北側から吹き上げる自然風を利用したことを暗示させる。さらに上段の柱穴は、炉遺構をとり囲み、かつ規模が統一的事であることより、なんらかの上屋構造があつたことを想像させる。

その厚みは、厚い所で1cmほどであり、杖状を示しており、流れ出したような形状を呈していた鉄滓北端には、鉄滓レベルよりやや低く木炭塊が、径15cmの拡がりをもつて出土している。

鉄滓の間隙からは、高坏(第99図-1)、丹彩の変形土器口辺部(第99図-7)、櫛播波状状文を施した変形土器破片(第99図-13)の遺物が出土している。

この遺構の稼働の時期については、北西で遺構と複合して構築されているY-2、Y-5号住居跡の時期が、遺物より尾崎期並行期であることと、鉄滓中より出土した高坏及び丹彩の変形土器口辺部が箱清水Ⅱ式に比定されること、他に時期を比定する土師器等の遺物が皆無であることなどにより、箱清水Ⅱ式期にほぼ並行する時期ものと思われる。(児玉卓文)

(2) Y-環溝遺構(第94図)

この遺構は、A・B-23グリッドで検出された箱清水Ⅱ期の溝状遺構である。遺構のプランはI地区で検出された環溝より幅がやや小さく造られているが、構造は全く同じで、上段V字上面の幅が約1、50m、下段V字上面の幅が約90cmで、その境の両壁に幅約20cmの平面をつけて段落し、上段の深さが約30cm、下段の深さが約45cmである。全掘していないので推定の域を出ないが、この溝状遺構は、I地区で検出された環溝の西側にあたる部分と考えてよからう。

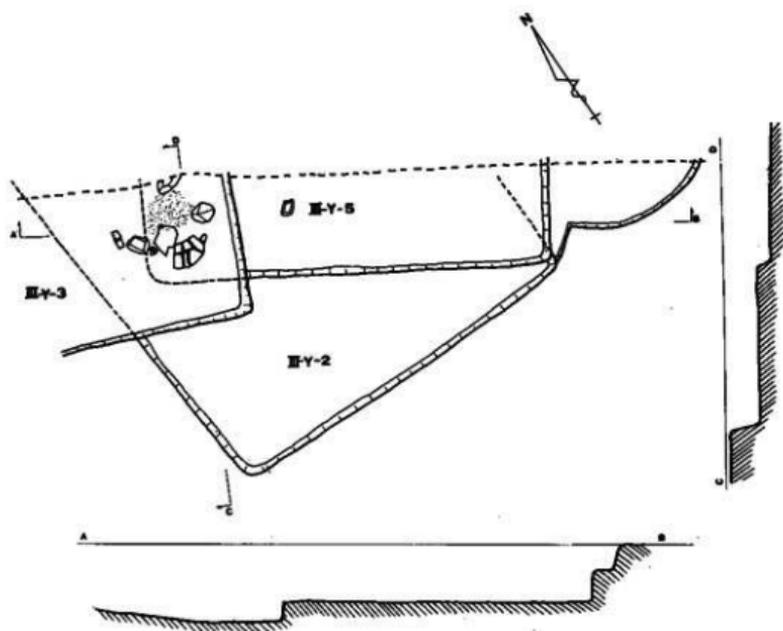
(3) Y-1号遺構 (第94図)

この遺構は、B-13~15グリッドの南側で検出された箱清水Ⅱ期の遺構である。平面プランは、遺構の南側が検出されていないので明らかでないが、東西径3.8mを測る隅丸長方形と思われる。

出土遺物は、丹彩のある壺形土器の下胴部と、櫛描波状文を施文した壺形土器の口辺部、および大型の鉄鏃と刀子などである。

(4) Y-2号住居跡 (第97図)

この遺構は、B-15~17グリッドで検出された尾崎式平行期の住居跡である。平面プランは、



第96図 城の前遺跡Ⅲ地区遺構実測図(2) 1:60

西壁部分が Y-3号住居跡によつて切られ、東壁部分が製鉄遺構の下にのび、さらに北側は Y-5号住居跡によつて切られているため明らかでないが、東西径が4.23mの隅丸長方形と推定される。

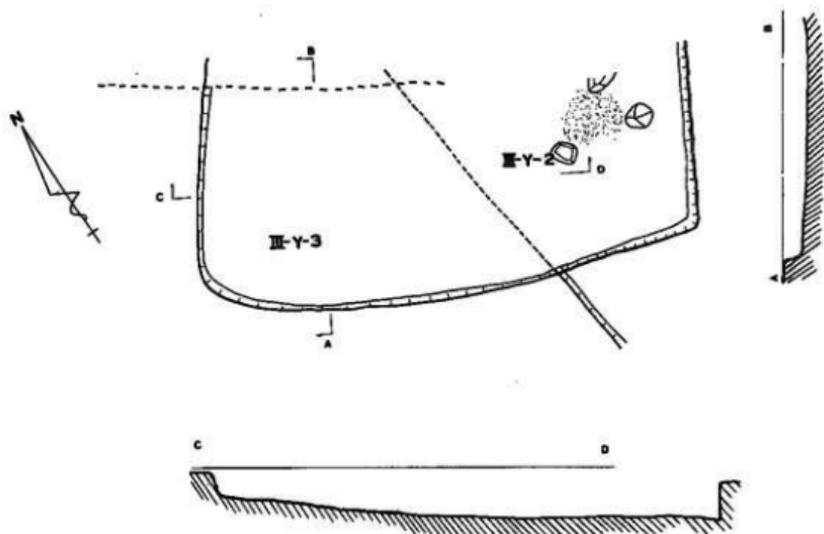
(5) Y-3号住居跡 (第96・97図)

この遺構は、A・B-16~19グリッドで検出された箱清水Ⅱ期の住居跡である。平面プランは、遺構の北半分が確認されていないため明らかでないが、東西径4.85mを測る隅丸長方形と思われる。壁高は東壁で36cmを測り、その壁際近くに3個の自然石を配した炉址が検出され、そして脇から壺形土器の破片がまとまって発見された。

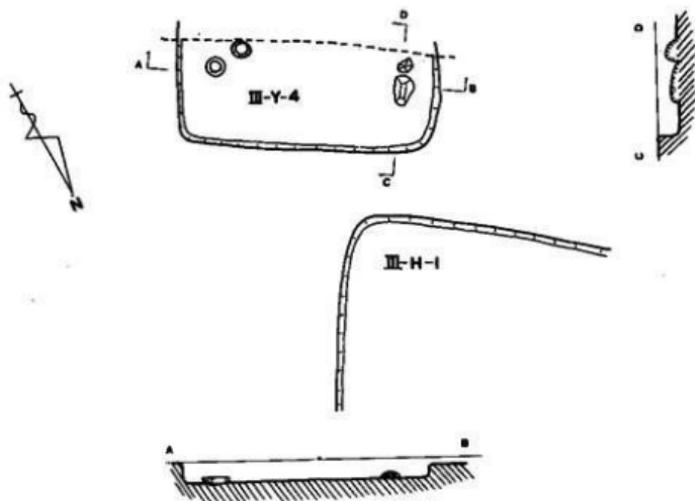
出土遺物は丹彩のある壺形土器の口辺部破片、壺形土器片などである。

(6) Y-4号住居跡 (第98図)

この遺構は、B-7・8グリッドで検出された箱清水Ⅰ期の住居跡である。プランは遺構の南側が確認されていないので明らかでないが、東西径2.55mを測るやや小型の隅丸長方形と思われる。床面はほぼ水平で、東壁寄りに径20cm、深さ18cmほどの柱穴状ピットが検出され、脇にほぼ完形の壺形土器の口辺部が検出された。出土遺物はこの他壺形土器の破片が少量検出されている



第97図 城の前遺跡Ⅲ地区遺構実測図(3) 1:60



第98図 城の前遺跡Ⅲ地区遺構実測図(4) 1:60

(7) Y-5号住居跡(第96図)

この遺構は、A-15・16グリッドで検出された尾崎式平行期の住居跡である。平面プランは遺構の北側が未確認で、さらに西側側が新清水Ⅱ期のY-3号住居跡によって切られているため明らかでない。

出土遺物は、ほぼ完形の鉢形土器・高坏形土器の坏部・銅付円筒形土器片・壺形土器の口辺部、および甍形土器などで、出土量は検出された遺構が小範囲の割に多い。

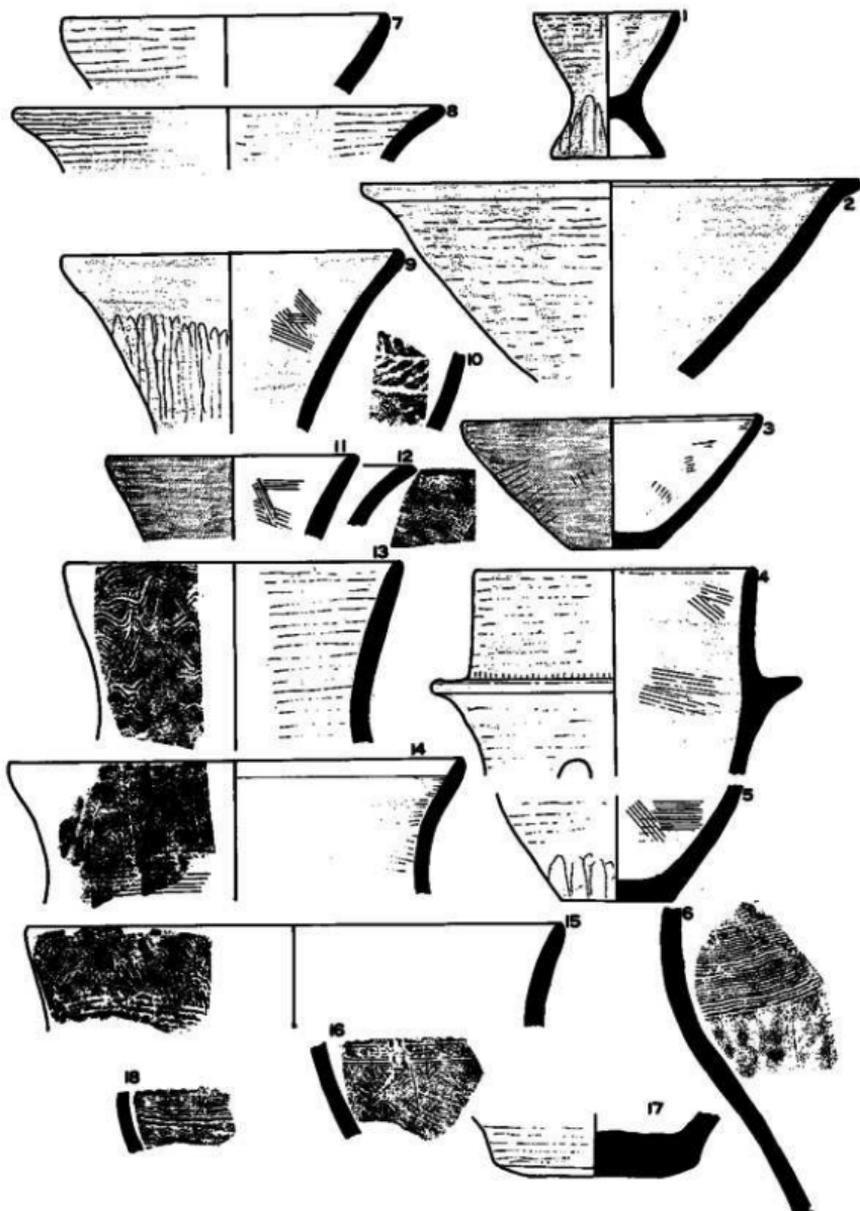
B 弥生時代の出土遺物

Ⅲ地区で検出された遺物は、S-2製鉄跡遺構から出土した多量の鉄滓をはじめ、高坏形土器鉢形土器、および鉄鏃などである。

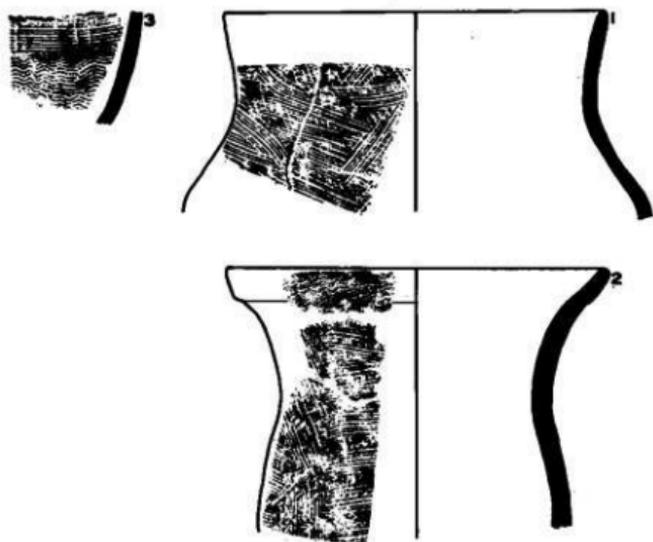
(1) 高坏形土器(第99図1・2)

1はS-2製鉄跡遺構のくぼみから検出されたもので、口縁端は丸く、口径がわずかに7cm、器高6.9cm、底部径5.5cmを測るミニチュア土器で、口辺部は立ち気味にわずかに内弯し、接着部で「く」の字形を描き、脚部もやや内弯気味の断面梯形につくられている。器面は坏部では横に脚部では縦に流してヘラ磨きされ、丹彩が施されている。

2は尾崎式平行期のY-5号住居跡から検出された土器で脚部を欠いている。口縁は唇状で外反りし、口径が2.4cmを測り、脚部はかすかに内弯して深く、接着部に向って急速に縮約している。器面はヘラを横に便つて調整し、丹彩が施されている。



第99図 城の前遺跡Ⅲ地区出土遺物(弥生式土器)実測図(Ⅰ) 1:3



第100図 城の前遺跡Ⅲ地区Y-5出土遺物(弥生式土器) 実測図(2) 1 : 3

(2) 鉢形土器 (第99図31)

この土器は、H-5号住居跡から検出された尾崎式平行期の土器である。口縁端は丸くわずかに内弯し、口径が14.3cm、胴部はほとんど直斜状に縮約し、底部径が4.2cm、器高が6.3cmを測り、器面は丹彩が施されて、ハケ目により調整している。

(3) 壺形土器 (第99図5・6・8~11)

この器形は、口辺部と胴部の破片であるが、後期の各期にわたるものが検出されている。

(イ) 尾崎式平行期の土器 (第99図9・10)

9は口縁端が丸く、わずかに内弯し、口径が16.2cm、口辺部は強く外反りして頸部で急に縮約している。10は頸部の破片であるが、葉脈痕状の文様が施文されているところに特色がある。器面はいずれもへら磨き調整され、丹彩が施されている。

(ロ) 箱清水Ⅰ式土器 (第99図11)

口縁端は丸く、口径が11.9cm、口辺部は緩く外反りしている。器面はへら磨き調整され、丹彩が施されている。

(ハ) 箱清水Ⅱ式土器(第99図5・6・8)

8は口縁端が丸く、口辺部が弓なりに外反りしている。5は平底で、下胴の張りが弱い。6は頸部の破片で、幅広く櫛描簾状文が施文され、胴部の張りは弱い。器面はいずれも丹彩があり、ヘラ磨き調整されている。

(4) 壘形土器(第99図7・12~18、第100図1~3)

(イ) 尾崎式平行期の土器(第99図18、第100図1~3)

器形は、口縁端が丸く、口辺部がわずかに外反りし、胴部が強く張るもの(1)と、口縁端が丸く、外側に緻密な櫛描波状文を施文して複合口縁状につくり、そこで小さな段落をつくつて、口辺部が弓なりに外反りし、胴部の張りが弱いもの(2)などがある。

器面の文様は、綾杉状に櫛描斜文を施文するもの(1・2)と、頸部に櫛描簾状文を施文し、口辺部と胴部に櫛描波状文を描くもの(18・3)がある。

(ロ) 箱清水Ⅰ式土器(第99図16)

検出されたのは、いずれも小破片で、器形を明らかにできないが、胴の張りが強く、緻密な櫛描波状文を施文している。

(ハ) 箱清水Ⅱ式土器(第99図7・12~15)

7は口縁端が丸く、口縁部が立ち気味に内弯し、口辺部も緩く内弯して頸部で弱い「く」の字を描くもので、器面と内面には丹彩を施している。この土器は、箱清水Ⅱ式の壘形土器に伴出する特徴のある土器である。

器面に櫛描簾状文と波状文を施文する器形は、口縁端が丸く、口辺部は立ち気味に緩く外反りし頸部のくびれが小さく、口辺部の長いものと、口縁端がわずかに尖り、口辺部が前者より短く、外反りのやや強いもの、外反りのきわめて強いものなどの3器形がある。

(5) 罎付円筒形土器(第99図4)

この土器は、尾崎式平行期のH-5号住居跡から検出されたものである。口縁端は丸く口辺部が直立し、罎は上面が平らで、下面から胴部にかけては弓なりに外反りし、上胴部に径1.5cmほどの穴を穿つものである。下胴は欠損して、全体の器形は明らかでない。器面はヘラ磨き調整により内外面に丹彩がある。

(6) 鉄器(第80図)

Ⅲ地区から検出された鉄器は、Y-1号遺構から検出された刀子と鉄鎌である。

刀子は現長が9.9cm、切先に向つてしだいに細くなり、切先が少し欠けている。

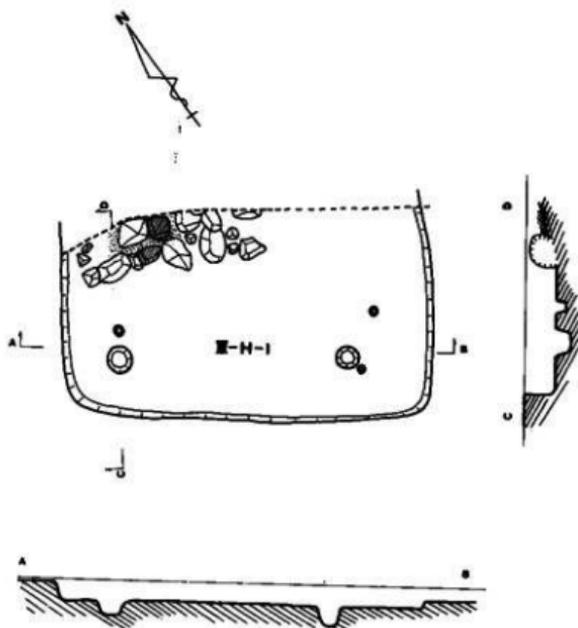
鉄鎌は現長7.4cm、三角形の尖頭鎌で、断面が柳葉状である。莖部はかなり欠損しているが、断面円形である。

しかし、この地方における弥生時代の鉄器は、ほとんど前例がなく、若干の疑問が残る。今後の調査例の累積を待つて、再検討したいと思つているが、少なくとも今回の調査の出土状態をみると、この遺構内から伴出した土器には、弥生後期の箱清水Ⅱ式に比定されるもの以外になく、また隣接して同期と推定される製鉄跡遺構が検出されていることなどから、箱清水Ⅱ期に平行する時期の鉄器と断定せざるを得ない。

C 古墳時代と歴史時代の遺構

Ⅲ地区で検出されたこの時期の遺構は、和泉期1・真間期2・国分期5、性格不明の溝状遺構1などである。

(1) H-1号住居跡(第101図)



第101図 城の前遺跡Ⅲ地区遺構実測図(1) 1:60

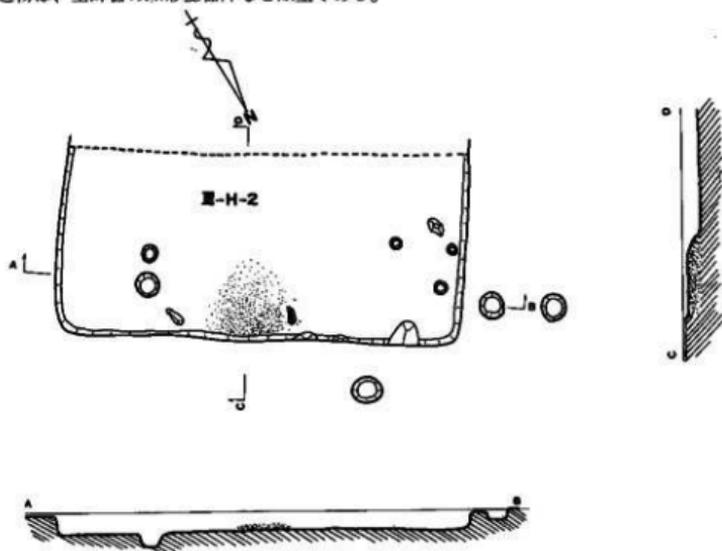
この遺構は、A-8-10グリッドを中心に検出された国分期の遺構である。平面プランは、遺構の北側が確認されていないので明らかでないが、東西径が3,61mを測る隅丸長方形と推定される。南壁で測る壁高は、およそこの壁沿いに径約23cm、深さ18cmほどの柱穴状ピット2個が検出され、また西壁に近いA-9・10グリッド北端付近に、焼けた凝灰岩2個と崩れた石組を伴う焼土層が検出された。焼土層の奥行きは、すでに35cmを測るので、奥壁(北壁)の位置は、さらに20~30cmぐらい北壁にあるものと推定される。この場合の南北径は、およそ2,20~2,30m前後と推定される。

出土遺物は、土師器の環形土器、鉢形土器、甕形土器と須恵器の環形土器などである。

(2) H-2号住居跡(第102図)

この遺構は、B-11・12グリッドを中心に検出された国分期の住居跡である。平面プランは南側が未確認で、東西径が3,93cmを測る。床面はほぼ水平で、北壁ほぼ中央付近に、奥行き約80cm、幅約70cmを測る厚い焼土層が検出され、かまど址の崩壊したものと考えられる。柱穴状ピットは、北壁沿いの東寄りと、北壁および西壁の外側北西隅寄りにそれぞれ1個が検出された。しかし、いずれも対称性を欠き、構造が明らかでない。

出土遺物は、土師器の環形土器片など微量である。



第102図 城の前遺跡Ⅲ地区遺構実測図(2) 1:60

(3) H-3号住居跡(第103図)

この遺構は、B-19・12グリッドに、北東隅の一部分が検出された国分期の住居跡である。

従つて、遺構のプランは明らかでないが、H-5号住居跡の床ははつてつくられている。出土遺物は比較的豊富で、土師器の鉢形土器・环形土器・甕形土器・壺形土器、および須恵器の甕形土器片などが検出されている。

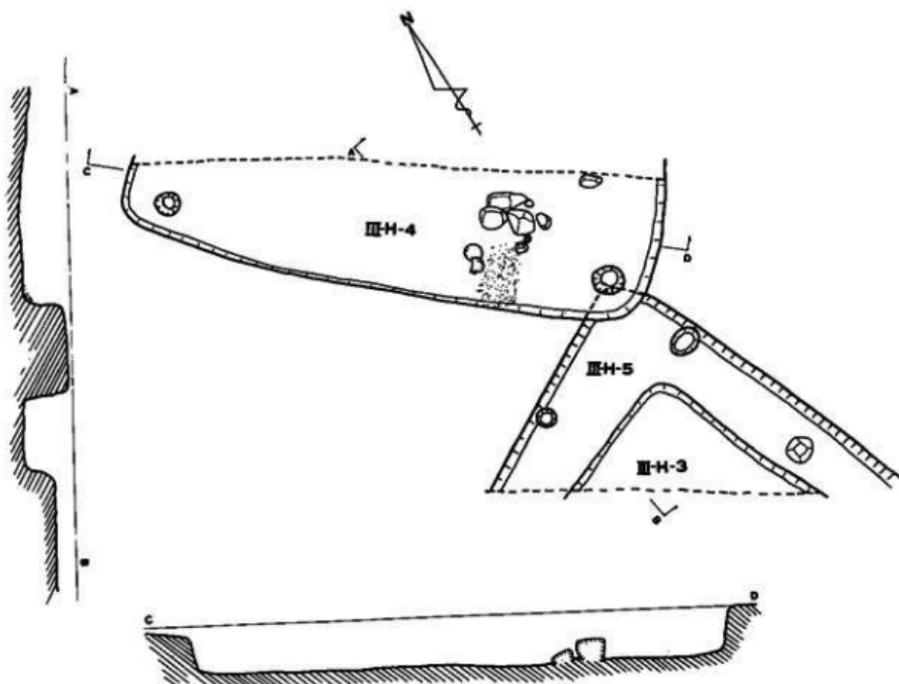
(4) H-4号住居跡 (第103図)

この遺構は、A-20-22グリッドで検出された真間期の住居跡である。平面プランは、北側の大部分が調査区外であるため明らかでないが、東西径5.17mを測る隅丸長方形と思われる。床面はほぼ水平で、南壁東寄りに、奥行き63cm、幅35cmほどの焼土層があり、また、東西両側に、径30cm、深さ25cmほどの柱穴が検出され、壁高48cmを測る。

出土遺物は、ほぼ完形の土師器の环形土器と須恵器の甕形土器および壺形土器の破片などである。

(5) H-5号住居跡 (第103図)

この遺構は、B-18-20グリッドで検出され、この上に国分期のH-3号住居跡が床をはつ



第103図 城の前遺跡Ⅲ地区遺構実測図(3) 1:60

て構築されている真間期に比定される住居跡である。

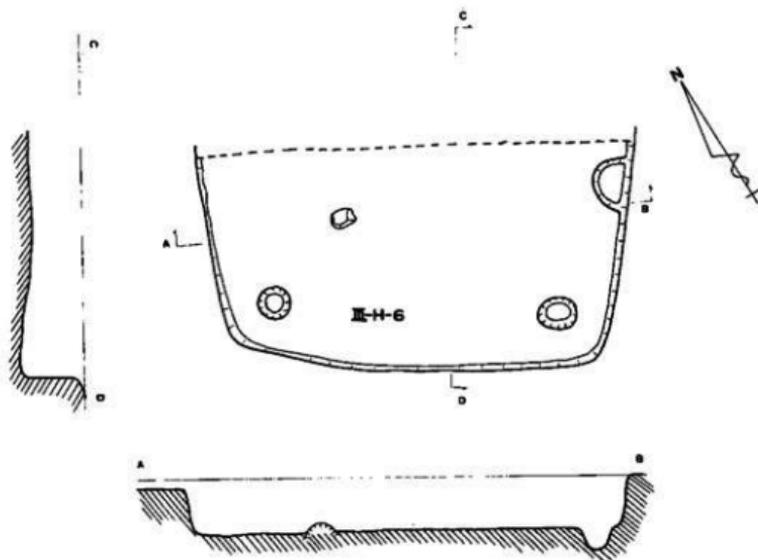
平面プランは、北東隅が検出されているだけで明らかでない。

出土遺物は、環形土器と甕形土器の破片などが少量である。

(6) H-6号住居跡 (第104図)

この遺構は、A・B-25・26グリッドを中心に検出された国分期の住居跡である。平面プランは、北半分が検出されていないため明らかでないが、東西径が4.04mの隅丸長方形と考えられ、南壁沿いに径38cm、深さ27cmほどの柱穴が検出された。床面はほぼ水平で、壁高42cmを測り、東壁際に性格不明の半円形のピットが検出された。

出土遺物は、土器の環形土器と須恵器の環形土器および甕形土器が検出されている。



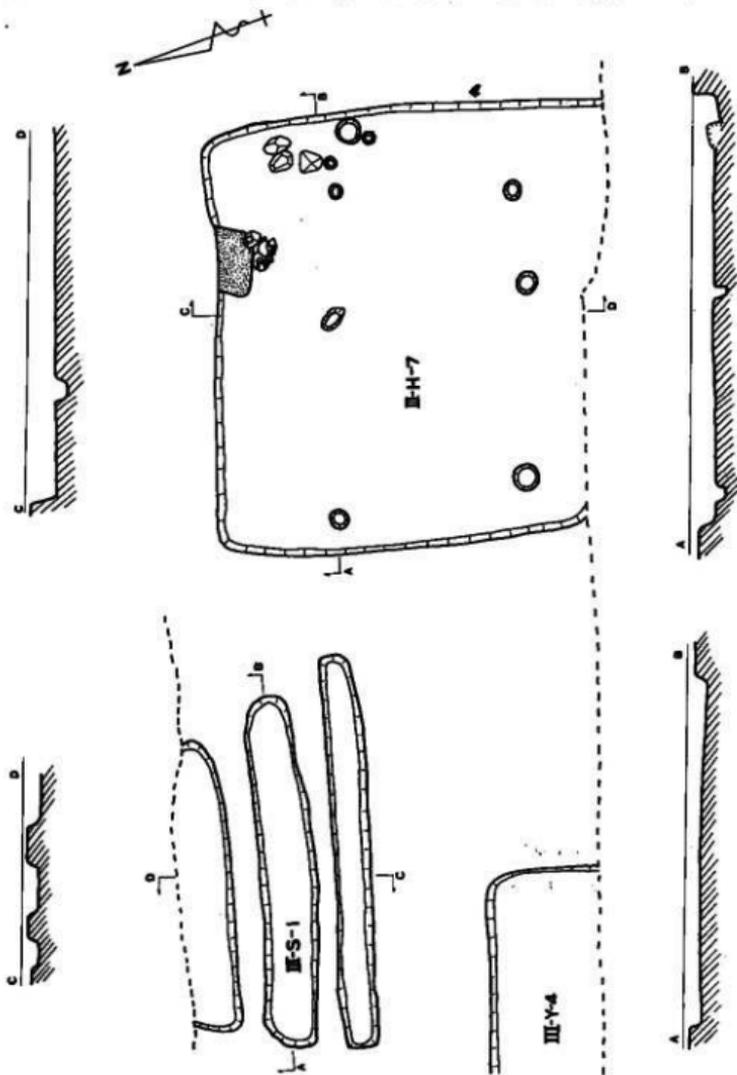
第104図 城の前遺跡Ⅲ地区遺構実測図(4) 1:60

(7) H-7号住居跡 (第105図)

この遺構は、A・B-4・5グリッドを中心に検出された国分期の住居跡である。平面プランは南壁の一部が明らかでないが、長軸心線の方が $N86^{\circ}W$ につくられ、長径が3.92m、短径が3.40mの隅丸長方形である。床面はほぼ水平で、壁高23cmを測り、北壁のやや東寄りに奥行き33cm、幅62cmの厚い焼土層を検出した。また、柱穴状ピットは、径18~24cm、深さ1

0 cm前後のきわめて小規模なものが、南北2列に計6個がほぼ対称的に検出された。

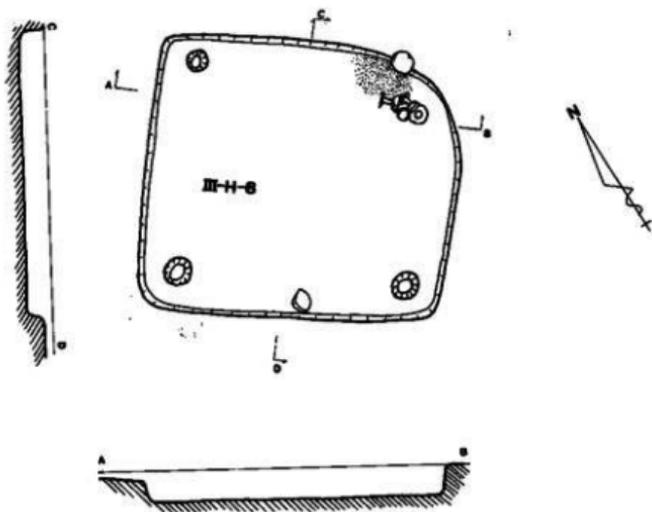
出土遺構は、土師器の坏形土器・変形土器・台付皿形土器、および須恵器のほぼ完形の坏形土器・変形土器などが検出されている。完形の坏形土器は、かまど址の脇から検出された。



第105図 城の前遺跡Ⅲ地区遺構実測図(5) 1 : 60

(8) H-8号住居跡(第106図)

この遺構は、A・B-1~3グリッドで検出された和泉期の住居跡である。平面プランは、長軸心線の方角がN64°Wにつくられ、長径が3.04m、短径が2.70mの隅丸長方形である。床面はほぼ水平で、壁高およそ23cmを測り、北壁際の東隅寄りに、奥行き40cm、幅55cmの焼土層が検出され、その東南脇に、ほぼ完形の高環形土器と埴形土器が検出された(図版28)。



第106図 城の前遺跡 地区遺構実測図(6) 1:60

(9) S-1溝状遺構(第105図)

この遺構は、A-6~8グリッドで検出された遺構で、周辺から国分期の環形土器片などが検出されているが、時期は明らかでない。遺構は、幅20~30cmの畝状を呈し、高さが7~8cm、長さには南端のものが3.50m、中央のものが3.13m、北端のものが2.57mである。さらに北側は、調査区の関係で未確認である。この溝状遺構は、いかにも規模が小さく、性格も明らかでない。

D 古墳時代と歴史時代の出土遺物

a 土師器(第92・107・108図)

Ⅲ地区から検出された土師器は、坏形土器・皿形土器・台付皿形土器、台付埴形土器・高坏形土器・甕形土器・埴形土器などである。

(1) 形土器 (第92図)

㊦ 真間式土器 (第92図10・12)

10は口縁端が丸く、わずかに唇状を呈して外反りし、下胴部に張りがなく、底部は丸底である。器面はヘラ磨き調整され、内面黒磨によつていゝ。口径が15、2cm、器高が3、7cmである。

12は口縁端が尖り、器面はロクロ状の擦痕が残る。

㊧ 国分式土器 (第92図8・13・15・16)

8は口縁端が丸く、胴部は緩い内弯形である。13・15は口縁が尖り、いずれも弱い内弯形で後者のカーブがわずかに強い。

(2) 鉢形土器 (第92図9)

この土器は、国分期H-3号住居跡から検出されたものである。口縁端が丸く、口辺部から上胴部は、立ち気味にわずかに内弯し、下胴が緩く張り、底部で弱い絞肉をつつていゝ。口径が12、1cm、器高が9、1cm、底部径が5cmで、器面は赤茶褐色を呈し、ヘラで調整されている。

(3) 台付皿形土器 (第108図3)

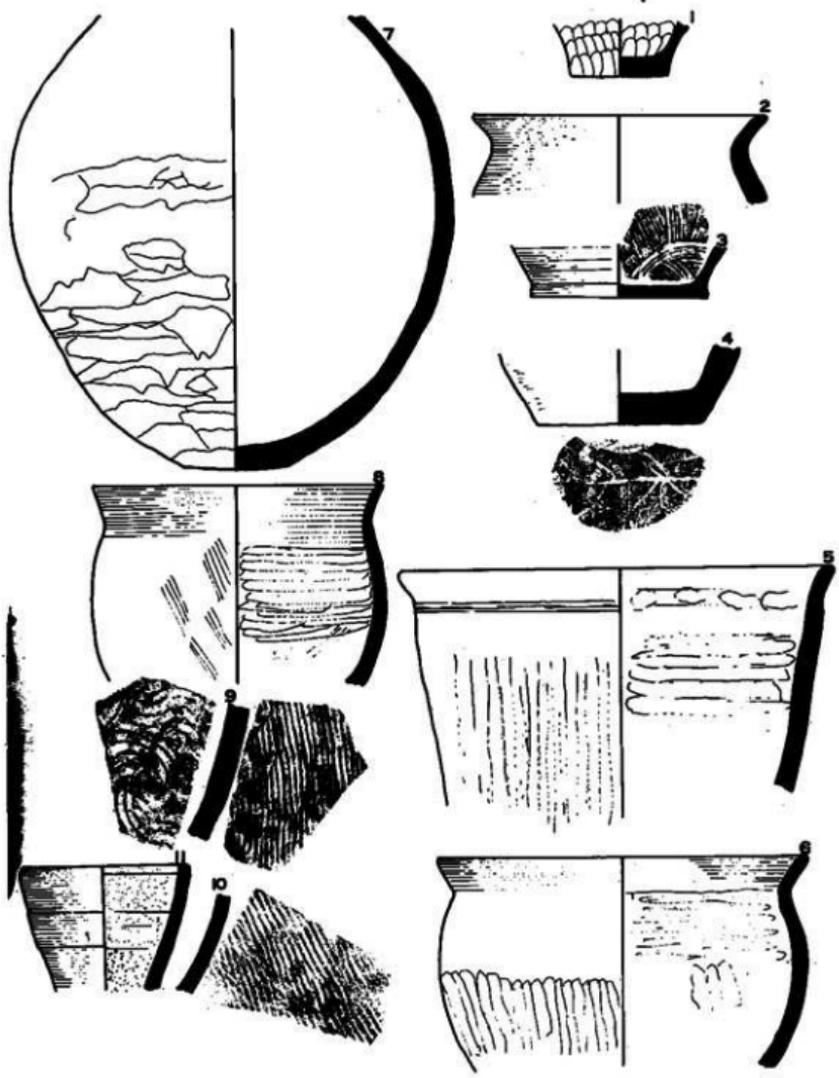
口縁端は丸く、胴部が直斜状に大きく開き、器台部は断面台形である。口径が13、7cm、器高が3、2cm、底部径が7、7cmで、器面は淡赤茶褐色を呈し、内面黒磨の国分式土器である。

(4) 台付埴形土器 (第108図4)

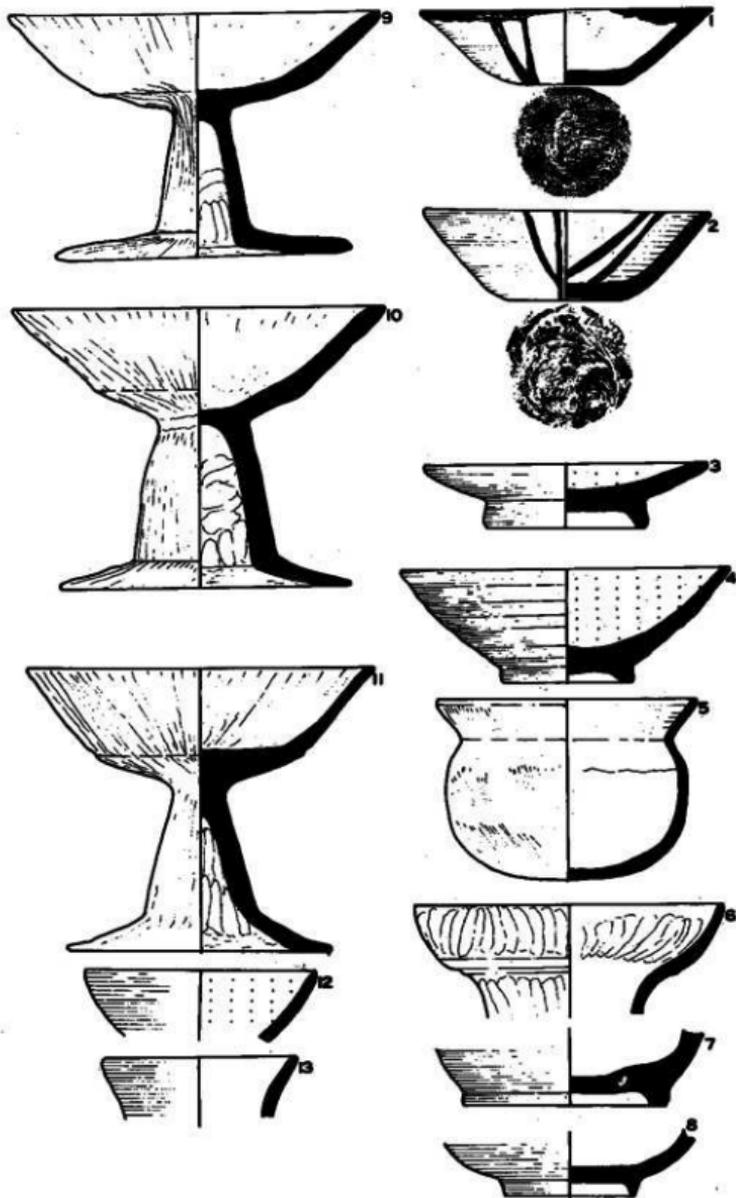
口縁端が丸く、胴部は緩く内弯し、器台は埴部に対して小型で、断面長方形である。口径は16cm、器高はロクロ状の擦痕がよく残り、内面黒磨の国分式土器である。

(5) 高坏形土器 (第108図9~11)

この器形の土器は、いずれもH-8号住居跡のかまど址脇から検出された和泉式土器である。器面はいずれも暗茶褐色を呈し、ヘラを縦につて調整し、手法は酷似しているが、器形はそれぞれ特色がある。



第107図 城の前遺跡Ⅲ地区出土遺物実測図(1) : 3



第108図 城の前遺跡Ⅲ地区出土遺物実測図(2) 1 : 3

9は口径が17.9cm、全器高が11.8cm、底部径が14.3cm、坏部の器高が4.6cmで、他の2個より浅く、脚部上胴の径も2.8cmで小さい。口縁端は丸く、口辺部は直斜状に大きく開き、下胴で弱い稜角をつくっている。脚部は接着部が最も細く、しだいに太くなり、胴部がわずかに張り、裾部はL字形に大きく開いている。

10は口径が18cm、全器高が13.7cm、底部径が14.2cm、坏部の器高が5.4cmで9より深く、上胴の径も4.4cmと太い。

口縁端は丸く、口辺部は直斜状に開くが、9より立ち気味で長く、下胴で弱い稜角をつくっている。脚部は接着部が最も細く、胴部は張り気味にしだいに太くなり、裾部はやや浅いラッパ状に大きく開いている。

11は口径が16.8cmでも小さく、全器高が13.8cm、坏部の器高は5.7cmで一番深い口縁端が丸く、唇状を呈し、胴部は直斜状で、下胴部に弱い稜角をつくっている。脚部は接着部の径が2.6cmで、前2者より下胴部の開きが大きく、裾部はラッパ状に開いている。

この時期の高坏形土器は、この地方、比較的少なく、埴形土器などと共に、今後の標準資料として利用できよう。

(6) 変形土器 (第107図1・2・4・6~8)

(イ) 和泉式土器 (第107図7)

口辺部は欠損しているが、胴部が大きく張り、最大径は中胴部にあり、21.4cmを測る。下胴はスマートな楕円カーブを描いてしだいに縮約し、底部径5.2cmを測る。器面は赤茶褐色を呈しかなり剥落している。

(ロ) 国分式土器 (第107図1・2・4・6・8)

口辺部の器形は、いずれも外反りしているが、反りにかなりの強弱の差があり、反りの弱いものは概して胴部の張りが弱く、反りの強いものは、胴部の張りも大きく、頸部は「く」の字形を呈している。器面はいずれも赤茶褐色を呈し、ヘラ磨きまたはハケ目で調整されている。底部は平底で底部径が4.8cmでやや小さく、下胴の張りの強いもの(1)と、底部径が7.9cmで下胴の張りの弱いもの(4)がある。

(7) 埴形土器 (第108図5)

この土器は、前述の高坏形土器に伴出した和泉期の土器である。口縁端は丸く、口辺部が強く外反りし、頸部で強い「く」の字形を描き、肩から胴部で強く張り、口径が12.5cm、器高が8.8cm、胴部最大径が11.8cmを測る。器面は黄土色を呈し、ハケ目で調整されている。

(8) 皿形土器 (第92図11)

この土器は、H-4号住居跡から検出された真間期の土器である。口縁端は尖つて内側が斜めに
なり、その先で稜角をつくり、胴部は緩く内弯して、底部は平底につくられている。口径が11、
3cm、器高が1、8cmときわめて低く、底部径が8、8cmを測る。

b 須恵器 (第92・107・108図)

器形は、甕形土器・器台形土器・坏形土器および壺形土器などである。

(1) 甕形土器 (第107図9・10)

いずれも国分期の土師器と伴出した大型土器の破片で、器形を復元できるものはない。胴部は緩
く張り、器面はタタキ目によつて整形し、9の内面は青海波文が認められる。

(2) 器台形土器 (第108図6)

坏部の破片で、完形できないが、和泉期の土器と伴出している。口径は15cmで、口縁端がわず
かに尖り、口辺部は緩く内弯し、頸部で反転して強く外反りしている。器面は暗灰色を呈し、ヘラ
磨き調整されている。

(3) 坏形土器 (第92図14・第108図1・2)

いずれも国分期の土器に伴出したもので、器形はおよそ完形に復元できる。口辺部は立ち気味の
直斜状につくり、口径が12cm、器高が3、2cm、底部径が7、8cmを測り、糸切り上げ底である
1は口縁端が外側にわずかに尖つて外反りし、胴部は内弯形である。口径が14、2cm、器高が3
、6cm、底部径が5、4cmで糸切平底につくられ、器面は青褐色を呈し、ロクロ状の擦痕がよく残り、
縦に黒色の縞が走っている。2は口縁が小さく唇状に外反りし、胴部はほとんど直斜状で、底
部に稜角をつくらないで、丸味をもたせ、糸切り上げ底につくられている。口径が13、8cm、器
高が4、5cm、底部径が5、8cmで、器面は青褐色を呈し、ロクロ状の擦痕がよく残り、内外面に
黒色の縦縞がつけられている。

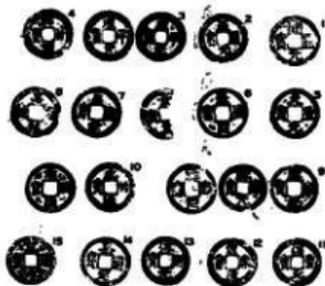
(4) 壺形土器 (第107図3)

底部の破片で、国分期の土器と伴出している。底部は糸切り平底で、稜角をつくつて器台状に立
ち上がり、下胴の張りは弱い。器面は灰白色を呈し、ロクロ状の擦痕がよく残り、胴部内面には櫛
描状の沈線斜文がつけられ、底部には3本の円形の輪郭をつけ、内部を同じ手法で施文している。

C 古 銭

古銭はⅠ地区のⅠ-H-38号住居跡覆土上層と、Ⅲ地区の第Ⅲ層上層から検出され、また、Ⅲ地区の南側から土地所有者が耕作中に相当量の古銭を収集しているが、すでに多くが散逸して、出土枚数を確認することはできなかった。

この遺跡から検出された古銭は、開元通宝(621・唐銭)・淳化元宝(991)・至道元宝(995-997)・咸平元宝(998-1003)・祥符通宝(1008)・天聖元宝(1023)・景祐元宝(1034)・皇宋通宝(1039)・至和通宝(1054)・嘉祐通宝(1056-1063)・治平通宝(1064-1067)・熙寧元宝(1068)・元豐通宝(1078)・元祐通宝(1093)・紹聖元宝(1094-1097)・聖宋元宝(1101)以上北宋銭、淳熙元宝(1174)・嘉定通宝(1208)以上南宋銭、および寛永通宝などである。(第109図)これらの古銭は、今回の調査によって検出された遺構との関連性はないと考えてよからう。また、先に加沢善福寺の調査時に、ほぼ同期の21種におよぶ古銭を検出している。しかし、本遺跡の古銭が隣接するこの善福寺跡となんらかの関係があるのか、今回の調査では解明できなかった。因に今回の調査で検出された古銭は、寛永通宝など6枚である(図版34)。



第109図 城の前遺跡出土の古銭 1:2

第IV章 考 察



第110图 Ⅲ-H-8号住居跡遺物出土状態

1 弥生時代の遺構と遺物

A 遺 構

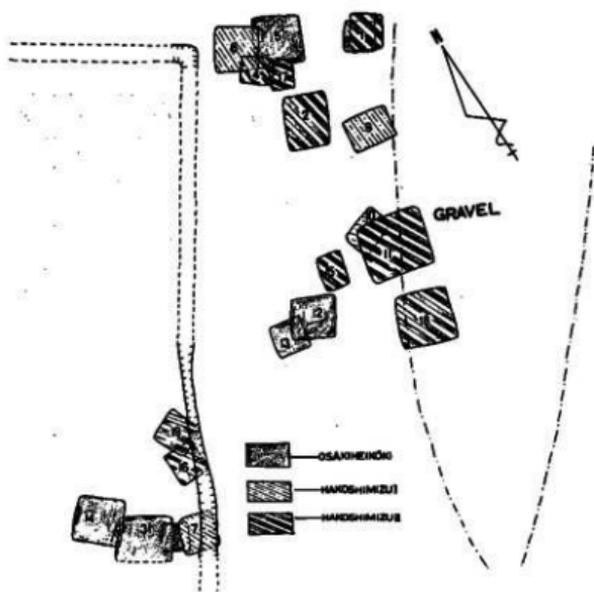
上小地方では、最近の調査によつて、後期の箱清水Ⅰ・Ⅱ期の遺構が数多く発見され、しだいにその様相が明らかになつてきた。今回の調査でも、箱清水Ⅰ期の遺構が8、箱清水Ⅱ期の遺構が15、その他に製鉄跡遺構と環溝が発見されて注目された。しかし、今回の調査で特筆されるのは、後期の尾崎式平行期の遺構の検出であろう。

(1) 尾崎式平行期の遺構

遺構番号	長軸心線方位	長 径(M)	短 径(M)	平面プラン	炉 址	備 考
I-Y-3	N60°W	5.20	308	隅丸長方形	東側中央	
I-Y-5	N32°E	4.00	310	◇	?	
I-Y-12	N65°W	4.43	4.15	◇	中央北寄り	
I-Y-13	N70°W	3.40?	3.40?	隅丸方形?	中央東寄り	
I-Y-14	N45°E	4.50	4.47	◇	南東隅寄り	
I-Y-20	?	?	3.15	◇?	?	
Ⅱ-Y-7	N52°W	2.68	2.65	◇	中央西寄り	
Ⅲ-Y-2	?	東西径4.23	?	隅丸長方形	?	
Ⅲ-Y-5	?	?	?	?		

今回の調査で検出された尾崎式平行期の遺構は、上表のとおりⅢ地区併せて9である。複合状態などから推考して、1時期に営まれた住居跡の分布を推考すれば、まず第5・12・14の3住居跡が考えられる(第111図)。そしてこれに先行する遺構は、第3・13号の2住居跡である。しかし、前3戸の住居跡についてプラン、規模を比較してみても、近似性は少なく、今回の調査資料では、その特色を伺うことはできない。今回の調査結果からみて、この時期の遺構は、西北の中央部分に中心があるように思われる。従つて、この時期の遺構については、さらに今後の調査を待つて、検討を加えたいと思つている。

(2) 箱清水Ⅰ期の遺構



第111図 城の前遺跡I地区の遺構(弥生時代) 1:600

検出された8遺構は、比較的規模の小さいものが多く、プランは隅丸長方形が主体と考えられる。そして、遺構の分布状態は、西北方の微高を中心にして、およそ半円を描いている。(111図)

遺構番号	長軸心線方位	長径(M)	短径(M)	平面プラン	炉址	備考
I-Y-6	N40°E	4.10	3.00	隅丸長方形	北寄り	
I-Y-7	N24°E	3.54	2.74	◇	?	
I-Y-8	?	?	1.90	?	?	
I-Y-9	N20°W	3.74	3.25	◇	?	
I-Y-10	N70°E	3.52	3.00	◇	?	
II-Y-1	?	東西径5.30	?	?	?	
II-Y-4	?	?	?	?	?	
III-Y-4	?	東西径2.55	?	?	?	

(3) 箱清水Ⅱ期の遺構

遺構番号	長軸心線方位	長径(M)	短径(M)	平面プラン	炉址	備考
I-Y-1	N35°E	3.98	2.80	隅丸長方形	中央北寄り	土器のセット
I-Y-2	N28°E	5.40	3.80	◇	?	—
I-Y-4	?	?	?	◇	?	—
I-Y-11	N80°W	6.40	5.60	◇	北壁寄り	鉄器
I-Y-15	N18°E	3.45	2.42	◇	北壁寄り	
I-Y-16	N74°E	3.50	3.08	◇	?	
I-Y-17	N24°E	?	2.65	◇?	?	
I-Y-18	N40°W	4.94	?	◇?	北壁東寄り	
I-Y-19	N70°E	3.54	3.33	◇	北壁西寄り	
Ⅱ-Y-2	N56°E	1.82	1.76	◇	?	小竪穴
Ⅱ-Y-3	N32°E	1.96	1.67	◇	?	◇
Ⅱ-Y-5	N78°E	4.88	4.23	◇	中央南側	
Ⅱ-Y-6	?	?	?	?	?	
Ⅲ-Y-1	?	東西径3.80	?	?	?	
Ⅲ-Y-3	?	東西径4.85		隅丸長方形?	中央東寄り	

この時期の遺構は、いずれも長方形プランで、炉址の位置は、北壁寄りにつくられたものと、中央に位置するものがある。規模は小竪穴状の小規模のものから一辺6m余におよぶ大規模のものがあり、およそ長径が5m前後の小規模のタイプに分類することができる。

東部町における弥生時代の遺構は、これまでも小規模には検出されているが、その例数がきわめて少なく、今後の調査、研究の進展を待つて検討したい。



第112図 城の前遺跡Ⅱ地区の遺構(弥生時代) 1:600

B 出土遺物

検出された各期の遺物について概観する。

(1) 尾崎式平行期の土器

この時期の土器は、壺形土器・甕形土器・鉢形土器・台付甕形土器・甗用鉢形土器・銅付円筒形土器などが検出されている。

壺形土器は、口縁部が内弯するものと外反りするものがあり、後者にはさらに反りの強いものと弱いものがある。内弯形の器形は、中期の百瀬式の特徴を残すものであろうか。さらに壺形土器にみられる特色は、頸部の施文と胴部の器形である。頸部の施文は、箱清水式にみられるような櫛描簾状文もすではじまっているが、ヘラ描あるいは櫛描でつけた沈線斜文を施すものと、葉脈痕状の文様を施文するものがある。また胴部の器形は、最大径が下降して、下腹にあるものが多く、張りには強弱2様がある。器面はいずれもヘラ磨きし、丹彩が施されている。

甕形土器は、口辺部が概して長く、口縁が大きく開いて立ち気味に内弯するものと外反りするものがある。また、口縁部が折返して複合口縁状につくられている。ものがあることもこの時期の特色の一つであろう。胴部は概して肩部から半円の弧を描いて強く張るものが多く、中にはなで肩で張りがなく、中胴で張るものもある。頸部は長いものが多く、中にはくびれが強く、壺形に近い器形を呈するものもある。施文は繊細な櫛描波状文と頸部に簾状文を施すものもあるが、胴部に櫛描沈線斜文や稜杉状の櫛描山形文を施し、口辺部には繊細な櫛描波状文を施し、頸部には櫛描簾状文を施したものが多い。

鉢形土器は、口縁が内弯し、胴部が直斜状に縮約して丹彩の施されたものと、大型で胴部は直斜状に縮約し、底部に器台状の断面方形の立ち上がりのあるものなどがあり、後者は丹彩が施されていない。前者は後の箱清水式土器に近似し、後者は中期の百瀬式に類似している。

高坏形土器は、口辺部が直斜状に開き、下腹部へ縮約して稜角をつくる坏部と、脚部は上胴で緩く外反りし、断面は器台に似た梯形状をつくるものである。坏部の下胴は、箱清水式への片りんを示すが、口縁の器形に特色が認められる。

甗用鉢形土器は、口辺部と上胴部を欠くので、全体の器形は明らかでないが、前述の鉢形土器の底部に1孔を穿つた器形によく似ている。

台付甕形土器は、箱清水式土器に比較して肩部と上胴の張りが強く、文様の櫛描波状文もやや繊細のように思われる。

(2) 箱清水Ⅰ式土器

この時期の土器は、壺形土器・甕形土器の他は、いずれも破片で、器形の考察は困難である。

壺形土器は、いずれも口縁端部が丸く、やや内弯するものと外反りするものの2器形がある。頸部の反りは一般に緩くなり、胴部は無果花形を呈し、下胴に稜線をつくるものが多い。器面はへら磨きで丹彩が施されている。

甕形土器は、口辺部が長くて大きく開き、胴部の張りの強いものが多い。

(3) 箱清水Ⅱ式土器

この時期の土器は、壺形土器・鉢形土器・高坏形土器・甕形土器などが検出されている。

壺形土器は概して小型のものが多く、口辺部の器形は、強く弓なりに外反りして 部のくびれの強いもの、口辺部の外反りが緩く、頸部のくびれも弱いもの、口縁部が内弯気味に立ち上がり、口頸部は大きく外反りしてくびれるものなどがある。胴部の器形は、肩に張りがなく、最大径が中胴部に上がり、下胴部に稜線をつくるものがほとんどないなどⅠ式との差異が認められる。

鉢形土器は、口縁部が内弯し、下胴部が緩く外反りするものと内弯形がある。中胴は直斜状で、器の内外面に丹彩が施されている。尾崎式平行期の土器と比較すれば、まず丹彩のある同器形では下胴部に変化が認められないこと、また他の器形は、大型で底部に立ち上がりがあり、箱清水Ⅱ式とは異なる用途をもつことが推考されるなど、かなりの差異が認められる。

高坏形土器は、口縁が唇状外反りで、胴部が緩く内弯し丸味のある深鉢形を呈する。この時期の高坏形土器は、胴部に稜角をつけるものもあるが、口縁に変化があり、口縁端に山形突起をもつものがあるなどの特色が認められる。

甕形土器は、一般的に小型化の傾向をたどり、胴部の張りも弱く、文様の描漆液状文に粗さが目立つなどの特色があらわれている。また、文様が全く消失して、器面の内外に丹彩を施すものがあるのも大きな特色の一つであろう。この地方では、上田市の信州大学繊維学部敷地遺跡や天神遺跡、および向田Ⅱ遺跡などでもその所在が知られている。

また、環溝遺構から検出された壺形土器の破片は、頸部にボタン状の粘土板をつけ、終末期の特色を示している。この土器は、脚部が有孔の器台形土器などを伴出し、さらに五領Ⅰ式を伴うことが知られている。しかし、今回の調査では、これらの土師器の伴出は認められなかったが、弥生式土器終末期の特色を示すことは間違いなく、環溝遺構の時期を知ることができる。

2 弥生時代の製鉄跡遺構（第95図）

わが国の鉄器文化は、弥生時代前期にはじまり、中期ごろには、瀬戸内沿岸あるいは北九州などにみられる石炭丁の推移からみて、急速に発展したことは、容易に伺い得るところである。そしてこの鉄器文化は、古来政治権力と密着して、青銅器のもつ祭祀的・権威的の象徴としての性格より一層実用利器としての性格をもつていたと考えられる。

そして、弥生時代の鉄器は、「三国史」魏書東夷伝弁辰の項に「国出鉄、韓濼倭、皆從取之。諸市買皆用鉄。中国用錢。又以供給二郡」と記されるように、楽浪・帯方の2郡に供給され、わが国もまたこれを購入していたと考えられている。これは弥生時代の製鉄が、製錬は大陸で行ない、鍛造のみをわが国で行なっていたことを意味する。

しかし、わが国の弥生時代の鉄器が、果してすべてこのような方法で製造されていたのかは疑問である。これはわれわれが、鉄は溶解しにくい鉱物という先入主をもつて接し、製鉄にはかなりの設備を要するものと考えるところに問題がはじまる。もちろん筆者も冶金については、全くの素人であるから、先学の研究成果を引用するにとどまるが、山本博士の紹介するW・ゴランド氏の論文によれば、鉄鉱石から「可鍛鉄」をつくるには、700～800°Cの熱量で足りるといわれるこれに対して鋼錠から鋼を抽出するには、1,100°C程度の熱量を必要するといわれる。このように鉄の製錬は、鋼のそれよりもかなり容易であることがわかる。因に、弥生式土器の焼成は、700～850°C程度の熱量といわれるから、弥生式土器焼成の開放窯程度の設備があれば、小規模な初期の製鉄は可能であるといえる。

Ⅲ地区で検出された遺構は、千曲川から吹き上げる自然風を利用し、先端に風を吹き抜せる穴窯状の構造と煙出し口をつくり、主体部は焼けただれた火処と溶解鉄滓が固定した湯走りの溝状遺構からなっていた。従つて、この遺構からは、大量の溶解鉄滓、および吹き分けの不良な鉄滓、丹彩のある変形土器片などを含む弥生後期箱清水Ⅱ期の土器片、および完形のミニチュア土器と思われる高環形土器が遺構内、および溶解鉄滓の中に含まれて検出されたが、吹子の羽口などはなく、この遺構はたたら以前の製鉄跡と考えざるを得ない。そして、製錬のための製鉄遺構と推考される。

またこの遺構は、協会員の三波俊一郎氏からご教授いただいた宮城県の上高野鍛冶遺跡砂鉄荒焼柴炉跡と類似性がある。しかし、この地域でこのような構造をもつ製鉄跡は類例がなく、現状では比較研究も不可能に近く、調査の進展を待つて再考してゆきたいと思つている。先学諸氏のご示教をいただければ幸いである。また、報告書執筆の段階では、心にとめながら鉄滓成分の化学的分析ができなかつた。これらの研究は、つとに恩師和島誠一先生が行ない、筆者も資源科学研究所で若干の手ほどきを受け、いろいろ該当遺跡が発見されず今日至り、先生はすでに故人になつてしまつたことを心から惜しむものである。

注 1 William Gowland 「Journal of The Anthropological Institute」
Institute」 (Vol. XLii, July-12, 1912)

注 2 穴戸儀一 「民族の形成と鉄の文明」 1942 道統社 (抄訳)
佐藤庄吉 「深谷鍛冶遺跡調査報告書」 不忘郷土研究所

3 古墳時代と歴史時代の遺構と遺物

今回の調査で検出された住居跡、あるいはたたら跡をもつ竪穴遺構、その小竪穴遺構を含めて和泉期1、鬼高期16、真間期13、国分期58の計88、および土城5、吹子の羽口や鉄滓を伴出したたたら跡の遺構が8(うち1は若干の疑問が残る)などである。たたら跡については、次項で考察するので、本項ではその他の遺構と特色のある出土遺物について概観したい。

A 構

(1) 和泉期の遺構

遺構番号	長軸心線方位	長 径	短 径	平面プラン	かまど址	備 考
Ⅲ-H-8	N64°W	3.40	2.74	隅丸長方形	北 壁	—

この時期の遺構は、Ⅲ地区で検出されたものが1戸のみで、比較研究はできない。最近の調査例では、岡谷市の海戸遺跡で、同期の好資料が検出されている。この場合は、7.0×7.0mの隅丸方形でやや大きく遺構内から高坏7個以上と埴・鉢形土器などが検出されている。今回の調査でも、かまど址と思われる焼土層の脇から高坏形土器3個と埴形土器1個が伴出し、好個の資料として調査団一同を喜ばせた。

(2) 鬼高期の遺構

この時期の遺構は、遺跡の西中央付近を中心に検出された。遺構はかなり複合しているものが多く、プランを正確に把握できるものは少なかった。平面プランは、ほとんどが隅丸長方形で、規模は概して長径が4.50m前後のものが多く、しかし、2m台の小規模なものがあり、H-10号住居跡では、石組のかまど内から鬼高期の埴形土器が検出された。

遺構番号	長軸心線方位	長 径(M)	短 径(M)	平面プラン	かまど址	備 考
I-H-9	?	?	?	?	?	—
I-H-10	N35°E	3.98	2.80	隅丸長方形	北壁(石組)	—

I-H-15	?	東西径3.00	?	?	?	—
I-H-17	N58°W	?	南北径2.15	?	?	—
I-H-24	N18°E	4.72	?	隅丸長方形	?	たたら跡
I-H-25	N40°E	4.70?	?	?	?	—
I-H-26	?	?	?	?	?	—
I-H-30	N16°E	6.37	4.90	隅丸長方形	?	たたら跡
I-H-46	N34°W	4.04	3.81	◇	?	—
I-H-48	N22°E	2.74	2.45	◇	?	—
I-H-57	N50°W	3.50	3.43	◇	?	—
I-H-61	?	?	?	?	?	—
II-H-71	N54°W	4.57	3.93	隅丸長方形	?	—
II-H-1	N62°W	2.21	1.80	◇	?	—
II-H-2	N34°E	4.47	4.42	◇	西壁	—
II-H-3	E20°S	4.80	4.30	隅丸長方形	東壁中央	—

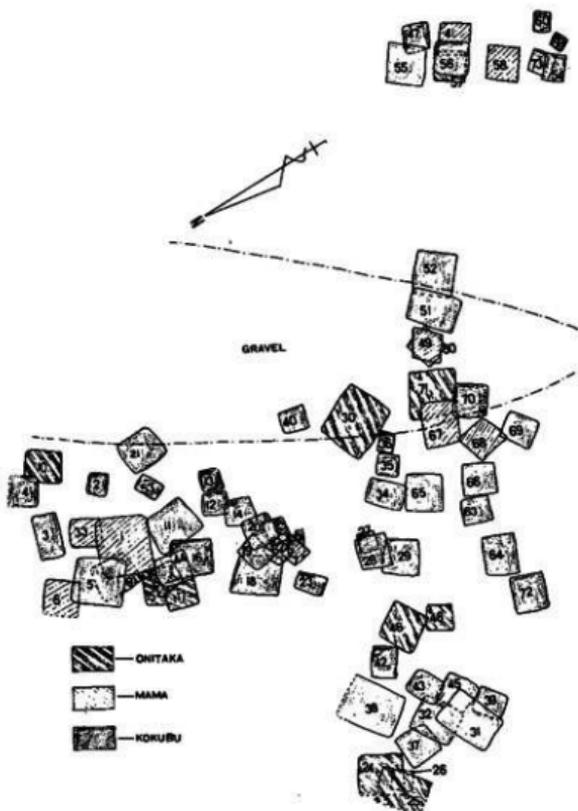
(3) 真間期の遺構

この時期の遺構は、いずれも平面プランが隅丸長方形で、かまど跡が東壁、あるいは南壁につくられたものが多い。これはこの地域の風向が、千曲川から吹き上げる西風、あるいは烏帽子岳方向から吹き下ろす北西風が多いためであろうか。

遺構の規模は、長径が6m近いものもあるが、概して3m前後の小規模のものが多く、分布も鬼高期の住居跡が比較的遺跡の中央にまとまっているのに対して、さらに南端部分まで広がり、次の国分期の遺構分布の先駆的役割を果たしている。(第113図)

遺構番号	長軸心線方位	長径(M)	短径(M)	平面プラン	かまど址	備考
I-H-1	N35°W	5.	4.22	隅丸長方形	東壁(粘土)	
I-H-6	?	?	3.00	◇	東壁	
I-H-7	N40°W	2.	1.93	◇	?	
I-H-33	N68°W	5.	4.58	◇	南壁	たたら跡?
I-H-41	?	?	?	?	?	
I-H-49	N56°W	3.	3.00	隅丸長方形	?	

I-H-50	N16° W	2.	2.48	◇	?	
I-H-58	N70° W	3.	3.14	◇	東壁	
I-H-67	N48° W	4.	3.10	◇	東壁(石組)	
I-H-68	N74° E	3.	2.78	◇	北壁	
II-H-4	?	南北径 3.2	?	◇	南壁	
III-H-4	?	東西径 5.17	?	◇	南壁東寄り	
III-H-5	?	?	?	?	?	



第113図 城の前遺跡I地区の遺構(古墳~歴史時代) 1:600

(4) 国分期の遺構

この時期の遺構は、およそ8世紀ごろから11世紀ごろにわたるものを一括しているの、今後さらに検討して細分化の必要があろう。

遺構の平面プランは、隅丸長方形と隅丸方形が半ばし規模も長径が5m前後のものがおよそ10%、4m前後のものがほぼ同率で、全般的には2~3m前後の小規模なものが多い。かまど址は、概して東壁、あるいは東壁寄りが多く、一部に南壁あるいは南壁寄りのものもあるこれは前述の風向に関連するものであろう。しかし、全般的には、プラン、規模の統一性がなく、石組かまど跡の構造も多様性が認められる。この理由は、一括して国分期としているが、実質的にはかなりの時間的な差があり、また村落内における支配的、あるいは社会的構造によるものであろう。



第114図 城の前遺跡II地区の遺構
(古墳~歴史時代) 1:600

遺構番号	長軸心線方位	長径(M)	短径(M)	平面プラン	かまど址	備考
I-H-2	N48°W	2.30	1.92	隅丸長方形	北壁	
I-H-3	N70°W	4.18	2.12	◇	北壁東寄り	鉄滓
I-H-4	?	3.00?	?	?	東壁(石組)	
I-H-5	N40°E	5.27	4.64	隅丸長方形	北壁東寄り (石組)	
I-H-8	W	2.87	2.70	◇	東壁(石組)	
I-H-11	N26°W	5.02	4.20	◇	東壁	たたら跡
I-H-12	N8°W	3.25	2.13	◇	東壁(石組)	
I-H-13	N80°W	2.45	1.92	◇	?	
I-H-14	N82°W	2.80	2.74	隅丸方形	?	
I-H-16	?	東西径3.60	?	?	?	たたら跡
I-H-18	N38°E	4.95	3.50	隅丸長方形	?	たたら跡
I-H-19	N66°E	2.95	2.68	◇	南壁東寄り	
I-H-20	N75°E	3.20	2.84	◇	西壁南寄り	

I-H-21	N 6° W	3.58	3.38	◇	?	たたら跡
I-H-22	?	東西径2.38	?	?	?	
I-H-23	N 6 4° E	2.90	2.50	隅丸長方形	北壁東寄り	
I-H-27	?	?	南北径1.52	?	?	小竪穴
I-H-28	N 1 6° E	2.93	2.70	隅丸長方形	北東隅	
I-H-29	N 3 4° E	3.52	3.45	隅丸方形	西壁(石組)	
I-H-31	N 7 4° E	5.42	4.01	隅丸長方形	北壁(石組)	
I-H-32	?	南北径4.28	?	?	?	
I-H-34	N 3 2° E	2.92	2.32	隅丸長方形	東 壁	
I-H-35	N 4 4° E	2.08	2.01	隅丸方形	?	
I-H-36	N 5 2° W	2.04	1.62	隅丸長方形	?	
I-H-37	N 3 6° W	3.65	3.54	隅丸方形	?	
I-H-38	N 5 0° E	5.26	3.83	隅丸長方形	北壁西寄り	
I-H-39	N 3 8° E	東西径3.60	?	?	?	
I-H-40	N 2 4° E	3.11	2.55	隅丸長方形	南壁(石組)	鉄 滓
I-H-42	N 6 2° W	3.10	2.61	◇	?	たたら跡
I-H-43	N 2 6° W	3.52	2.25	◇	東 壁	
I-H-44	N 4 4° E	3.72	3.47	◇	西 壁	鉄 滓
I-H-45	N 1 8° W	南北径3.50	?	?	?	
I-H-47	N 1° E	2.84	2.70	隅丸長方形	?	
I-H-51	N 4 2° E	5.00	3.22	◇	西 壁	
I-H-52	N 5 8° W	南北径4.31	?	◇ ?	?	
I-H-53	N 6 2° E	2.53	1.50	◇	?	
I-H-54	N 4 5° W	3.16	2.08	◇	東壁(石組)	
I-H-55	N 7 6° W	4.41	3.43	◇	?	
I-H-56	N 3 2° E	3.35	2.94	◇	?	
I-H-59	N 5 2° E	1.65	1.37	◇	?	小 竪 穴
I-H-60	N 3 3° E	2.50	1.28	◇	?	◇

I-H-62	N 2 0° W	南北径2.12	?	◇	?	
I-H-63	N 1 2° E	3.62	2.85	◇	?	
I-H-64	N 3 0° E	4.23	4.04	◇	西壁(石組)	
I-H-65	N 6 0° W	3.57	3.51	隅丸方形	東 壁	
I-H-66	N 4 8° W	3.23	3.20	◇	?	南壁に砂
I-H-69	N 4 2° E	3.35	3.04	隅丸長方形	西 壁	
I-H-70	N 5 0° W	3.15	3.00	◇	南壁(石組)	
I-H-72	N 2 9° E	3.66	3.33	◇	東 壁	
I-H-73	?	東西径2.43	?	?	?	
II-H-5	?	4.3?	3.6?	隅丸長方形?	南壁東寄り	
II-H-6	N 8 8° E	4.57	4.10	◇	西 壁	
II-H-7	N 5 8° W	3.57	3.42	◇	?	
III-H-1	?	東西径3.61	?	◇?	北壁(石組)	
III-H-2	?	東西径3.93	?	?	北 壁	
III-H-3	?	?	?	?	?	
III-H-6	?	東西径4.04	?	隅丸長方形	?	
III-H-7	N 8 6° W	3.92	3.40	◇	北 壁	

これらの遺構群は、出土遺物の考察から、和泉期のおよそ5世紀ごろから平安中期ごろに至る国分期、すなわち榎崎彰一氏の示す「平安時代陶器編年表」の折戸第53号窯期(0-53)直前ごろに比定されるものである。

註 1 藤森栄一氏編「岡谷市海戸遺跡第1次調査報告」(海戸・安源寺)1967 長野県考古学会

註 2 榎崎彰一「埴器の道」(1)(名古屋大学文学部二十周年記念論集)1968

B 出土遺物

古墳時代の遺物は、中期の和泉式と後期の鬼高式、および歴史時代の土師晩期I期の真間式とII期の国分式などである。本項では各時期の遺物について、特色のあるものを概観して略述したい。

(1) 和泉式土器

この時期の土器は、高坏形土器・埴形土器および甕形土器などが検出されている。

この時期の土器は、高坏形土器・埴形土器および甕形土器などが検出されている。

高坏形土器は、海戸遺跡のいわゆる1類土器(1~4)に近似し、埴形土器は、長野市松代町の四ツ屋遺跡出土の土器に類似している。高坏形土器の器形は、124・167・170ページで述べたとおり、坏部および脚部にそれぞれ微妙な変化があり、いずれも完形に近く、上小地方の標準土器として活用できよう。

(2) 鬼高式土器

この時期の土器には、坏形土器・鉢形土器・高坏形土器・甕形土器・壺形土器・埴形土器などが検出されている。

坏形土器は、口縁が嘴状で外反りあるいは内弯し、胴部が緩く張つて底部で丸底をつくるもの、あるいは底部径の小さい平面が多く、器高：口径の比が1：3以下、平底の土器は、器高：底部径の比が1：1、0以下の数値を示すものが多い。

この坏形土器と高坏形土器および埴形土器は、上田市の信州大学繊維学部敷地遺跡から検出された土器と近似し、甕形土器は市川市の須和田遺跡の土器と類似している。

(3) 真間式土器

この時期の土器は、坏形土器・高坏形土器・甕形土器などが検出されている。

坏形土器は、器高に対する口径の比が大きくなり、また底部径も大きくなる。器高：口径の比は1：3・1~3・8前後の数値を示すもの多く、外見上浅いものが目立つてくる。また、器高：底部径の比は1：1・2~1・9前後の数値を示し、安定度を増してくる。高坏形土器は、脚部の器形が、須和田遺跡出土の土器にみられる直胴形に近似し、甕形土器には、鬼高式土器にみられる胴部の長い器形の他に、胴部の張りが増し、浅いものなど種類が急に増加してくる。

(4) 国分式土器

この時期の土器は、坏形土器・台付皿形土器・台付埴形土器・鉢形土器・高坏形土器・甕形土器・壺形土器・甌形土器など、かなり多様な器形を検出している。

坏形土器は、真間式土器と余り大きな変化はないが、台付皿形土器や台付埴形土器を伴出する点に特色がある。坏形土器の器形変化を係数化して編年すれば、器高：底部径の比が比較的よくその変化を示している。しかし、今回の調査によつて検出された出土資料は、例数が少なく、また、これと併用して考察すべき灰釉陶器も、ほとんど完形品がないので、集約して推論することができない。しかし、台付皿形土器や台付埴形土器および灰釉陶器の器形を総合すれば、前述のとおりおよびその下限は折戸第53号窯期の直前に至る時期に比定されよう。

この他、鉄器・須恵器については、各項で詳述したので、ここでは割愛したい。

- 註 1 藤森栄一他 「岡谷市海戸遺跡第一次調査報告」前掲書
- 註 2 西野元彦 「善光寺の土師器」(和洋女子大学紀要8)昭和39年
- 註 3 小林幹男 「長野県上田市・信大織維学部敷地内遺跡調査概報」長野県考古学会誌第9号
川上 元
昭和45年
- 註 4 杉原荘介他 「古墳文化」(市川市史第1巻)昭和46年吉川弘文館
- 註 5 4に同じ
- 註 6 小林幹男 「明神前遺跡」(信濃国分寺本編)昭和49年 吉川弘文館

4 古墳時代の製鉄跡遺構

今回の調査で検出されたたたら跡と推考される遺構は、7世紀後半の鬼高Ⅱ式に比定されるものが2基、8世紀の真間期に比定されるものが1基、但し、この遺構は、構造上若干の問題が残る。9世紀以降の国分期、すなわち平安時代に比定されるものが5基など計8基が検出されている。この他鉄滓を検出した遺構は、国分期に比定されるものが4である。

たたら跡のプランおよび計測値を下表に示す。

時期	遺構番号	長軸心線方位	奥行き	最大幅	平面プラン	出土遺物
国分	I-H-11	N 50° E	92	62	卵形	吹子の羽口・鉄滓
国分	I-H-16	N 70° W	1, 10	55	卵形	吹子の羽口・鉄滓
国分	I-H-18	N 18° E	80	55	楕円形	鉄滓
国分	I-H-21	N 72° E	80	55	卵形	吹子の羽口・鉄滓
鬼高	I-H-24	N 18° W	85	60	楕円形	吹子の羽口・鉄滓・坏
鬼高	I-H-30	N 10° W	75	63	卵形	鉄滓
真間	I-H-33	N 4° W	1, 60	1, 10	楕円形	?
国分	I-H-42	N 86° W	1, 52	1, 45	楕円形	吹子の羽口・鉄滓

上表によれば、長軸心線の方位は、特に統一性、すなわき風向等に対する配慮はない。遺構の規模は、奥行きが1, 5m前後のやや大型のものもあるが、大部分は1m弱で、最大幅が50~60cm前後のものが多く、このような規模からみた一般的傾向は、時期によつて特に差異が認められない。

平面プランは、いずれも楕円形か、奥がわずかに大きい卵形を呈し、側壁は頭程度の自然石と粘土で固め、底部は粘土をたたき、さらに湿気を防ぐための砂を入れていたようである。底部はいずれも床面をボール形に掘りくぼめて構築していた。上小地方の最近の調査例では、明神前遺跡で検出された遺構が、馬蹄形の粘土堤をつくって構築していた。

また、いずれの遺構も内部には松材と推定される木炭と鉄滓が多く検出された。そして、鬼高期のH-24号遺構のたたら跡では、胎土にすさを混入したるつぼに用いられたと思われる環形土器が検出されている。吹子の羽口は、いずれも粘土にわらと思われるすさをに入れており、器形、規模に大差はない。

これらの遺構は、以上の遺構の構造や規模、あるいは検出された鉄滓の吹き分けが余り良好でなく、一見多孔質であることなどを総合すれば、古代の鍛冶工場の⁽²⁾たたら跡と考えられる。

青森県大畑町の⁽²⁾たたら跡は、城の前遺跡と同様に、扇状地の末端に立地し、長径1.7m、短径1.3mの楕円形のくぼみをつくり近世以降のものといわれる。

この炉跡は、いわゆるボール炉 (bowl furnace) と呼ばれるものであり、千葉県佐倉市の天辺鍛冶遺跡で検出された鍛冶炉跡は、北向の緩傾斜地につくられ、南北径が2.3m、東西径が1.7mの大きく隅丸をとつた小判型を呈し、図面によると14cmほどのくぼみをつくり、熱影響は18cmほど下層におよんでいると報告されている⁽³⁾。これは検出された鉄滓の所見から鍛冶遺跡と推考しその時期は明応期前後ごろと推定されている。

城の前遺跡の鉄滓は、長径4~5cmから10cm前後で、表面は粗雑な多孔質のものが多く、塊形滓は見当たらない。また、この成分組成については、調査書執筆時までに化学的分析をすべく考慮したが、諸般の事情で果せなかつた。いずれ近い時期にその實を果したいと思つている。

吹口の羽口は、前述のとおり、いずれも粘土にわらのすさを混入してつくり、特定の施設のない炉の前面に置かれているか、その周辺に破片が散在していた。概して焼成が悪く、一端は溶融と灰釉により緑青色を呈していた。

この鍛冶遺跡は、いかなる工人集団によつて営まれていたのか明らかでない。しかし、「日本書紀」大化2年正月の条によれば「凡そ兵は、人の身ごとに刀・甲・弓・矢・幡・鼓を輪せ」とあり「令義解」「軍防令」を考えれば、全国の兵士は武器を自弁し兵役に応ずるためであり、当然多くの村落の中に、武器や農具をつくる特殊な工人集団の村落が存在したであろう。城の前遺跡は蝦夷地の前衛基地信濃において、こうした古代の鍛冶工人集落と考えることはできないだろうか。

註1 小林幹男 「明神前遺跡」(信濃国分寺本編)昭和49年 吉川文館

註2 「製鉄技術の展開」(日本考古学歴史時代上)昭和42年 河出書房

註3 窪田蔵郎 「鉄の考古学」昭和48年 雄山閣

あとがき

一昨夜来の雪は、音もなく今朝もしきりと降り続いている。この春に転動してきた飯山は、市川谷ともいわれる奥信濃の一角で、冬には数メートルの豪雪に覆われる。

しかし、城の前遺跡の調査も寒かった。千曲川から吹き上げる烈風・吹雪、そして連日の寒気にいてつく大地、ひとたび暖くなると、こんどは凍土が溶けて、足をとり、地層の変化も消えてしまう。こうした悪条件の中で、一ヵ月近くにわたる城の前遺跡の調査は、多大の成果を収めて無事終了した。

この陰には、東部町教育委員事務局の皆さんの努力と、地元有志の皆さんのご協力、そして多くの大学生諸君の援助、高校生諸君の献身的努力のあったことを忘れてはならない。

調査の成果は、予期以上に大きかった。まず従来上小地方では余り知られていなかった弥生後期初頭の尾崎式平行期の遺構・遺物の発見がある。ついで弥生後期終末期の環溝遺溝の発見、そして最大の成果は、弥生後期と推考される製鉄所跡、土師後、晩期に比定されるたたら跡の発見であった。製鉄の技術史的研究は、さらに検討を要するが、一集落の中にこれだけ集中して、製鉄遺構が検出された例は珍しく、この集落の性格、あるいは古代集落の遺構を知る上に貴重である。しかし、構造内から検出された鉄滓については、その組成を化学的に分析することを考えながら、報告書執筆の段階では果し得なかつた。また、調査終了直後に転動という事情もあつて、報告書の内容には、意を尽せなかつたことも多い。ほとんどが結果あるいは資料の報告の域を出ていない。いずれ時間の余裕をみて、再検討しその實を果したいと考えている。

最後に、本調査に協力し、また参加していただいた多くの皆さんに、重ねて心から謝意を表すしだいである。

1975年11月25日

飯山にて

小林幹男





図版1 城の前遺跡全景（千曲川対岸から望む烏帽子岳・三方が峰の裾野扇状地）



図版2 城の前遺跡Ⅰ地区の全景(上)調査前 (下)調査時



図版3

H-10号住居跡と
石組かまど跡



図版 4 I地区北西隅の遺構(上)北方より(下)東方より



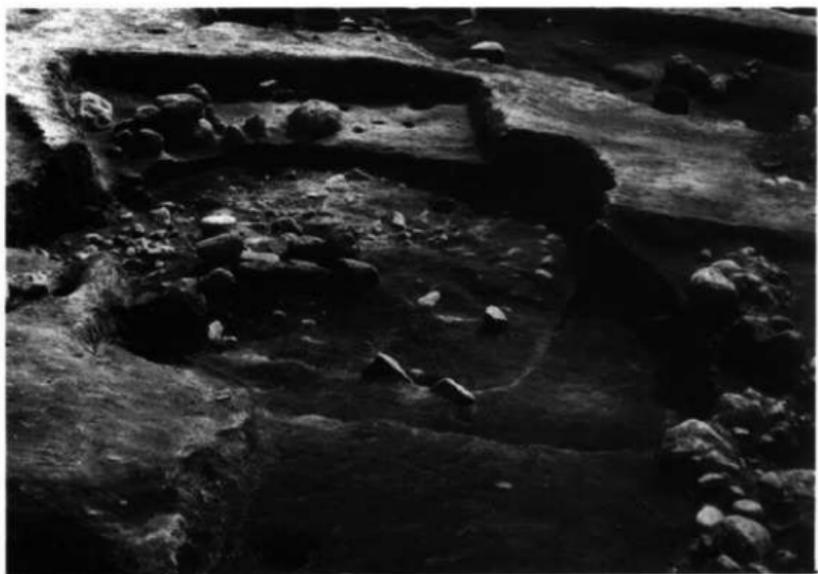
図版5 H-5号住居跡と周辺の遺構



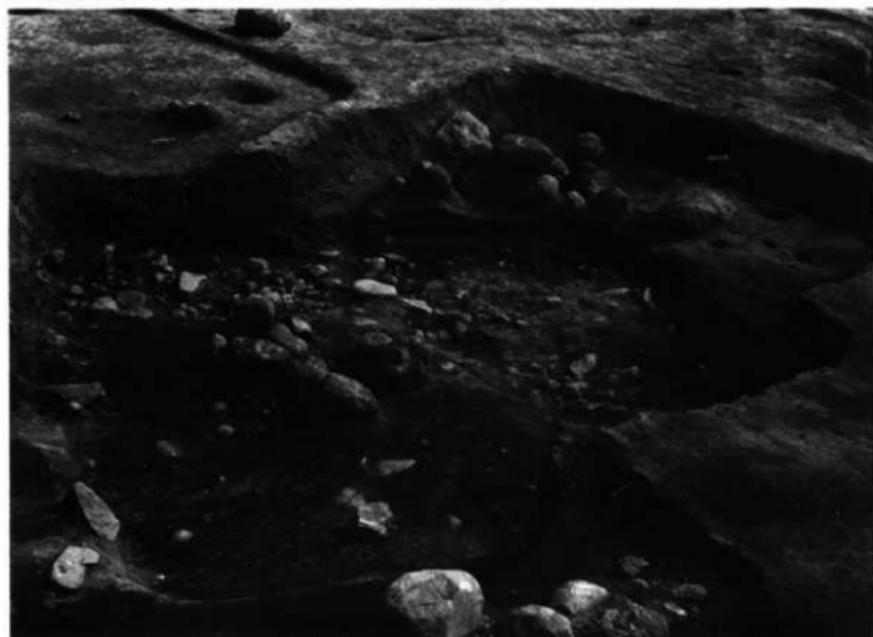
図版6 H-11号住
居跡とたたら跡（下）



図版7 H-19号住居跡(上) H-11号住居跡周辺の遺構(下)



図版 8 H-16号遺構と周辺の遺構 (上) 東北方より (下) 北方より



図版9 H-16号遺構のたたら跡(上)と周辺の遺構(下) 西北方より



図版 10

H-16号遺構
のたたら跡



図版11 H-18号遺構と周辺の遺構(上) 西北方より(下) 北方より



図版12 Y-10(下)・18(上)号住居跡と周辺の疎層



図版13 Y-12号住居跡(上)とH-21号遺構(下)



図版14 H-24号遺構とたたら跡

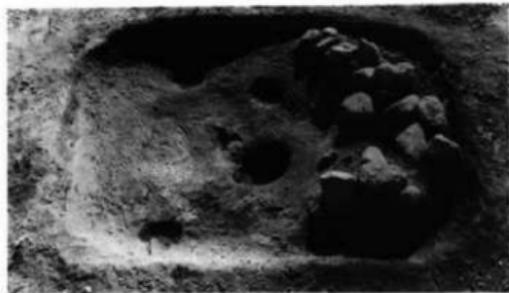


図版15 H-64号住居跡とかまど址



図版 16 H-65号住居跡と石組かまど址

H-31 住居跡



H-2号遺構

H-35 (上) ・ →
36 (下) 号住居跡



Y-1号住居跡

図版17 I地区の遺構



H-31号住居跡 1

M-H-29号住居跡

H-28号住居跡



図版18 I地区の石組
かまど址

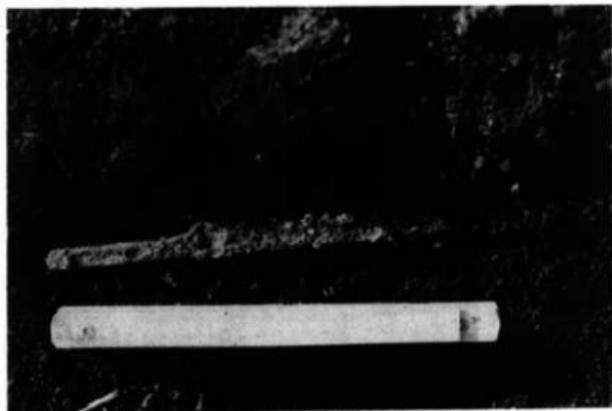


図版19 Y-環溝遺構と周辺の遺構（上）北方より（下）南方より

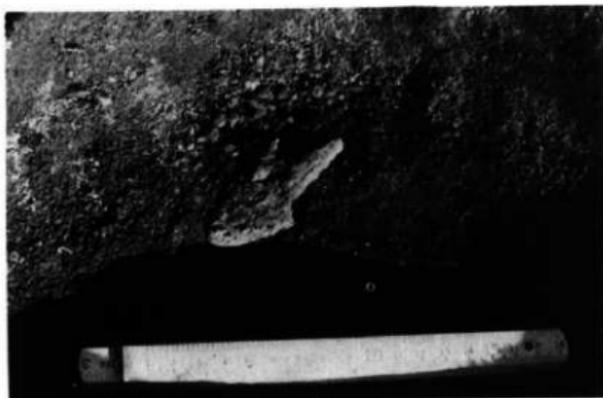
→
I-Y-11号住居跡



I-H-3号遺構 ↓



→
III-Y-1号遺構



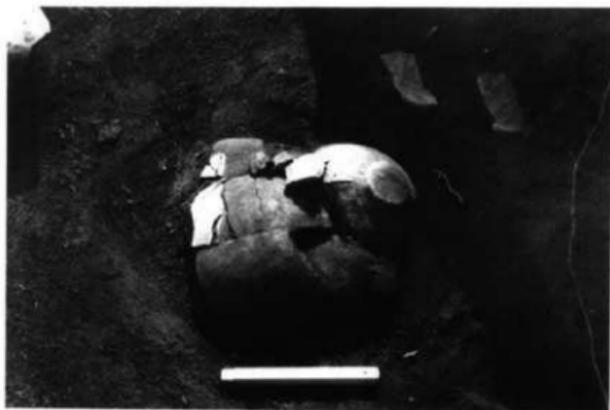
図版20 鉄器の出土状態



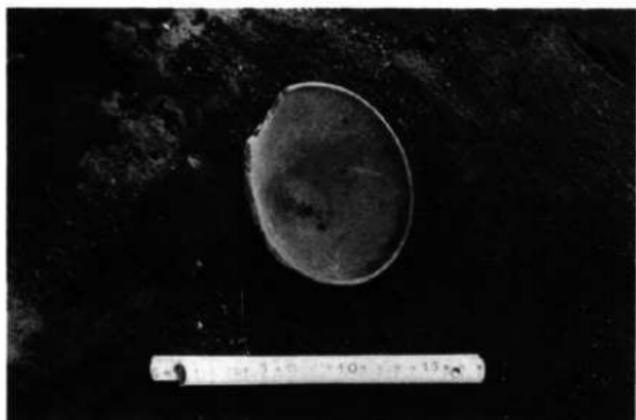
図版 2 1 土器の出土状態 (1)

(上) 1-H-30号住居跡

(中・下) 1-Y-1号住居跡



図版 22 土器の出土状態 (2) 1-H-25号住居跡



図版 23 土器の出土状態 (3)



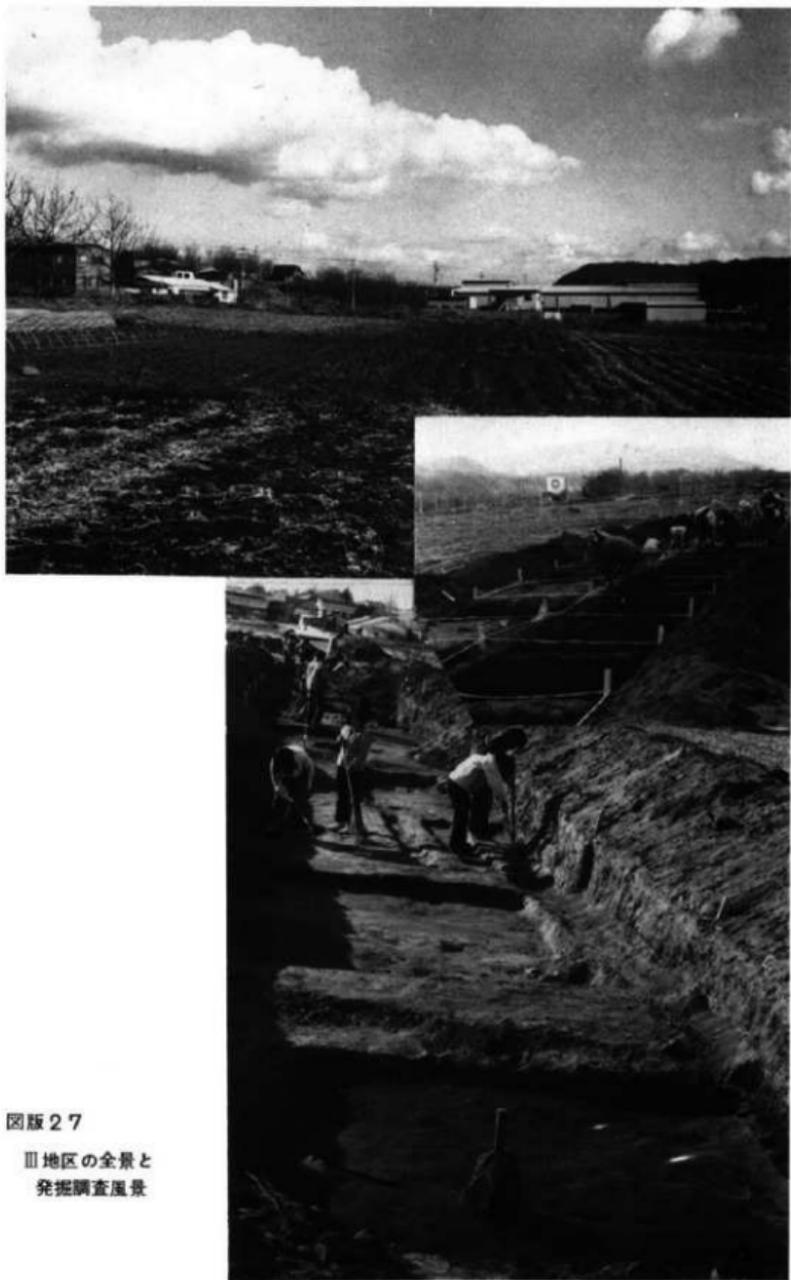
図版 24 II・III地区の全景と発掘風景



図版 25 II-H-2号住居跡と土器の出土状態



図版 26 II地区の遺構と土器の出土状態

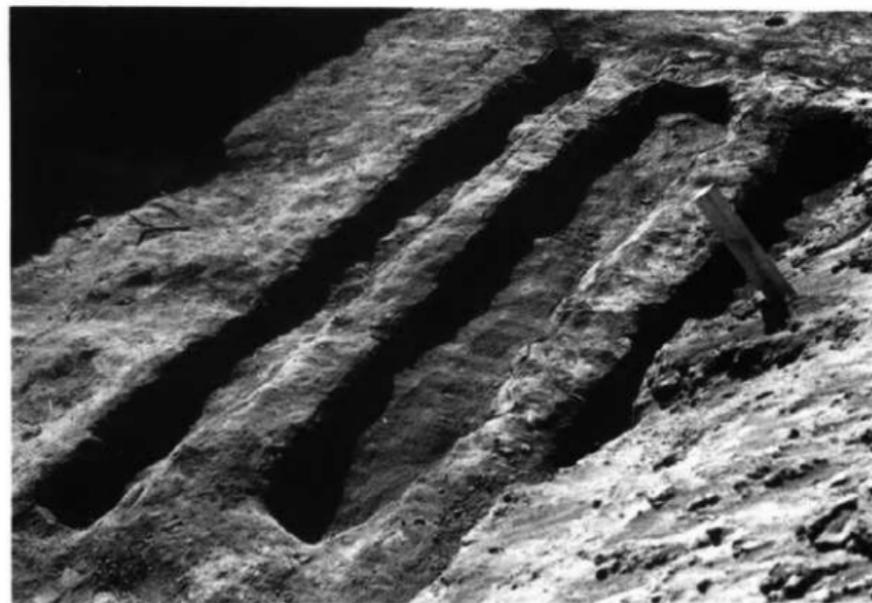
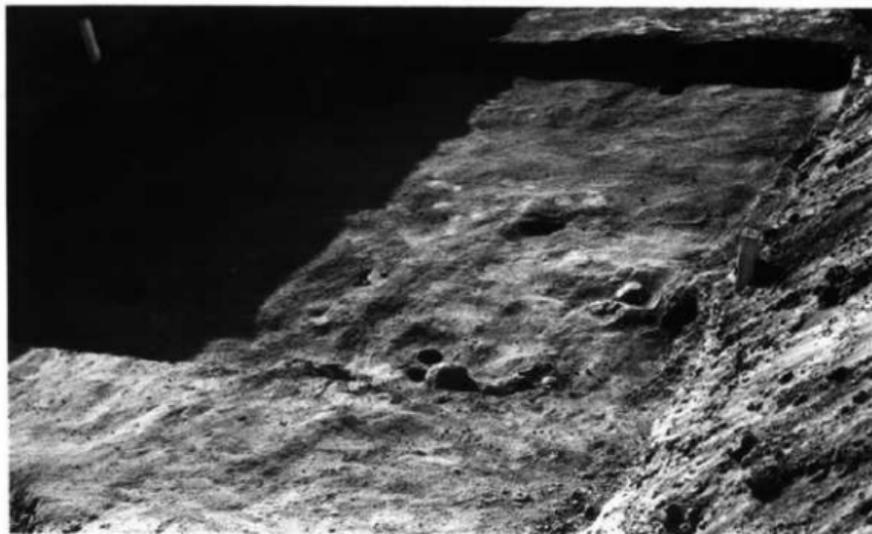


図版 27

Ⅲ地区の全景と
発掘調査風景



図版 28 III-H-8号住居跡と土器の出土状態

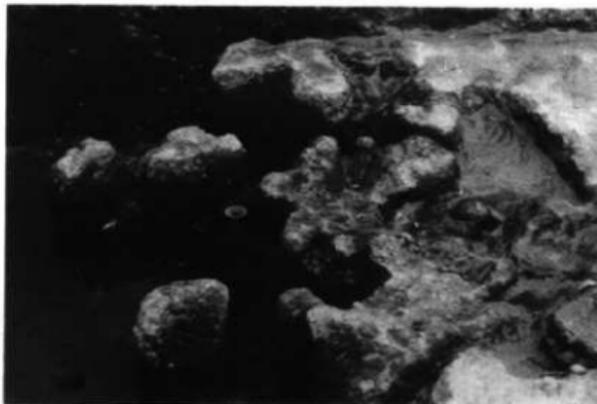


図版 29 III地区の遺構（H-7号住居跡と溝状遺構）

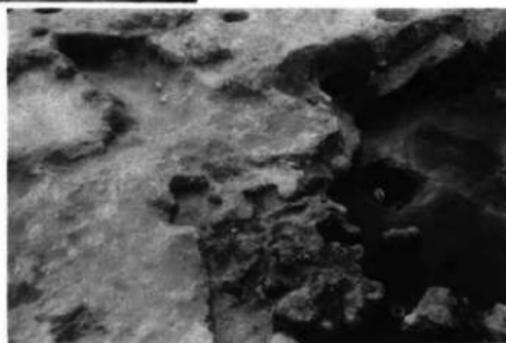
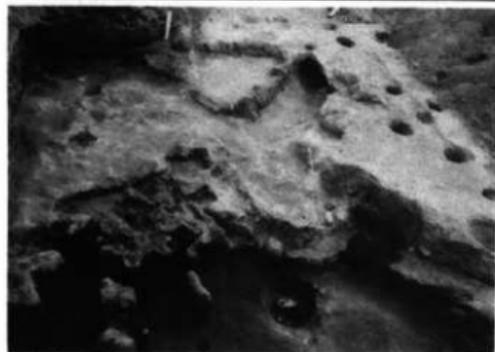


〔西方より〕 ↑

→
〔南方より〕



図版 30 Ⅲ-Y-製鉄跡遺構(1)



图版 31

Ⅲ—Y—製鉄跡遺構(2)



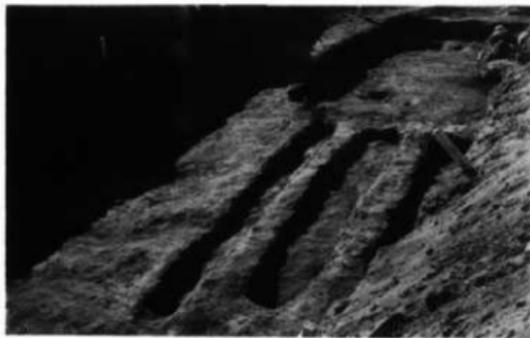
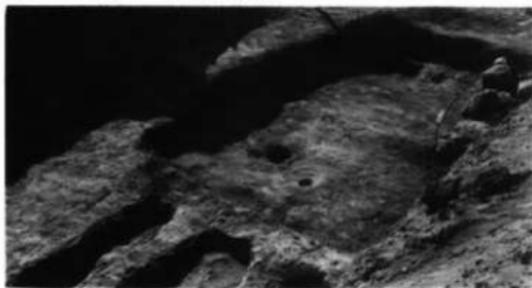
↑ III-H-4号住居跡



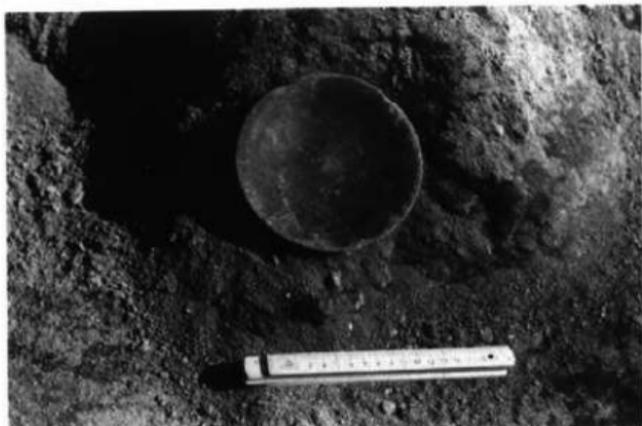
← III-Y-3号住居跡

III-H-7号住居跡 →

III-H-溝状遺構 ↓



図版32
III地区の遺構



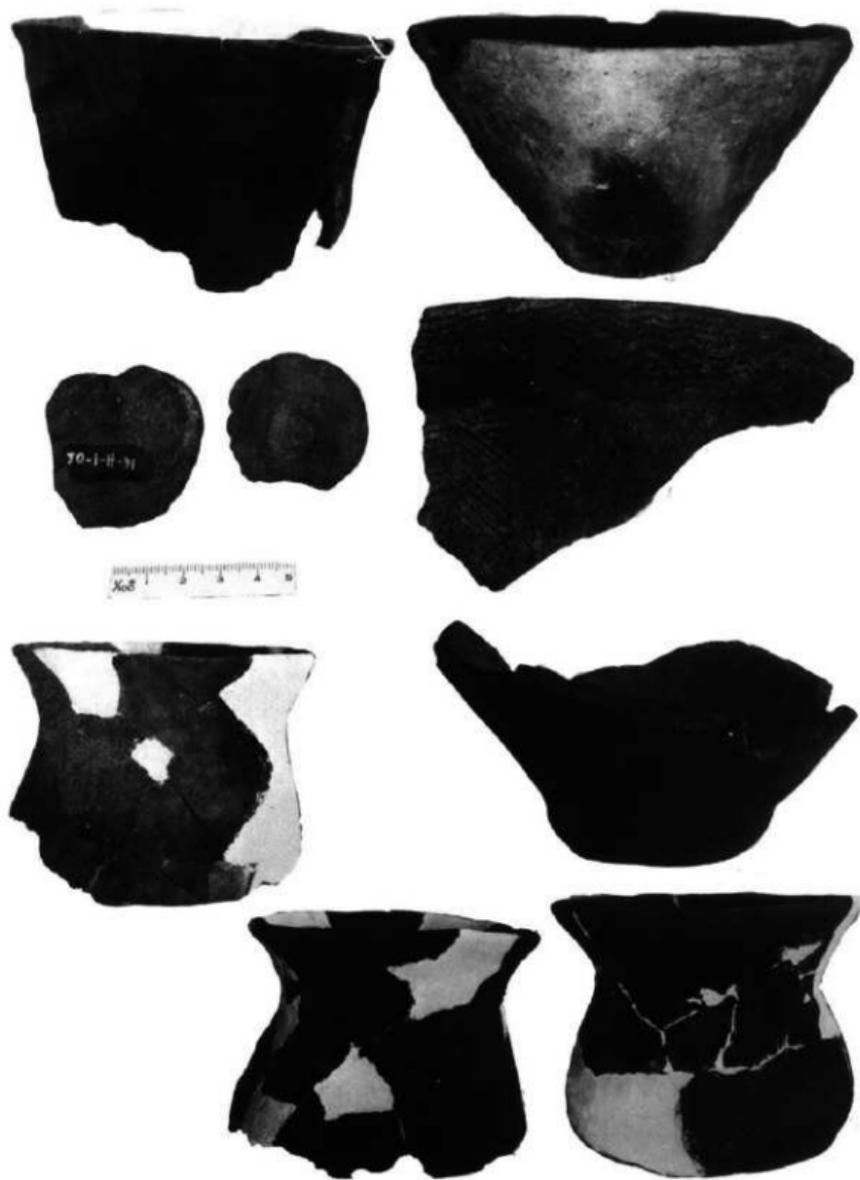
図版33 III地区の土器出土状態



図版34 城の前遺跡の出土遺物（鉄器・吹口羽口・古銭）



図版 35 城の前遺跡の弥生式土器 (1)



図版 36 城の前遺跡の弥生式土器 (2)



図版37 城の前遺跡の土師器と須恵器



図版38 城の前遺跡の土師器(2)



図版39 城の前遺跡の土師器と須恵器(3)



図版40 城の前遺跡の土師器(4)

— 東部町文化財調査報告書 —

城の前遺跡緊急発掘調査報告書

1975年12月15日 印刷

1975年12月25日 発行

編 集 者 小 林 幹 男

発 行 者 東部町教育委員会

印 刷 所 上田市大字上田1713
有限会社フタバ
電話(上田)23-1122(代)

長野県松本市旭3丁目1番1号(〒390)

信州大学人文学部



日知錄卷之四十四
卷之四十四

